人文・社会科学編
HUMAN & SOCIAL SCIENCES

人文・社会科学編 目次

目次 ……1

人文・社会科学の系譜 ……3
凡例 ……8
1. ヘロドトス「歴史」ギリシャ語初版 1502年 ……9
2. プラトン「全集」ギリシャ語初版 1513年 ……10
3. リウィウス「ローマ建国以来の歴史」1470年 ……11
4. セネカ「哲学論集および道徳書簡集」1478年 ……12
5. プルタルコス「対比列伝」1517年 ……13
6. タキトゥス「著作集」初版 1515年 ……14
7. 聖書「四十二行聖書」零葉 1455年頃 ……15
8. 聖書「ラテン語聖書」1478年 ……16
9. 聖書「マインツ詩篇」零葉 1459年 ……17
10. ヘルメス・トリスメギトゥス「ポイマンドレスほか」初版 1471年 …18
11. ヘルメス・トリスメギトゥス「ポイマンドレス」ギリシャ語初版 1554年 …19
12-1. アウグスティヌス「神の国」1490年 ……20
12-2. アウグスティヌス「三位一体論」1490年 ……21
13. ボエティウス「哲学の慰め」1476年 ……22
14. ユスティニアヌス「勅法集成」1475年 ……23
15. イシドール「語源」初版 1472年 ……24
16. トマス・アクィナス「ペトルス・ロンバルドゥスの命題集・第4巻注解」初版 1469年 …25
17. ブラクトン「イギリスの法と慣習」初版 1569年 ……26
18. ヴァンサン・ド・ボヴェー「諸学の鏡」初版 1477/1478年 ……27
19. トマス・アクィナス「神学大全」初版 1485年 ……28
20. バルブス「カトリコン」初版 1472年 ……29
21. マルコ・ポーロ「世界の不思議(東方見聞録)」1590年 ……30
22. ダンテ「神曲」挿絵入第2版 1487年 ……31
23. ヒグデン「ポリクロニコン」初版 1482年 ……32
24. トマス・ア・ケンピス「キリストに倣いて」初版 1473年 ……33
25. ニコラウス・クサーヌス「著作集」初版 1514年 ……34
26. コロンブス「新発見諸島についての報告」ラテン語版 1493年 …35
27. シェデル「ニュルンベルク年代記」ラテン語初版 1493年 ……36
28. シェデル「ニュルンベルク年代記」ドイツ語初版 1493年 ……37
29. コロンナ「ポリフィユの夢における愛の闘争」初版 1499年 …38
30. エラスムス「痴愚神礼賛」1676年 ……39
31. ルター「キリスト教界の改善についてドイツ国民の貴族に訴う」初版 1520年 …40
32. ヘンリー8世「7つの秘跡の主張」初版 1521年 ……41
33-1. マキャヴェリ「君主論」仏訳版 1571年 ……42
33-2. マキャヴェリ「ローマ史論」1571年 ……43
34. イグナティウス・デ・ロヨラ「心霊修業」初版 1548年 ……44
35. エティエンヌ「辞典あるいはラテン語宝典」初版 1531年 …45
36. ゲスナー「万有書誌」初版 1545年 ……46
37. ノストラダムス「大予言」英訳初版 1672年 ……47
38. ボダン「共和国に関する6書」第3版 1578年 ……48
39. ランギュエ「暴君に対する自由の擁護」初版 1579年 ……49
40. モンテーニュ「随想録(エセー)」初版 1580年 ……50
41. ボテロ「国家理性論」初版 1589年 ……51
42. F.ベーコン「学問の進歩」初版 1605年 ……52
43. グロチウス「戦争と平和の法」初版 1625年 ……53
44. セルデン「封鎖海論」初版 1635年 ……54
45. デカルト「哲学原理」初版 1644年 ……55
46. リルバーン「イギリスの人民協約」初版 1649年 ……56
47. ホッブズ「リヴァイアサン」初版 1651年 ……57
48. パスカル「プロヴァンシアル」初版 1657年 ……58
49. パスカル「パンセ(瞑想録)」初版 1670年 ……59
50. スピノザ「神学政治論」初版 1670年 ……60
51. スキナー「語源辞典」初版 1671年 ……61
52. モレリ「歴史大辞典」初版 1674年 ……62
53. ロック「人間悟性論」初版 1690年 ……63
54. ベール「歴史批判辞典」初版 1697年 ……64
55. ハリス「航海および旅行記集成」初版 1705年 ……65
56. サン・ピエール「永久平和論」初版 1713/1717年 ……66
57. ヴォルテール「哲学書簡(イギリス書簡)」初版 1733年 ……67
58. バトラー「宗教の類比」初版 1736年 ……68
59. ヒューム「人性論」初版 1739-1740年 ……69
60.「新航海および旅行記集成」初版 1745年 ……70
61. ヒューム「人間悟性に関する哲学論集」初版 1748年 ……71
62. モンテスキュー「法の精神」初版 1748年 ……72
63. ディドロ「盲人書簡」初版 1749年 ……73
64. ケムズ卿「道徳と自然宗教の原理」初版 1751年 ……74
65. ディドロ/ダランベール「百科全書」初版 1751-1780年 ……75
66. ヒューム「政治論集」初版 1752年 ……76
67. ジョンソン「英語辞典」初版 1755年 ……77
68. モレリ ー「自然法典」初版 1755年 ……78
69. ルソー「人間不平等起源論」初版 1755年 ……79
70. ルソー「エミール」初版 1762年 ……80
71. ルソー「社会契約論」初版 1762年 ……81
72. ベッカリーア「犯罪と刑罰」初版 1764年 ……82
73. ファーガソン「市民社会史論」初版 1767年 ……83
74. ドルバック「自然の体系」初版 1770年 ……84
75.「大英百科事典(ブリタニカ)」初版 1771年 ……85
76. キャンベル「英国政治概観」初版 1774年 ……86

77. ランゲ「誣告の理論」初版 1775年 ……87
78. フランクリン「政治・哲学論集」初版 1779年 ……88
79. コンディヤック「論理学」初版 1780年 ……89
80. カント「純粋理性批判」初版 1781年 ……90
81. カント「プロレゴメナ」初版 1783年 ……91
82. カント「実践理性批判」初版 1788年 ……92
83. ハミルトン他「フェデラリスト」初版 1788年 ……93
84. ベンサム「道徳および立法の諸原理」初版 1789年 ……94
85. カント「判断力批判」初版 1790年 ……95
86. フィヒテ「知識学の概念について」初版 1794年 ……96
87. コンドルセ「人間精神進歩の歴史」初版 1795年 ……97
88. シェリング「自然哲学の理念」初版 1797年 ……98
89. ヘーゲル「精神現象学」初版 1807年 ……99
90. フィヒテ「ドイツ国民に告ぐ」初版 1808年 ……100
91. (クック)「南太平洋航海風景画集」1808年 ……101
92. ヘーゲル「論理学」初版 1812-1816年 ……102
93. オーエン「社会に関する新見解」初版 1813年 ……103
94. ショーペンハウア「意志と表象としての世界」初版1819年 …104
95. ヘーゲル「法の哲学」初版 1821年 ……105
96. ウェブスター「アメリカ英語辞典」初版 1828年 ……106
97. オヴェルメール・フィスヘル「日本国の知識に対する寄与」初版 1833年 …107
98. サヴィニー「現代ローマ法大系」初版 1840-1849年 ……108
99. キェルケゴール「あれかこれか」初版 1843年 ……109
100. J.Sミル「論理学大系」初版 1843年 ……110
101. コント「実証的政治体系」初版 1851-1854年 ……111
102. リヴィングストン「南アフリカ伝道旅行」初版 1857年 ……112
103. J.Sミル「自由論」初版 1859年 ……113
104. リンカーン「リンカーン大統領演説」1863年 ……114
105. バジョット「イギリス憲政論」初版 1867年 ……115
106. J.Sミル「女性の隷従」初版 1869年 ……116
107. ニーチェ「ツァラトゥストラはかく語りき」初版 1883-1884年 …117
108. ハイデッガー「存在と時間」初版 1927年 ……118
109. 聖書「コロネーション・バイブル」1953年 ……119

彩飾写本「時祷書」写本 15世紀第4四半期 ……121

プライベートプレス<ケルムスコットプレス>
40.エリス編「ジェフリー・チョーサー著作集」 ……122
ケルムスコットプレス 印行リスト ……123

[ダブスプレス]「聖書」1903-1905年 ……127
[アシェンデンプレス] ダンテ「神曲」1902-1905年 ……128
[アシェンデンプレス] ダンテ「ダンテ著作集」1909年 ……129

参考文献 ……130

著者名索引 ……131

古代

メソポタミアでは5000年以上前に文字によって情報伝達・記録システムが発明された。最初の文字はピクトグラムと呼ばれる絵文字であったが、前3千年紀にはメソポタミア南部でシュメール語の『ギルガメシュ叙事詩』が楔形文字で記録されるまでに発達した。叙事詩は英雄ギルガメシュを主人公とする波乱万丈の物語で、当時の歴史的事実を背景として様々な知識を包含した英雄譚であった。叙事詩はやがてアッカド語、アッシリア語、バビロニア語、ヒッタイト語などの言語に翻訳されて西アジア世界で広く永く流布された。叙事詩には洪水伝説が記録されていたが、それはパレスティナの『旧約聖書』の中ではノアの箱舟伝説として伝えられた。

ギリシアでは植民活動時代を迎え、ギリシア連合軍とトロイアが激突したトロイ戦争末期のアキレスの活躍を伝える英雄叙事詩『イリアス』とその後日談となる『オデュッセイア』がホメロスによって歌われた。これらの叙事詩は吟遊詩人によってギリシア各地で長い間歌い継がれ、前5世紀絶頂期のアテナイで文字によって記録された。

前5世紀初、ギリシアは強大なアケメネス朝ペルシア帝国とペルシア戦争を戦ってペルシア軍に勝利するという大事件を経験した。この戦争の原因を究明しようとした人物がヘロドトスである。彼は古代世界各地を直接訪ね、そこで見聞した事柄を細大漏らさずに散文で記録した。その記録の姿勢がそれまでのギリシアにはなかった歴史という分野を切り拓くことになり、後にキケロが彼を「歴史の父」と呼んだ。

同時代のアテナイではソクラテスが人びとにいかに生きるべきかを問いかけていた。しかし、若者を堕落させるとの廉で死刑に処せられた。弟子の一人プラトンはソクラテスから対話編と弁証法を学び、イデア（形相）論を唱え、形相の永久不変の真理を求めることで不滅の魂をもつと説いた。プラトンはアテナイ郊外にアカデメイアを創設して多くの学者を育成した。

アカデメイアに入門したアリストテレスはあらゆる学問を研究した。後にマケドニア王フィリッポス2世の招きで息子アレクサンドロスを教えた。アレクサンドロスがマケドニア王に即位すると彼はアテナイに戻り学園リュケイオンを創設して後身の育成に当たった。彼はあらゆる資料を収集し分類して秩序立てて見せた。アリストテレスの学問は彼の講義ノートあるいは講義録として弟子たちによって伝えられ整理された。

ギリシア知識の記録・保存に大きな役割を果たしたのはエジプトのプトレマイオス1世によりアレクサンドリアに創建された学問研究所ムセイオンである。そこにはアリストテレスのリュケイオンに範を取った図書館が併設された。図書館長として活躍したカリマコスはギリシア各地からあらゆる書物を集めて、標準的なテクストとなる写本を制作し図書館に保存した。そして、ピナケスという120巻の蔵書目録を編纂した。ピナケスでは韻文と散文が大別され、修辞学、法学、叙事詩、悲劇、喜劇、抒情詩、歴史、医学、数学、自然学、諸学に分類された。各分類内は著者名順に配列して、著者の略歴、書名、巻数、内容を記述した。この目録記述方法は近代に至るまでヨーロッパで使用され続けた。

前1世紀、古代ローマ共和制時代には優れた弁論家であり散文作家であったキケロが活躍した。キケロは洗練されたラテン語を駆使して哲学、政治、修辞学を論じてラテン散文を完成させたといわれる。同時代のカエサルも優れた弁論家であり、自らの遠征記を平易に綴った。また、詩人ルクレティウスはギリシア的精神をもって自然現象を科学者の目で観察した。

ラテン文学では前1世紀後半から後1世紀初を黄金時代、後1−2世紀を白銀時代と呼んで区分している。黄金時代を代表する詩人はウェルギリウス、ホラティウスらである。ウェルギリウスとホラティウスはラテン詩を完成させた。同時代の歴史家ではリウィウスが膨大な史料に基づいて『ローマ建国以来の歴史』を執筆して、ローマ史の基礎を築いた。

白銀時代には著述家であり政治家であったセネカや歴史家タキトゥスなどが活躍した。セネカは修辞学を駆使した悲劇を創作し、哲学・道徳を論じた。タキトゥスはリウィウスの仕事を引き継ぎ『年代記』を綴った。また、同時代にはスエトニウスとプルタルコスも活躍した。スエトニウスはトラヤヌス帝の図書係・文書係を勤め、カエサルからドミティアヌスまでの皇帝の事績を記述し、プルタルコスはギリシアとローマの偉人たちを対比した教訓的評伝をギリシア語で綴った。この時代には史上初めて冊子形態の書物が誕生した。

帝政ローマ時代末期にはヒエロニュムス、アウグスティヌス等の初期キリスト教の教父たちが旺盛な執筆活動を展開した。ヒエロニュムスはギリシア語で読まれていた『聖書』をヘブライ語から

直接ラテン語に翻訳してウルガタ訳聖書を完成させた。アウグスティヌスは古代的な教養とともにキリスト教的思想をもって『告白』『三位一体論』『神の国』などを著した。

最後のローマ人といわれるボエティウスはアリストテレスの著作の一部をラテン語に翻訳して中世にアリストテレスを伝えた唯一の学者となった。彼は自由七学科（文法学、修辞学、弁証論、算術、幾何学、天文学、音楽）の教科書などを執筆した。そして、彼は東ゴート王テオドリクにより反逆罪の廉で処刑されたが、獄中で『哲学の慰め』を執筆して神への帰依を説いた。

中世

中世の知の系譜はキリスト教と不可分であり、古代末期に成立した学問体系であるスコラ学が主流をなした。書物も古代の巻子本とは形態を変えて犢皮や羊皮の獣皮紙を使った冊子本が主役となった。

コンスタンティノポリスを首都とする東ローマ帝国では皇帝ユスティヌアヌス1世によって法典の編纂が命ぜられ、530年から533年の間にハドリアヌス帝以降の法律を集成した『勅法集』、『学説集』、『法学提要』（法学教科書）、『新勅法』が発布された。これらは教会法とともに中世から近代に至るまで社会規範をなした。

9世紀には東ローマ帝国では学問が再興して、古いアンシャル書体の写本を小文字書体で書写しなおす作業が行われた。同時代の総主教フォティオスは『ビブリオテケ』を著してこれまで読んできた書物を論評して当時の知の系譜を記録した。10世紀には皇帝コンスタンティノス7世が編纂を推進した『スーダ』という名で知られる百科事典が編纂された。これはギリシア語のアルファベット順に項目が配列された最古の事典であり、古典の記述が多数収録され、その後散逸した文献を断片的に後世に伝えた。

古代ギリシア語文献は東方で古代シリア語、アルメニア語、アラビア語に翻訳された。とりわけ哲学・科学の書物はイスラム圏で研究され、アラビア科学の発達をみた。これらの翻訳や注釈はすでにヨーロッパで失われたテクストを保存するものがあり、また別な読み方を示していたため、ヨーロッパで散逸した古代文献を補完する役割を果たした。

一方、西欧のイタリアでは、ボエティウスと同時代人のカッシオドルスが修道院を開いて古代文献とともにキリスト教文献の写本作成に従事した。イベリア半島のセビリアでは7世紀前半に司教イシドルスが古代ローマのプリニウスの『博物誌』を継承する百科事典的著作『語源』を著した。彼の百科事典的伝統は13世紀にはイギリスのバルトロマエウス・アングリクスの『事物の属性について』、フランスのヴァンサン・ド・ボーヴェの『自然の鏡』、『諸学の鏡』、『道徳の鏡』、『歴史の鏡』へと引き継がれていった。また、イタリアのヨハンネス・バルブス（ジョヴァンニ・バルビ）がラテン語文典『カトリコン』をまとめている。『カトリコン』は中世に最もよく利用されたラテン語辞典のひとつである。

8世紀後半、カロリング朝のカール大帝はヨーロッパ各地から写本を収集して写本制作を推進した。ヨークの神学者アルクイン等の当代一流の学者が宮廷に招聘されて学問研究が奨励された。自由七学科が高等教育の規範になったのはこの時代である。写本制作ではカロリング朝小文字書体が考案され、それまでの大文字書体に変わって使用された。ルネサンス期の人文主義書体はこの書体が母体となった。

12世紀、西ヨーロッパでは学問復興の時代を迎えていた。パリのサン・ヴィクトル修道院の学校を指導したフーゴーは自由七学科と神学のための教科書『学習論』を執筆した。その中で知の系譜を3層構造の学問体系として示した。哲学（学知）のもとに理論学、実践学、機械学、論理学という4科を置き、それぞれ理論学は神学、数学、自然学、実践学は政治学、家政学、倫理学、機械学は演劇学、医学、狩猟学、農学、通商学、造兵学、機械学、論理学は弁論学と文法学からなっていた。

また、都市にはヨーロッパ中から学問を求めて学生が集まるようになり、パリ、ボローニャ、オックスフォードでは大学が設立され、学問の中心が修道院から大学へ移っていった。パリではペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』が神学教科書として使用されるようになった。また、ユスティニアヌスの『学説集』が再発見されたのをきっかけにボローニャでは法学研究が始まった。

そして、13世紀に入るとアリストテレスの著作の大半がラテン語で読めるようになり、パリとオックスフォードではアリストテレス哲学がキリスト教思想の中に積極的に受容されていった。それを推進したのはフランシスコ修道会やドミニコ修道会であり、パリ大学ではドミニコ会士アルベルトゥス・マグヌスがアリストテレス哲学を講義した。それを聞いていた学生の一人がドミニコ会士トマス・アクィナスである。トマス・アクィナスはアルベルト

ゥスの助手となるが、パリ大学神学教授の道を歩む。彼の神学研究の成果は『ペトルス・ロンバルドゥス命題集注解』にまとめられ、イタリア招聘の際に執筆が始まった『神学大全』は第3部まで書き進められた。トマス・アクィナスの功績はアリストテレス哲学全体をキリスト教神学の中にしっかりと位置づけたことである。

古代以来書き継がれた年代記は中世においてはアウグスティヌスによって確立された神の国へ至るキリスト教普遍史が支配するところとなった。英国ではラヌルフ・ヒグデンの『ポリクロニコン』がある。ドイツでは各都市で年代記が記録された。15世紀末に刊行されたハルトマン・シェーデルの『ニュルンベルク年代記』などもこの範疇の歴史書である。ちなみに、『ニュルンベルク年代記』は15世紀活版印刷書の中でも最も多数の挿絵が挿入された記念碑的な著作である。

ルネサンス

14世紀のイタリアでは人文主義の文化運動が胎動していた。人文主義（humanism）とは当時のイタリアの学生の俗語（umanista）に端を発した言葉で、人間性を研究する学問を行う人を意味していた。トスカーナでは詩人ダンテが1307年頃から叙事詩『神曲』を書き始め、古代ローマの詩人ウェルギリウスに導かれて地獄・煉獄を巡り、生涯の恋人ベアトリーチェの励ましで天国へ至る旅をトスカーナ方言で力強く歌い上げた。そして、桂冠詩人ペトラルカは写本を求めてヨーロッパ各地に赴いて古典文献を発見して研究した。彼はヨーロッパ各地にばらばらになっていたリウィウス『ローマ建国以来の歴史』の写本の足取りを辿り1−40巻までを編纂した。ペトラルカから直接影響を受けたのは作家ボカッチオである。彼は代表作『デカメロン』を著した後、学問を志して写本を求めてモンテカッシーノ修道院に赴きウァロとキケロのテクストを書写してペトラルカに贈ったという。フィレンツェの高官コルッチョ・サルターティは古代ローマのワレリウス・マクシムスのテクストを校訂し、テクスト・クリティークの先駆者となり、東ローマ帝国の外交官マヌエル・クリュソロラスをフィレンツェに招聘した。1397年からクリュソロラスのギリシア語講義が行われ、レオナルド・ブルーニらの才能ある人士が学び、西欧におけるギリシア語理解の端緒を開いた。

1453年のオスマン・トルコ帝国によるコンスタンティノポリス陥落はヨーロッパに大きな衝撃を与えた。この時代にはギリシアの知識人がイタリアに難を逃れてヴェネツィア経由で続々と亡命して来た。公会議のためにイタリアに派遣されたギリシアの枢機卿ベッサリオンはアリストファネスなどを含む多数のギリシア語写本をもたらした。ベッサリオンは古典文献に満ちた蔵書を1468年にギリシア人が多く居住するヴェネツィアに寄贈した。後にロレンツォ・デ・メディチはヤヌス・ラスカリスをギリシアに派遣して写本を収集させ、またマルシリオ・フィチーノを中心とするプラントン・アカデミーを庇護してフィレンツェをルネサンス最高の学芸都市とした。

一方、枢機卿ニコラウス・クサーヌスは修道院改革に着手し、ドイツを巡回し正しい『聖書』の写本が不足していることによる弊害を指摘して、各修道院では優れた『聖書』を備えるよう命令した。その頃、ヨハネス・グーテンベルクは活版印刷術を完成させ、ウルガタ訳『聖書』の印刷に着手した。こうして、彼は1455年までにフォリオ2巻本の『42行聖書』を刷り上げた。活版印刷術は情報メディアの主役を写本から印刷本へ転換させる決定的な役割を果たし、ルネサンス文化にも大きな影響を与えた。グーテンベルクは実業家ヨハネス・フストに多額な借金をしていたため、工房はフストとグーテンベルクの助手を勤めてペーター・シェーファーのものになり、『マインツ詩篇』『ミサ典書』『ベネディクト式詩篇』、デュランデュス『典礼大全』が印行された。一方、グーテンベルクは自宅の工房で印刷を続けて小型活字を制作しバルブス『カトリコン』の印刷に導いた。

活版印刷術は大航海時代の幕開けも導いた。1492年8月コロブスは3艘の船でスペインのパロスから大西洋を西に向かって出帆した。2ヵ月後の10月に現在のバハマ諸島の一島に上陸してサン・サルバドル島と命名した。そして、現在のキューバ、ハイチなどを発見し、そこがアジアの一部と判断して、そこに乗組員に植民させて1月に帰途についた。コロンブスは帰路で3通のスペイン語の書簡を認めてインドの島々を発見したことを報告した。書簡の1通は航海を援助したスペイン王フェルナンドとイザベル1世に宛てたもので、帰港後直ぐに宮廷に送られた。この大ニュースは書簡の一部が印刷されることで伝わり、直ちにラテン語訳が作成されローマから『コロンブス書簡』として印行された。

16世紀前半のイタリアでは盛期ルネサンスを迎えており、ニッコロ・マキャヴェッリらの才能ある人文主義者が登場した。マキャヴェッリは1498年のサヴォナローラ処刑後ただちにフィレンツェ

の書記官に就くが、1512年のメディチ家の復帰によって政界を追われ、郊外に隠棲して執筆生活を行った。『君主論』はこのような失意の時代に書かれた政治思想書である。また、メディチ家の当主ジュリオ・デ・メディチの依頼に応じてローマ帝国滅亡以降1492年のロレンツォ・デ・メディチの死までの『フィレンツェ史』を書き上げた。マキャヴェッリの友人でフィレンツェの政治家であったグイッチャルディーニはマキャヴェリとは別に『フィレンツェ史』および『イタリア史』を執筆した。特に、彼はこれまでのキリスト教的普遍史ではない同時代史に力を注ぎ、1494年から1532年に至る『イタリア史』を執筆した。同時代史料を綿密に利用することによってグイッチャルディーニは近代歴史学の父と呼ばれるようになった。

ルネサンスはイタリアからヨーロッパ各国に普及していった。ロッテルダム出身のエラスムスはルネサンスを代表する知識人であった。彼はヨーロッパ各地の大学を遍歴して人文主義者と交友しながら執筆活動を続け、ギリシア・ローマの古典文学の校訂とともに、『格言集』『痴愚心礼賛』などの著作を発表した。

フランスでは国王フランソワ1世のもとで王室司書を勤めたギヨーム・ビュデがギリシア・ラテン古典の校訂を行いながら、国王にフランスの学問研究の基礎となる研究機関創設を提案した。これが後のコレージュ・ド・フランスである。彼は『貨幣論』や『ギリシア語注釈』などの先駆的な研究を発表した。また、パリの印刷業者ロベール・エチエンヌは王室印刷家として活躍し、『ラテン語辞典』『ラテン語=フランス語辞典』などの辞書を次々と刊行した。ロベールの辞書は近代的辞書の嚆矢となった。

1517年、マルティン・ルターがヴィッテンヴェルクの教会の扉に『95か条の論題』を貼り付けてカトリック教会に公開質問状を突きつけた。ルターはカトリック教会の堕落を糾弾して聖書の精神に戻ることを要求した。こうして彼は宗教改革の口火を切って聖書のドイツ語訳に着手した。それまでの俗語訳ではなくヘブライ語・ギリシア語から直接ドイツ語へ翻訳して、1524年から10年かけて新旧訳聖書のドイツ語訳が完成した。ルターはその他にも多数の小論を刊行したが、ドイツの多くの印刷業者がそれらを印刷流布させた。宗教改革運動の急速な拡大は印刷物の力でもあろう。

プロテスタント運動がヨーロッパ各地に拡大していく一方で、反宗教改革の動きが始まり、イグナチオ・デ・ロヨラを中心にパリ大学学生が清貧、貞節を旨として教皇を守るという目的をもってイエズス修道会を結成した。布教のために日本に至ったフランシスコ・ザビエルも結成メンバーの一人であった。イエズス会はアジアおよび新大陸において布教を積極的に行い、各地に学校を設立した。ロヨラの『霊操(心霊修行)』はイエズス会の修行を説いたもので、イエズス会の精神的な拠り所となった。

スイスのチューリヒでは市医でギリシア語教師そして博物学者のコンラート・ゲスナーが『万有書誌』を編纂して、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語の書物を著者名順に示した。彼はイタリア各地の図書館・文庫を巡り書物を調査して、古代のピナケス以来の著者略歴と著作一覧という伝統的な書誌記述方式に則りながら、活版印刷時代に相応しく印刷本には印刷事項を記述した。そして、続編の『分類目録』と『補遺』によって学問体系を21分類で示した。すなわち、文法学・文献学、弁証法、修辞学、詩学、算術、幾何学、音楽、天文学、占星術、占い、地理、歴史、技術、自然哲学、形而上学、倫理、家政学、政治学、法学、医学、神学である。ゲスナーはこれらの先駆的な書誌によって近代書誌学の父と呼ばれる。

16世紀後半に国家論を提示したのはフランス人ジャン・ボダンとイタリア人ジョヴァンニ・ボテロであった。ボダンは『共和国に関する6書』で国家の主権は宇宙の秩序における全能の神に相当するという神の絶対的権力を認めた。ボダンの国家論に影響を受けたボテロはイエズス会士としてコレージョで哲学と修辞学を教えながら、主著『国家理性論』を執筆し、国家の公正性はトマス・アクィナスの思想と自然法に由来するものと考えたが、経済的な問題についてはボダンに賛同した。

同時代のミシェル・ド・モンテーニュはボルドーの自宅の塔に古代から同時代に至る多数の書物を集めてひたすら読書した。蔵書の中にはグイッチャルディーニやボダンの著書も含まれていた。彼は何事にも懐疑的にQue sais-je?(われ何を知るか)と自問しながら『随想録(エセー)』を執筆した。彼が目指したのは「私的モラルの確立」であり、「静寂な魂」の追求であり、現実の人間を洞察して人間の生き方を探求した。彼は近代的批判精神をもった最初のモラリストであった。

近代

17世紀初頭オランダやドイツで初めて定期的

な新聞が発行され、最新のニュースが人びとの関心を集めるようになった。1665年にはフランスでJournal des sçavans、英国でPhilosophical Transactionsという学術雑誌が創刊され、学者間の公的なコミュニケーションの道具が登場した。このような雑誌が最新の学術情報を速く広く伝達する役割を担い、17世紀の科学革命の発展に貢献した。そのため、17世紀は情報コミュニケーションにとって画期的な時代であった。また、この時代には公共の利用に供する図書館が登場した。オックスフォードやレイデンなどの大学図書館が利用できるようになり、また宰相マザランのように個人文庫を学者の利用に供した貴族がおり、図書館は学者が集い議論する場所となり、知識の蓄積と提供の役割を果たすようになった。

科学革命を先導した英国のフランシス・ベーコンは中世以来のスコラ的アリストテレス主義の三段論法から帰納法への論理学の転換を主張して『学問の進歩』を発表し、そして経験主義に依拠する実験的方法を展開して『新機関』を上梓した。こうして、スコラ的アリストテレス主義の自然哲学は揺らぎ始めて、17世紀中に機械論哲学にとって代わられた。機械論哲学を主張したルネ・デカルトは『哲学原理』でその体系を発表したが、機械論哲学の完成はデカルトに批判的であったニュートンによって達成された。

オランダの法学者グロティウスは『戦争と平和の法』を発表して、成立過程にあった近代国家の政治対立や宗教対立に由来する戦争の時代に万人に妥当する自然法の存在を明らかにした。一方、オランダのスピノザは『神学政治論』において人間の理性を聖書支配から解き放ち、理性によって信頼を覚醒させようとした。そして、『エチカ』では神を人間に心の中に内在化させることで人間の自由の探求へと向う汎神論を唱えた。

17世紀英国の混乱の中でパリに亡命したホッブズは『リヴァイアサン』を著し、国家あるいはコモンウェルスを偉大なるリヴァイアサンと呼び、国家は絶対的主権者とそれに絶対的に服従する臣民からなる秩序であるとした。王政復古後の英国ではロックが亡命先のオランダから帰国して『人間悟性論』『統治論』などを発表した。ロックの思想は立憲君主制の拠り所ともなり、さらに18世紀の啓蒙主義、アメリカ独立戦争やフランス革命にも影響を与えた。

18世紀フランスでは啓蒙主義者であるモンテスキュー、ディドロ、ダランベール、ルソーなどが活躍した。モンテスキューは若くしてフランス・アカデミー会員となり、20年におよぶ構想の末に『法の精神』を公刊して、立法、行政、司法の三権が同一人物や集団に集中しないことが政治的自由の保障であるという三権分立論を提示した。ジャン・ジャック・ルソーはディジョン・アカデミー懸賞論文を受賞した後、『人間不平等起源論』で同時代の道徳的腐敗こそ不平等の起源であると論じ、『エミール』で来るべき共和国市民の形成のための自然と人間の再生という教育論を展開した。また、『社会契約論』では人間の自由と政治的服従とを両立させることができる正当な形態としての共和制の構成原理を探求した。

同時代、英国のヒュームは『英国史』を発表して成功を収め、フランスに渡ってディドロなどの啓蒙主義者と議論し、ルソーと意気投合した。ヒュームは哲学的な主著である『人間知性に関する哲学論集』ではロックの経験論を受け継いで、経験と観察の積み重ねによって真理を獲得する人間の科学を主張した。

18世紀の知の系譜にとって最も大きな貢献はディドロとダランベールによって編纂された『百科全書』である。それはルソーなどの啓蒙主義者が執筆人に加わって提示した近代初期の知の体系である。このような百科事典は17世紀にはモレリ（1643～80）『歴史大事典』、ピエール・ベール（1647～1706）『歴史批評辞典』などの系譜に連なっている。このような百科事典としてドイツではツェートラー『万有百科事典』、クリューニッツ『経済学百科事典』、英国の『ブリタニカ』などが刊行され、知識の蓄積とともに広く一般に普及するという新たな役割を果たした。

19世紀、欧米では教育の普及とともに一般大衆が知識を求める市民社会が成立し、知の系譜は広大無辺に拡大していった。そのような中で知識を保存・提供する最も一般的な社会的施設として図書館が広く認識されるようになり、同世紀後半以降に欧米各地に一般市民に開かれた公共図書館が設立されるようになり、市民がいつでも知の系譜に触れることができるようになった。

早稲田大学准教授　雪嶋 宏一

凡　例

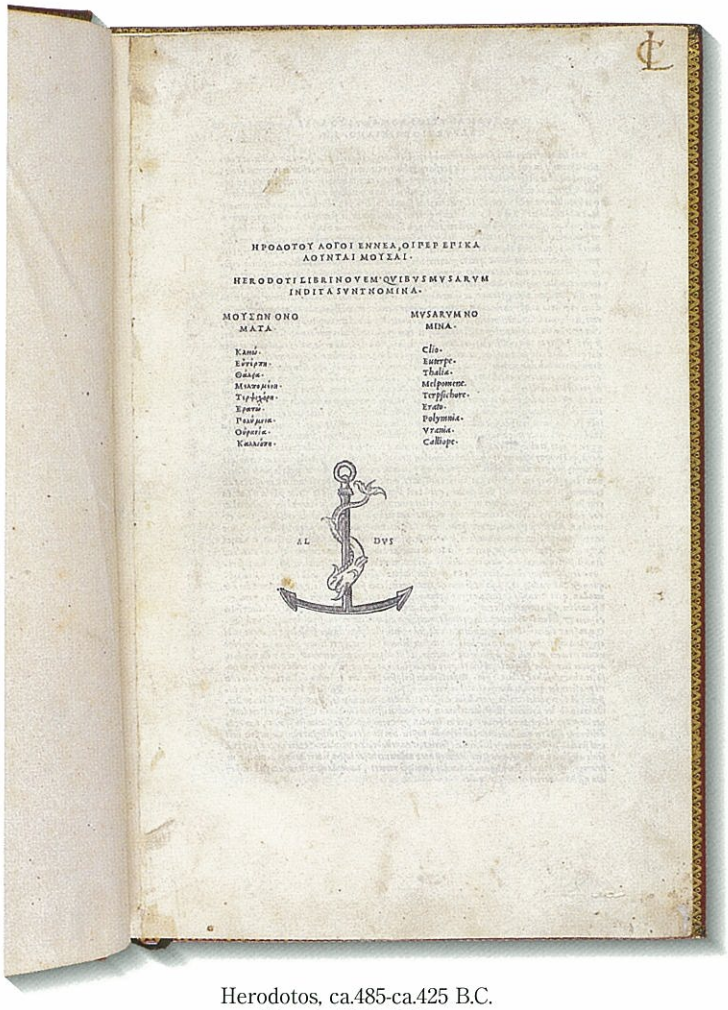
1. 本書は、広島経済大学図書館が所蔵する「知の系譜」文庫に収蔵されている人文・社会科学（経済・商学を除く）に関する稀覯書目録であり、2009年4月末日現在で所蔵しているものを掲載した。

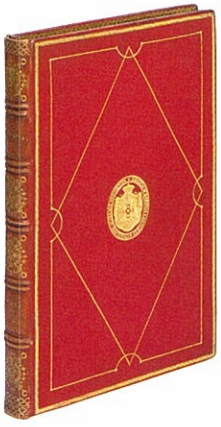
2. 本書に収録した稀覯書は、以下の順に掲載している。
   15世紀以前に書かれた著作は、原則として著作が発表された順に掲載し、16世紀以後に書かれた著作は、初版が刊行された順に掲載した。但し、著者の生年が不明の場合や著者が特定できない場合はこの限りではない。
   また、時祷書とプライベート・プレス（私家版印刷）の出版物は、上記によらず巻末に纏めて掲載した。

3. 本文には、すべての著作に写真を付し、解題及び書誌事項を記述した。
   書誌事項は、著者名、生没年、書名、出版地、出版者、出版年、ページ数、サイズの順に記載し、必要に応じて注記を加えた。
   略記号は、以下のとおりである。
   - b.=birth（生まれ）
   - ca.=circa（およそ、…のころ）
   - cf.=confer（参照せよ）
   - d.=died（死没）
   - fl.=flourished（活躍する）
   - i.e.=id est（すなわち）
   - n.d.=no date（出版年不明）
   - s.l.=sine loco（出版地不明）
   - s.n.=sine nomine（出版者不明）
   - PMM=Printing and the Mind of Man（西洋を築いた書物）
   - BMC=Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum
   - H=Hain, Lugwig. Repertorium bibliographicum in quo libri omnes ab arte typographi…
   - HC=Copinger, W. A., Supplement to Hain's 'Repertorium bibliographicum.
   - Goff=Goff, Frederick R. Incunabula in American Libraries: A Third Census …
   - GK=Goldsmiths'-kress Library of Economic Literature

4. 索引は、著者名のアルファベット順とした。

1. ヘロドトス（B.C.485頃～425頃）
「歴史」ギリシャ語初版　1502年　アルドゥス・マヌティウス印行　ヴェニス刊



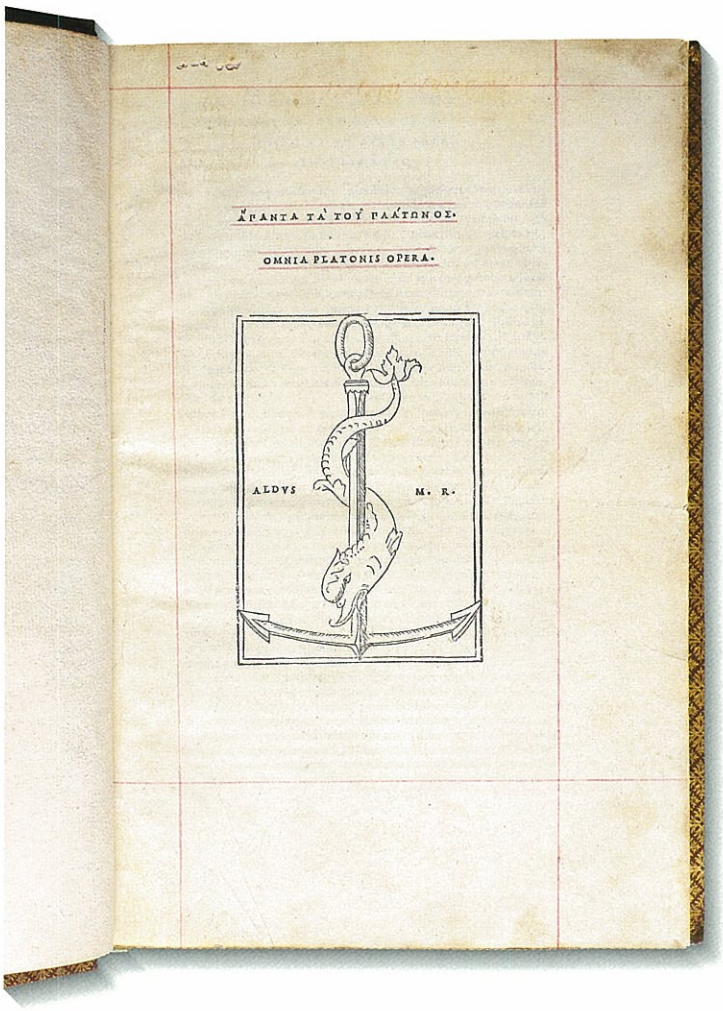


Herodotos, ca.485-ca.425 B.C.
Herodoti Libri Novem.
Venice : Aldus Manutius,　1502　140 leaves ; 32cm
PMM 41

ヘロドトスは、ギリシャの最も古い歴史家であり、＜歴史の父＞と呼ばれている。彼の生涯について、詳しいことは判っていないが、当時としては比類のない大旅行家であった。本書の主題は、紀元前490年から紀元前479年の間に行なわれた大ペルシアの侵略の歴史である。彼は、主として自らの見聞に基づき、各地の人々の伝承を集成して歴史を構成しようとした。主題の他に多くのエピソードが入れられ、興味本位になりがちでいわゆる物語風の歴史の域を出ていないが、彼のゆるぎない史的透察力と旅行によって自ら採録した膨大な知識を豊富に織り込むことによって＜歴史の父＞たる栄誉を今日なお失っていない。

彼以前の歴史家は、単なる年代記録者であったが、彼は資料を歴史的に集め、できる限りその真実性を確かめ、読者に報告すると同時に、アピールするよう物語をまとめた最初の人であった。

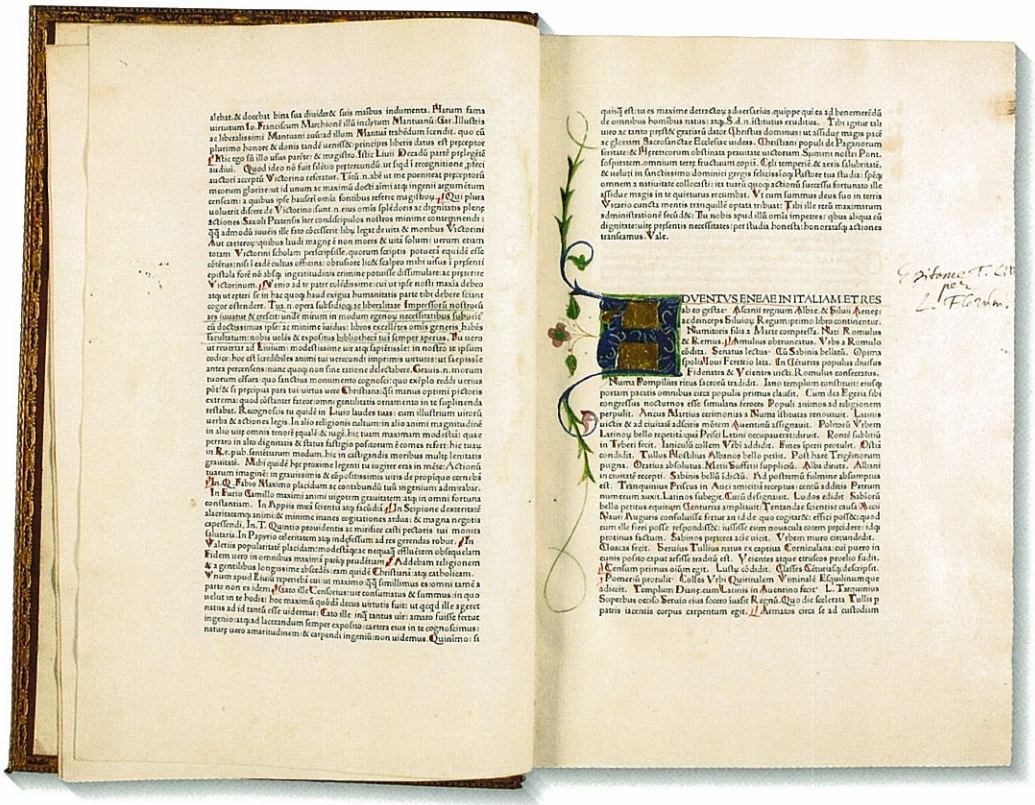
2. プラトン（B.C.429頃～347）
「全集」ギリシャ語初版　1513年　アルドゥス・マヌティウス印行　ヴェニス刊



Platon, ca.429-347 B.C.
Omnia Platonis opera.[Greek]
Venice : Aldus Mautius,　1513　2 Vols. ; 28cm
cf.PMM 27

プラトンは、古代ギリシャの哲学者。今日一般的に言われている「プラトン全集」は、ローマ皇帝テイベリウス（在位14-37年）の師友であったトラシュロスの編集によるものが基本となっている。それは、ギリシャ悲劇の上演形式をまねた4部作を単位としたもので、それが九つ集まって全集を形成している。プラトンの著作で現存する最古のものは、オックスフォード大学のボードリアン図書館に所蔵されている写本で、895年に制作されたとみられている。プラトン全集が初めて印刷本として登場するのは、1484年にフィレンツェで印刷されたラテン語訳である。しかし、ギリシャ語原典としては1513年にヴェニスのアルドゥス・マヌティウスによって刊行された本書が最初である。

3. リウィウス（B.C.59～A.D.17）
「ローマ建国以来の歴史」　1470年　スピラ印行　ヴェニス刊

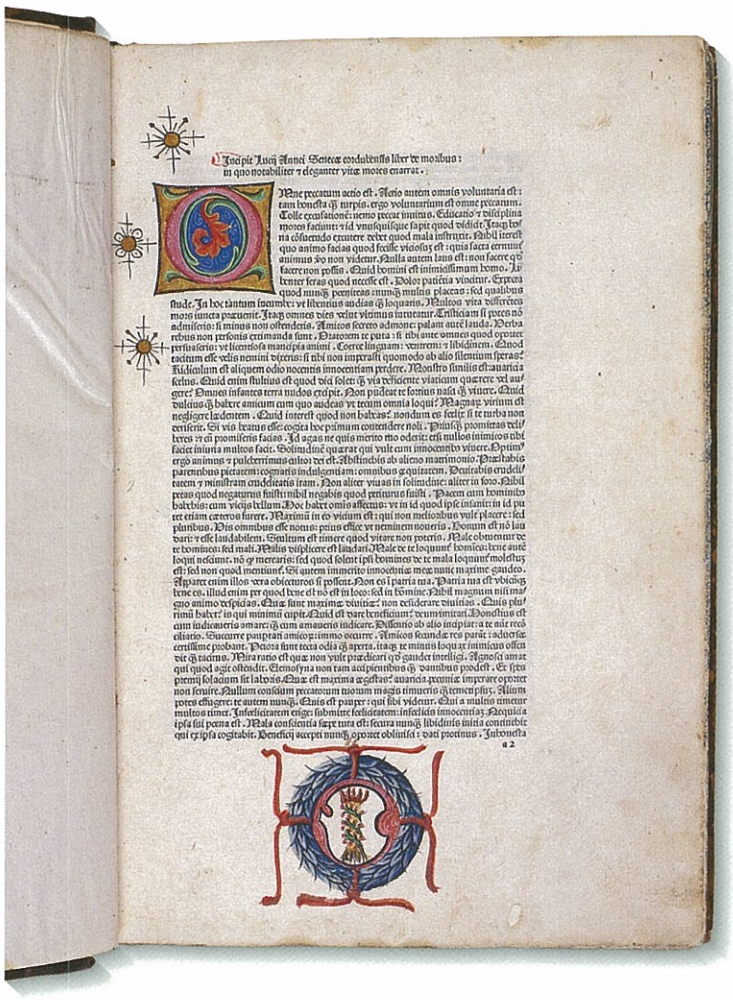


Livius, Titus. B.C.59-A.D.17
Historiae Romanae decades.
[Venice] : Vindelinus de Spira,　1470　417 leaves. ; 41cm
HC 10130 ; Goff L-238 ; BMC V-154

リウィウスの名著「ローマ建国以来の歴史」は、リウィウスが40年以上の歳月をかけて完成した142巻からなるローマ時代最大の歴史書で、ローマ市の伝説的な建設から前2世紀のマケドニア王朝の滅亡までが記述されている。劇的なエピソードに満ち溢れたリウィウスの叙述は、後世の文学や美術などに大きな影響を及ぼし、各国語に翻訳されて人気を博した。

「ローマ建国以来の歴史」は、15世紀中の同時期に相次いでイタリアの3ヶ所で出版されており、シュヴァインハイムとパンナルツが、1469年にローマ近郊スビアコに設立したイタリア最初の印刷所で刊行したものが初版。その翌年にヴェニスで出版された本書か、あるいはウルリヒ・ハーンがローマで刊行した版本のどちらかが第2版と考えられている。本書は、刊年が印刷された初めての版であり、ヴェニスにおいて最初にローマン字体が使用された印刷本である。

4. セネカ（B.C.5～A.D.65）
「哲学論集および道徳書簡集」 1478年　ベルナルド・デ・コロニア印行　トレヴィーゾ刊

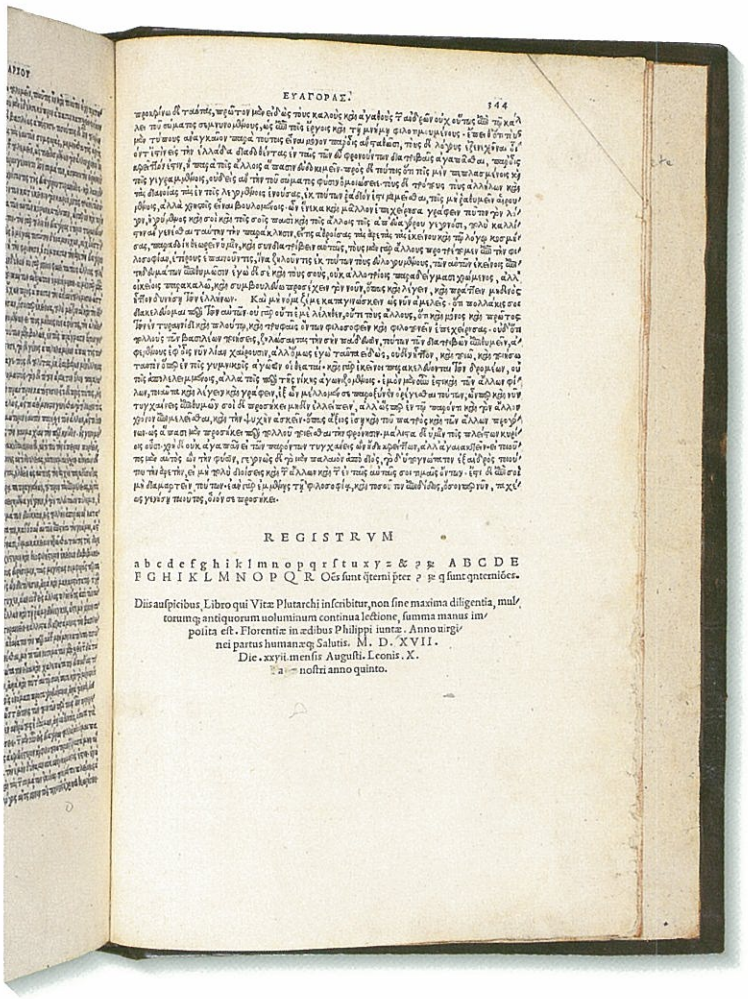


Seneca, Lucius Annaeus, B.C.5-A.D.65
Opera Philosophica. Epistolae. ED: Blasius Romerus
Treviso : Bernardus de Colonia,　1478　212 leaves ; 34cm
HC 14591 ; Goff S-369 ; BMC VI-892
W. J. Monson 旧蔵書

セネカは、ローマ帝政時代の哲学者で、弁論術と哲学を学び、著述家、政治家として活躍した。政治的陰謀の疑いでコルシカ島に幽閉されたが、ネロの母アグリッピナの口利で召還され、ネロの私教師として採用された。ネロが皇帝になると、執政官に任じられ再び政治的影響力を持つが、その後皇帝に対する陰謀加担の嫌疑をうけ、皇帝ネロから死を命ぜられて自殺した。

セネカの哲学論集は、1475年に初めて印刷・出版されており、本書は2番目の版である。

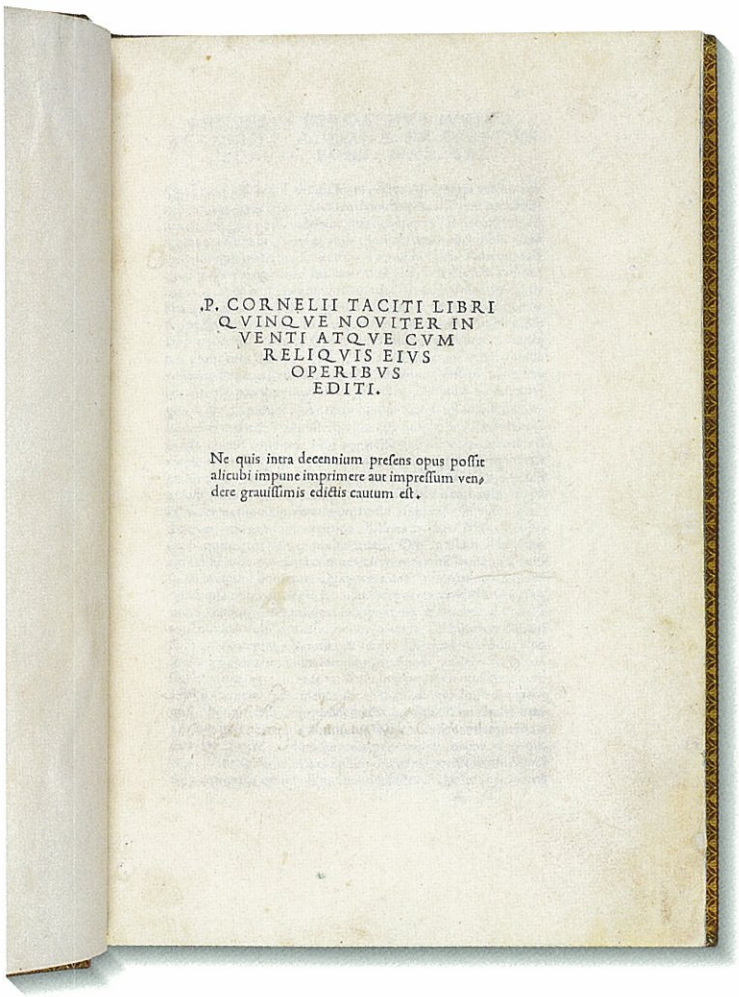
5. プルタルコス（46頃～120頃）
「対比列伝」　1517年　フィリッポ・デ・ギュンティス印行　フローレンス刊



Plutarchos, ca.46-ca.120
Vitae Romanorum et Graecorum.
Florence : Philippo de Giuntis, 1517 344 leaves ; 31cm
PMM 48

プルタルコス＜プルターク＞は、ギリシャ末期の道学者、歴史家。「対比列伝」は俗に「英雄伝」と呼ばれ、ギリシャとローマの軍人や政治家からそれぞれ似かよった人物を選び、対比して比較研究したものである。対比の目的は、当時のギリシャはローマの属領であったため、ローマ人に対し、ギリシャ人が軽蔑すべき弱小民族ではなく、多くの偉人を過去に出していることを教えるとともに、ギリシャ人に対してはローマが未開の蛮族ではないことを示すことにあった。この作品は晩年に書かれたもので、本書は、1517年にフローレンスではじめて印刷されたギリシャ語版である。16世紀後半になるとフランスでフランソワⅠ世のもとでルネサンスが起こり、「優しいプルターク」がもてはやされた。ジャック・アミヨ（Jacques Amyot）のフランス語訳（Vies des hoames illustres. 1559.）が出るに及んで、フランス国内にとどまらず広く西欧に知れ渡ることとなった。アミヨの翻訳は、フランス語法を完成したと言われるほど広く愛読された。

6. タキトゥス（55頃～120頃）
「著作集」初版　1515年　ステファヌム・ギレレッティ印行　ローマ刊



.P. CORNELII TACITI LIBRI
QVINQVE NOVITER IN
VENTI ATQVE CVM
RELIQVIS EIVS
OPERIBVS
EDITI.

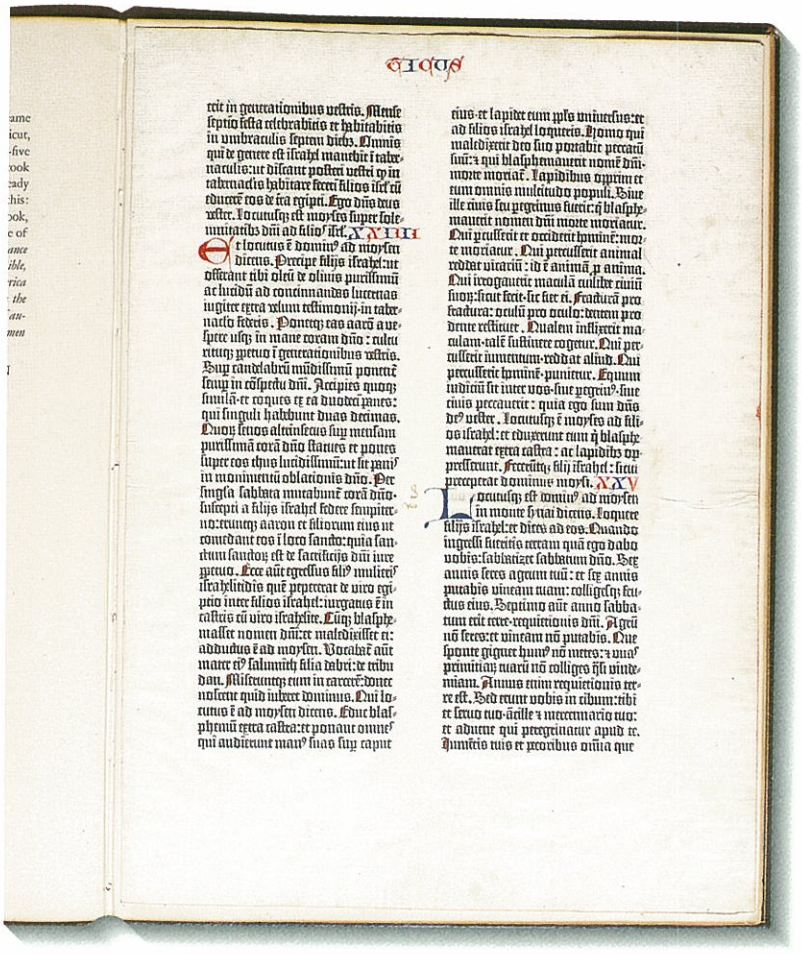
Ne quis intra decennium presens opus possit
alicubi impune imprimere aut impressum ven-
dere grauissimis edictis cautum est.

Tacitus, Publius Cornelius, ca.55-ca.120
Cornelii Taciti Libri quinque noviter inventi atque cum reliqiis eius operibus editi.
Rome : Stephanum Guillereti de Lothoringia Tullen dioc.　1515　242 leaves ; 32cm

タキトゥスは、ローマの歴史家であり、ラテン文学の白銀時代の中心的な散文作家である。はじめ弁論と法律を学び、雄弁家として名声を得、77年頃政治家アグリコラの娘と結婚した。彼は自由な共和政時代の賛美者、帝政の痛烈な批判者であった。彼の主要な作品は、「年代記」と「歴史」であり、14年のティベリウス帝の即位から97年のドミティアヌス帝の死までにわたっており、この期間の歴史について最も信頼しうるものである。中世の間は比較的知られていなかったタキトゥスの作品は、1473年頃ヴェネチアではじめて印刷され、ルネサンスの歴史家に大きな影響を及ぼした。

7. 聖書

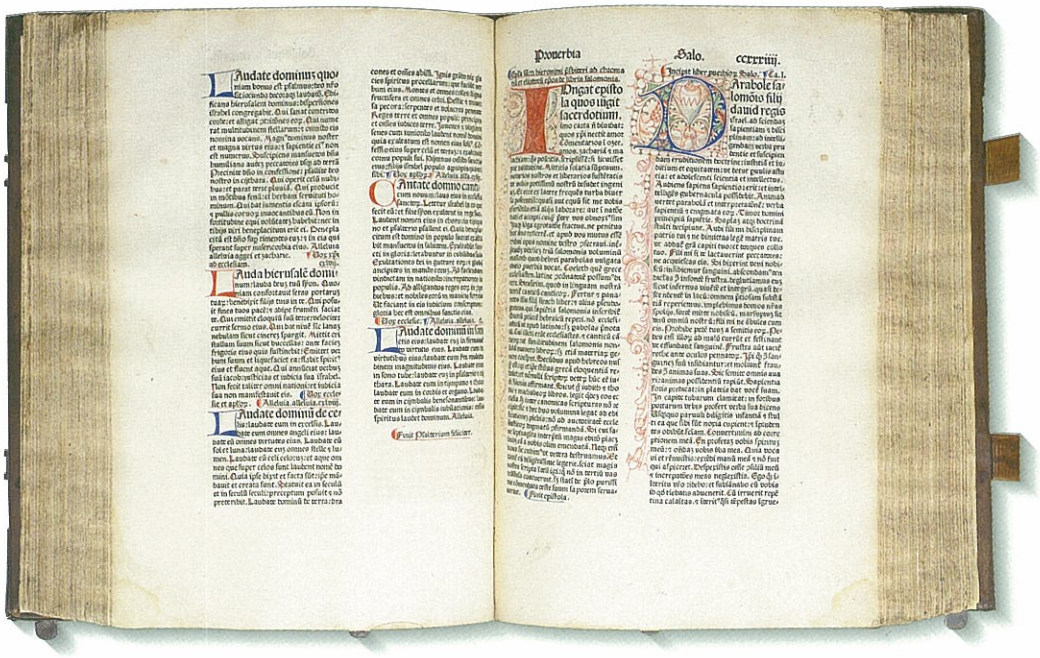
「四十二行聖書」　零葉　1455年頃　グーテンベルク印行　マインツ刊



Gutenberg, Johann.
A Noble Fragment Being a Leaf of the Gutenberg Bible, 1450/1455.
With a Bibliographical essay by A. Edward Newton.
New York : Gabriel Wells,　1921　A single leaf. ; 40cm
cf.PMM 1

本書は、印刷術の創始者グーテンベルクが発明した活版印刷術により、初めて印刷されたラテン語聖書として知られている。発行総数は160から180部と言われ、そのうち約4分の1が羊皮紙に、残り4分の3が紙に印刷された。現存するものは48部で、そのうち完本は21部とされている。一般的には「グーテンベルク聖書」として有名であるが、1頁が概ね42行で印刷されているため「42行聖書」とも呼ばれている。この零葉は、1921年にアメリカにあった不完全本がバラバラにされニューヨークで売りに出されたものの一つである。館蔵ページは、旧約聖書レビ記の一部分で、第23章の途中から第25章の途中までである。第24章20節では、「骨折には骨折を、目には目を、歯には歯をもって人に与えたと同じ傷害を受けねばならない。」と言う有名なくだりの部分が含まれている。

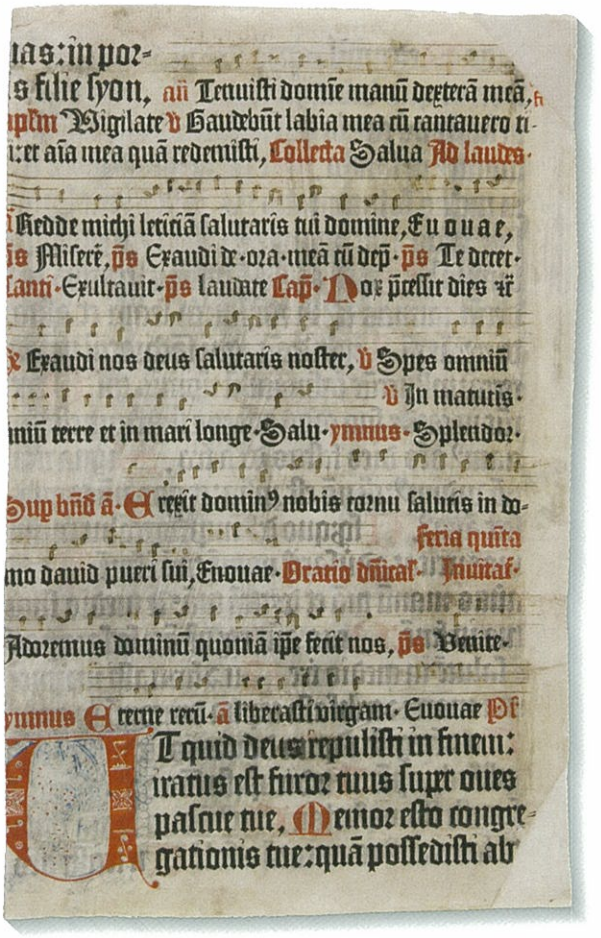
8. 聖書
「ラテン語聖書」　1478年　アントン・コーベルガー印行　ニュルンベルク刊



Biblia Latina. With additions by Menardus Monachus
Nuremberg : Anton Koberger,　10 Nov. 1478　486 leaves ; 41cm
HC 3069 ; Goff B-559 ; BMC II-416

ドイツの印刷業者、アントン・コーベルガーによって印刷されたラテン語聖書。コーベルガーは、初期印刷術において最も成功したニュルンベルクの印刷者である。最盛期の1485年頃には、100人の植字工と印刷工を使い、24台の印刷機を操って200種以上の書籍を印刷した。彼は、1475年に最初の聖書を印刷し、全部で15点の聖書を印刷出版しているが、本書はその第3番目に印刷された「ラテン語聖書」である。

9. 聖書
「マインツ詩篇」零葉　1459年　フスト/シェーファー印行　マインツ刊



Just, Johan and Peter Shöffer (Printer)
Psalterium Benedictinum cum canticis et hymnis.
Mainz : Johann Fust and Peter Schöffer,　29 August 1459　Leaf48[E8] ; 35×22cm
Goff P-1062　BMC I-19
Otto Schäffer 旧蔵書

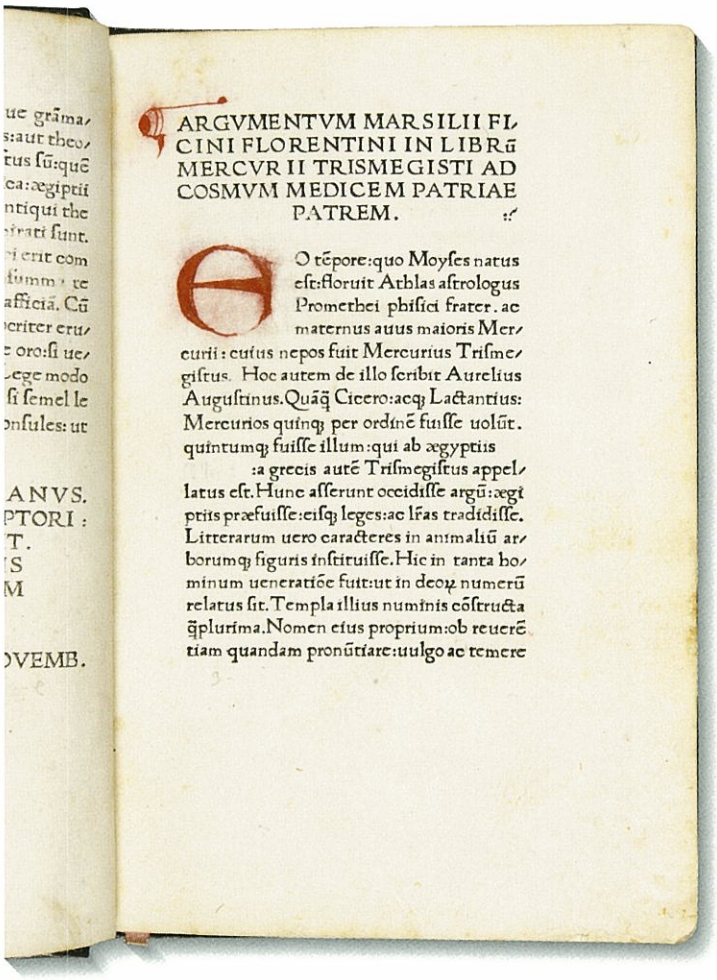
「詩篇」は、旧約聖書の一書で、古代イスラエル民族が神を賛美した詩150編からなる。この詩篇は、グーテンベルクの共同経営者であったヨハン・フストと、助手を務めていたペーター・シェーファーによって印刷されたものである。「マインツ詩篇」は、グーテンベルク聖書の後、マインツで2番目に印刷された活版印刷本で、ヴェラム革に刷られ、出版年月、印刷者、印刷地、出版者のマークを印刷した初めての刊行本であった。

発行部数は不明であるが、現在、不完全本を含め13部と10枚の零葉が存在している。活字デザインはグーテンベルク聖書に近く、大型イニシャル文字を使用し、赤、青、黒のインクが使用された初めての多色刷り印刷本であった。ラテン語で印刷された本零葉は、初期刊行本の歴史上最も重要な資料の一つと考えられている。

この零葉は、後年に製本された刊本の補強及び裏打ち用材料として再利用されていた。同寸の零葉がアメリカのビッドウェル図書館にも所蔵されており、同じ本の裏打ちに使用されていたと考えられる。

ドイツの収集家オットー・シェファーの旧蔵書。

10. ヘルメス・トリスメギトゥス（ヘルメスの名に帰せてB.C.300頃～A.D.300頃に書かれたとされる）
「ポイマンドレスほか」初版　1471年　ジェラルド・デ・リサ印行　トレヴィーソ刊



ARGVMENTVM MARSILII FI/
CINI FLORENTINI IN LIBRū
MERCVRII TRISMEGISTI AD
COSMVM MEDICEM PATRIAE
PATREM.

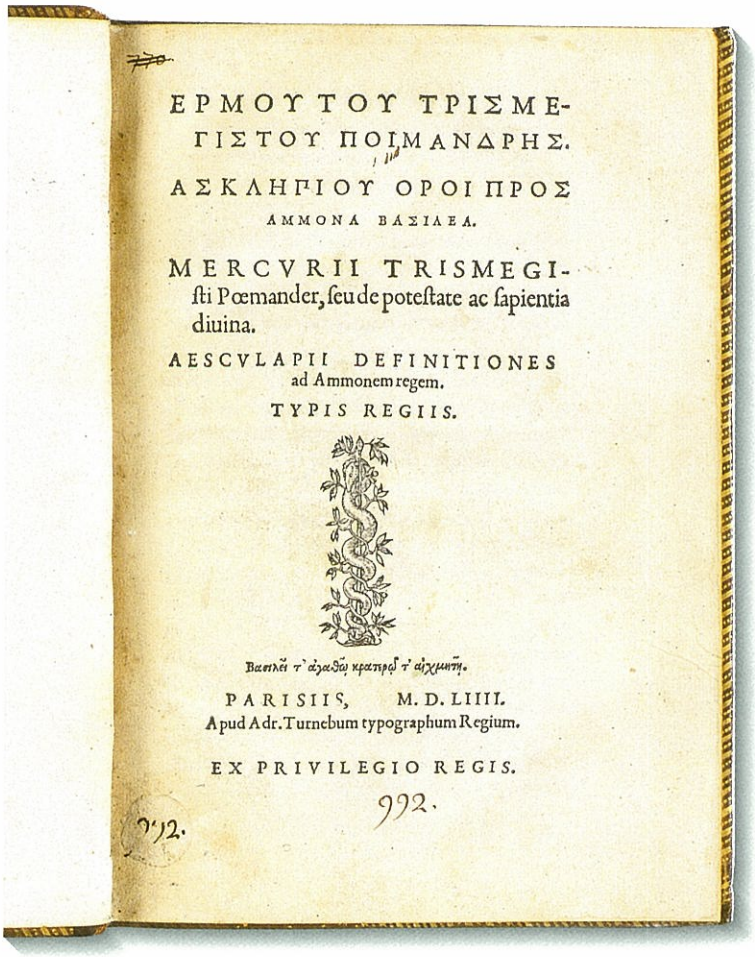
HO tēpore:quo Moyses natus
est:floruit Athlas astrologus
Promethei phisici frater. ac
maternus auus maioris Mer/
curii: cuius nepos fuit Mercurius Trisme/
gistus. Hoc autem de illo scribit Aurelius
Augustinus. Quāq; Cicero:aeq; Lactantius:
Mercurios quinq; per ordinē fuisse uolūt.
quintumq; fuisse illum:qui ab ægyptiis
:a greeis autē Trismegistus appel/
latus est. Hunc asserunt occidisse argū:ægi
ptiis præfuisse:eisq; leges:ac lras tradidisse.
Litterarum uero caracteres in animaliū ar/
borumq; figuris instituisse. Hic in tanta ho/
minum ueneratiōe fuit:ut in deoꝝ numerū
relatus sit. Templa illius numinis cōstructa
q̄plurima. Nomen eius proprium:ob reuerē
tiam quandam pronūtiare:uulgo ac temere

Hermes Trismegistus;
Primander de Potestate et sapientia dei. [Translated by Marsilius Ficimus.]
Treviso : Gerardus de Lisa, de Flandria　18 Dec. 1471　56 leaves. ; 22cm
Goff H-77 ; BMC VI-883, XII 64

錬金術関連文書の中でも最も有名であり、後世の科学思想に大きな影響を与えた文書群、「ヘルメス選集」の第1番目の著作である「ポイマンドレス」の初版。ヘルメス選書は、アレクサンドリアやナイル沿岸都市を母胎として生まれた。この膨大な著作の内容は、宗教・哲学、占星術、錬金術、薬学・医学、魔術などに及ぶ。

もともとギリシャ語写本として伝えられたこの「ヘルメス選集」の翻訳を、メディチ家の始祖コジモ・デ・メディチの庇護下にあった哲学者マルシリオ・フィチーノ（1433-99）が、その委嘱を受けてラテン語への翻訳に取り組んだ。フィチーノもこの文書の持つ異教思想に大いに魅了され、当時志していた「プラトン全集」の翻訳を後回しにしてまで、本文書の翻訳に集中したと言われている。この文書群では、エジプト神話に登場する神々（ヘルメス、イシス、ホルス）が、神の本性について、世界の起源について、人間の創造と堕落について、唯一の救済手段としての神的啓示について、相互に交わす一連の対話を行っている。

11. ヘルメス・トリスメギトゥス
「ポイマンドレス」ギリシャ語初版　1554年　パリ刊



ΕΡΜΟΥ ΤΟΥ ΤΡΙΣΜΕ-
ΓΙΣΤΟΥ ΠΟΙΜΑΝΔΡΗΣ.
ΑΣΚΛΗΠΙΟΥ ΟΡΟΙ ΠΡΟΣ
ΑΜΜΟΝΑ ΒΑΣΙΛΕΑ.

MERCVRII TRISMEGI-
sti Pœmander, seu de poteſtate ac ſapientia
diuina.

AESCVLAPII DEFINITIONES
ad Ammonem regem.

TYPIS REGIIS.

Βασιλεῖ τ' ἀγαθῷ κρατερῷ τ' αἰχμητῇ.

PARISIIS, M. D. LIIII.
Apud Adr. Turnebum typographum Regium.

EX PRIVILEGIO REGIS.

992.

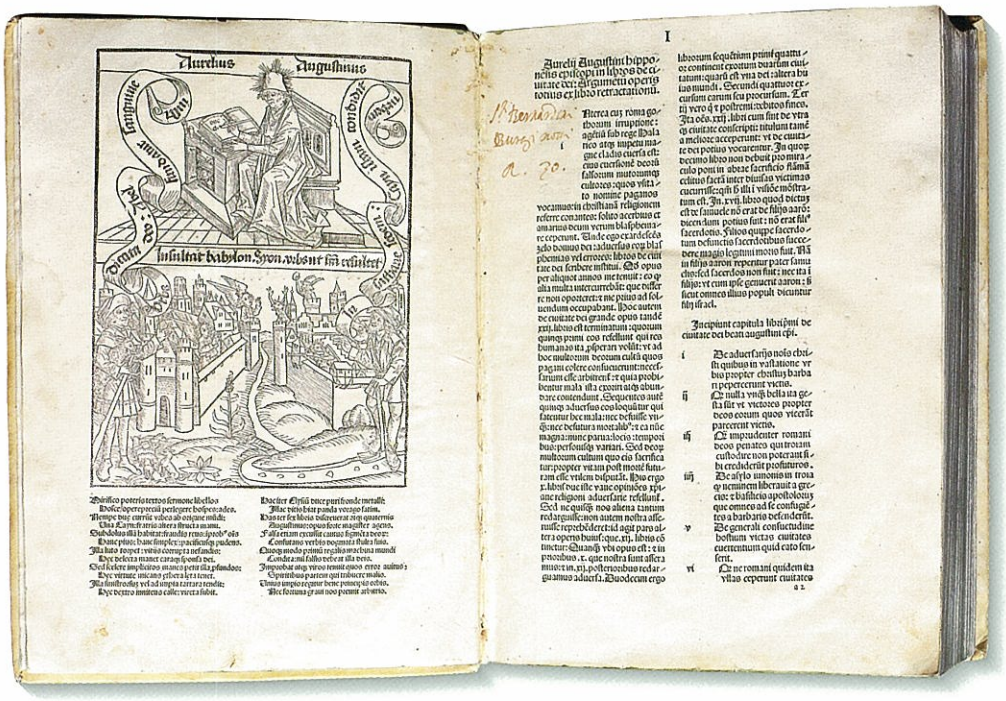
Hermes Trismegistus.
Mercvrii Trismegisti Poemander, seu de potestate ac sapientia divina.
Paris : apud Adr. Turnebum, 1554. [8],126,[2]p. ; 20cm

「ポイマンドレス」は、いわゆる古代「ヘルメス文書」の中の一冊子である。ヘルメス文書は、アレクサンドリアやナイル沿岸都市を母胎として生まれた。この膨大な著作の内容は、宗教・哲学、占星術、錬金術、薬学・医学、魔術などに及ぶ。

「ポイマンドレス」は、ヘルメス・トリスメギストゥスなるポイマンドレスが、求導者との対話の中で教えを伝授する形式をとって書かれている。32の対話は、Ⅰ.ポイマンドレスの遭遇、Ⅱ.世界の素材と原理、Ⅲ.世界の原型、Ⅳ.世界の創造、Ⅴ.人間の創造と堕落、Ⅵ.人間の救済、Ⅶ.宣教と頌栄、で構成され、当時の反ローマ的思想から生まれたとされる宇宙論と人間論は興味深い。

館蔵書は、学匠印刷者のアドリアン・トゥルネーブが出版したギリシャ語原典初刊本。後半にフィチーノのラテン語訳が収録されている。

12-1. アウグスティヌス（354～430）
「神の国」 1490年　アマーバッハ印行　バーゼル刊

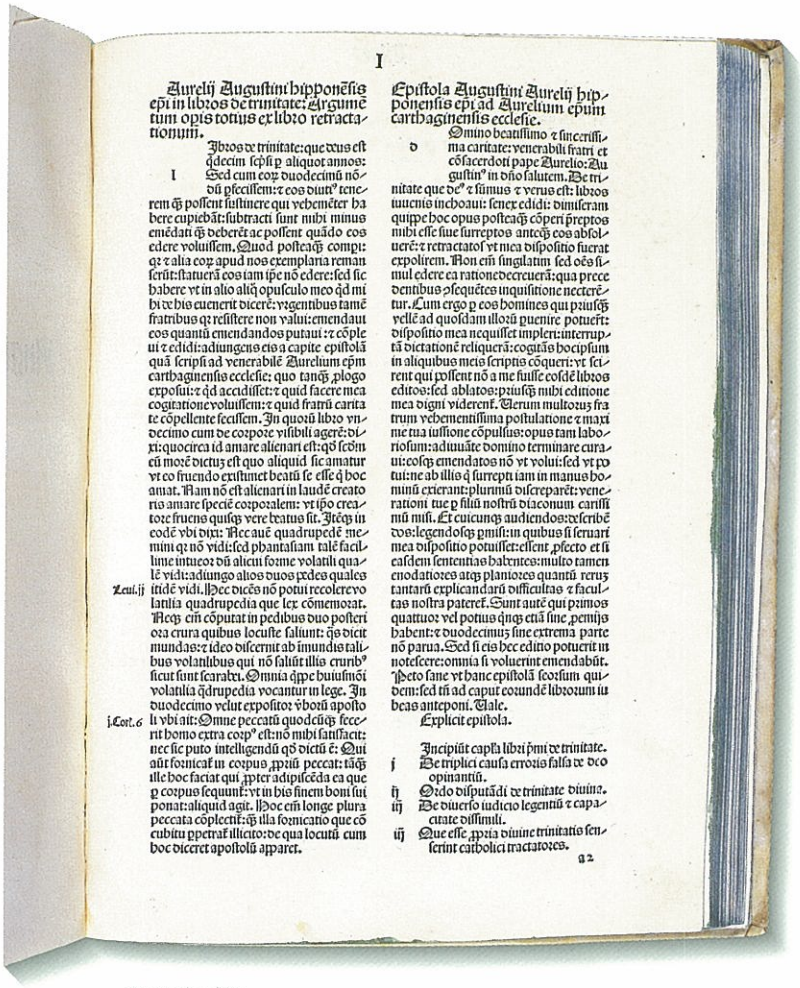


Augustinus, Aurelius, 354-430
De civitate dei.
Basel : Johann Amerbach,　13 Feb. 1490　267 leaves ; 30cm
HC 2066 ; Goff A-1244 ; BMC III-752
cf.PMM 3

アウグスティヌスは、古代キリスト教の最大の教父である。410年頃ローマに起こった大災害が、古いローマの神々を忘れてキリスト教を信じたためであるとの非難に反駁して、「神の国」と「世の国」を対立させることによって、大規模のキリスト教護教論を展開した書。原書は、413年頃執筆にとりかかり426年頃までの14年間に全22巻が書き上げられた。キリスト教的世界観の上に生まれた西洋最初の＜歴史の哲学＞ないし、＜歴史の神学＞であるといわれる。

本書は、初期の印刷業者の一人、ヨハネス・アマーバッハによりバーゼルで印刷されたもので、アウグスティヌスの別の著作「三位一体論」が合冊製本されている。

12-2. アウグスティヌス（354～430）
「三位一体論」 1490年　アマーバッハ印行　バーゼル刊



I

Aurelij Augustini hipponēsis epi in libros de trinitate: argumentum opis totius ex libro retractationum.

Ibros de trinitate: que deus est q̃ decim sp̃ij p aliquot annos:
I Sed cum eos duodecimũ nondũ p̃fecissem: et eos diuuⁿ tenerem q̃ possent sustinere qui vehemēter habere cupiebāt: subtracti sunt mihi minus emēdati q̃ deberēt ac possent quādo eos edere voluissem. Quod posteaq̃ compi: qz et alia eor apud nos exemplaria remanserūt: statuerā eos iam ipe nō edere: sed sic habere vt in alio aliq̃ opusculo meo q̃d mihi de his euenerit dicerē: vrgentibus tamē fratribus qz resistere non valui: emendaui eos quantũ emendandos putaui: et cōplevi et edidi: adiungens eis a capite epistolā quā scripsi ad venerabilē Aurelium ep̃m carthaginensis ecclesie: quo tanq̃ ,plogo exposui: et q̃d accidisset: et quid facere mea cogitatione voluissem: et quid fratrũ caritate cōpellente fecissem. In quoũ libro vndecimo cum de corpore visibili agerē: dixi: quocirca id amare alienari est: qd secũm eũ morē dictuz est quo aliquid sic amatur vt eo fruendo existimet beatũ se esse q̃ hoc amat. Nam nō est alienari in laudē creatoris amare speciē corporalem: vt ipo creatore fruens quisq̃ vere beatus sit. Itēq̃ in eodē vbi dixi: Nec auē quadrupedē memini qz nō vidi: sed phantasiam talē facillime intueor dũ alicui forme volatili qualē vidi: adiungo alios duos pedes quales
Leui.ij itidē vidi. ¶Hec dicēs nō potui recolere volatilia quadrupedia que lex cōmemorat. Hecq̃ cũ cōputat in pedibus duo posteriora crura quibus locuste saliunt: q̃s dicit mundas: et ideo discernit ab ĩmundis talibus volatilibus qui nō salūt illis cruribⁿ sicut sunt scarabei. Omnia q̃pe huiusmõi volatilia q̃drupedia vocantur in lege. In duodecimo velut expositor vborũ apostoli vbi ait: Omne peccatũ quod cũq̃ fecerit homo extra corpⁿ est: nō mihi satisfacit: nec sic puto intelligendũ qd dictũ ē: Qui aũt fornicat in corpus ,prũ peccat: tãq̃ ille hoc faciat qui ,pter adipiscēda ea que p corpus sequunt: vt in his finem boni sui ponat: aliquid agit. ¶Hoc cũ longe plura peccata cōplectit: q̃ illa fornicatio que cōcubitu ppetrat illicito: de qua locutũ cum hoc diceret apostolũ apparet.
j.Cor.6

Epistola Augustini Aurelij hipponensis epi ad Aurelium epum carthaginensis ecclesie.

Omino beatissimo et sincerissima caritate: venerabili fratri et cōsacerdoti pape Aurelio: Augustinⁿ in dño salutem. De trinitate que deⁿ et sumus et verus est: libros tuuenis inchoaui: senex edidi: dimiseram quippe hoc opus posteaq̃ cōperi ,preptos mihi esse siue surreptos anteq̃ eos absoluerē: et retractatos vt mea dispositio fuerat expolirem. Non cũ singulatim sed oēs simul edere ea ratione decreuerā: qua precedentibus ,sequētes inquisitione necterētur. Cum ergo p eos homines qui ,priusq̃ vellē ad quosdam illozũ puenire potuerūt: dispositio mea nequisset impleri: interruptā dictationē reliquerā: cogitās hocipsum in aliquibus meis scriptis cōqueri: vt scirent qui possent nō a me fuisse eosdē libros editos: sed ablatos: ,priusq̃ mihi editione mea digni viderent. Verum multozuz fratrum vehementissima postulatione et maxime tua iussione cōpulsus: opus tam laboriosum: adiuuāte domino terminare curaui: eosq̃ emendatos nō vt volui: sed vt potui: ne ab illis q̃ surrepti iam in manus hominũ exierant: plurimũ discreparēt: venerationi tue p filiũ nostrũ diaconum carissimũ misi. Et cuicunq̃ audiendos: rescribēdos: legendosq̃ ,misi: in quibus si seruari mea dispositio potuisset: essent ,pfecto et si easdem sententias haberētes: multo tamen enodatiores atq̃ planiores quantũ rerum tantarũ explicandarũ difficultas et facultas nostra pateret. Sunt autē qui primos quattuor vel potius q̃nq̃ etiã sine ,pemijs habent: et duodecimuz sine extrema parte nō parua. Sed si eis hec editio potuerit innotescere: omnia si voluerint emendabūt. ¶Peto sane vt hanc epistolã seozsum quidem: sed tñ ad caput eozundē librozum iubeas anteponi. Vale.

Explicit epistola.

Incipiūt capla libri ,pmi de trinitate.
j De triplici causa errozis fallã de deo opinantiũ.
ij Ordo disputãdi de trinitate diuina.
iij De diuersis iudicio legentiũ et capacitate dissimili.
iiij Que esse ,pria diuine trinitatis senserint catholici tractatores.

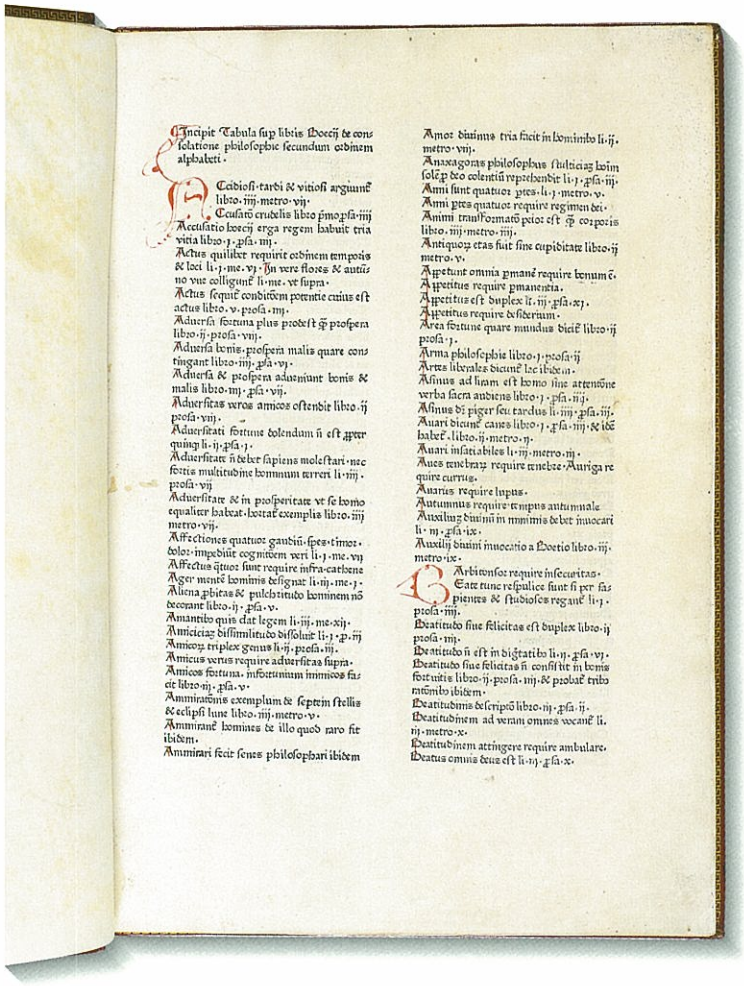
g2

Bound with:
Augustinus Aurelius, 354-430
De trinitate.
Basel : Johann Amerbach,　1490　83 leaves ; 30cm
HC 2039 ; Goff A-1345 ; BMC III-753

本書は、アウグスティヌスによる教義学上の主著で、キリスト教の信仰の核心をなす三位一体の秘儀について、長年の思索の成果として417年頃までに書き上げられたとされる。第12巻まで書き上げた時、ひそかに持ち出されて読まれるようになったので、一時、執筆を続けることを断念したが、信仰の友の懇請にしたがって、最後の3巻を書き加え公にした。

館蔵書は、同じ年にアマーバッハにより印行された「神の国」と合冊製本されている。

13. ボエティウス（480頃～542）
「哲学の慰め」　1476年　アントン・コーベルガー印行　ニュルンベルク刊



Incipit Tabula sup libris Boecij de consolatione philosophie secundum ordinem alphabeti.

Accidiosi·tardi & vitiosi arguunt libro·iiij·metro·viij.
Accusatio crudelis libro ꝓmo·ꝓsa·iiij
Accusatio boecij erga regem habuit tria vitia libro·j·ꝓsa·mj.
Actus quilibet requirit ordinem temporis & loci li·j·me·vj·In vere flores & autumno vua colliguntur li·me·vt supra.
Actus sequitur conditorem potentie cuius est actus libro·v·prosa·mj.
Aduersa fortuna plus prodest q̃ prospera libro·ij·prosa·viij.
Aduersa bonis·prosperia malis quare contingant libro·iiij·ꝓsa·vj.
Aduersa & prospera adaugmiunt bonis & malis libro·mj·ꝓsa·viij.
Aduersitas veros amicos ostendit libro·ij prosa·viij.
Aduersitati fortune dolendum ñ est ꝓpter quinq; li·ij·ꝓsa·j.
Aduersitate ñ debet sapiens molestari·nec fortis multitudine hominum terreri li·iiij·prosa·viij
Aduersitate & in prosperitate vt se homo equaliter habeat·hortat exemplis libro·iiij metro·viij.
Affectiones quatuor gaudiũ·spes·timor·dolor·impediũt cognitorem veri li·j·me·vij
Affectus q̃tuor sunt require infra·carbone
Ager mente hominis designat li·ij·me·j·
Aliena ꝓhibet & pulchritudo hominem nõ decorant libro·ij·ꝓsa·v.
Amantibo quis dat legem li·iij·me·xij·
Amicitia dissimilitudo dissoluit li·j·ꝓ·iij
Amicoꝝ triplex genus li·ij·prosa·iij.
Amicus verus require aduersitas supra·
Amicos fortuna. infortunium inimicos facit libro·mj·ꝓsa·v·
Ammiratius exemplum de septem stellis & eclipsi lune libro·iiij·metro·v·
Ammirant homines de illo quod raro fit ibidem.
Ammirari facit senes philosophari ibidem

Amor diuinus tria facit in hominibo li·ij·metro·viij.
Anaxagoras philosophus sudiciaꝝ hoim solep deo colentiũ reprehendit li·j·ꝓsa·iij.
Animi sunt quatuor ꝓtes·li·j·metro·v·
Animi ꝓtes quatuor require regimen dei.
Animi transformatõ pior est q̃ corporis libro·iiij·metro·iiij.
Antiquor etas fuit sine cupiditate libro·ij metro·v·
Appetunt omnia ꝑmanẽ require bonum c̃.
Appetitus require ꝑmanentia.
Appetitus est duplex li·iij·ꝓsa·xj.
Appetitus require desiderium.
Area fortune quare mundus dicit libro·ij prosa·j.
Arma philosophie libro·j·prosa·ij
Artes liberales dicunt lee ibidem.
Asinus ad liram est homo sine arte mõne verba sacra audiens libro·j·ꝓsa·iij.
Asinus di piger seu tardus li·iij·ꝓsa·iij.
Auari dicunt canes libro·j·ꝓsa·mj·& idõ habet·libro·ij·metro·ij.
Auari insatiabiles li·mj·metro·iij.
Aues tenebraꝝ require tenebre·Auriga require currus.
Auarus require lupus.
Autumnus require tempus autumnale
Auxilius diuinũ in omnibus debet inuocari li·mj·ꝓsa·ix.
Auxilij diuini inuocatio a boetio libro·iij·metro·ix.

Arbitrator require inscuritas·
Sate tunc respublice sunt si per sapientes & studiosos regant li·j·prosa·iiij.
Beatitudo siue felicitas est duplex libro·ij prosa·mj.
Beatitudo ñ est in digratibo li·ij·ꝓsa·vj.
Beatitudo siue felicitas ñ consistit in bonis fortuitis libro·ij·prosa·mj·& probat tribo rationibo ibidem.
Beatitudinis descriptio libro·mj·ꝓsa·ij.
Beatitudinem ad veram omnes vocant li·mj·metro·x.
Beatitudinem attingere require ambulare.
Beatus omnis deus est li·mj·ꝓsa·x.

Boethius, Anicius Manlius Severinus, ca.480-524
De consolatione philosophiae.
Nuremberg : Anton Koberger,　12 Nov. 1476　137 leaves ; 39cm
HC 3370 ; Goff B-771 ; BMC II-413
cf.PMM 34

ボエティウスは、イタリアの哲学者、政治家。ボエティウスは、ギリシャ・ローマ哲学の最後の人といわれ、アリストテレスの倫理学をラテン語に訳し、これが中世のアリストテレス研究の端緒となったことで知られている。ボエティウスは、東ゴート王テオドリクスに仕えたが、「哲学の慰め」は反逆罪の疑いによる死刑を前にして獄中で書かれたもので、5部からなり、哲学の化身たる架空の女性が獄中を訪れ、彼と問答をかわしその不幸を慰め、人間の真の生き方について説き教える形式になっている。

本書は、1473年にバーゼルでM.ヴェンスラーによって最初に印刷されて以来、版を重ねている。館蔵書は、刊本としては、5番目の印刷本である。

14. ユスティニアヌス（483～565）

「勅法集成」　1475年　ゼンゼンシュミット/フリスナー印行　ニュルンベルク刊

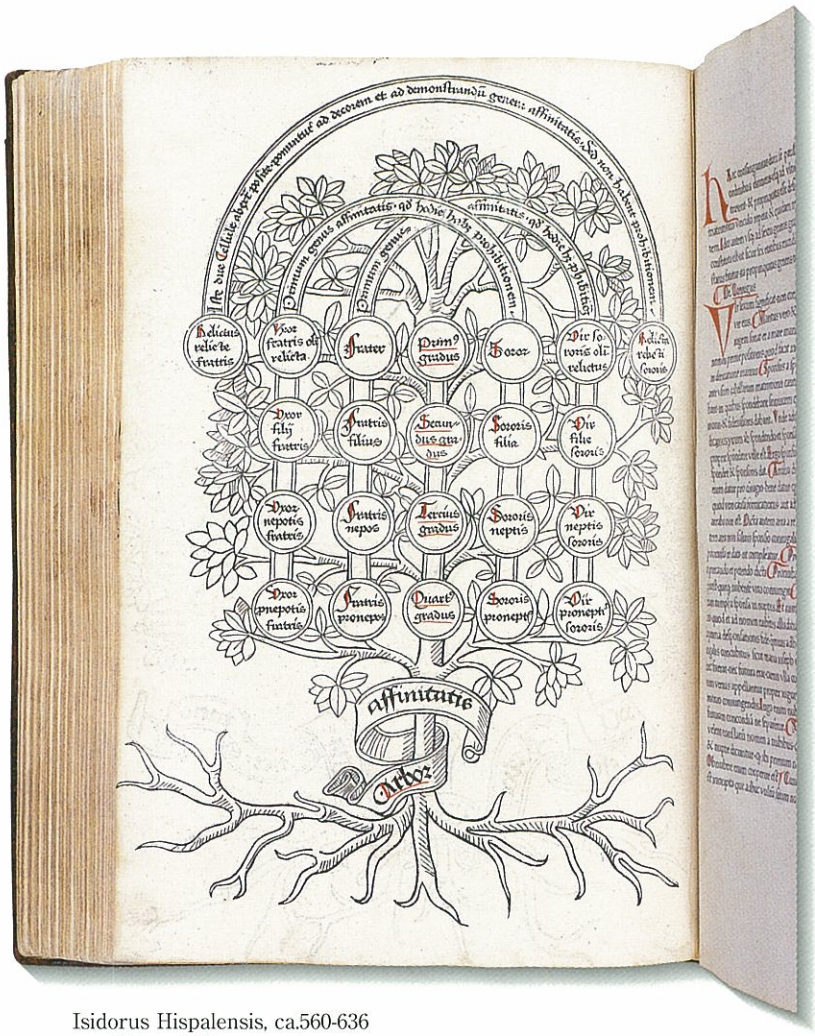
Justinianus, 483-565
Codex Justinianus (with the Glossa ordinaria of Accursius)
Nuremberg : Johann Sensenschmidt and Andreas Frisner,　24 June 1475　407 leaves ; 41cm
H 9599 ; Goff J-575 ; BMC II-406
cf.PMM 4

ユスティニアヌスⅠ世は、東ローマ帝国の皇帝で、在位は527～565年。即位後、ローマ帝国の復興をはかり、北アフリカのヴァンダル王国を征服、さらに東ゴートと戦いイタリアを帝国領とした。また、西ゴートとも戦い南スペインを征服した。彼はまた、当時混乱していた法体系を整備するため、トリポリアヌスを中心とする法学者たちを動員して今日いわゆる『ローマ法大全』（ユスティニアヌス法典）と呼ばれるものを編纂した。

『ローマ法大全』は、次の4つの著作からなる。「法学提要」Institutiones（法律学者たちにとっての法律の教科書）、「学説集成」Digests（2～3世紀のローマの法学者の学説を集めたもの）、「勅法集成」Codex（ユスティニアヌスに至るまでのローマの歴代皇帝の勅法を集めたもの）、「新勅法集成」Novellae（ユスティニアヌスの発した勅法を集めたもの）

「勅法集成」は、マインツのペーター・シェファーが1475年1月26日に初めて印刷しているが、館蔵書は、同年6月24日にニュルンベルグで印刷された2番目の版であり、最初の挿絵本として有名である。

15. イシドール（560頃～636）
「語源」初版　1472年　ギュンター・ツァイナー印行　アウグスブルグ刊



Isidorus Hispalensis, ca.560-636
Etymologiae.
[Augsburg] : Günther Zainer,　19 Nov. 1472　267 leaves ; 31cm
H 9273 ; Goff I-181 ; BMC II-317
PMM 9

セヴィリアの司教イシドールによって7世紀頃に著された最も古い百科事典で、教会のしきたり、教養、語源、文法、数学、天文、歴史といった後期ローマ世界の知識と思考形式を後世に伝える重要な役割を果たした一書である。

印刷者のギュンター・ツァイナーは、アウグスブルグの印刷者で、彼は後に書物の装飾として最初に木版画によるイニシャルを常用するようになり、その意匠がウィリアム・モリスに影響を与えたことで知られている。ローマ字体で印刷されたツァイナーの最初の作品として知られている。

16. トマス・アクィナス（1225頃～1274）

「ペトルス・ロンバルドゥスの命題集・第4巻注解」初版　1469年　ペーター・シェーファー印行　マインツ刊

Thomas Aquinas, Saint. ca1225-1274
Super quarto libro Sententiarum Petri Lombardi.
Mainz : Peter Schöffer,　13 June 1469　Large folio, 274 vellum leaves ; 37cm
H 1481 ; Goff T-168 ; BMC I-25
Emperor Maximilian I of Mexico 旧蔵書

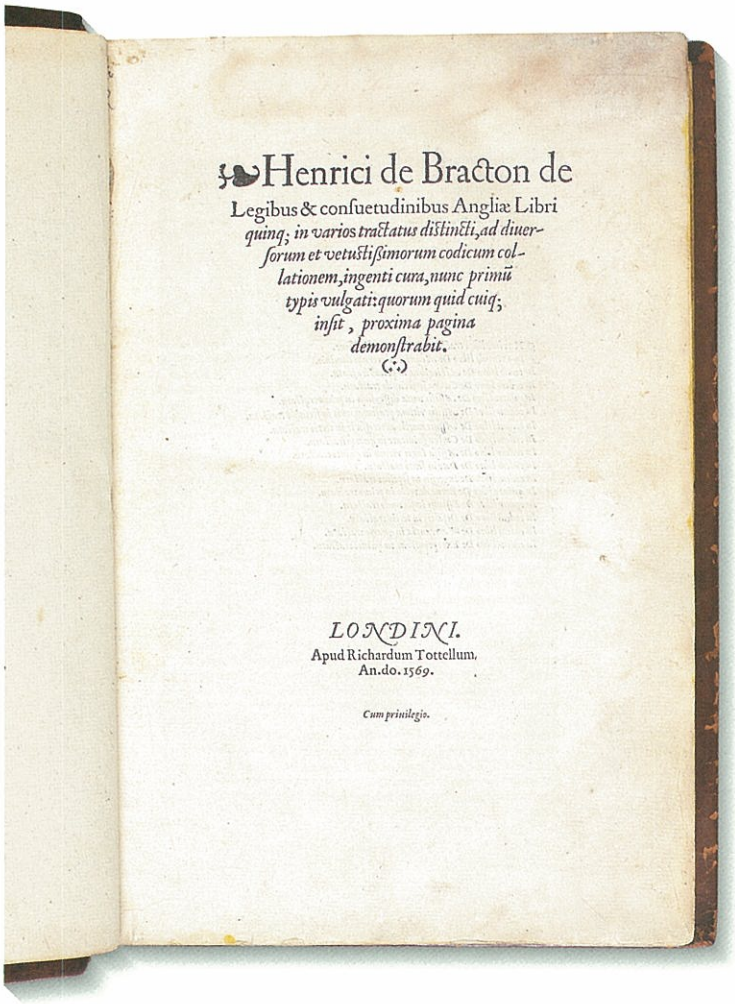
ペトルス・ロンバルドゥス（1095頃-1160）は、1136年より1150年までノートル・ダムで神学を教え、1159年にパリの司教になった人物。1155年から1158年にかけて書かれた「命題集」は中世神学の教科書として聖書と並ぶ必須テキストであった。この「命題集」についての講義を行うことが新人教師の義務となっていた中世の神学では最も基本的な著作である。

本書は、トマス・アクィナスにより1253年から1255年にかけて「注解書」（4巻）として著わされたもので、これは彼の最初の大著で、後に著された「神学大全」に並ぶ重要な著作である。

15世紀に印刷術が発明されると、4巻から成る本書は各巻ごとに分けられてドイツの3つの出版社で刊行された。最初に活字となって刊行されたのが最も重要な内容を持つこの第4巻で、1469年にマインツのペーター・シェーファーにより刊行された。また、第3巻は1476年にケルンのケルホフによって、第1,2巻は同じくケルンのクヴィンテルによって1480年に刊行されている。

館蔵書は、ヴェラムに印刷されたもので、19世紀のメキシコ皇帝マクシミリアンI世の旧蔵書。

17. ブラクトン（1216～1268）
「イギリスの法と慣習」初版　1569年　ロンドン刊



Henrici de Bracton de
Legibus & consuetudinibus Angliæ Libri
quinq; in varios tractatus distinCti, ad diuer-
sorum et vetustissimorum codicum col-
lationem, ingenti cura, nunc primũ
typis vulgati: quorum quid cuiq;
insit, proxima pagina
demonstrabit.

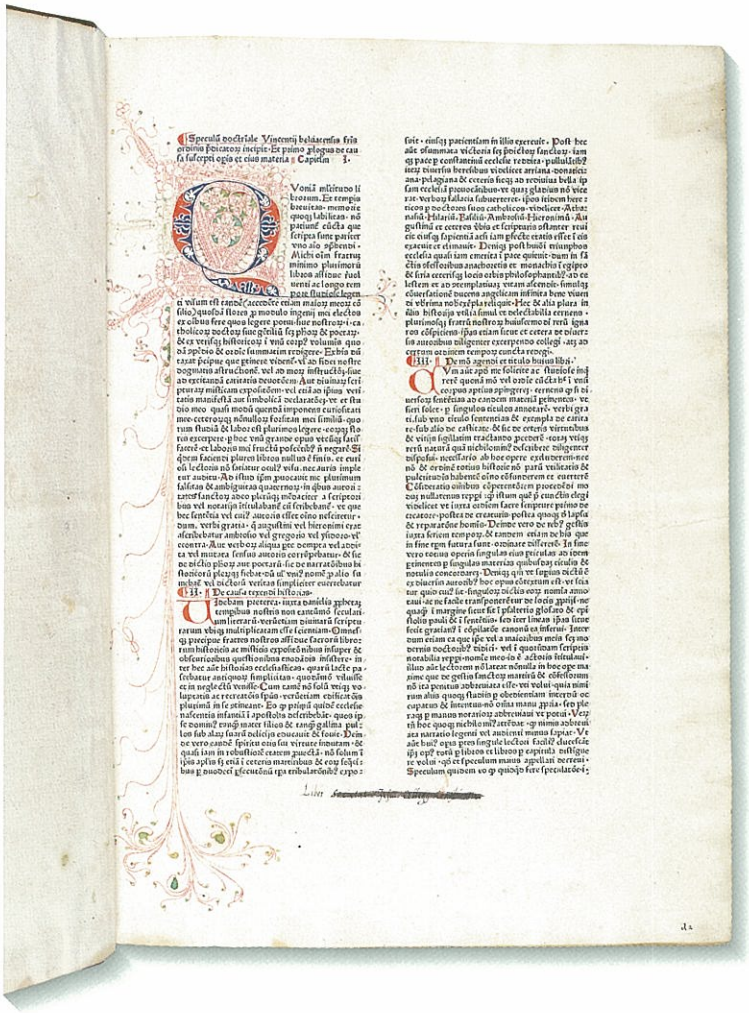
LONDINI.
Apud Richardum Tottellum,
An.do. 1569.

Cum priuilegio.

Bracton, Henry de, 1216-1268
De Legibus & consuetudinibus Angliae Libri quinq; in varios tractatus dictincti, ad diuersorum et vetustissimorum codicum collationem, ingenti cura, nunc primu[m] typis vulgati: quorum quid cuiq[ue] insit, proxima pagina demonstrabit.
London : Apud Richard Tottell,　1569　[16],1-172,175-144 leaves ; 29cm
PMM 89

ブラクトンは、イギリスの法律家、裁判官。ヘンリー3世の時代に＜王会裁判所（curia regis）＞の裁判官として活躍した。本書は、イギリス慣習法の父といわれるブラクトンの著した、未完ではあるがイギリス法の最初の体系的大著である。“イギリス法学の花咲ける王冠”と称えられた本書は、1250−56年にかけてブラクトンによって編纂されたが、やっと出版の気運が高まり、1569年にその定本第1版がイギリスの有力な法律出版社リチャード・トテルによって刊行され、以後諸種の版本が印刷された。現代の最良の校訂本は、G.B.ウッドバインが編集したエール大学版4巻である。

18. ヴァンサン・ド・ボヴェー（1190頃～1264）
「諸学の鏡」初版　1477/1478年　アドルフ・ルッシュ印行　ストラスブルグ刊



Vincent de Beauvais, ca.1190-1264
Speculum doctrinale.
[Strssburg] : The R-Printer(i.e. Adolf Rusch),　between 1477 and 11 Feb. 1478]　404 leaves ; 46cm
Goff V-278 ; C 6242

ヴァンサン・ド・ボヴェーは1190年頃の生まれで、パリ大学を終えた後ドミニコ会に入会した。当時、伝存がほとんど知られていなかった数多くの稀覯な著作をもとにして、古典をはじめとする権威を集大成した"鏡（Speculum majus）"の執筆を開始した。1244年頃に最初の部分が記述され、その後約10年の歳月をかけて完成された"鏡"は、今日4部作として伝えられている。「歴史の鏡」「自然の鏡」「諸学の鏡」の3部は、ヴァンサンの著述であるが、「徳育の鏡」は、トマス・アクィナスの著作にほぼ全面的に依拠した、別の人の手になるものと今日では考えられている。ヴァンサンは「自然の鏡」で神の創造した植物・動物・気象・大地など博物について記述し、「諸学の鏡」ではさらに広汎な対象を百科全書的に論じている。

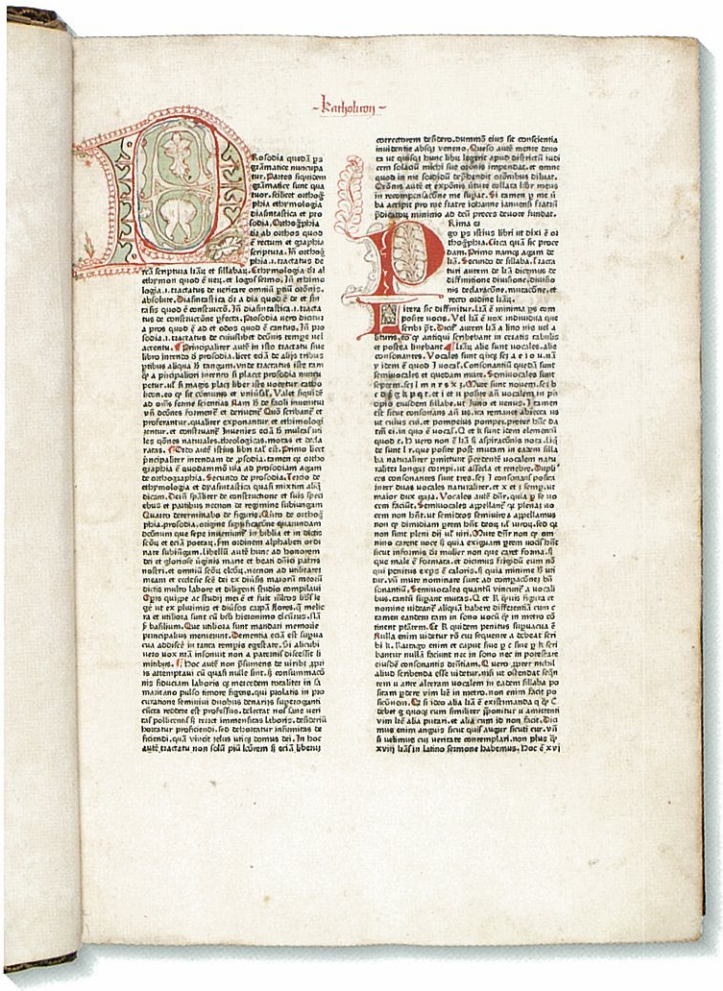
本書は、1477年ないし1478年、ストラスブルクのアドルフ・ルッシュが上梓したもの。ルッシュは自らの印行に一切刊記を加えず、刊行年も記さなかったため、ルッシュと同定されるまでは彼が用いた独特の大文字にちなんで「大文字Rの印刷者」として知られていた。

19. トマス・アクィナス（1225頃～1274）
「神学大全」初版　1485年　ミヒャエル・ヴェンスラー印行　バーゼル刊

Thomas Aquinas, Saint, ca.1225-1274
Summa theologiae. (I-III)
Basel : [Michael Wenssler],　1485　176,164,242,159 leaves ; 41cm
HC 1434 ; Goff T-194 ; BMC III-729
PMM 30

トマス・アクィナスは、イタリアの神学者、哲学者、聖人で中世のスコラ哲学の大成者。「神学大全」は、著者の晩年に書かれた彼の神学的、哲学的体系の書であり代表的著作である。通称「神学的スンマ」と呼ばれ、原著は1266年頃から執筆されはじめ、1274年に著者死亡のため未完のままとなったが、その後彼の弟子たちが、第3部の終末と審判を完成させた。「神学大全」は全編3部からなり、最初の印刷本としては1471年に第2部が、1473年に第1部が、1474年頃には第3部がそれぞれ別な印刷者によって刊行されている。この膨大な著作を余すところなく出版する企画は、1485年になって本書によって実現された。バーゼルで二番目に大きな印刷業者、ミヒャエル・ヴェンスラーによって第1部、第2部の1、第2部の2、第3部と、全3部が刊行され、同時代の製本で1冊に合綴されている。

20. バルブス（1298没）
「カトリコン」初版　1472年　カトリコン・プリンター印行　マインツ刊



Balbus, Johannes, d.1298
Catholicon.
[Mainz : Printer of the 'Catholicon'], '1460' [not before 1469]; also recorded as : [Johann Gutenberg?], 1460 : [between 1460 and about 1472.] 373 leaves ; 41cm
Third Printing of the First Edition
HC 2254 ; Goff B-20 ; BMC I-39
Otto Schäffer 旧蔵書

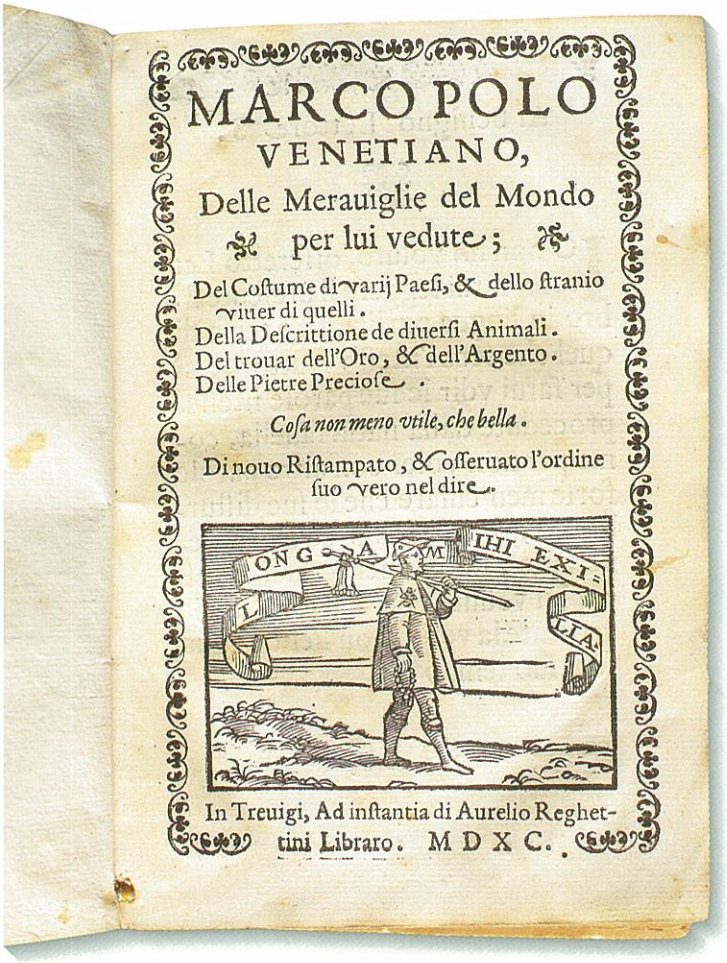
バルブスは、イタリア・ジェノヴァのドミニコ会修道士。本書はラテン語文法とラテン語辞典とからなるラテン語の百科事典で、1286年に編纂され中世からルネサンス時代を通じ広く流布した。

本書はグーテンベルクが生涯の最後に製作した「カトリコン・タイプ」といわれる活字を用いて印刷され、刷られた紙の違いによって3つの種類の刷りが確認されている。第1がヴェラム及び「牡牛の頭」の透かしのある紙の刷り、第2がCというイニシャルの透かしのあるガリツィアーニ紙の刷り、そして第3が「塔」の透かしの紙と「王冠」の透かしの紙が一緒に使用された刷りで、館蔵書は第3の刷り。

巻末のコロフォンには「主の生誕1460年」に製作されたと記されているものの、3つの刷りがあることからこの印刷年について研究者の間で意見が分かれている。また、印刷者についてもグーテンベルクが直接関与したものかどうかについて確かな証拠がないため、印刷者不明の意でカトリコン・プリンターと呼び慣わされている。その他印刷技法を巡っても議論がなされているが未だ決着がついておらず、謎多き書として知られている。

館蔵書は、ドイツの愛書家オットー・シェファーの旧蔵書。

21. マルコ・ポーロ（1254～1324）
「世界の不思議（東方見聞録）」　1590年　トレヴィーゾ刊



MARCO POLO
VENETIANO,
Delle Merauiglie del Mondo
per lui vedute;

Del Costume di varij Paesi, & dello stranio viuer di quelli.
Della Descrittione de diuersi Animali.
Del trouar dell'Oro, & dell'Argento.
Delle Pietre Preciose.

Cosa non meno vtile, che bella.

Di nouo Ristampato, & osseruato l'ordine suo vero nel dire.

In Treuigi, Ad instantia di Aurelio Reghettini Libraro. MDXC.

Marco Polo, 1254-1324
Delle Merauiglie del Mondo per lui vedute;
[Treviso] : Ad instantia de Aurelio Reghettini Libraro,　1590　ii,58p. ; 15cm

マルコ・ポーロは、イタリアの東洋旅行家。「世界の不思議（東方見聞録）」はマルコ・ポーロが、1270−95年にわたる東方旅行で得た知識を記憶とメモによってフランス語で口述し、これをピサの物語作家ルスティチアーノが1298～99年に獄中で記録したものである。その内容は序章でこの旅行が敢行された経緯、中国に至って元朝に仕えた模様及びイル・ハーン国の使臣に同伴して帰国するにいたった事情を略述し、続く本文では西・中央アジアを横断する行程の子細、モンゴル朝廷の諸事情、中国国内旅行で得た見聞、帰路の航海で経過した南海諸国の実情を報告する。

本書は、ルネサンス期におけるヨーロッパの、東方に関する唯一の知識の源泉となった。また、本書によって日本が＜黄金の国ジパング＞としてはじめて西洋に紹介され、コロンブスの新大陸発見のきっかけとなったとも言われている。

ルスティチアーノの記録した祖本はたぶんイタリア語で書かれたのであろうが、すでに散逸し、現存するのはこれに基づく多様の古写本、古版本である。

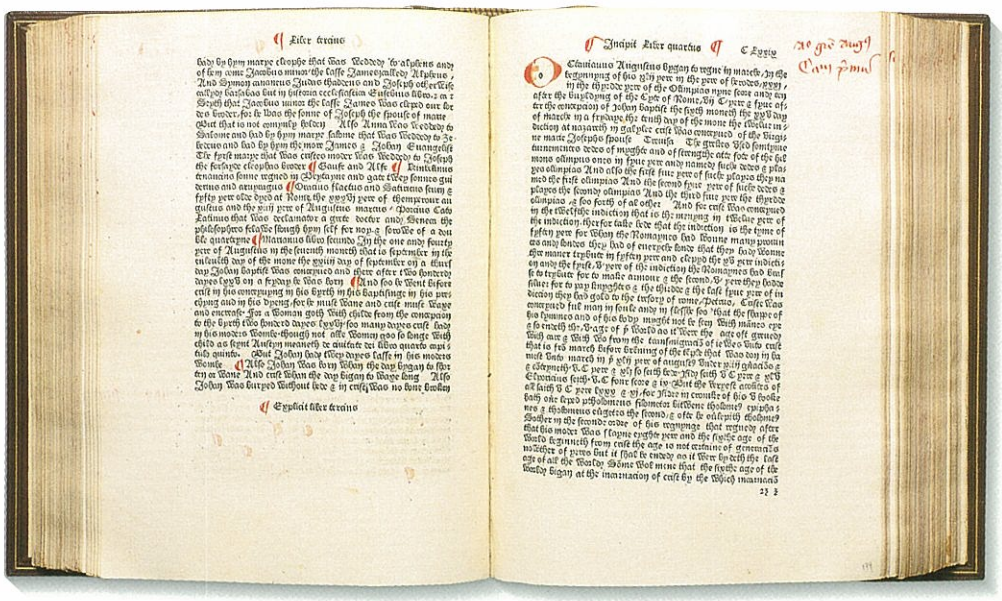
22. ダンテ（1265～1321）
「神曲」挿絵入第2版　1487年　ボニーヌス・デ・ボニーニス印行　ブレシア刊

Dante, Alighieri. 1265-1321
La Commedia.
Brescia : Boninus de Boninis, de Ragusia,　31 May 1487　309 leaves ; 37cm
HCR 5948 ; Goff D-31 ; BMC VII-971
cf.PMM 8

ダンテは、イタリアの詩人で名家の出身。「神曲」は叙事詩で「地獄編」、「煉獄編」、「天国編」の三部よりなる。彼は、その中で、巡礼の旅のたとえを借りてキリスト教世界を説明し、正当化を試みている。巡礼の旅は、地球の中心、逆円錐形の最深部である地獄から始まり、浄罪山の麓に至り、やがて山頂に達する。山頂は地上の楽園であり、ダンテはそこでベアトリーチェに出会う。彼女の案内で、天堂界を巡り、天帝を見かけて詩は終わる。テーマの大胆さ、表現や詩の美しさや荘厳さは、彼の詩に対する評価を不動のものにしている。

「神曲」はヨハン・ノイマスターによって1472年4月にイタリアで最初に印刷されて以来、多くの印刷者によって刊行されている。挿絵入り初版は1481年に銅版画を入れて刊行されており、館蔵書は木版画を入れた最初の版で、15世紀のイタリアの木版による挿絵を代表するものである。

23. ヒグデン（1280頃～1364）
「ポリクロニコン」初版　1482年　カクストン印行　ウェストミンスター刊



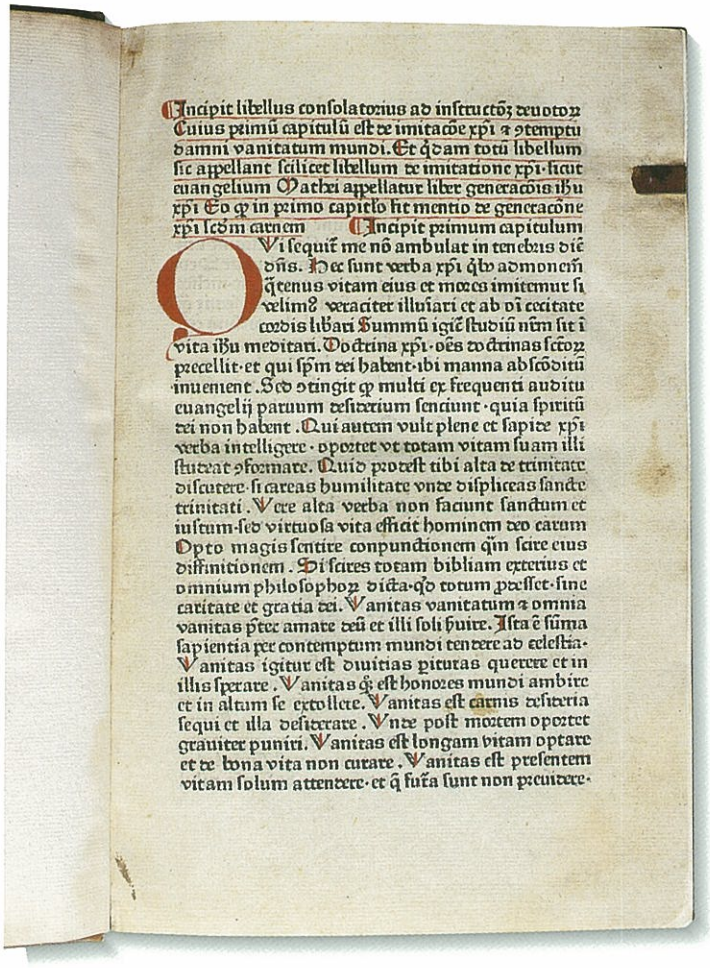
Higden, Ranulphus, ca.1280-1364
Polycronicon.Tr:Johann de Treviso. Continued for the years 1387 to 1460.
[Westminster] : William Caxton,　[between 2 and 8 October 1482]　450 leaves ; 27cm
HC 8659 ; Goff H-267 ; BMC XI-127
Beriah Botfield 旧蔵書

「ポリクロニコン」は、14世紀初頭のイギリスのベネディクト会修道僧であったヒグデンが、当時の知識を集成したもので、天地創造から当時までの世界史（いわゆる年代記）を制作すべく、40ほどの情報源から、世界地理の説明と6つに分けた世界の歴史を編集した。1340年代に彼はこの仕事を降りたが、後継者によってリチャードⅡ世の時代まで続けられた。この著作は、多くの奇跡と超自然現象の記載を含むが、14世紀の歴史、地理、科学の知識を収載し、2世紀以上その人気を保った。

本書は、1387年トレヴィーゾのジョンがラテン語から英語へ翻訳し、英国で最初の活版印刷者として知られるW.カクストンによって、ウェストミンスターで1482年に初めて印刷されたものである。

19世紀の実業家で愛書家のベライア・ボットフィールドの旧蔵書。

24. トマス・ア・ケンピス（1380頃～1471）
「キリストに倣いて」初版　1473年　ギュンター・ツァイナー印行　アウスブルク刊



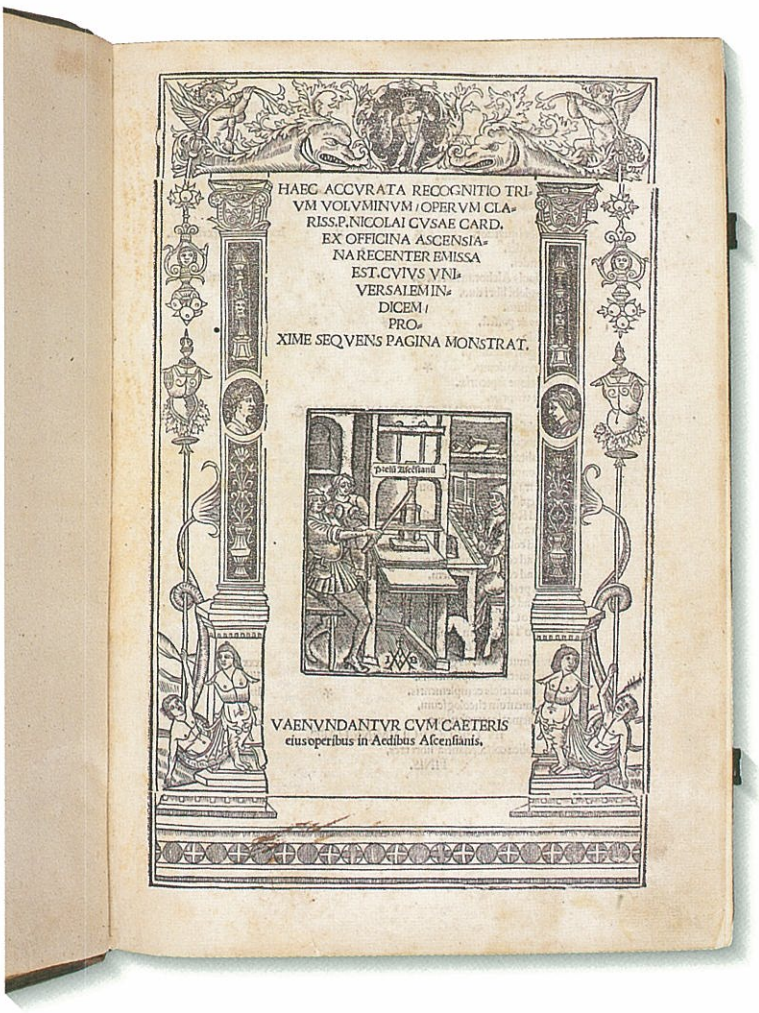
Incipit libellus consolatorius ad instructoꝫ ꝛeuotoꝫ
Cuius primũ capitulũ est de imitacõe xpi & ꝓtemptu
damni vanitatum mundi. Et q̃dam totũ libellum
sic appellant scilicet libellum de imitatione xpi. sicut
euangelium Mathei appellatur liber generacõis ihu
xpi Eo q̃ in primo capitlo fit mentio de generacõne
xpi secõm carnem　Incipit primum capitulum
Qui sequit me nõ ambulat in tenebris die
dñs. Hec sunt verba xpi q̃bꝫ admonemur
q̃tenus vitam eius et mores imitemur si
velimus veraciter illuiari et ab oi cecitate
cordis liberari Summũ igit studiũ nũm sit i
vita ihu meditari. Doctrina xpi. oes doctrinas sctoꝫ
precellit. et qui spm dei habent. ibi manna absconditũ
inuenient. Sed ꝓtingit q̃ multi ex frequenti auditu
euangelij parum desiderium senciunt. quia spiritũ
dei non habent. Qui autem vult plene et sapide xpi
verba intelligere. oportet vt totam vitam suam illi
studeat ꝓformare. Quid prodest tibi alta de trinitate
discutere. si careas humilitate vnde displiceas sancte
trinitati. Vere alta verba non faciunt sanctum et
iustum. sed virtuosa vita efficit hominem deo carum
Opto magis sentire conpunctionem q̃m scire eius
diffinitionem. Di scires totam bibliam exterius et
omnium philosophoꝫ dicta. q̃d totum presset. sine
caritate et gratia dei. Vanitas vanitatum & omnia
vanitas p̃ter amare deũ et illi soli seruire. Ista ē sma
sapientia per contemptum mundi tendere ad celestia.
Vanitas igitur est diuitias pituras querere et in
illis sperare. Vanitas q̃ est honores mundi ambire
et in altum se extollere. Vanitas est carnis desideria
sequi et illa desiderare. Vnde post mortem oportet
graviter puniri. Vanitas est longam vitam optare
et de bona vita non curare. Vanitas est presentem
vitam solum attendere. et q̃ futra sunt non prouidere.

Thomas A Kempis, ca.1380-1471
Imitatio Christi.
[Augsburg] : Günther Zainer,　[before 5 June]1473,　77 leaves ; 28cm
H 8589 ; Goff I-4 ; BMC II-318
PMM 13

本書は、修道士がキリストの教えに従って生活すべきことをすすめた書で、キリスト教の古典として聖書をのぞけば、おそらく本書ほど広く読まれた本はないであろう。ラテン語の原文は何千回も出版され、世界各国語にも訳された。

本書の著者については、数百年の間多くの学者たちによって議論がたたかわされてきたが、現在ではドイツの神秘思想家で聖職者であるトマス・ア・ケンピスというアウグスティヌス会の修道士とされている。本書には「誰がこれを言ったかと詮索しないで、何を言っているかに注意せよ」とあり、著者が不明であることは、また著者の本望とするところである。従って、原著の著作年も不明である。

25. ニコラウス・クサーヌス（1401～1464）
「著作集」初版　3巻（2冊）　1514年　パリ刊

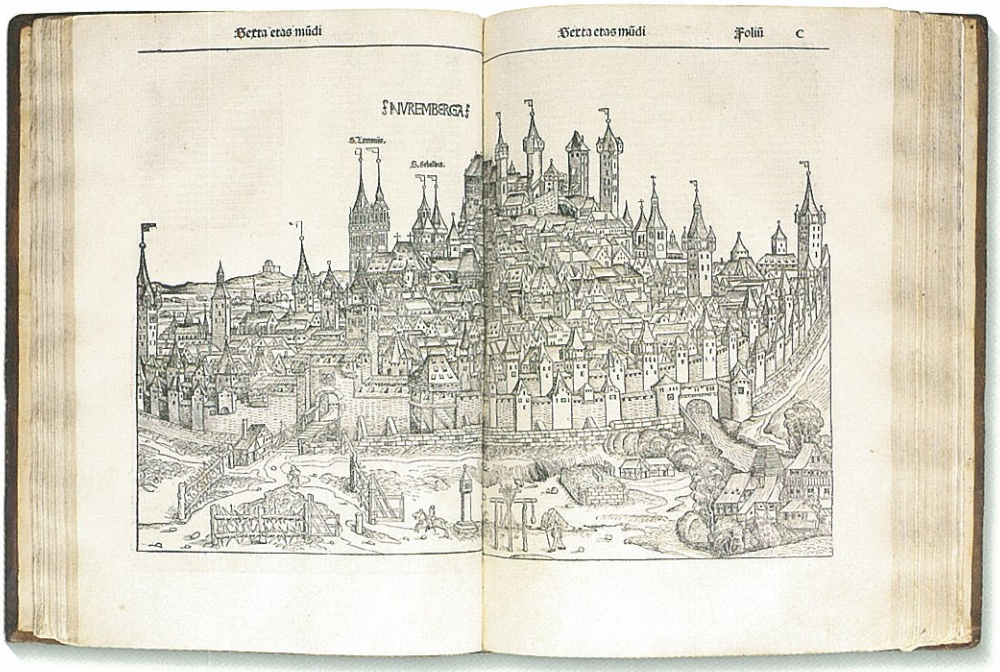


Nicolaus Cusanus, 1401-1464
Opera.
Paris : Badius Ascensius,　1514　3 Vols.(in two) ; 29cm
PMM 45

ニコラウス・クサーヌスは中世から近世への過渡期に立つドイツの哲学者。モーゼル河畔のクエスに生まれオランダで教育を受けたのち、ハイデルベルク、パドヴァに学んで新しい学問を身につけた。スコラ的思弁から出発しながら、ドイツ神秘主義と新しい自然科学の精神とを独自の方法で結びつけた思想家として注目されている。

彼は、人間の知識はすべて推測であり、知恵はわれわれの本質的無知を認めることにあると主張した。また、彼は、宇宙の形態やその無限の可能性についても神学的な思索に耽ったが、その思索は多くの人の心を魅了し、彼の死後も宇宙論的思想に少なからず影響を与えた。

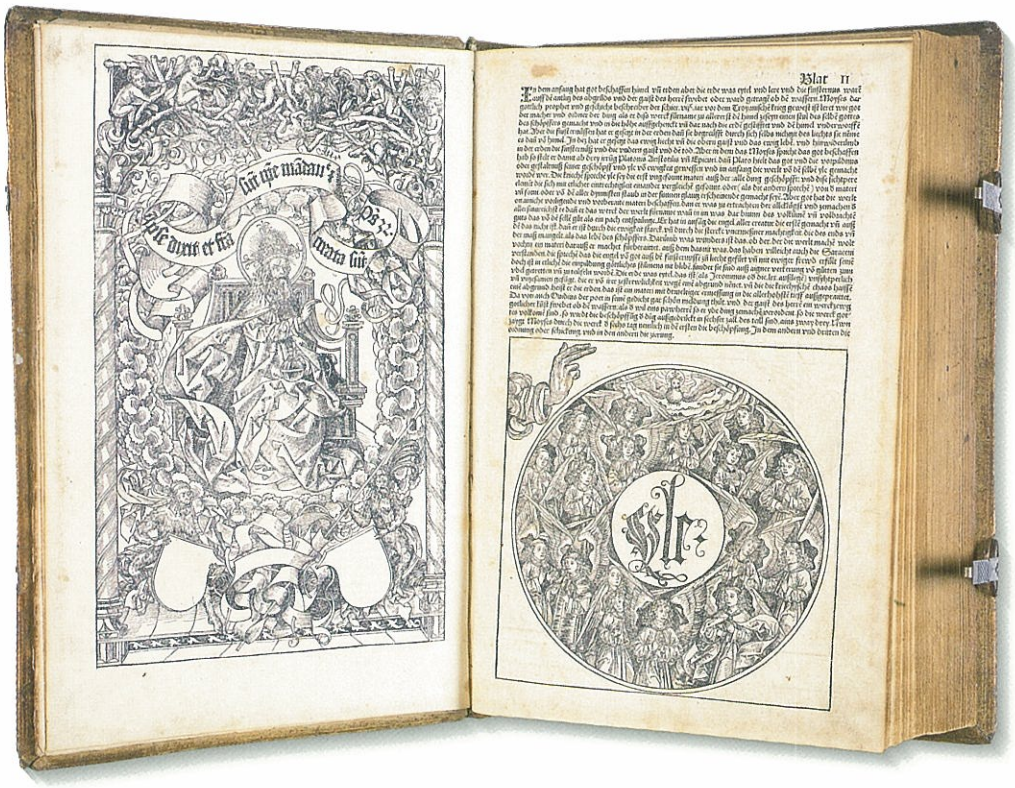
27. シェデル（1440～1514）
「ニュルンベルク年代記」ラテン語初版　1493年　アントン・コーベルガー印行　ニュルンベルク刊



Schedel, Hartmann, 1440-1514
Liber Chronicarum.
Nuremberg : Anton Koberger,　12 July 1493　326 leaves ; 44cm
HC 14508 ; Goff S-307 ; BMC II-437

本書は、ドイツの医者で人文学者のハルトマン・シェデルが、世界の歴史・地理に関する奇事、異聞を収録した「世界年代記」である。ニュルンベルク最大の印刷業者アントン・コーベルガーによって約2,000個の木版挿画を添えて印刷され、一般に「ニュルンベルク年代記」と呼ばれている。この書物は、歴史書としては後の出版物によってその資料的価値が失われたが、その挿絵、印刷技術、その木版画や諸都市についての記述によって高く評価されている。グーテンベルクの「42行聖書」についで15世紀の最も有名な出版物である。

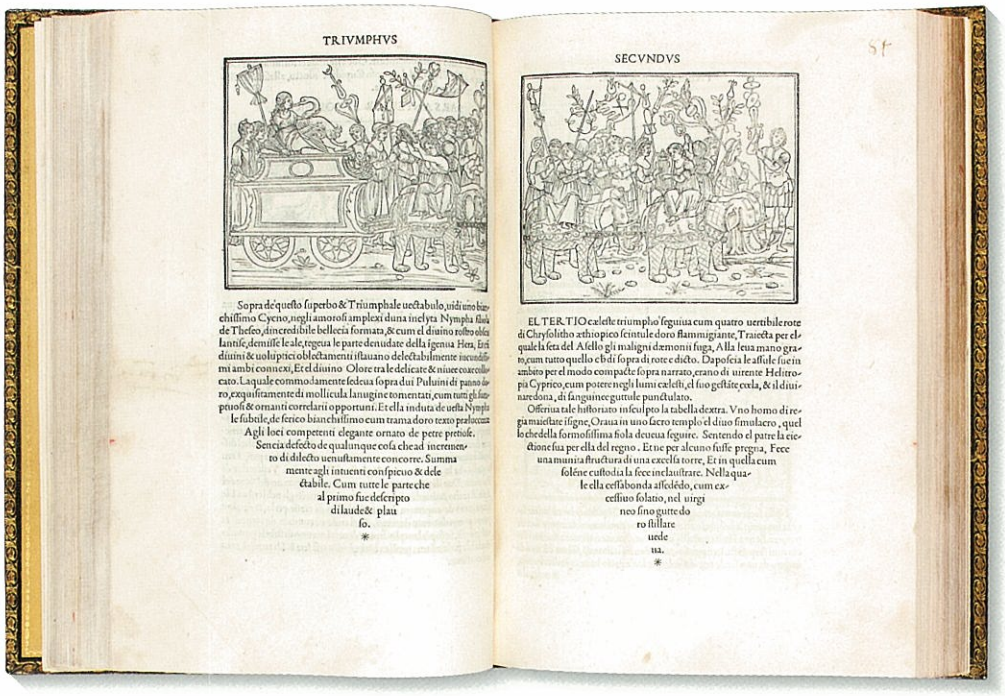
28. シェデル（1440～1514）
「ニュルンベルク年代記」ドイツ語初版　1493年　アントン・コーベルガー印行　ニュルンベルク刊



Schedel, Hartmann, 1440-1514
Das Buch der Chronicken und Geschichten.
Nuremberg : Anton Koberger,　23 Dec 1493　298 leaves ; 44cm
H 14510 ; Goff S-309 ; BMC II-437
Honri Lambert, Versailles 旧蔵書

「ニュルンベルク年代記」は、出版当初からラテン語版とドイツ語版の刊行が計画されており、極めて人文主義的な作品である。ドイツ語版はラテン語版から翻訳されたもので、翻訳者は、ニュルンベルク市の書記を務めていたゲオルク・アルトであった。彼は、非凡にもラテン語とドイツ語を修め、ラテン語版稿本の一部も彼によって筆写されている。ドイツ語版への訳出の際、古い注記や不明瞭な参照、詩的飛躍が割愛され、ドイツの読者のために文章が通俗化されている。ラテン語版に約5ヵ月遅れて刊行された。

29. コロンナ（1433～1529）
「ポリフィユの夢における愛の闘争」初版　1499年　アルドゥス・マヌティウス印行　ヴェニス刊


TRIVMPHVS

Sopra de questo superbo & Triumphale uectabulo, uidi uno bianchissimo Cyeno, negli amorosi amplexi duna inclyta Nympha sula de Theseo, di credibile bellecia formata, & cum el diuino rostro obliquo lantise, demisse le ale, tegeua le parte denudate della igenua Hera, Et diuini & uoluptrici oblectamenti istauano delectabilmente iucundissimi ambi connexi, Et el diuino Olore tra le delicate & niuee cuarcellcato. La quale commodamente sedeua sopra dui Puluini di panno d'oro, exquisitamente di mollicula lanugine tomentati, cum tutti gli superuoli & ornanti correlarii opportuni. Et ella induta de uesta Nymphale subtile, de serico bianchissimo cum trama doro texto praloccata Agli loci competenti elegante ornato de petre pretiose. Senecia defecto de qualunque cosa chead incremento di dilecto uenustamente concorre. Summamente agli intuenti conspicuo & delectabile. Cum tutte le parte che al primo fue descripto di laude & plauso.

SECVNDVS

EL TERTIO cæleste triumpho seguiua cum quatro uertibile rote di Chrysolitho æthiopico scintule doro flammigiante, Traiecta per el quale la feta del Asello gli maligni dæmonii fuga, Alla leua mano grato, cum tutto quello che di sopra di rote e dicto. Da poscia le assule sue in ambito per el modo compacte sopra narrato, erano di uirente Helitropia Cypricu, cum potere negli lumi cælesti, el suo gestate corda, & il diuinare dora, di sanguine guttule punctulato.

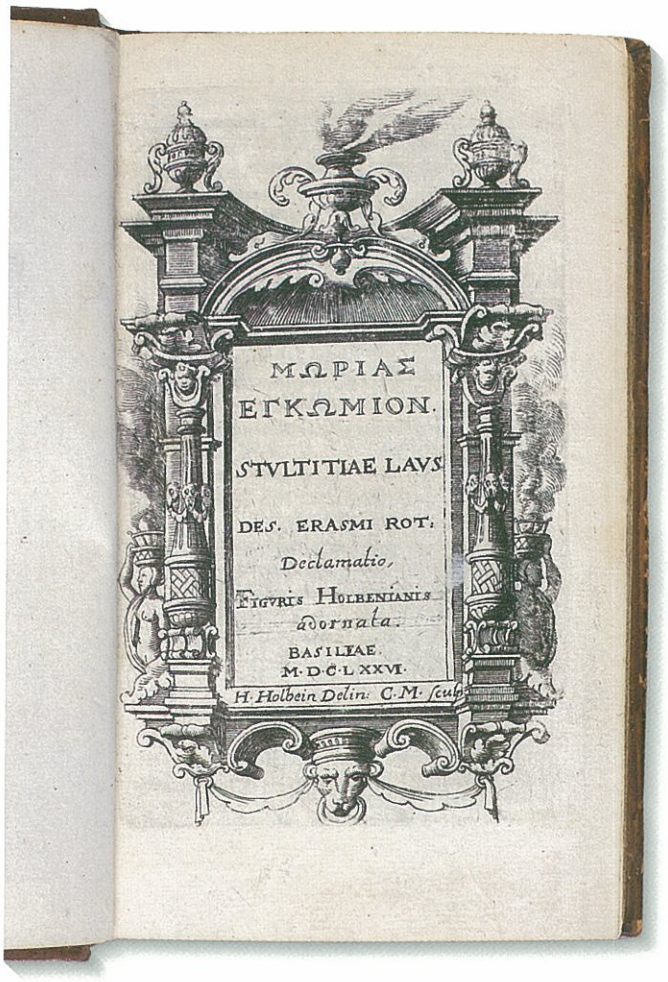
Offeriua tale historiato insculpto la tabella dextra. Vno homo di regia maiestate insigne, Oraua in uno sacro templo el diuo simulacro, quel lo che della formosissima fiola deueua seguire. Sentendo el patre la eiectione sua per ella del regno. Et ne per alcuno fusse pregna, Fece una munita structura di una excelsa torre, Et in quella cum solene custodia la fece inclaustrare. Nella quale ella cessabonda assedēdo, cum excessiuo solatio, nel uirginneo sino gutte doro stillare uedeua.

Columna, Franciscus de. 1433-1529
La Hypnerotomachia di Poliphilo
Venice : Aldus Manutius, Romanus for Leonardus Crassus,　Dec. 1499　234 leaves ; 30cm
Goff C-767 ; HC 5501 ; BMC V-561

「ポリフィユの夢における愛の闘争」は、フランチェスコ・デ・コロンナ作と伝えられる夢物語で、「ヒュプンエロトマキア」とも言われている。夢の中で恋人ポリフィーロが、様々な古代の人物や遺物に出会うという寓意的な愛のロマンスで、1499年にアルドゥス・マヌティウスによってヴェネチアで印刷されて以来、イタリアで生み出した初期印刷時代の最も美しい木版画作品として、またイタリア印刷史上で最も優れた刊本として知られている。ギリシャ語古典の刊行や最初のイタリック体の使用、古典文学の小型本の刊行で有名なアルドゥスの作品の中でも難解なラテン語的なイタリア語で書かれた本書は、繊細な木版画、装飾頭文字、テクスト本文、欄外見出など、書体、絵、装飾のすべての点で完全な調和が保たれ、輪郭線の特性、素朴で豊かな木版画、さらにその木版画の詩情、神秘性、異教趣味などの表現方法など、この木版画シリーズは異彩を放っている。

各章は、飾り大文字ではじまり、全部あわせると'Pliam Frater Franciscus Columna Peramavit'（フランソワ・コロンナはポリアを熱愛した）と判読できる。（Colonna, Francesco de La Hypnerotomachia di Poliphilo,）

30. エラスムス（1465頃～1536）
「痴愚神礼賛」 1676年　バーゼル刊

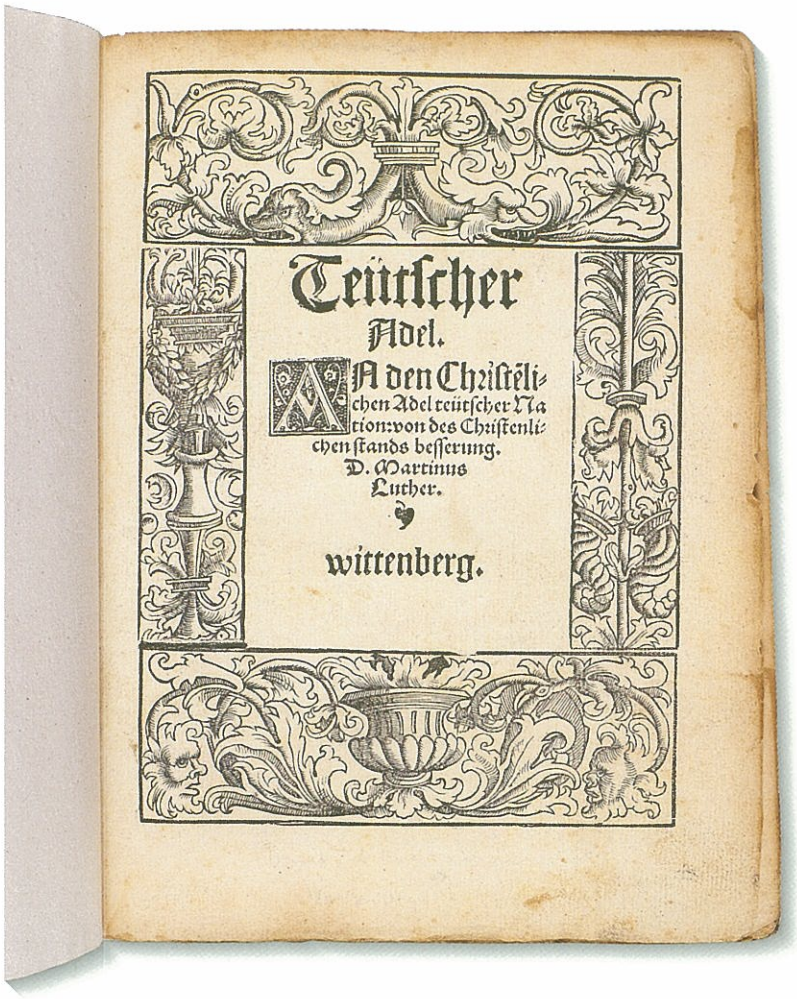


Erasmus, Desiderius, ca.1465-1536
Moriae Ercomium(in Greek alphabet).
Basel : Typis Genathianis,　1676　[82],336,[14]p. ; 20cm

エラスムスは、ルネサンス期のオランダのヒューマニストで、アルプス以北のルネサンス運動に指導的役割を果たした。エラスムスは、古典の素養を活用しつつ、最後まで軽妙、滑稽な調子を崩さずに悪徳や矛盾を風刺し、特定の人物を対象とせず、人間・社会一般のゆがみを批判した。神学、古典古代研究から政治論、平和論、教育論、礼儀作法にいたるまできわめて多岐にわたる彼の作品の中でも、本書は「対話集」とともに最も広く読まれた。

初版は1511年で、1,800部という当時異例の部数で出版されたが、1ヵ月後の残部60というほど大きな反響を呼んだ。本書は、1515年にバーゼルで出版された版にホルバインの絵をメリアンが彫って印刷されたもので、「痴愚神礼賛」が始めて挿画された版である。ホルバインの素描にはかなり大きなものがあったため、版画にする際には横向きに印刷しなければならなかったものや、折り込んであるものもある。

31. ルター（1483～1546）
「キリスト教界の改善についてドイツ国民の貴族に訴う」初版 1520年　ヴィッテンベルク刊

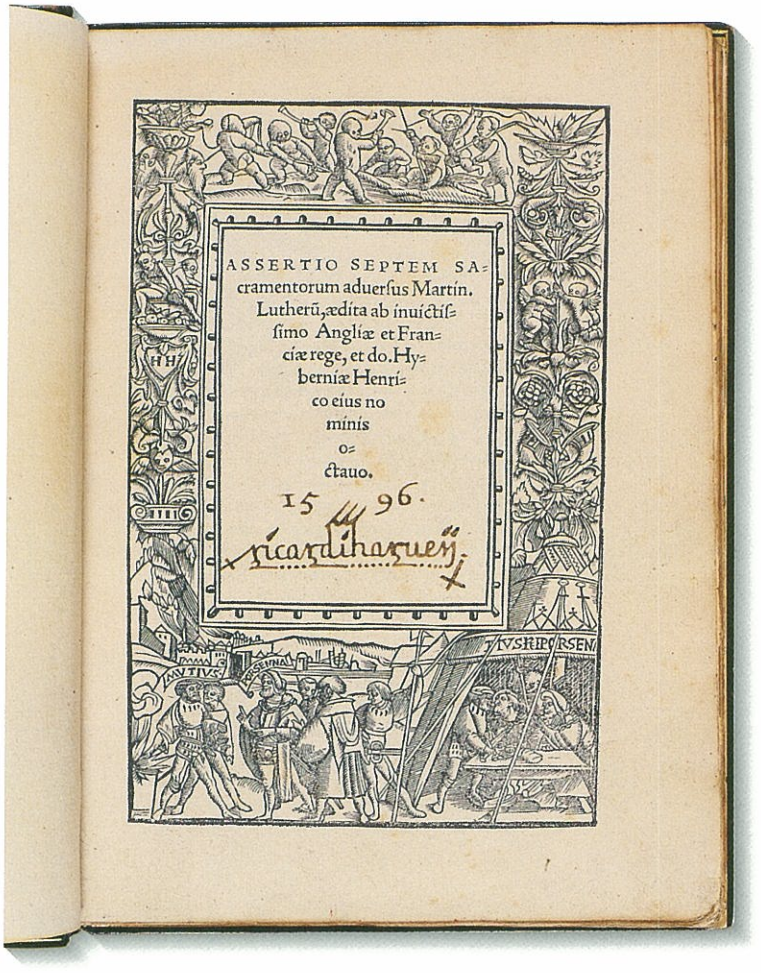

Teütscher
Adel.
AN den Christēli-
chen Adel teütscher Na
tion: von des Christenli-
chen stands besserung.
D. Martinus
Luther.
wittenberg.

Luther, Martin, 1483-1546
Teutscher Adel. an den Christelichen Adel teüscher Nation; von des christenlichen.
Wittenberg : [Melchior Lotter]. 1520 48 leaves ; 21cm
PMM 49

ルターは、ドイツの宗教改革者。アウグスティヌス派の修道院に入り司祭となり、ヴィッテンベルク大学教授として聖書を講じたが、宗教的苦悩を経験し“福音の再発見“を行った。1517年に免罪符に関して、95か条よりなる討議題目をヴィッテンベルク城教会の門の扉にかかげたことが宗教改革の発端となった。

本書は、ルターが著した3大宗教改革文書の一つで、腐敗した教会の状態を改革し、国民の経済的・社会的困難を改善するために、カールⅤ世とドイツの全貴族に対して一般的宗教会議の自由を擁護することを訴えたものである。ルターは、教皇権力がその霊的任務を逸脱して＜反キリスト＞にまで堕落している事実を公然と批判し、教会の改革を俗権が援助すべきことを説いた。この訴えは、ドイツをローマ教皇の支配から解放しようとするドイツ騎士団や人文主義者の計画と通ずるところがあり、広範な社会的反響を呼び起こした。本書の公刊が教皇庁との和解の道を断ち、宗教改革の進展を不可避にしたのみならず、ドイツ人の国民的意識を深く自覚せしめた歴史的意義は大きい。

32. ヘンリー8世（1491～1547）
「7つの秘跡の主張」初版　1521年　ロンドン刊

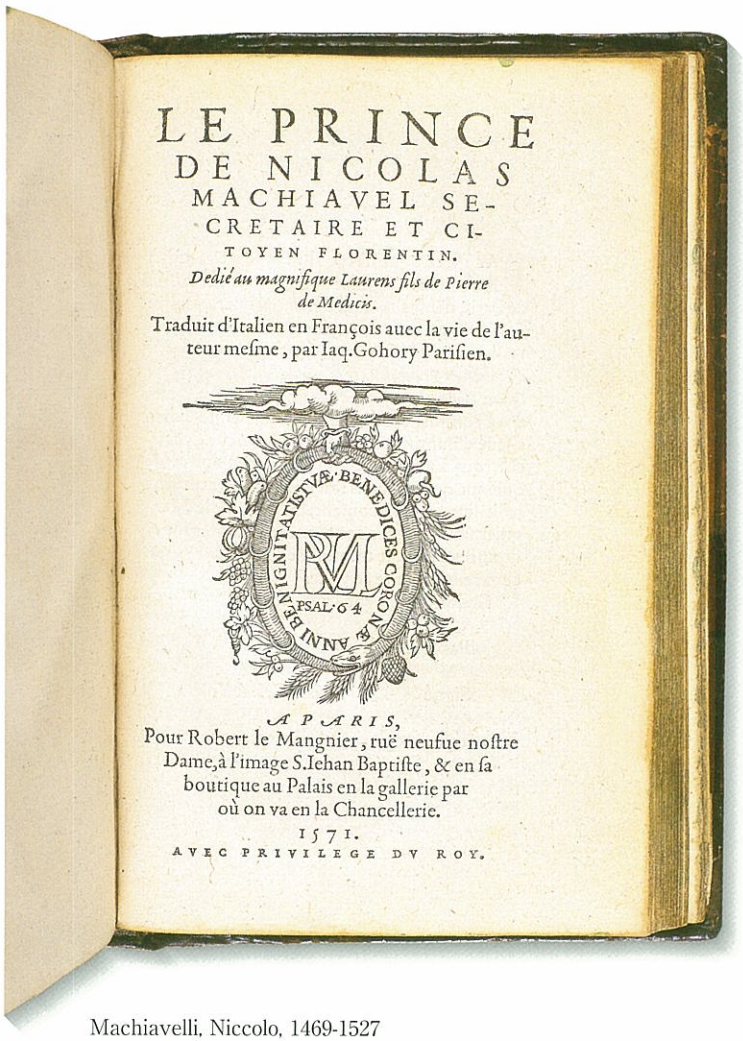


Henry, VIII, King of England, 1491-1547
Assertio septem sacramentorum aduersus Martin. Lutheru, aedita ab inuictissimo Angliae et Franciaerege, et do. Hyberniae Henrico eius nominis octauo.
London : Richard Pynson,　1521　[160] p. ; 23cm
PMM 50

ヘンリー8世がマルティン・ルターの宗教改革の論文に対し、これを激しく非難してローマ・カトリック教会を擁護した書物。教皇レオ10世は彼に“信仰の保護者”の称号を授けるが、彼は後にキャサリンとの離婚問題で教皇と長い間争い、ついにはローマ教会と絶縁、英国教会を設立して国王を政教における最高権威と位置づけた。

本書は、王立御用印刷人リチャード・ピンソン印行の初版で、本文はローマン体のラテン語で、ハンス・ホルバインがマルチウスの「人間論」のために版下を作成した作品を基としたピンソンの版画がタイトルページに使われている。

33-1. マキャヴェリ（1469～1527）
「君主論」仏訳版　1571年　パリ刊



LE PRINCE
DE NICOLAS
MACHIAVEL SE-
CRETAIRE ET CI-
TOYEN FLORENTIN.
Dedié au magnifique Laurens fils de Pierre de Medicis.
Traduit d'Italien en François auec la vie de l'auteur mesme, par Iaq. Gohory Parisien.

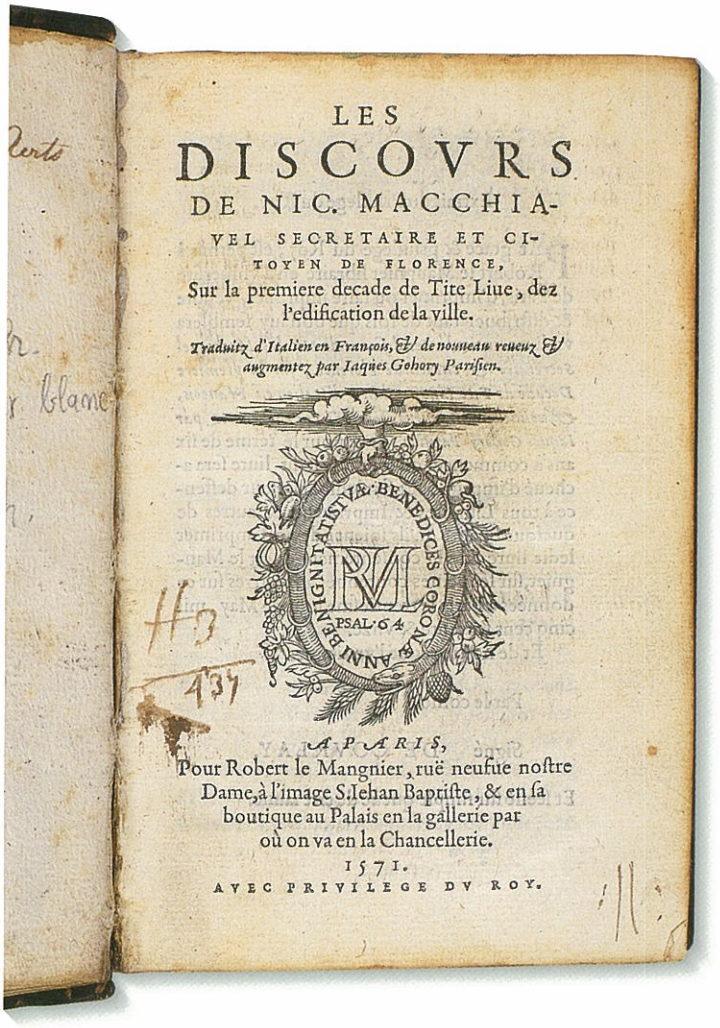
ANNI BENIGNITATIS TVÆ BENEDICES CORONÆ
PSAL. 64

A PARIS,
Pour Robert le Mangnier, ruë neufue nostre Dame, à l'image S. Iehan Baptiste, & en sa boutique au Palais en la gallerie par où on va en la Chancellerie.
1571.
AVEC PRIVILEGE DV ROY.

Machiavelli, Niccolo, 1469-1527
Le Prince.
Paris : Robert le Mangnier,　1571　298 leaves ; 17cm
cf.PMM 63

マキャヴェリは、16世紀イタリアの政治思想家、歴史家。フィレンツェに生まれ、法律学を修めた。本書は、ルネサンス時代の代表的な政治的著作で、政治を倫理や宗教から分離して考察することによって、近代政治学の基礎を築き、近代政治思想史における不朽の名著として知られている。「君主論」は、フィレンツェ共和政府に仕え政治、外交、軍事の衛にあったが、政界を追われ、不遇のうちに執筆生活を送った時代に書かれたマキャヴェリの代表的著作である。初版は1532年に刊行されているが、館蔵書は、フランスの博物学者、歴史家そして詩人でもあるジャック・ゴーリによる珍しい仏訳版である。

33-2. マキャヴェリ（1469～1527）
「ローマ史論」　1571年　パリ刊（合本）



LES
DISCOVRS
DE NIC. MACCHIA-
VEL SECRETAIRE ET CI-
TOYEN DE FLORENCE,
Sur la premiere decade de Tite Liue, dez
l'edification de la ville.
Traduitz d'Italien en François, & de nouueau reueuz & augmentez par Iaques Gohory Parisien.

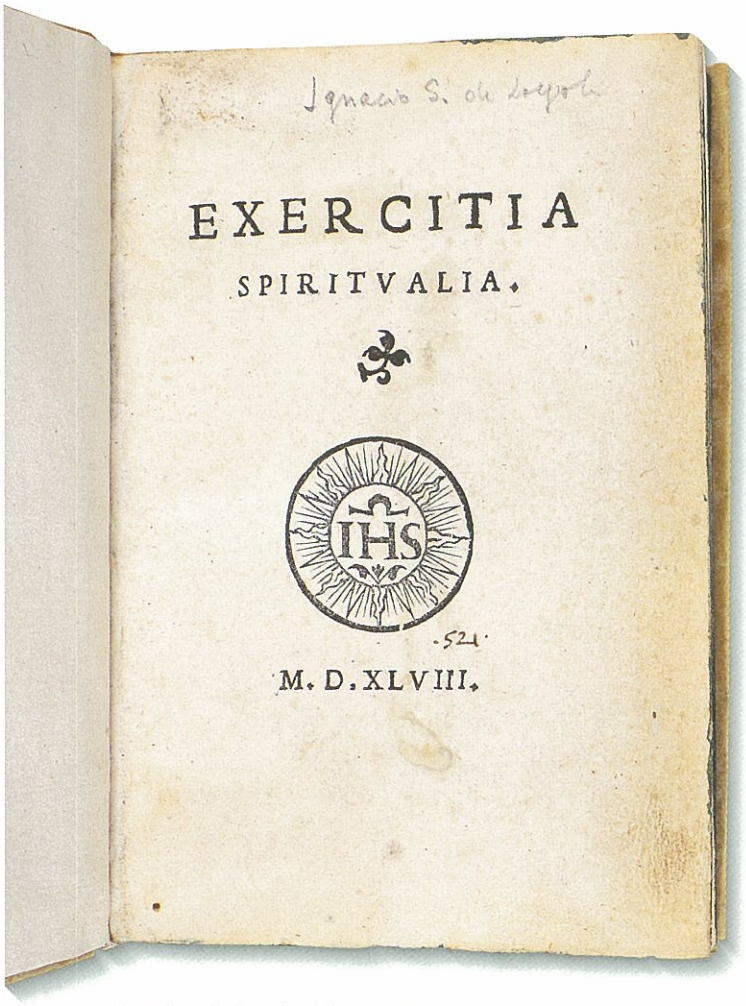
ANNI BENIGNITATIS TVÆ BENEDICES CORONÆ
PSAL. 64

A PARIS,
Pour Robert le Mangnier, ruë neufue nostre
Dame, à l'image S. Iehan Baptiste, & en sa
boutique au Palais en la gallerie par
où on va en la Chancellerie.
1571.
AVEC PRIVILEGE DV ROY.

Bound with:
Machiavelli, Niccolo, 1469-1527.
Les Discours... sur la Premiere Decade de Tite Liue, dez l' edification de la ville.
Paris : Robert le Mangnier,　1571　72 leaves ; 17cm

ローマ史論は、マキャヴェリがローマの歴史家リウィウスの著作「ローマ建国以来の歴史」の注解の形式をかりて、新しい政治理論を主張しようとした著作である。この著作は、「君主論」と並んで、近代政治思想史上画期的な意義を持っている。マキャヴェリが、本書を執筆した時期は明らかではない。1513年に「君主論」の執筆をはじめた時、すでに本書の第1巻を書き終えていたと思われる。しばらく中断した後、1517年の末かあるいは1518年頃に全巻をほぼ完成したと考えられているが、著者の死後の1532年になって「君主論」や「フィレンツェ史」といっしょにはじめて刊行された。本書は、初版が刊行された後、初めてフランス語に訳されたもので、同年に刊行された「君主論」と合冊製本されている。

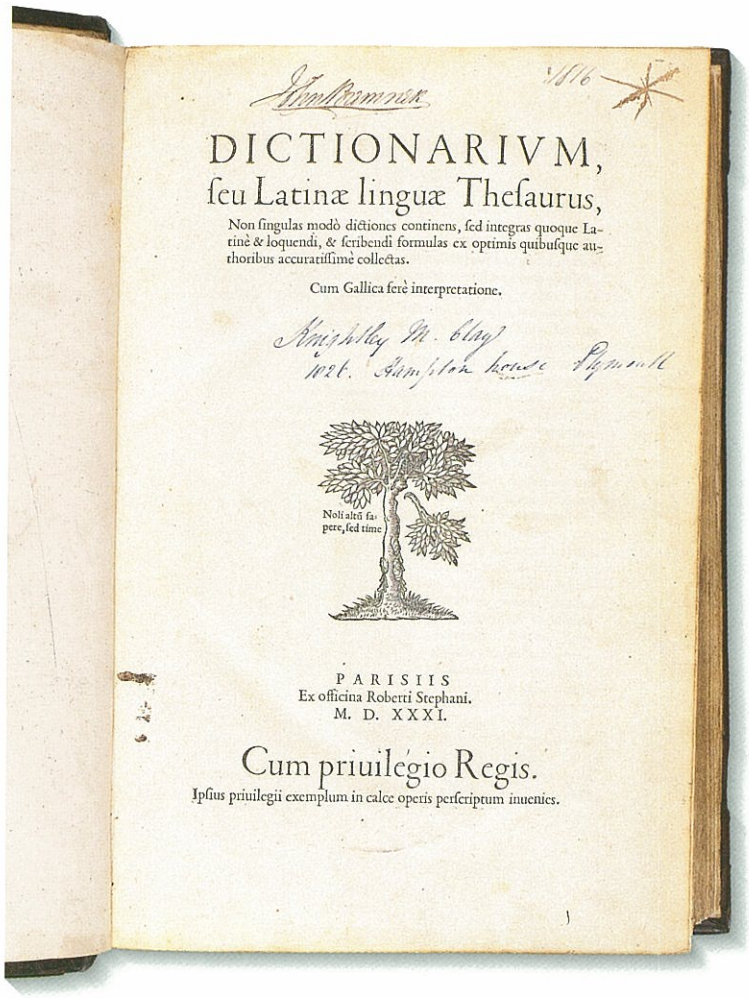
34. イグナティウス・デ・ロヨラ（1491頃～1556）
「心霊修業」初版　1548年　ローマ刊



Ignatius de Loyola, Saint, ca.1491-1556
Exercitia spiritualia.
Rome : Atonio Blado,　1548　115 leaves ; 16cm
PMM 74

本書は、イエズス会の創立者イグナティウス・デ・ロヨラが、パンプロナの戦いで負傷した後、マンレサの洞窟にこもって行った祈り苦業の生活から得た霊的な体験が結実したもので、1522年3月から1523年2月頃までの間にはじめの構想がまとめられた。本書は一般の信心書とは異なり、禁欲修行、罪の本質、神の慈悲によるキリスト教の理想を積極的生活と実践的認識の中に求め、福音書の戒律による人格の形成を目指した手引書で、イエズス会の内外でも広く求められ、1548年には教皇パウロⅢ世の認可を得るまでになった。

35. エティエンヌ（1503頃～1559）
「辞典あるいはラテン語宝典」初版　1巻（2冊）　1531年　パリ刊



DICTIONARIVM,
ſeu Latinæ linguæ Theſaurus,
Non ſingulas modò dictiones continens, ſed integras quoque Latinè & loquendi, & ſcribendi formulas ex optimis quibuſque authoribus accuratiſſimè collectas.
Cum Gallica ferè interpretatione.

Noli altè ſapere, ſed time

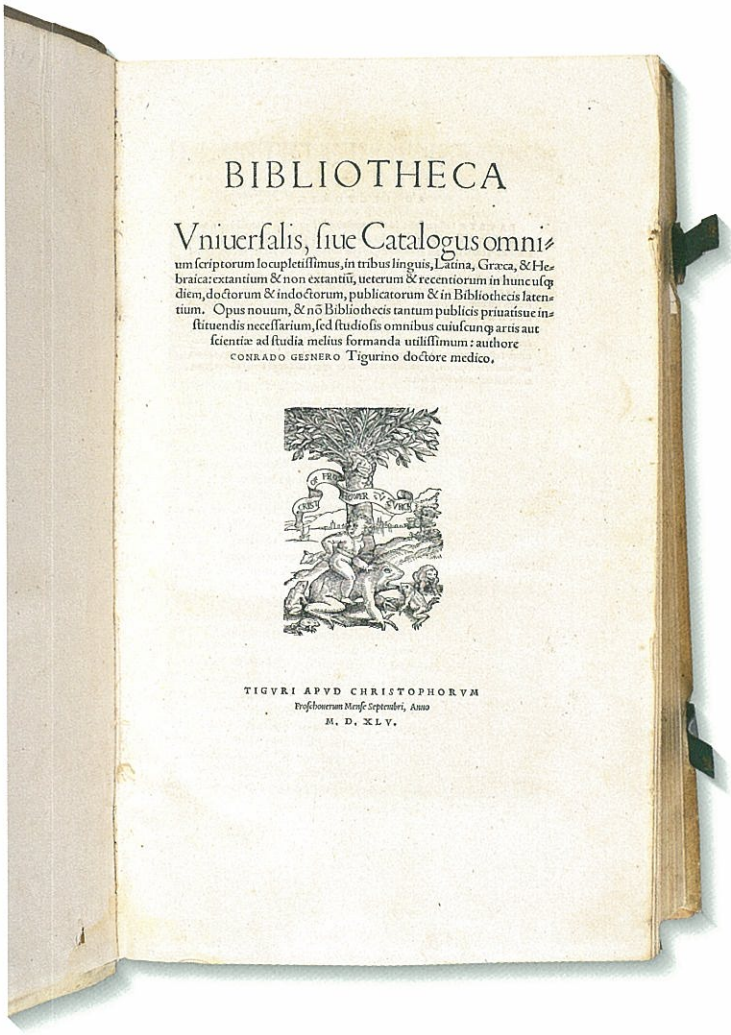
PARISIIS
Ex officina Roberti Stephani.
M. D. XXXI.

Cum priuilegio Regis.
Ipſius priuilegii exemplum in calce operis perſcriptum inuenies.

Estienne, Robert, ca.1503-1559
Dictionarium, seu Latinae liguae Thesaurus, non singulas modo dictuiones continens, sed integras quoque Latine & loquendi, & scribendi formulas ex optimis quibusque authoribus accuratissime collectas.
Paris : Robert Estienne,　1531　1 Vol. in 2 ; 31cm
PMM 62(a)

すぐれた学者兼印刷業者を輩出したエティエンヌ一族にあっても、ロベール・エティエンヌ（Ⅰ世）は最も偉大な人物であった。すぐれた印刷工であると同時に、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語に関する言語学者、文法学者でもあり、古代及び近代諸語についての最初の科学的辞典編纂者として、その業績は今も高く評価されている。
この「辞典あるいはラテン語宝典」は、ロベールの最初の辞典で大成功をおさめ、それまでのラテン語辞典を払拭し、現代に到るもこれを凌駕する辞典はないといわれている。

36. ゲスナー（1516～1565）
「万有書誌」初版　1545年　チューリッヒ刊



BIBLIOTHECA

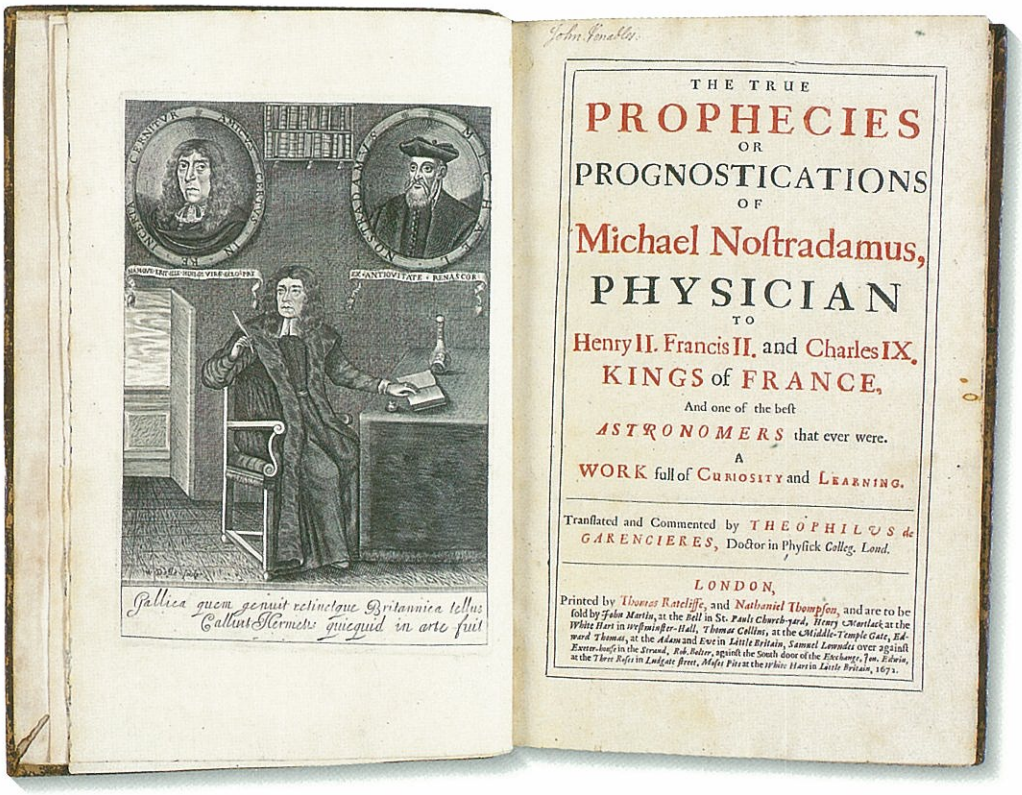
Vniuerſalis, ſiue Catalogus omni-
um ſcriptorum locupletiſſimus, in tribus linguis, Latina, Græca, & He-
braica: extantium & non extantiũ, ueterum & recentiorum in hunc uſq;
diem, doctorum & indoctorum, publicatorum & in Bibliothecis laten-
tium. Opus nouum, & nõ Bibliothecis tantum publicis priuatisue in-
ſtituendis neceſſarium, ſed ſtudioſis omnibus cuiuſcunq; artis aut
ſcientiæ ad ſtudia melius formanda utiliſſimum: authore
CONRADO GESNERO Tigurino doctore medico.

TIGVRI APVD CHRISTOPHORVM
Froſchouerum Menſe Septembri, Anno
M. D. XLV.

Gesner, Conrad, 1516-1565
Bibliotheca Universalis, sive Catalogus Omnium scriptorum locupletissimus, in tribus linguis, Latina, Graeca, & Hebraica: extantium & non extantiu, ueterum & recentiorum in ...
Zurich : Christopher Froschauer,　1545　[36],631,[3] leaves ; 33cm
PMM 73

ゲスナーは、スイスの博物学者、医者で、博物学のみならず古代及び東洋の諸語にも通じ、きわめて博識であった。ゲスナーはラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の現存するすべての図書についての書誌的目録の編纂を試みた。それまで図書の書誌的目録の編纂は、主にキリスト教徒によって編纂されたためキリスト教関係の文献だけを対象としていた。従って、本書は、出版された最初の“本に関する本”であり、近代的な注釈付き書誌の最初のものである。この業績により、彼は＜最初の書誌学者＞と呼ばれている。

37. ノストラダムス（1503～1566）
「大予言」英訳初版　1672年　ロンドン刊



Gallica quem genuit retinetque Britannica tellus
Callunt Hermetis quicquid in arte fuit

THE TRUE
PROPHECIES
OR
PROGNOSTICATIONS
OF
Michael Nostradamus,
PHYSICIAN
TO
Henry II. Francis II. and Charles IX.
KINGS of FRANCE,
And one of the best
ASTRONOMERS that ever were.
A
WORK full of CURIOSITY and LEARNING.

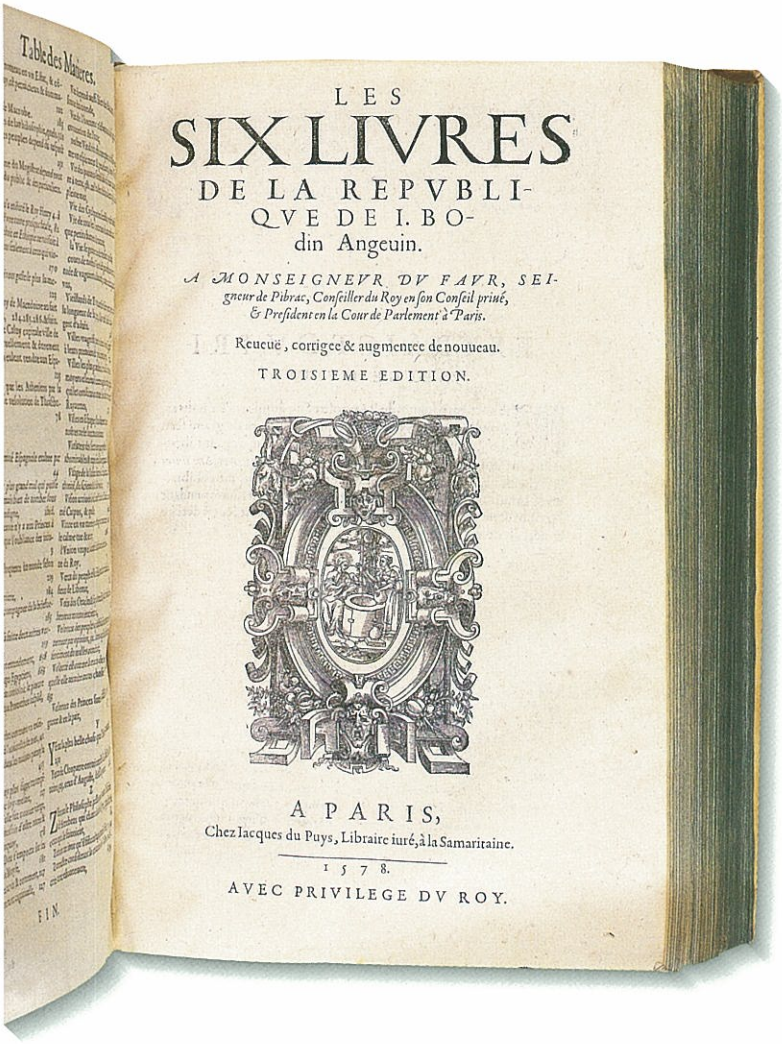
Translated and Commented by THEOPHILUS de GARENCIERES, Doctor in Physick Colleg. Lond.

LONDON,
Printed by Thomas Ratcliffe, and Nathaniel Thompson, and are to be sold by John Martin, at the Bell in St. Pauls Church-yard, Henry Marlack at the White Hart in Westminster-Hall, Thomas Collins, at the Middle-Temple Gate, Edward Thomas, at the Adam and Eve in Little Britain, Samuel Lowndes over against Exeter-house in the Strand, Rob. Boltar, against the South door of the Exchange, Jon. Robins, at the Three Roses in Ludgate street, Moses Pitt at the white Hart in Little Britain, 1672.

Nostradamus, Michael, 1503-1566
The true prophecies or prognostications of Michael Nostradamus, physician to Henry II. Francis II. and Charles IX. Kings of France, and one of the best astronomers that ever were.
London : Thomas Ratcliffe and Nathaniel Thompson,　1672　[38],522,[2]p. ; 30cm

ノストラダムスは、フランスの占星家、医者。本書の初版は1555年に出版されており、占星術に基づいた韻文の予言詩である。原文はラテン語混じりのフランス語で書かれており、フランス革命、第一次世界大戦の勃発、ヒトラーの出現、第二次世界大戦で使用された原爆までも予言されているという。本書は、原書から初めて英訳され、出版されたもので、フランス語の詩を対訳のような形で英訳された注釈が付けられており、1672年にロンドンで刊行されたものである。

38. ボダン（1530～1596）
「共和国に関する6書」第3版　1578年　パリ刊



LES
SIX LIVRES
DE LA REPVBLI-
QVE DE I. BO-
din Angeuin.

*A MONSEIGNEVR DV FAVR, SEI-
gneur de Pibrac, Conseiller du Roy en son Conseil priué,
& President en la Cour de Parlement à Paris.*

Reueuë, corrigee & augmentee de nouueau.

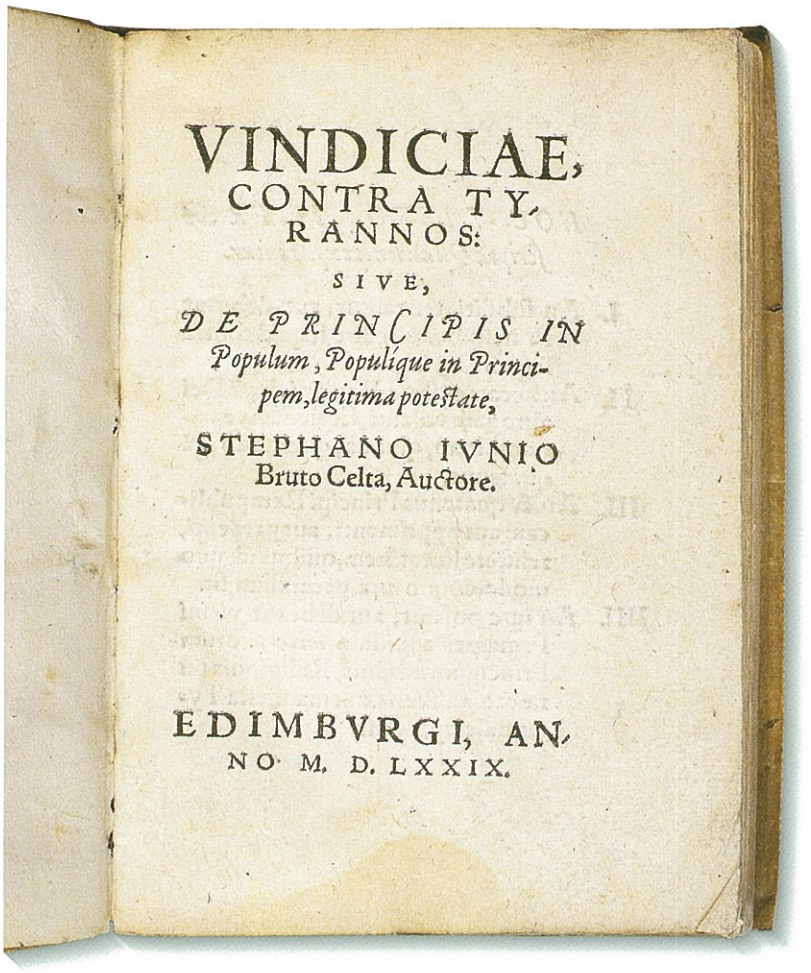
TROISIEME EDITION.

A PARIS,
Chez Iacques du Puys, Libraire iuré, à la Samaritaine.
1578.
AVEC PRIVILEGE DV ROY.

Bodin, Jean, 1530-1596
Les Six Livres de la Republique.
Third edition.
Paris : Jacques du Puys,　1578　[44],773,[4]p. ; 31cm
cf.PMM 94(a)
Bound with;
Les Œuvres dus du Vair grade des sceaux　de France comprises en cinq parties.
Derniere edition,
Paris : Pierre Chevalier,　1619　[16],880,[8]p.

ボダンは、フランス絶対主義形成期の政治思想家で富裕なブルジョアの出身。本書は近代において、政治学を総合的な学問体系として作り上げようとした最初の試みであるが、同時に近代的な意味における主権の概念をはじめて明確にした著作として知られている。本書の正確な書名は、「共和国に関する6書」である。本書は政治思想史上、アリストテレスの「政治学」あるいはモンテスキューの「法の精神」にも匹敵する大著であるにもかかわらず、その影響は著者の真意に反して、わずかに主権の概念や国家形態の問題などが、部分的に後世の思想家の興味をひきつけたに過ぎない。1576年に初版が刊行されているが、当時からラテン語ではなくフランス語で出版されている。館蔵書は第3版にあたる。

39. ランギュエ（1518～1581）
「暴君に対する自由の擁護」初版　1579年　バーゼル刊



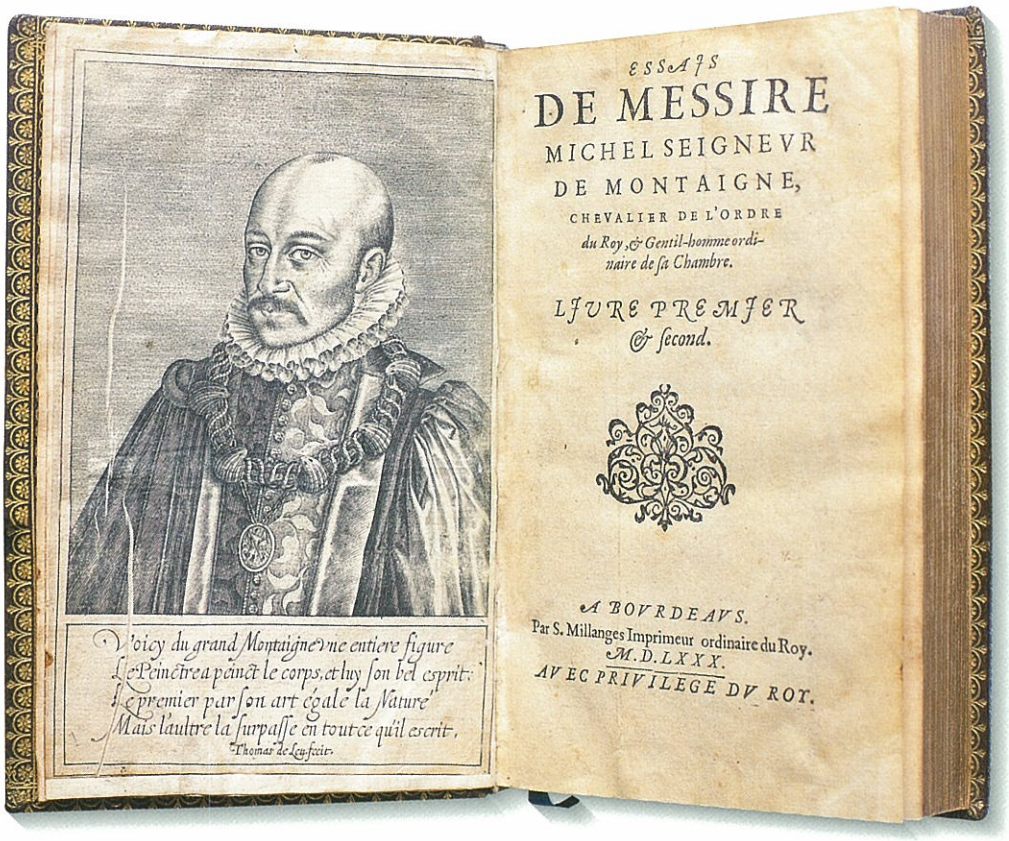
VINDICIAE,
CONTRA TY-
RANNOS:
SIVE,
DE PRINCIPIS IN
Populum, Populique in Princi-
pem, legitima potestate,
STEPHANO IVNIO
Bruto Celta, Auctore.

EDIMBVRGI, AN-
NO M. D. LXXIX.

Languet, Hubert, 1518-1581
Vindiciae, contra tyrannos: sive, de principis in populum, populique in principem, legitima potestate, Stephano Iunio Bruto Celta, auctore.
Edinburg[i.e. Basel] : Printed by T. Guarinus?], 1579 [14],236,[6]p. ; 15cm
PMM 94(b)

本書は、16世紀フランスのカルヴァン派、ユグノーの代表的な政治的文献で、近代民主主義思想史において先駆的な意味をもつ古典的著作の一つである。この書は、フランスの外交官ランギュエの著作とされているが、ユニウス・ブルトウス（Junius Brutus）という匿名で出版されており、一説ではモルネー（Mornay, Du Plessis）の作ともされている。また、出版地もエジンバラで出版されたように書かれているが、ローマ法王、皇帝、王の司法権の及ばないバーゼルで印刷され、追求を逃れるために偽の出版事項を載せたと思われる。

40. モンテーニュ（1533～1592）
「随想録（エセー）」初版　2巻　1580年　ボルドー刊

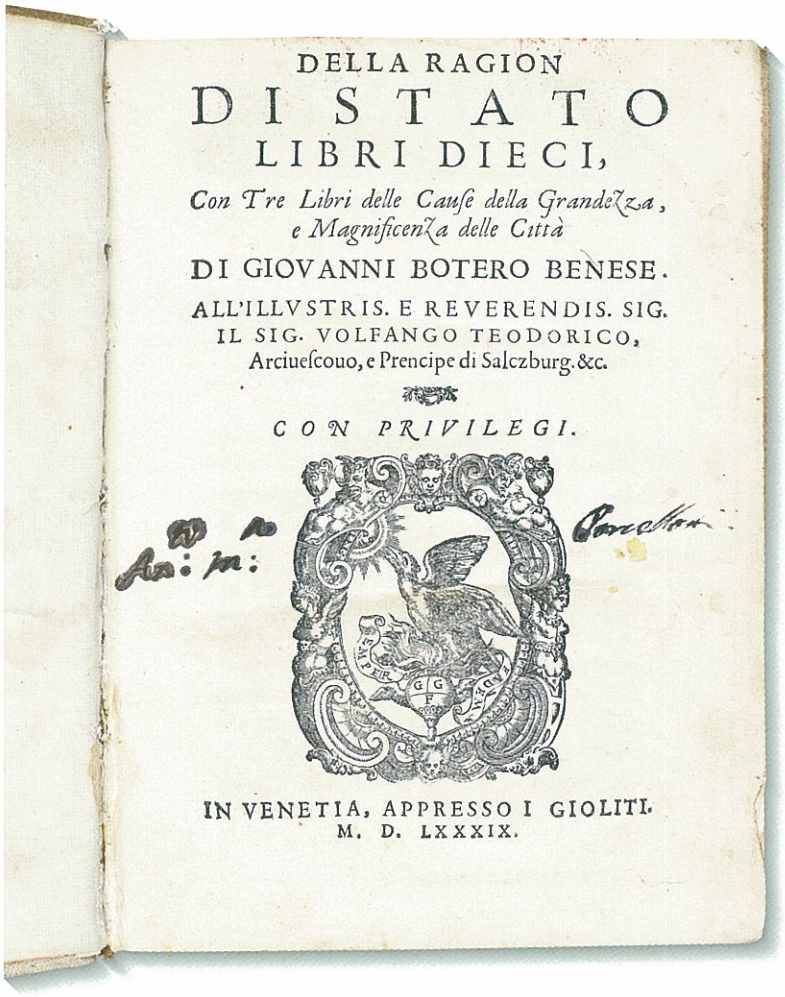


Montaigne, Michel de., 1533-1592
Essais de Messire Michel Seigneur de Montaigne,
chevalier de l'ordre du Roy, & Gentil-homme ordinaire de sa chambre.
Bordeaux : S. Millanges,　1580　2 Vols. ; 16cm
PMM 95

モンテーニュは、フランス・ルネサンス時代後期の思想家。富裕な新興貴族の子として南フランスのボルドー市付近のモンテーニュに生まれた。1570年にボルドー最高法院評定官の職を退き、以後は読書と黙想の生活に入った。「随想録」は、幼児期よりラテン語教育を受けていた彼が、この時期のひたすらな読書や同時代の激しい歴史事件についての見聞や内省を、豊富な知識や意見をまじえ、読書余録、感想録の形で書きとめたものである。題名の「（エセー）」は、「判断力の試み」の意味である。モンテーニュの文章は抽象的な思想を具体的、感覚的に語るものであり、言葉は平明でありながら十分に意味が込められている。「随想録」は、近代の人間意識、思想、科学の発達の原動力となっており、そこに盛られた新しい人間論と魅力ある文章のゆえに、世界の古典の一つとなって愛読されている。

本書の「われ何を知るか?（Que　sais-je?）」という有名な句は、モンテーニュの生来の思考法であり、フランスのペーパーバック・シリーズの名称（クセジュ文庫）にもなっている。

41. ボテロ（1540～1617）
「国家理性論」初版　1589年　ヴェニス刊

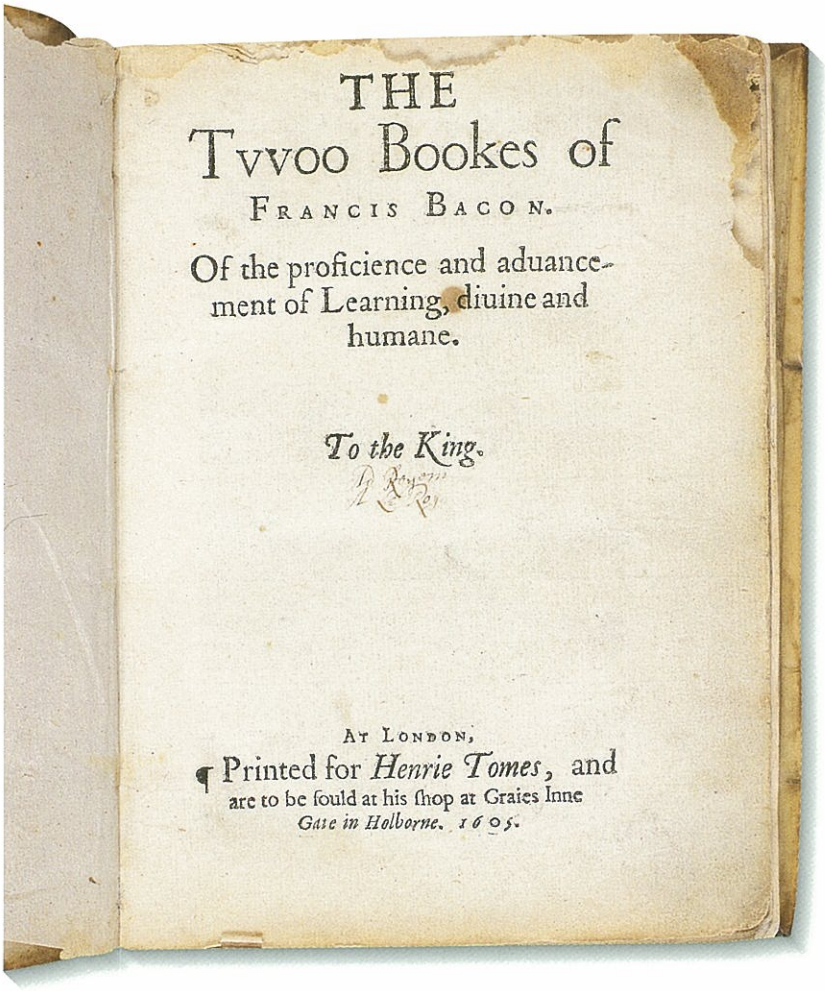


DELLA RAGION
DI STATO
LIBRI DIECI,
Con Tre Libri delle Cause della Grandezza, e Magnificenza delle Città
DI GIOVANNI BOTERO BENESE.
ALL'ILLVSTRIS. E REVERENDIS. SIG.
IL SIG. VOLFANGO TEODORICO,
Arciuescouo, e Prencipe di Salczburg. &c.
CON PRIVILEGI.
IN VENETIA, APPRESSO I GIOLITI.
M. D. LXXXIX.

Botero, Giovanni, 1540-1617
Della Ragion di Stato libri dieci, Con Tre Libri delle cause della Grandeza.
Venice : Appresso I. Gioliti,　1589　[18],367[3]p. ; 21cm

ボテロは、イタリアの政治学者、経済学者。反宗教改革の立場に立ち、君主は伝統的な宗教倫理にとらわれてはならないとするマキャヴェリの主張に強く反対して1583年に「明君論」を、1589年に本書を著し、宗教に好意を持つ君主の理想像を示した。なかでも経済論を展開した一論「都市の偉大の原因」（1588）には、人口の自然的増殖率は太古から不変で、妨害がなければ無制限に増加することが述べられており、マルサスに先行した生活資料による人口制限が主張されている。

42. F.ベーコン（1561～1626）
「学問の進歩」初版　1605年　ロンドン刊



THE
Tvvoo Bookes of
FRANCIS BACON.

Of the proficience and aduance-
ment of Learning, diuine and
humane.

To the King.

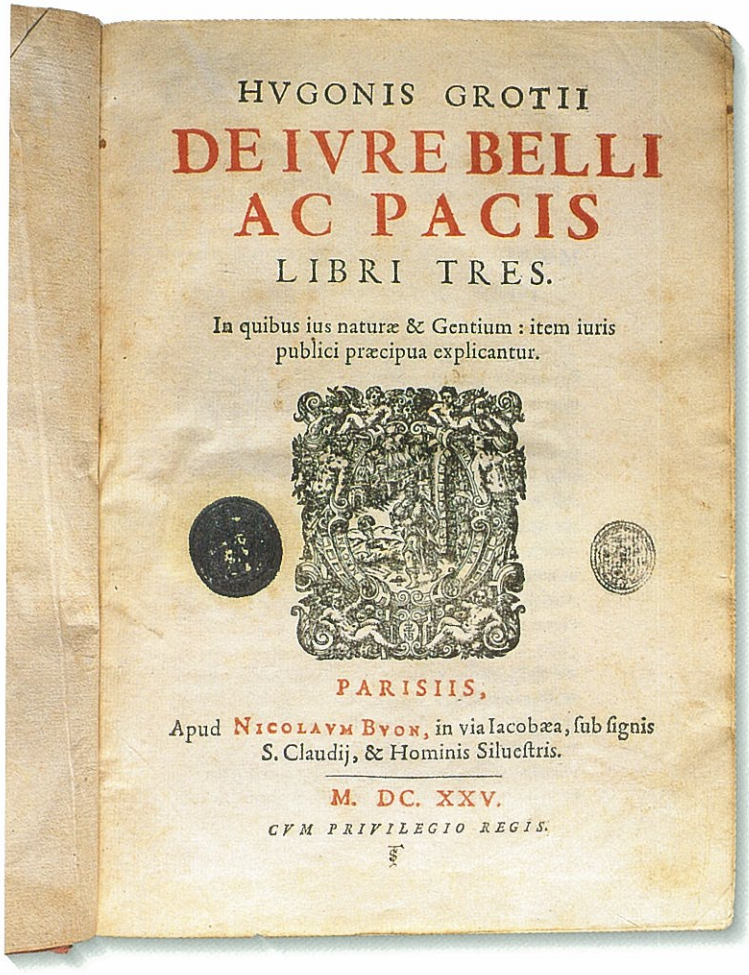
AT LONDON,
¶ Printed for *Henrie Tomes*, and
are to be sould at his shop at Graies Inne
Gate in Holborne. 1605.

Bacon, Francis, 1561-1626
The tvvoo bookes of Francis Bacon. Of the proficience and advancement of Learning, diuine and humane.
London : Henrie Tomes,　1605　[2],45,118,[4] leaves ; 19cm

フランシス・ベーコンはイギリスの哲学者、政治家。本書は、人間の知識と学問を完璧に探求し、学問分類とその区分を行ったベーコンの主著の一つである。ベーコンの生涯の課題は、学問の＜大革新＞であり、25歳の時にこの構想が生まれ、1607年に書かれた草稿には6部の構成となっていた。このうち執筆されたのは前半の3部だけであり、それもすべて完成したわけではないが、「学問の進歩」はこの構想の第1部にあたる。本書は、後にラテン語に訳されて「学問の尊厳と進歩」として1623年に刊行された。

「学問の進歩」は、英語で書かれた最初の哲学書といわれている。ベーコンは、従来のアリストテレス的スコラ学（中世教会哲学）から帰納法への論理の転換を主張し、学問を確固たる実証の手続きによって基礎づけようとした。

43. グロチウス（1583～1645）
「戦争と平和の法」初版　1625年　パリ刊



HVGONIS GROTII
DE IVRE BELLI
AC PACIS
LIBRI TRES.

In quibus ius naturæ & Gentium : item iuris
publici præcipua explicantur.

PARISIIS,
Apud NICOLAVM BVON, in via Iacobæa, ſub ſignis
S. Claudij, & Hominis Silueſtris.

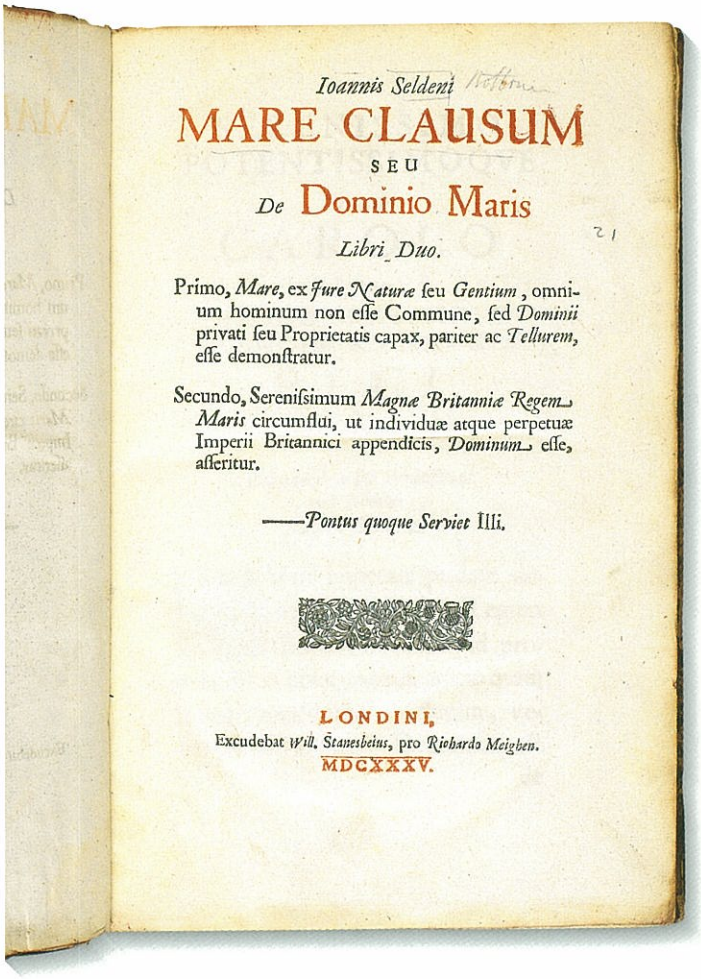
M. DC. XXV.
CVM PRIVILEGIO REGIS.

Grotius, Hugo, 1583-1645
Die Jure belli ac pacis libri tres. In quibus ius naturae & Gentium: item juris publici praecipua explicantur.
Paris : Nicolaum Buon,　1625　[20],786,[82]p. ; 25cm
PMM 125

グロチウスは、オランダの法学者。グロチウスは、30歳のころオランダに起こった神学論争に加わり、ルーフェスタインの古城に幽閉される身となった。ここから脱走後、フランスに亡命し、その滞在中に本書を著した。彼は、近世初頭における最大の法思想家の一人であり、自然法の父、国際法の祖と称されている。

本書は、現在のように法律が分化されていない時代に、法に関するすべての課題を取り扱っており、近代国際法、近代自然法の代表作と目されている。本書の法史上の意義としては、第1に神学と法学との分離、第2に国家元首もローマ教皇もいかなる支配者も私人と同様自然法に従うべきものとし、人間の地位の確立に貢献したこと、第3に人類再統合を描き、その現実化に努力し、後世、国際連盟のような世界平和機構の形成の理念として役だったこと、第4に戦闘行為の惨害を緩和しようと努力し、のちの第1回ハーグ平和会議開催の基本理念とされたことなどである。

44. セルデン（1584～1654）
「封鎖海論」初版　1635年　ロンドン刊



Ioannis Seldeni

MARE CLAUSUM

SEU

De Dominio Maris

Libri Duo.

Primo, *Mare*, ex *Jure Naturæ* ſeu *Gentium*, omnium hominum non eſſe Commune, ſed *Dominii* privati ſeu Proprietatis capax, pariter ac *Tellurem*, eſſe demonſtratur.

Secundo, Sereniſsimum *Magnæ Britanniæ Regem Maris* circumflui, ut individuæ atque perpetuæ Imperii Britannici appendicis, *Dominum* eſſe, aſſeritur.

——*Pontus quoque Serviet* Illi.

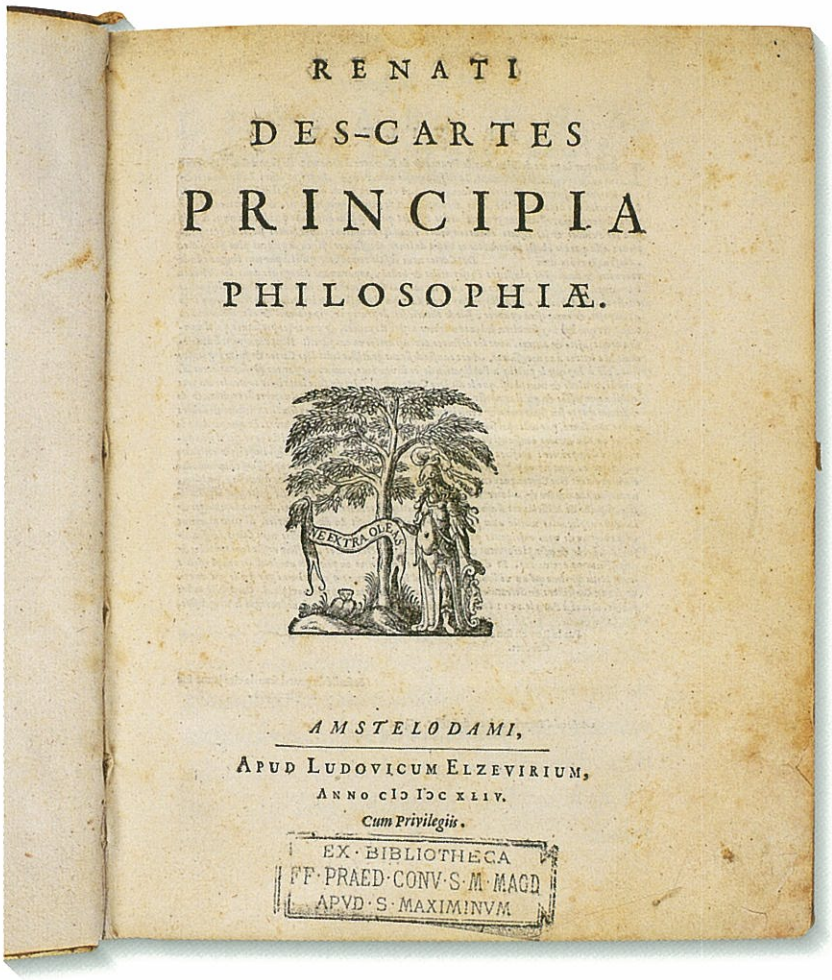
LONDINI,
Excudebat *Will. Stanesbeius*, pro *Richardo Meighen*.
MDCXXXV.

Selden, John 1584-1654
Ioannis Seldeni Mare clausum seu, De dominio maris libri duo [microform] : primo, mare ex jure natura seu gentium omnium hominum non esse commune sed dominii privati seu proprietatis capax, pariter ac tellurem, esse demonstratur : secundo, Serenissimum Magna Britannia Regem maris circumflui ut individua atque perpetua imperii Britannici appendicis dominum esse, asseritur ..
London : Stanesbeii pro Richardo Meighen, 1635 [30], 304,[18]p. ; 29cm
GK 662.2

セルデンは、イギリスの法学者、歴史家、政治学者。オックスフォードで法律を学んだのち弁護士になったが、著述家として多彩な活動をした。なかでも十分の一税の研究は聖職者の反感を買い、その圧迫と戦ううちに政治活動に足を踏み入れ、権利請願の起草にも参加した。

本書は、グロチウスの<自由海論>に反対して、イギリスの海洋領有を弁護するために執筆され、チャールズⅠ世の勅命により公刊された。兵力による実効的支配を基準として海洋に対する所有権と管轄権とを領有権で統一的に把握したことは、当時の国際慣行にも一致し、グロチウスの理論よりも実証的で正当であった。しかし、本書の立論は、引用した資料の解釈において公平を欠き概括的であったため、やがて公海自由の原則の確立とともに、封鎖海論は否定された。

45. デカルト（1596～1650）
「哲学原理」初版　1644年　アムステルダム刊


RENATI
DES-CARTES
PRINCIPIA
PHILOSOPHIÆ.

AMSTELODAMI,
APUD LUDOVICUM ELZEVIRIUM,
ANNO CIↃ IↃC XLIV.
Cum Privilegiis.

EX·BIBLIOTHECA
FF·PRAED·CONV·S·M·MAGD
APVD·S·MAXIMINVM

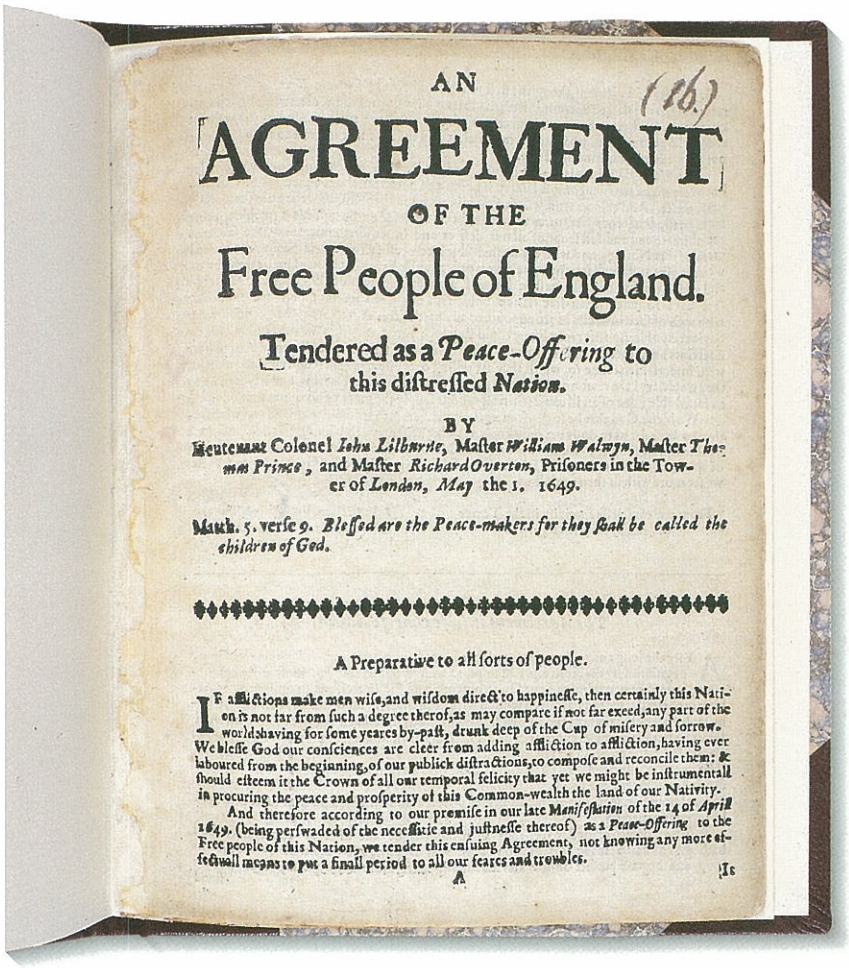
Descartes, René, 1596-1650
Principia philosophiae.
Amsterdam : Ludouicum Elzevirium,　1644　[13],310,[2]p. ; 20cm

デカルトは、フランスの哲学者、数学者、自然科学者。豊かなブルジョアの出身で、スコラ的教育を受け、軍隊勤務をした。除隊後ヨーロッパ各地を旅行し、1629年から20年間アムステルダム近郊に定住して、自然科学と哲学の研究をした。

本書は、形而上学と自然学とを体系的にまとめたもので4部からなる。第1部は、形而上学で「省察」に述べられたことを要約している。第2部以下は自然学についての記述であり、第3部では物体の本質について、第3部は宇宙発生論、第4部は地球の地質学的進化について論じられている。

デカルトの哲学体系は、1本の木に例えられ、根に形而上学、幹に自然学、枝に諸々のその他の学問が当てられ、そこには、医学、機械学、道徳という果実が実り、哲学の成果は、枝に実る諸学問から得られると考えた。

46. リルバーン（1614～1657）
「イギリスの人民協約」初版　1649年　ロンドン刊



AN

(16.)

AGREEMENT

OF THE

Free People of England.

Tendered as a *Peace-Offering* to this distressed *Nation*.

BY

Lieutenant Colonel *John Lilburne*, Master *William Walwyn*, Master *Thomas Prince*, and Master *Richard Overton*, Prisoners in the Tower of *London*, *May* the 1. 1649.

Math. 5. verse 9. *Blessed are the Peace-makers for they shall be called the children of God.*

A Preparative to all sorts of people.

IF afflictions make men wise, and wisdom direct to happinesse, then certainly this Nation is not far from such a degree therof, as may compare if not far exceed, any part of the world, having for some yeares by-past, drunk deep of the Cup of misery and sorrow. We blesse God our consciences are cleer from adding affliction to affliction, having ever laboured from the begianing, of our publick distractions, to compose and reconcile them: & should esteem it the Crown of all our temporal felicity that yet we might be instrumentall in procuring the peace and prosperity of this Common-wealth the land of our Nativity.

And therefore according to our premise in our late *Manifestation* of the 14 of *April* 1649. (being perswaded of the necessitie and justnesse thereof) as a *Peace-Offering* to the Free people of this Nation, we tender this ensuing Agreement, not knowing any more effectuall means to put a finall period to all our feares and troubles.

A

It

Lilburne, John, 1614-1657
An Agreement of the Free People of England. Tendered as a Peace-Offering to this distressed Nation.
London : Gyles Calvers,　1649　8p. ; 19cm
PMM 136

リルバーンは、イギリスの市民革命期の民主主義者で水平派運動の指導者の一人。本書は、イギリス清教徒革命中に、水平派運動の指導者リルバーンによって発表された民主主義憲法草案である。わずか8ページのパンフレットだが、のちの協同主義、社会主義、マルクス主義思想の形成過程において、本書が与えた影響は大きいものがあった。

47. ホッブズ（1588～1679）
「リヴァイアサン」初版　1651年　ロンドン刊

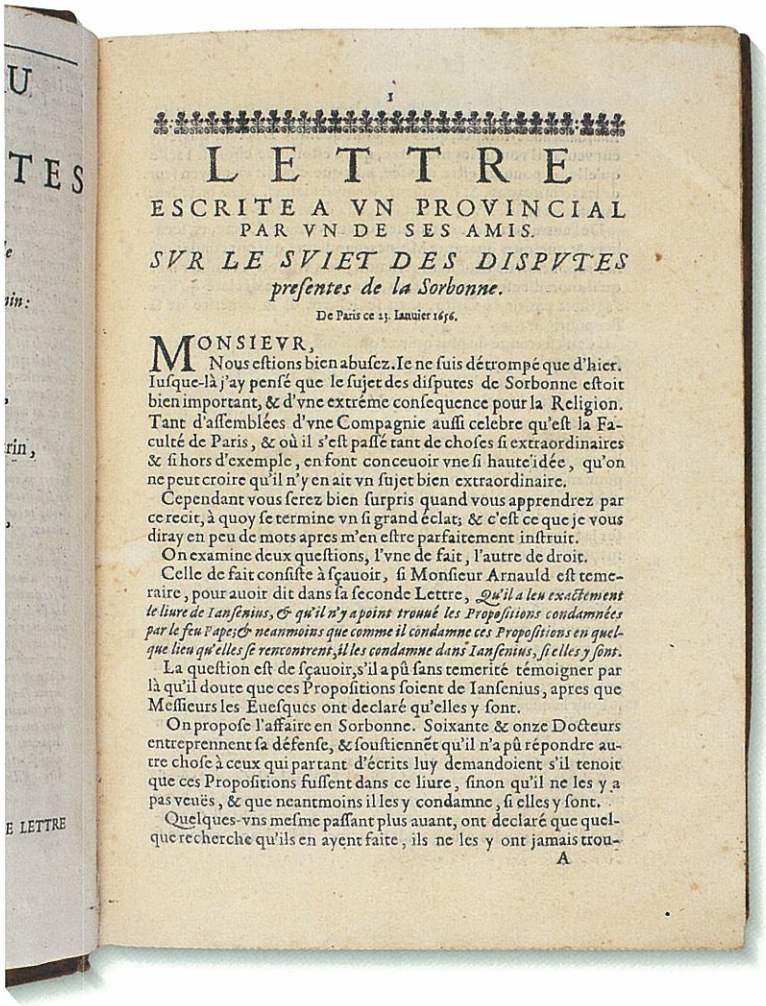
Hobbes, Thomas, 1588-1679
Leviathan, or The matter, forme, & power of a common-wealth ecclesiasticall and civill.
London : Andrew Crooke,　1651　[12],248,247-256,261-396,[4]p. ; 28cm
PMM 138　Walter Chetwynd 旧蔵書

本書は、市民革命期におけるイギリスの代表的政治思想家ホッブズの主著。ホッブズは、政治学者であり、イギリス経験論、近代自然法思想、社会契約説の代表者の一人である。彼は、王権を神によってではなく、契約という合理的な観念によって基礎づけており、近代民主主義思想の基本的枠組みである社会契約説を初めて構築した。

本書の原題は<リヴァイアサン、すなわち教会的および市民的国家>であり、亡命中にフランスで執筆され、革命政権下のイギリスで出版された。書名のリヴァイアサンとは、旧約聖書のヨブ記に記された水棲の巨大な妖獣で、聖書に語られる陸の怪獣ビヒモスと対をなす巨獣である。

本書には、初版とよばれるものが3種類ある。いずれも出版社、出版年は同じであるが、出版社の綴りがCrookeと刷られているものとCkookeと印刷されたもの、タイトルページの飾りの木版画が人の顔、熊、花模様の3種類の異同が見られる。

48. パスカル（1623〜1662）
「プロヴァンシアル」初版　1657年　ケルン刊



1

LETTRE
ESCRITE A VN PROVINCIAL
PAR VN DE SES AMIS.
SVR LE SVIET DES DISPVTES
presentes de la Sorbonne.

De Paris ce 23. Ianuier 1656.

MONSIEVR,
Nous estions bien abusez. Ie ne suis détrompé que d'hier. Iusque-là j'ay pensé que le sujet des disputes de Sorbonne estoit bien important, & d'vne extrême consequence pour la Religion. Tant d'assemblées d'vne Compagnie aussi celebre qu'est la Faculté de Paris, & où il s'est passé tant de choses si extraordinaires & si hors d'exemple, en font conceuoir vne si haute idée, qu'on ne peut croire qu'il n'y en ait vn sujet bien extraordinaire.

Cependant vous serez bien surpris quand vous apprendrez par ce recit, à quoy se termine vn si grand éclat; & c'est ce que je vous diray en peu de mots apres m'en estre parfaitement instruit.

On examine deux questions, l'vne de fait, l'autre de droit.

Celle de fait consiste à sçauoir, si Monsieur Arnauld est temeraire, pour auoir dit dans sa seconde Lettre, *Qu'il a leu exactement le liure de Iansenius, & qu'il n'y a point trouué les Propositions condamnées par le feu Pape; & neanmoins que comme il condamne ces Propositions en quelque lieu qu'elles se rencontrent, il les condamne dans Iansenius, si elles y sont.*

La question est de sçauoir, s'il a pû sans temerité témoigner par là qu'il doute que ces Propositions soient de Iansenius, apres que Messieurs les Euesques ont declaré qu'elles y sont.

On propose l'affaire en Sorbonne. Soixante & onze Docteurs entreprennent sa défense, & soustiennẽt qu'il n'a pû répondre autre chose à ceux qui partant d'écrits luy demandoient s'il tenoit que ces Propositions fussent dans ce liure, sinon qu'il ne les y a pas veuës, & que neantmoins il les y condamne, si elles y sont.

Quelques-vns mesme passant plus auant, ont declaré que quelque recherche qu'ils en ayent faite, ils ne les y ont jamais trou-

A

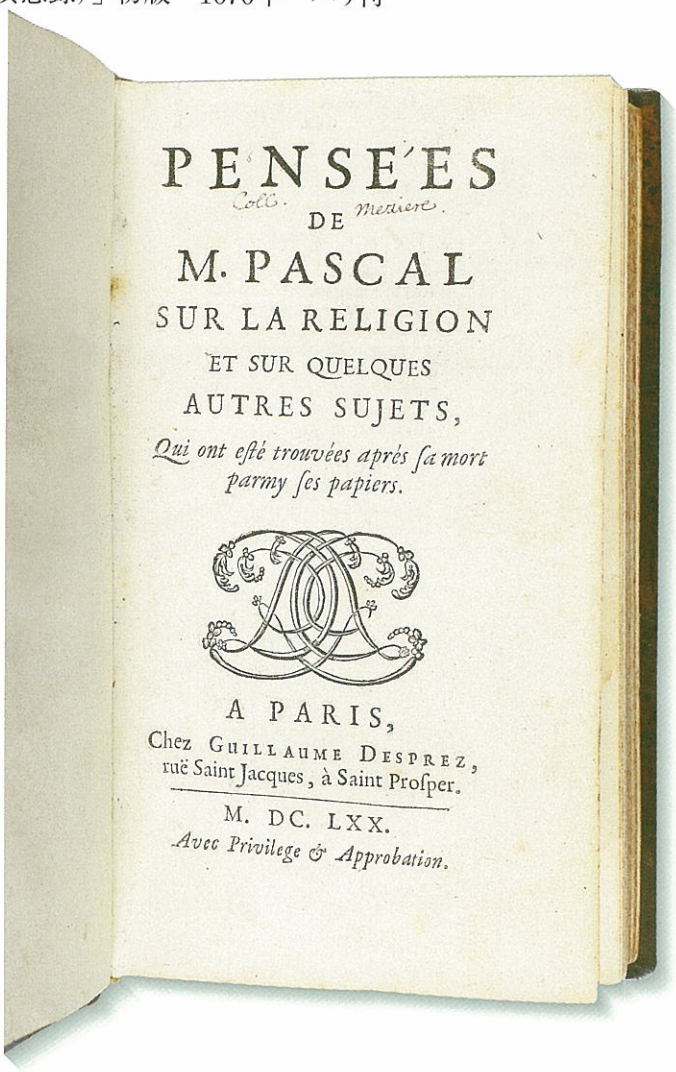
Pascal, Blaise, 1623-1662
Les Provinciales, ou les lettres e'crites par Louis de Montalte, a un provincial de ses amis & au RR.PP.Jesuites: sur les sujet de la morale, & de la politique de ces peres.
A Cologne : Pierre de la Vallee,　1657　1 Vol. ; 24cm
PMM 140

パスカルは、フランスの思想家。「プロヴァンシアル」の正しい題は「現にソルボンヌで行われている論争の件に関して、あるいは田舎の住人に、その友達の一人が書き送った手紙」といい、「田舎人への手紙」とも訳される。本書は、1656年1月23日から翌年3月24日までにわたって、匿名で刊行された18の書簡体のパンフレットであり、1657年にルイ・ド・モンタルトの筆名でそれらが合本されて刊行された。

パスカルは、イエズス会に対するジャンセニストを擁護するために筆をとったもので、最初の3篇で友人のアルノーを擁護し、第4篇から第10篇はイエズス会の道徳観を批判、さらに第11から第16篇はイエズス会からの批判に対する反駁、そして最後の2篇はジャンセニウスの擁護をし、神学論争に立ちかえったが迫害が激しくなり、第19篇の草稿を作ったところで筆を投じた。「プロヴァンシアル」は、その軽快で素直な文体によって当時大きな評価を得たばかりでなく、フランスにおけるいわば最初の言文一致体ともいうべき著作として、近代フランス語の文体に大きな影響を与えた。

館蔵書には、手書文献を含む、38点の関連文献が合冊製本されている。

49. パスカル（1623～1662）
「パンセ（瞑想録）」初版　1670年　パリ刊



PENSE'ES
Coll. Meziere.
DE
M. PASCAL
SUR LA RELIGION
ET SUR QUELQUES
AUTRES SUJETS,
Qui ont esté trouvées après sa mort parmy ses papiers.

A PARIS,
Chez GUILLAUME DESPREZ,
ruë Saint Jacques, à Saint Prosper.
M. DC. LXX.
Avec Privilege & Approbation.

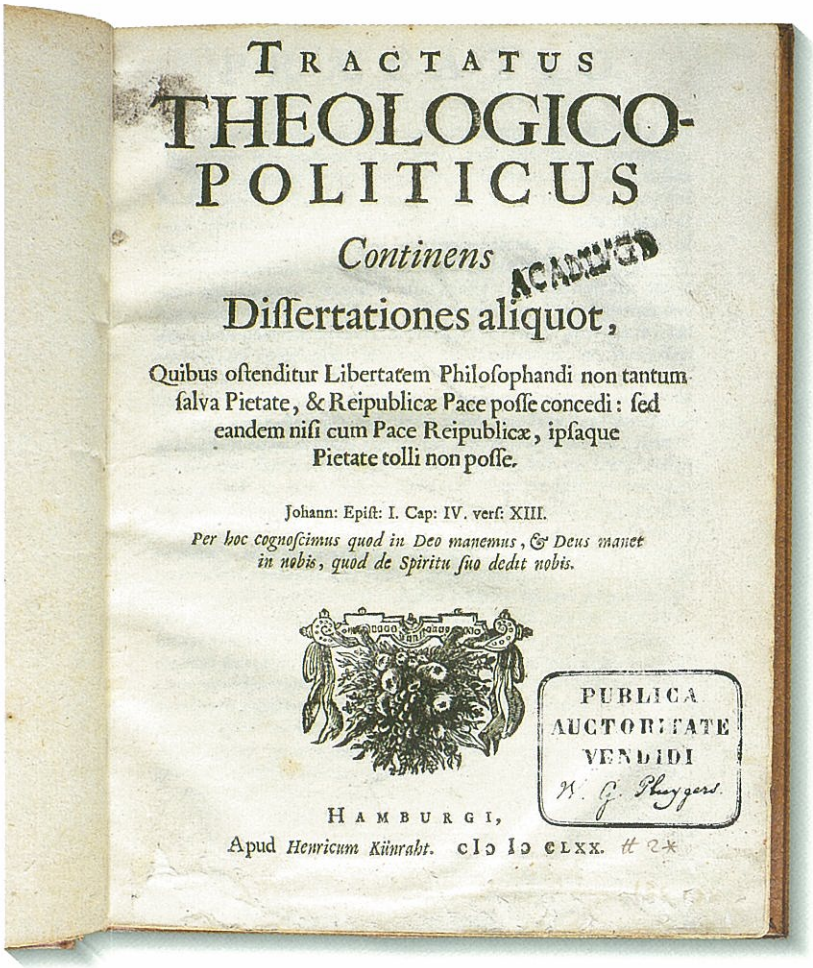
Pascal, Blaise, 1623-1662
Pensèes de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, qui ont estè trouvèes après sa mort parmy ses papiers.
Paris : Guillaume Desprez,　1670　[84],365,[23]p. ; 16cm
PMM 152

本書は、パスカルが晩年の数年間執筆したキリスト教弁証論のための覚え書を、彼の死後友人達が編集して出版したもので「瞑想録」とも呼ばれる。

本書の内容は、編者によっていろいろに分類され、読者によって様々に解釈されてきたが、大別すれば人間学と神学に分けられる。パスカルの人間学は、当時流行していたストア哲学とモンテーニュとの人間観を批判しつつ、それらをキリスト教的な立場において統合したもので、生きた実存的な人間の分析である。神学について、当時の神学者たちは神の存在を示すのに、存在論的証明や自然神学的証明を用いたのに対して、パスカルはそのようなスコラ神学的な神や理神論的な神を持ち出さず、聖書に示された神に目を向けさせた。彼は、聖書の中に示されている神の本質は愛であり、その真の価値を理解することが神に近づく第一歩であるとしている。

本書は、出版早々非常な好評を博し、当時の読書社会を支配したが、その後も単に古典的文書としてでなく、生きた現実的著作として、各時代の人々に迎えられた。「人間は考える葦である」という有名な言葉は、パスカルが本書の中に残した言葉である。

50. スピノザ（1632～1677）
「神学政治論」初版　1670年　アムステルダム刊



TRACTATUS
THEOLOGICO-
POLITICUS

Continens
Diſſertationes aliquot,

Quibus oſtenditur Libertatem Philoſophandi non tantum ſalva Pietate, & Reipublicæ Pace poſſe concedi: ſed eandem niſi cum Pace Reipublicæ, ipſaque Pietate tolli non poſſe.

Johann: Epiſt: I. Cap: IV. verſ: XIII.
Per hoc cognoſcimus quod in Deo manemus, & Deus manet in nobis, quod de Spiritu ſuo dedit nobis.

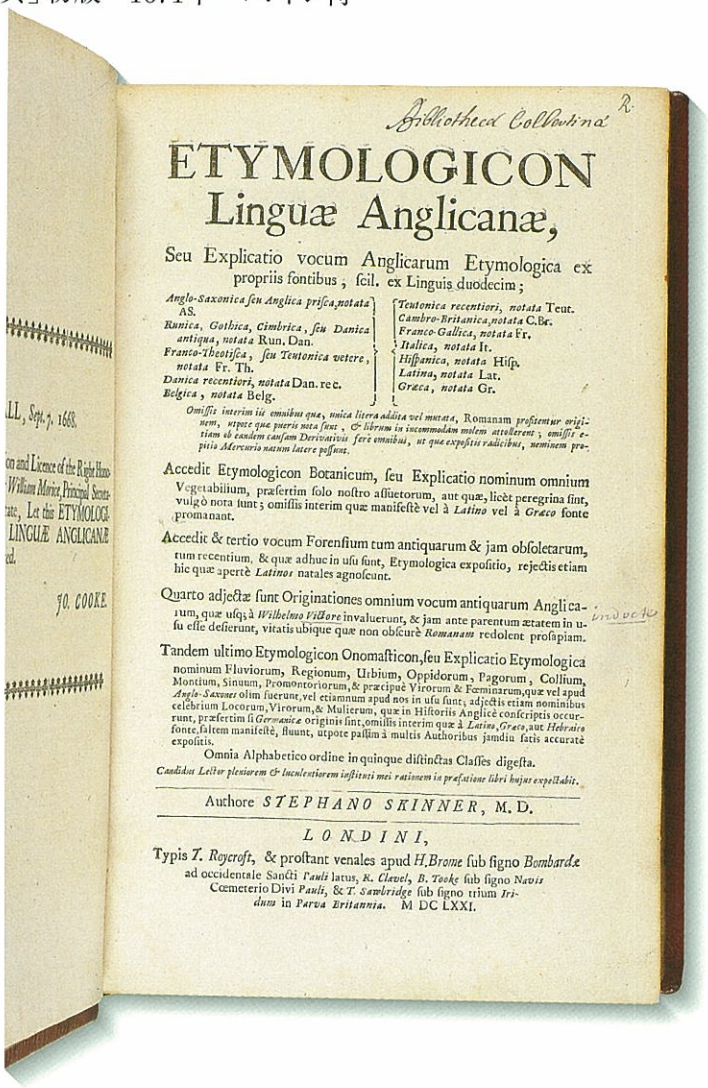
HAMBURGI,
Apud *Henricum Künraht.* CIↃ IↃ CLXX.

ACADEMICA
PUBLICA AUCTORITATE VENDIDI
W. G. Huygens

Spinoza, Benedictus de., 1632-1677
Tractatus theologico-politicus.
Hamburg[i.e. Amsterdam] : Henricum Künraht, 1670 [16],233[1]p. ; 20cm
PMM 153

スピノザは、オランダの哲学者。当時オランダでは、国家権力が教権のもとに喘ぎ、神学が哲学の領域を犯し、言論の自由が危うくされていた。彼は、本書を匿名で出版し、公然と聖書を批判し、神学と哲学はおのおのその目的と基礎を異にし、お互いに独立したものであるとした。しかし、本書の出版と同時に聖職者、神学者たちは激しく反論し、1774年にオランダ法院は「神を汚し、精神を毒する」として本書を印刷し、販売することを禁止した。彼の思想は無神論、唯物論として約100年の間葬られていたが、従来の固定概念から解放され、新たな目で読み出されるようになると人々に感動を与えた。ことに思考と言論の自由に関しての強力な主張は、近代思想史上注目すべきものがあり、ドイツ哲学等に影響を与えた。スピノザは、本書の刊行に際し、著者の名前を秘し、アムステルダムで刊行したにもかかわらずタイトルページの発行地をハンブルクとし、発行者もキューンラートと偽って出版している。

51. スキナー（1623～1667）
「語源辞典」初版　1671年　ロンドン刊



Bibliotheca Colbertina

ETYMOLOGICON
Linguæ Anglicanæ,

Seu Explicatio vocum Anglicarum Etymologica ex propriis fontibus, ſcil. ex Linguis duodecim;

Anglo-Saxonica ſeu Anglica priſca, notata AS.
Runica, Gothica, Cimbrica, ſeu Danica antiqua, notata Run. Dan.
Franco-Theotiſca, ſeu Teutonica vetere, notata Fr. Th.
Danica recentiori, notata Dan. rec.
Belgica, notata Belg.
Teutonica recentiori, notata Teut.
Cambro-Britanica, notata C.Br.
Franco-Gallica, notata Fr.
Italica, notata It.
Hiſpanica, notata Hiſp.
Latina, notata Lat.
Græca, notata Gr.

Omiſſis interim iis omnibus quæ, unica litera addita vel mutata, Romanam *profitentur originem, utpote quæ pueris nota ſunt, & librorum in incommodam molem attollerent; omiſſis etiam ob eandem cauſam Derivativis fere omnibus, ut quæ expoſitis radicibus, neminem prorſus Mercurio natum latere poſſunt.*

Accedit Etymologicon Botanicum, ſeu Explicatio nominum omnium Vegetabilium, præſertim ſolo noſtro aſſuetorum, aut quæ, licèt peregrina ſint, vulgò nota ſunt; omiſſis interim quæ manifeſtè vel à *Latino* vel à *Græco* fonte promanant.

Accedit & tertio vocum Forenſium tum antiquarum & jam obſoletarum, tum recentium, & quæ adhuc in uſu ſunt, Etymologica expoſitio, rejectis etiam hic quæ apertè *Latinos* natales agnoſcunt.

Quarto adjectæ ſunt Originationes omnium vocum antiquarum Anglicarum, quæ uſqs à *Wilhelmo Victore* invaluerunt, & jam ante parentum ætatem in uſu eſſe deſierunt, vitatis ubique quæ non obſcurè *Romanam* redolent proſapiam.

Tandem ultimo Etymologicon Onomaſticon, ſeu Explicatio Etymologica nominum Fluviorum, Regionum, Urbium, Oppidorum, Pagorum, Collium, Montium, Sinuum, Promontoriorum, & præcipuè Virorum & Fœminarum, quæ vel apud *Anglo-Saxones* olim fuerunt, vel etiamnum apud nos in uſu ſunt; adjectis etiam nominibus celebrium Locorum, Virorum, & Mulierum, quæ in Hiſtoriis Anglicè conſcriptis occurrunt, præſertim ſi *Germanicæ* originis ſint, omiſſis interim quæ à *Latina, Græca,* aut *Hebraica* fonte, ſaltem manifeſtè, fluunt, utpote paſſim à multis Authoribus jamdiu ſatis accuratè expoſitis.

Omnia Alphabetico ordine in quinque diſtinctas Claſſes digeſta.

Candidus Lector plenioren & luculentiorem inſtituti mei rationem in præfatione libri hujus expoſitam habit.

Authore *STEPHANO SKINNER*, M. D.

LONDINI,
Typis *T. Roycroft*, & proſtant venales apud *H. Brome* ſub ſigno *Bombardæ* ad occidentale Sancti *Pauli* latus, *R. Clavel*, *B. Tooke* ſub ſigno *Navis* Cœmeterio Divi *Pauli*, & *T. Sawbridge* ſub ſigno trium *Iridum* in *Parva Britannia*. M DC LXXI.

Skinner, Stephen, 1623-1667
Etymologicon linguae Anglicanae, seu Explicatio vocum Anglicarum etymologica ex propriis fontibus, scil. ex linguis duodecim; …
London : typis T. Roycroft, & others, 1671 1 Vol. ; 32cm
Jean Baptiste Colbert 旧蔵書

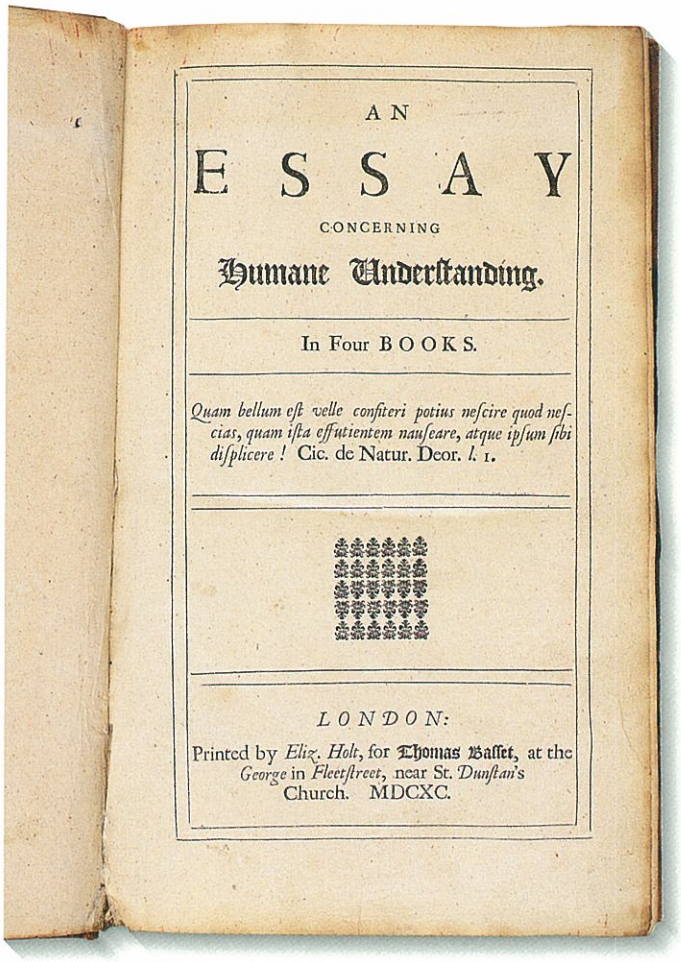
ジョンソンの「英語辞典」の発表以前において、ユニヌスの「辞典」と並び最も権威のある語源辞典のひとつであった。ジョンソンの「辞典」のなかで、語源の記載が本文の特色の一つとなっているが、その語源の収集にあたっては、スキナー、ユニヌス、バイリ、エインスワース、フィリップスといった先行の辞書編纂者の諸辞典に負うところが多かったといわれる。特にジョンソンが「序文」において評したように、スキナーの「語源辞典」に対する信頼は厚かったといわれている。館蔵書は、17世紀のフランスの政治家、財務長官として知られているコルベールの旧蔵書でタイトルページ上部に手書きでBibliotheca Colbertinaと記されている。

52. モレリ（1643～1680）
「歴史大辞典」初版　1674年　リヨン刊

Moréri, Louis, 1643-1680
Le Graqnd Dictionaire Historique, ou le melange curieux de l' histoire sainte et profane, rapportant en abbrege les vies des parriarches, …
Lyons : Jean Girin & Barthelemy Rivière,　1674　xxxvi,1346p. ; 37cm
PMM 155(a)

啓蒙時代は、奔流のように種々の百科事典を生み出した。ヨーロッパ世界に知識の面で衝撃を与えた最初の百科事典は、2種類のフランスの百科事典であった。一つはモレリの「歴史大辞典」であり、もう一つはベールの「歴史批判辞典」である。この二つの百科事典は、ルイ14世時代の知性優先と、同時にまたその逆のローマカトリック教会への名目的信仰や啓示宗教への懐疑的な問題に焦点をあわせていたため、大きな衝撃を与えたのである。僧院長だったモレリは、自己の著作を、彼の教会を弁明し防衛するものとして企画した。彼の著作が注目に値するのは、歴史的・伝記的記述を重視している点であり、＜理性の時代＞において、なお伝統を重視する反合理主義者の力強さを想起させるものがある。

53. ロック（1632～1704）
「人間悟性論」初版　1690年　ロンドン刊



AN

ESSAY

CONCERNING

Humane Understanding.

In Four BOOKS.

Quam bellum est velle confiteri potius nescire quod nescias, quam ista effutientem nauseare, atque ipsum sibi displicere! Cic. de Natur. Deor. *l.* 1.

LONDON:

Printed by *Eliz. Holt*, for Thomas Basset, at the *George* in *Fleetstreet*, near St. *Dunstan's* Church. MDCXC.

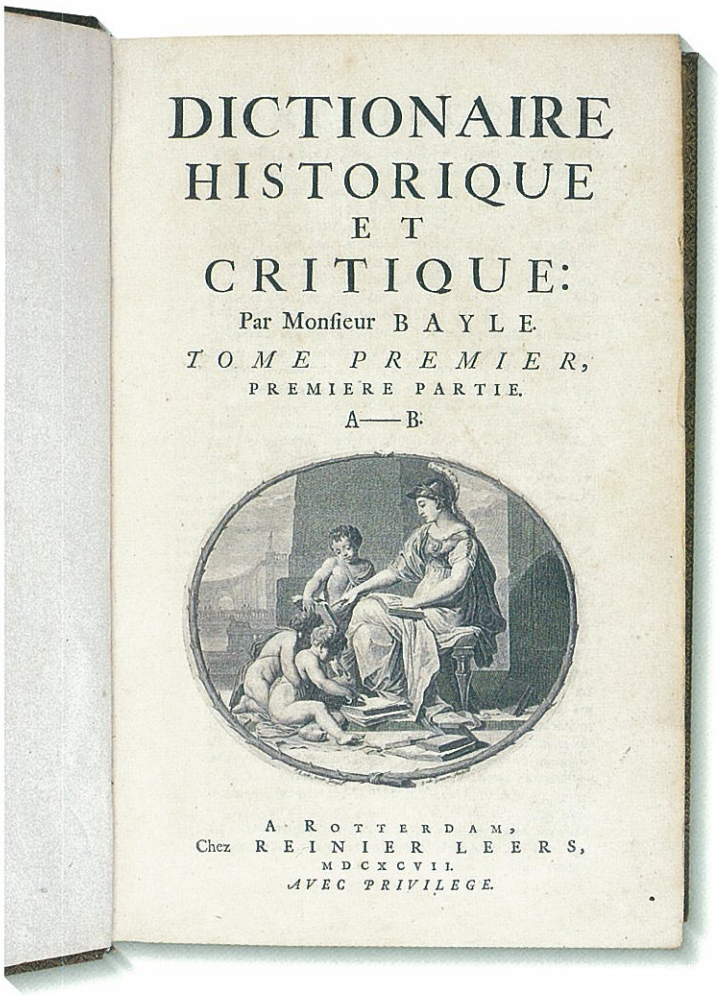
Locke, John, 1632-1704
An essay concerning humane understanding. In four books.
London : printed by Elizabeth Holt, for Thomas Basset, 1690 [16],362,[26]p. ; 32cm
PMM 164

ロックはイギリスの政治思想家、哲学者であり、政治思想史上はイギリス名誉革命の代表的理論家で、哲学史上はイギリス経験論の代表者である。ロックの著作は、政治論、経済論、宗教論、教育論など様々な分野にわたっているが、「人間悟性論」を著すことによって、これらの課題をより深め、近代認識論哲学の樹立へ近づいていった。

本書は4篇からなり、第1篇の序論で本書の着想の由来を明らかにしている。経験的知識は、自己の経験に由来する知識であり、知覚したものを感覚と理性で吟味する態度が人間の自然的義務であるという経験論を展開した。

「人間悟性論」は、当時の国際的学術用語であるラテン語をさけ、平易な英語で書かれているが、本書の意義は、単にイギリスにとどまらず、汎ヨーロッパ的な近代思想の形成に偉大な礎石の役割を果たしたことにある。

54. ベール（1647～1706）
「歴史批判辞典」初版　2巻　1697年　ロッテルダム刊



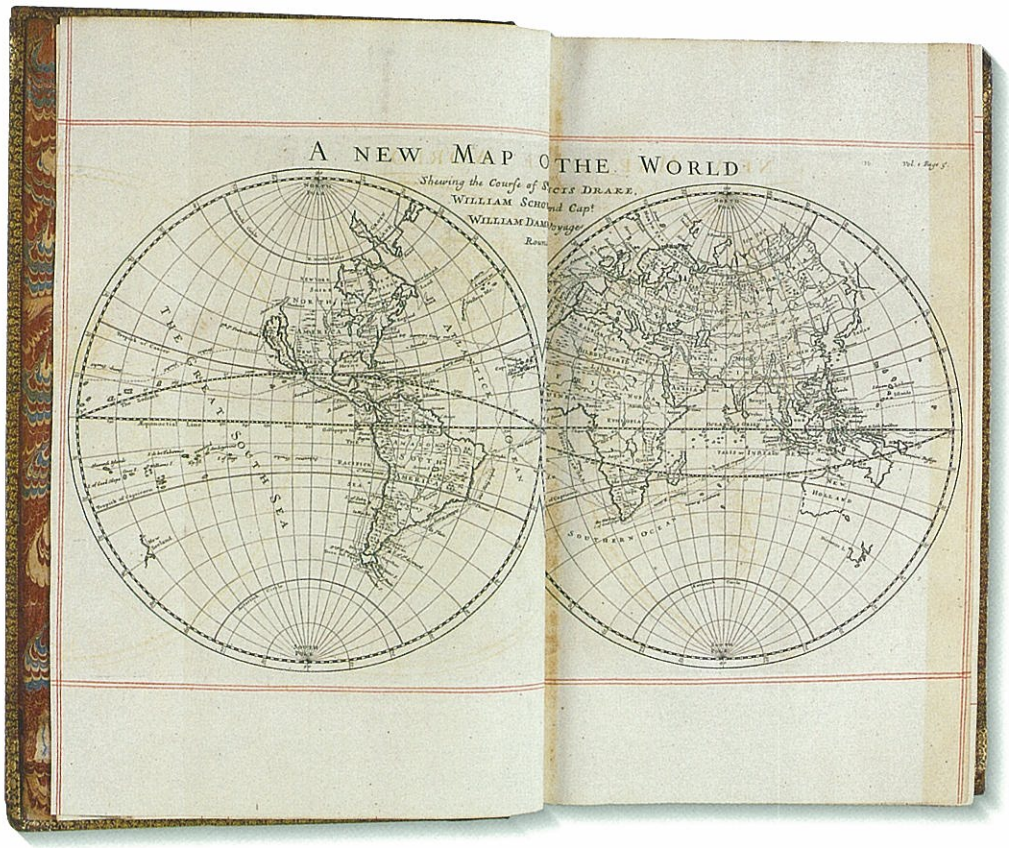
DICTIONAIRE
HISTORIQUE
ET
CRITIQUE:
Par Monſieur BAYLE.
TOME PREMIER,
PREMIERE PARTIE.
A—B.

A ROTTERDAM,
Chez REINIER LEERS,
MDCXCVII.
AVEC PRIVILEGE.

Bayle, Pierre, 1647-1706
Dictionaire historique et critique
Rotterdam : Reinier Leers,　1697　2 Vols. ; 38cm
PMM 155(b)

ベールは、フランスの哲学者、神学者。彼は牧師の子に生まれ、一時カトリックに改宗したが再び新教に復し、1681年ナントの勅令廃止とともにオランダに亡命し、そこで後半生を信仰の自由のために闘った。本書は、そうしたベールの思想の集大成とみなされるべきものである。この辞典を作ろうとした彼の意図は、モレリの「歴史大辞典」に代表される従来の辞典にみられた歴史の伝説化に対抗して、“誤謬の辞典“を作るためであった。こうした批判的態度は本辞典の本文と脚注との奇妙な対照によって示されている。常識的な記述を本文とすれば、脚注はベール自身の毒舌の場であり、脚注の方が本文の何倍ものスペースを占めることがまれではなく、きわめて巧妙大胆な風刺辞典の体裁をなしている。本書は、マンデヴィル、ヴォルテールなど当代の啓蒙思想家に多大な影響を与えた辞典で、デイドロ・ダランベールの「百科全書」が出版されるまで18世紀前半のヨーロッパの知的源泉として利用された。

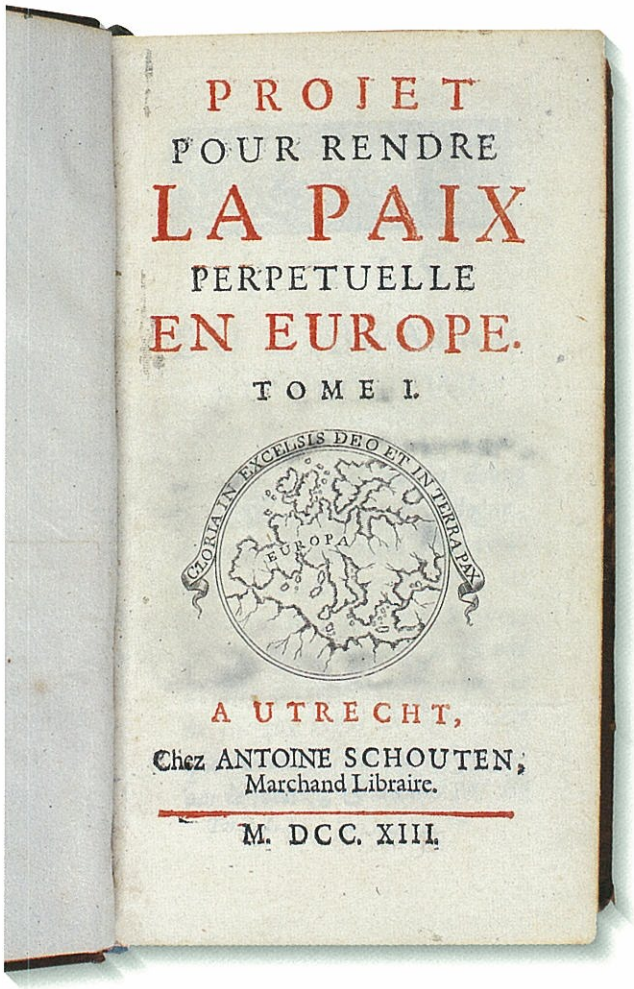
55. ハリス（1667頃～1719）
「航海および旅行記集成」初版　2巻　1705年　ロンドン刊



Harris, John., ca.1667-1719
Navigantium atque itinerantium bibliotheca: or, a compleat collection of voyages and travels: consisting of above four hundred of the most authentick writers; beginning with Hackluit, Purchass, &c. in English; ... Also, an appendix, of ... accidents at sea; ... To which is prefixed, a history of the peopling of the several parts of the world.
London : Thomas Bennet and Others,　1705　2 Vols. ; 44cm

ハリスは、イギリスの科学者、神学者、地誌学者。本書は、英語による「技術事典、あるいは万有英語学芸および科学辞典」を編纂したハリスによって、新大陸の発見航海や異国の征服、通商に関する記述をまとめて収録し、編集された資料集である。ポルトガルの東洋における布教活動、日英通商やウィリアム・アダムズの生涯など日本に関する資料も多く含まれ、大航海時代の東洋研究にとっても貴重な文献となっている。

56. サン・ピエール（1658～1743）
「永久平和論」初版　3巻（2冊）　1713/1717年　ユトレヒト刊


PROJET
POUR RENDRE
LA PAIX
PERPETUELLE
EN EUROPE.
TOME I.

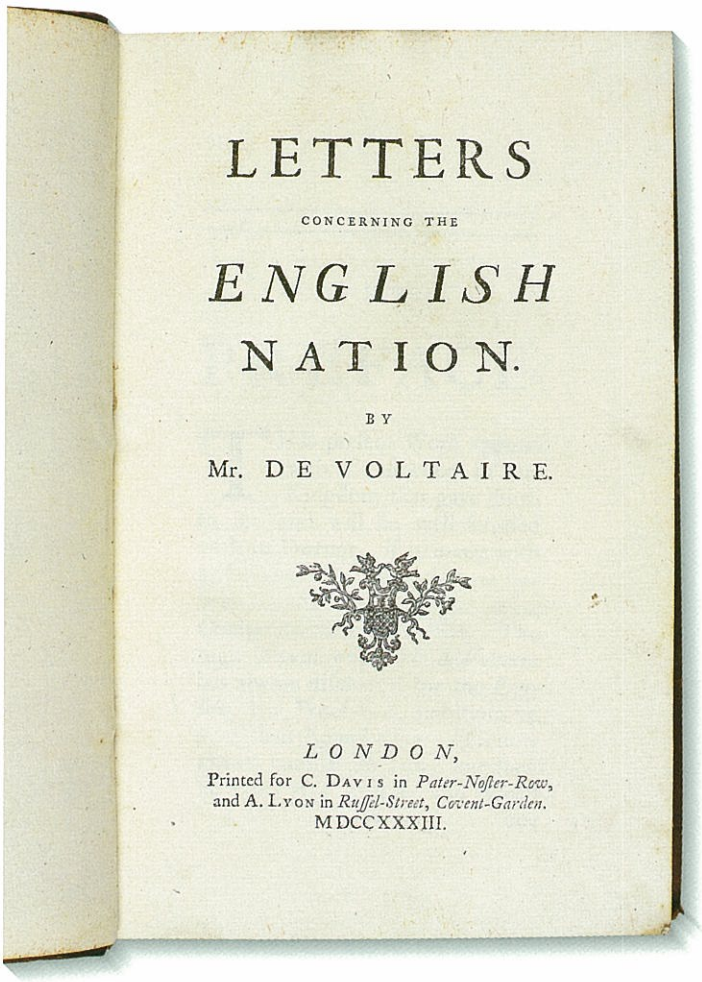
A UTRECHT,
Chez ANTOINE SCHOUTEN,
Marchand Libraire.
M. DCC. XIII.

Saint-Pierre, (Charles Irénée Castel de.), 1658-1743
Projet pour rendre la paix perpetuelle en Europe. Two Volume in one.
Utrecht : Antoine Schouten,　1713　[8],xxiv,400,[10];1-423,[11]p.　2 Vols. in 1 ; 16cm
Together with:
Projet de traité pour rendre la paix perpetuelle entre les souverains chretiens, pour maintenir toujours le commerce libre entre les Nations; pour afermir beaucoup davantage les maisons souveraines sur le trone.
Utrecht : Antoine Schouten,　1717　xxxiv,[12],455,[5]p. ; 17cm

サン・ピエールは、フランスの思想家。イエズス会に入り修道院長になるが、会の不寛容に反対し、自然宗教を主張する。ユトレヒト講和会議にはフランス代表の一人として出席したが、ルイ14世の政策を批判したためアカデミーから追放された。

本書は、多作家であった彼の著作の中で最も有名なもので、平和論の古典的な著作として知られる。3巻の膨大な著作で1713年に第1巻と第2巻が、1717年に第3巻が刊行されている。全巻は7論2編より成り、第1巻（第1～5論）は本文400ページ、第2巻（第6～7論）は本文423ページ、第3巻（第1～2編）は本文455ページで、序文その他を加えると1,300ページを超える大冊である。館蔵書は、第1巻と第2巻が合冊製本されている。

57. ヴォルテール（1694～1778）
「哲学書簡（イギリス書簡）」初版　1733年　ロンドン刊



LETTERS

CONCERNING THE

ENGLISH

NATION.

BY

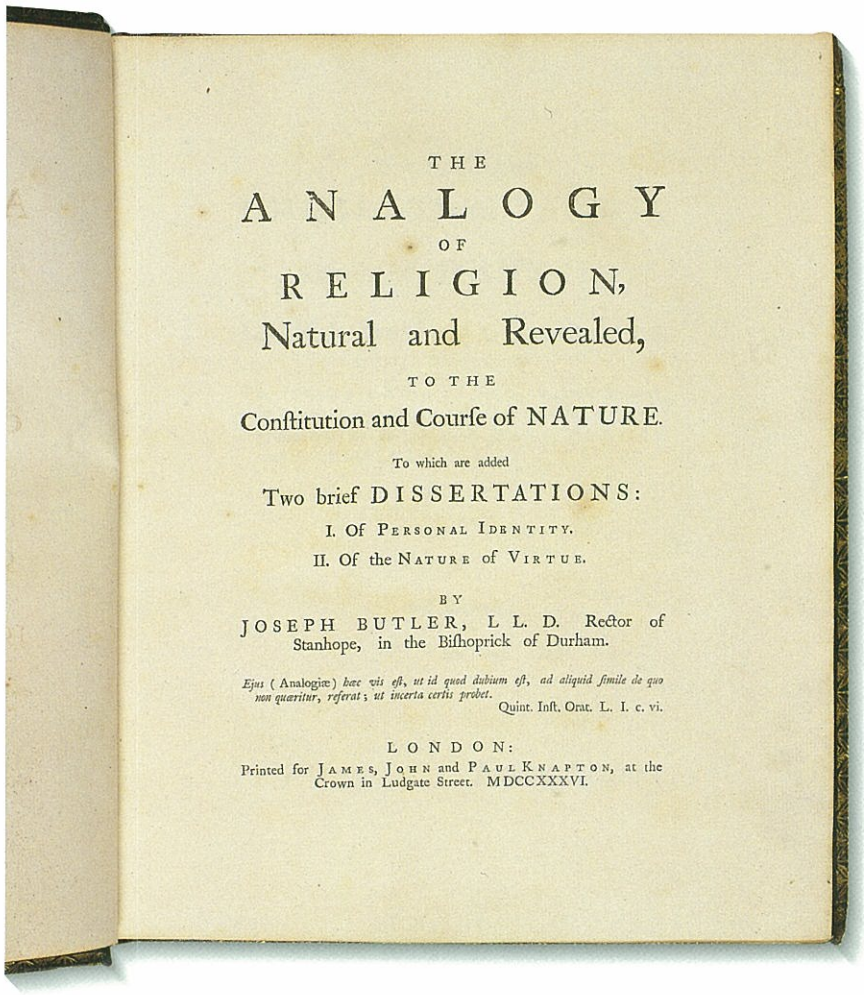
Mr. DE VOLTAIRE.

LONDON,
Printed for C. DAVIS in *Pater-Noſter-Row,*
and A. LYON in *Ruſſel-Street, Covent-Garden.*
MDCCXXXIII.

Voltaire, Francois Marie Arouet, 1694-1778
Letters concerning the English nation.
London : C. Davis , and A. Lyon,　1733　[16],253,[19]p ; 20cm

ヴォルテールは、フランスの文学者、思想家。18世紀を支配した思想家として、その生涯は波乱に富み、その活動領域は劇、小説、歴史、哲学などに及んだ。1726年にイギリスに渡り、3年間滞在して、イギリスの政治、社会、文学などを研究した。本書は、その間フランスの友人にイギリスの事情を説明した24編の書信であるが、啓蒙的な論文風のものであり、1733年にまず英語版が刊行され、翌年にフランス語版が出された。ニュートンと林檎の落下についての有名な逸話を最初に報じた一書として有名。フランス語版の初版が出る前年に刊行されたこの英語版「哲学書簡」は、しばしば偽版の疑いさえ受けてきたが、ハーコート・ブラウンの研究によれば、本書に収められた書簡のうち、ベーコン、スウィフト、バトラー、ホープ等の文学や、英国におけるヴォルテールの個人的な体験・観察に関する記述はもともと英語で書かれており、後に科学や哲学にも関心を寄せた著者が、帰国後にフランス語でその他を書き加えたと思われる。

58. バトラー（1692～1752）
「宗教の類比」初版　1736年　ロンドン刊



THE
ANALOGY
OF
RELIGION,
Natural and Revealed,
TO THE
Conſtitution and Courſe of NATURE.

To which are added
Two brief DISSERTATIONS:
I. Of PERSONAL IDENTITY.
II. Of the NATURE of VIRTUE.

BY
JOSEPH BUTLER, L L. D. Rector of Stanhope, in the Biſhoprick of Durham.

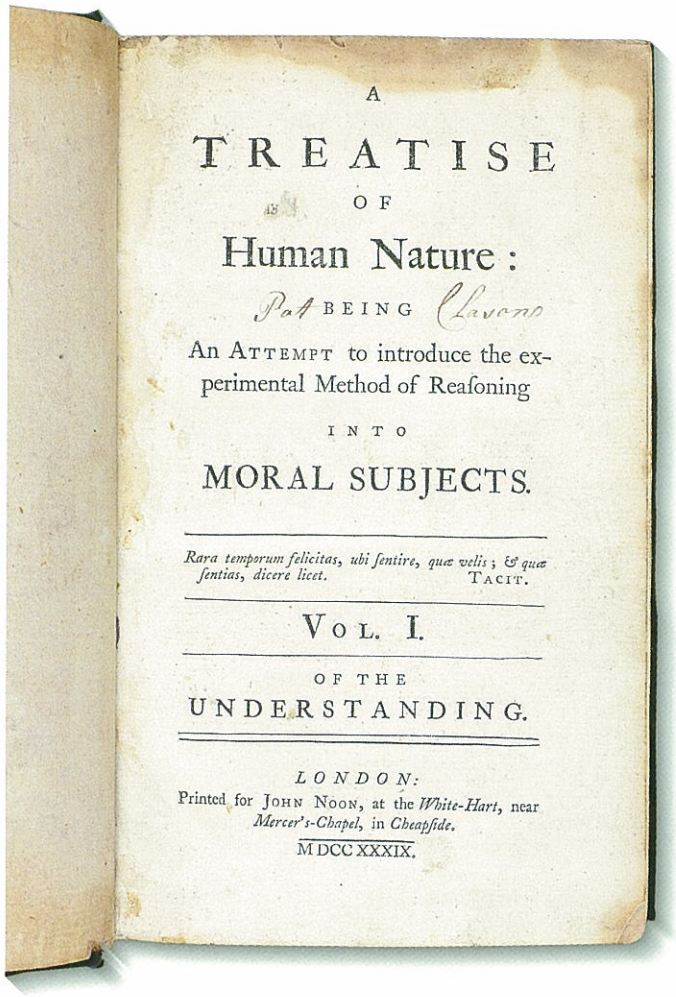
Ejus (Analogiæ) hæc vis eſt, ut id quod dubium eſt, ad aliquid ſimile de quo non quæritur, referat; ut incerta certis probet.
Quint. Inſt. Orat. L. I. c. vi.

LONDON:
Printed for JAMES, JOHN and PAUL KNAPTON, at the Crown in Ludgate Street. MDCCXXXVI.

Butler, Joseph, 1692-1752
The analogy of religion, natural and revealed, to the constitution and course of nature.
London : James, John and Paul Knapton, 1736. [14],x,11-320,[2]p. ; 28cm
PMM 193

バトラーは、イギリスの神学者、宗教学者。長老派の家に生まれ、国教会に転じダラムの主教をつとめた。G.バークリー主教などと交わり、18世紀のイギリスの啓蒙思想特に理神論の進出に対して、キリスト教を擁護する新しい神学的な立場を代表した。本書は、「自然、啓示両宗教と自然の構造および推移との類比」という題名があらわすように、イギリス哲学者らしく人知の不完全を率直に承認し、論証の絶対性を求めず類比の蓋然性に高い信頼を置いている。バトラーは、本書によって当時学界の最大の課題であった理神論論争に穏和な調停的解決を示した。

59. ヒューム（1711～1776）
「人性論」初版　3巻　1739-1740年　ロンドン刊



A

TREATISE

OF

Human Nature:

BEING

An ATTEMPT to introduce the experimental Method of Reasoning

INTO

MORAL SUBJECTS.

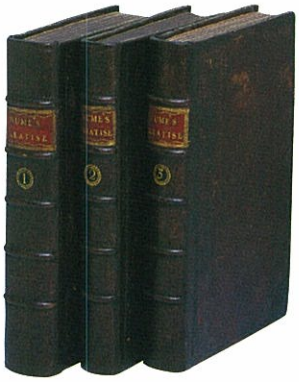
Rara temporum felicitas, ubi sentire, quæ velis; & quæ sentias, dicere licet. TACIT.

VOL. I.

OF THE

UNDERSTANDING.

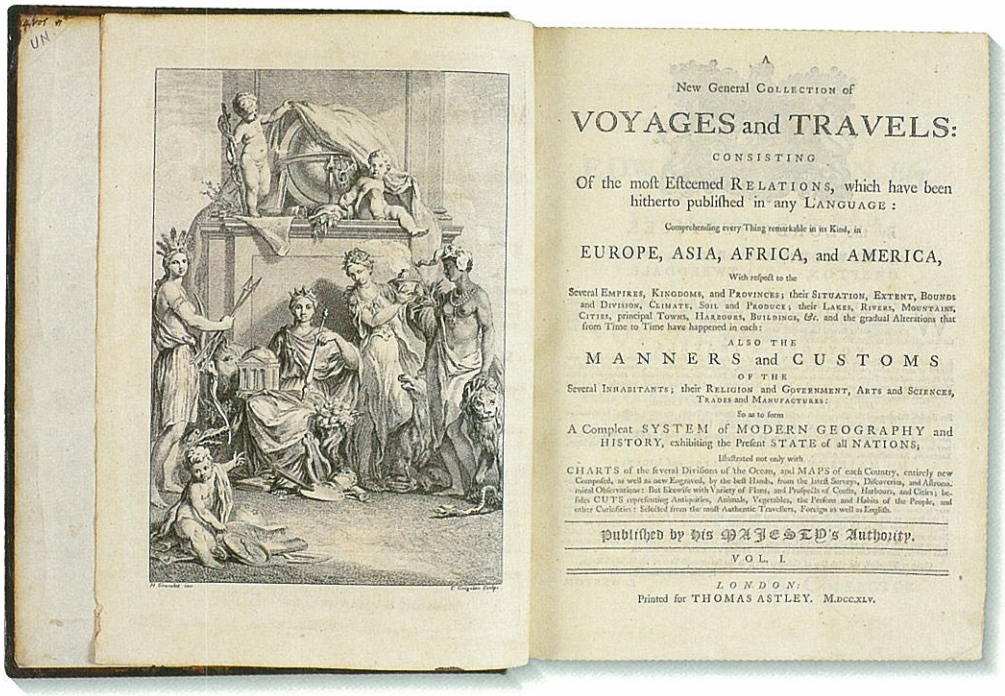
LONDON:
Printed for JOHN NOON, at the *White-Hart*, near *Mercer's-Chapel*, in *Cheapside*.
MDCCXXXIX.



Hume, David. 1711-1776
A treatise of human nature: being an attempt to introduce the experimental method of reasoning into moral subjects.
London : John Noon,　1739-40　3 Vols. ; 20cm
PMM 194

ヒュームは、イギリスの哲学者。エディンバラに生まれ、同地の大学で古典語、法律を学んだ。一時ブリストルで商業を志したが、すぐに断念してフランスに渡り、哲学の研究にふけった。帰国後にその成果を世に問うために「人性論」を出版したが、著者の期待に反して学界からの反応は少く、彼は“印刷機から死産した”と嘆いた。しかし、学界の一部からは注目され、ことにリードは本書の懐疑論と対決してスコットランド常識学派を開き、カントも“独断のまどろみ”から目覚めたといわれる。ヒュームが本書を軽んじて自選の著作集から除いたため一時は読む人も少なかったが、ドイツの哲学史家のクーノ・フィッシャーらが本書をヒュームの主著とした後は、本書の評価は高まり、イギリス最大の文人の評価が定まった。

60.「新航海および旅行記集成」初版　4巻　1745年　ロンドン刊

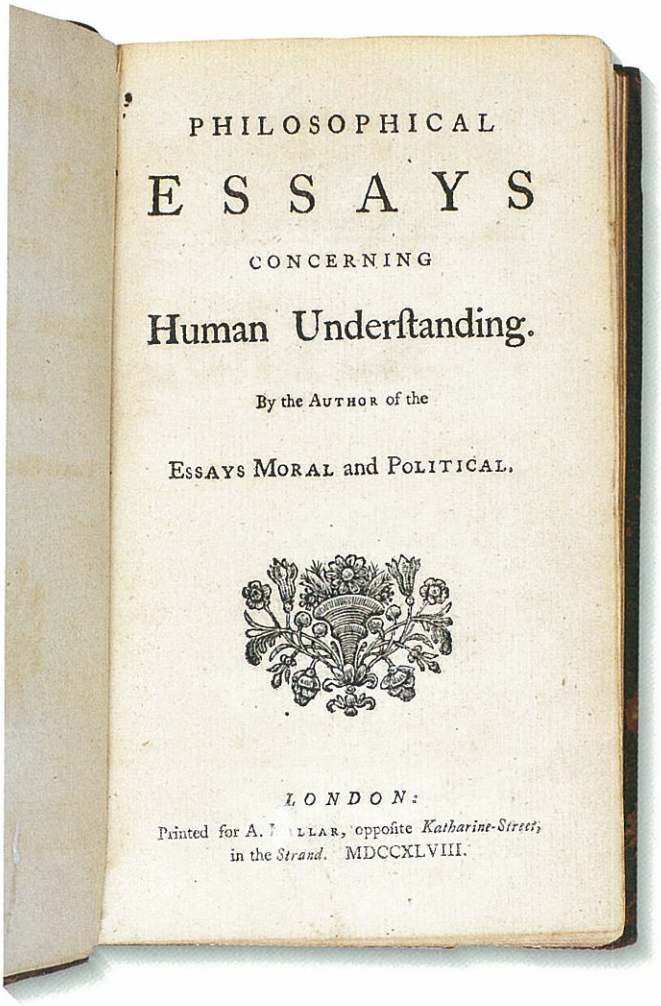


A
New General Collection of
VOYAGES and TRAVELS:
CONSISTING
Of the most Esteemed RELATIONS, which have been hitherto published in any LANGUAGE:
Comprehending every Thing remarkable in its Kind, in
EUROPE, ASIA, AFRICA, and AMERICA,
With respect to the
Several EMPIRES, KINGDOMS, and PROVINCES; their SITUATION, EXTENT, BOUNDS and DIVISION, CLIMATE, SOIL and PRODUCE; their LAKES, RIVERS, MOUNTAINS, CITIES, principal TOWNS, HARBOURS, BUILDINGS, &c. and the gradual Alterations that from Time to Time have happened in each:
ALSO THE
MANNERS and CUSTOMS
OF THE
Several INHABITANTS; their RELIGION and GOVERNMENT, ARTS and SCIENCES, TRADES and MANUFACTURES:
So as to form
A Compleat SYSTEM of MODERN GEOGRAPHY and HISTORY, exhibiting the Present STATE of all NATIONS,
Illustrated not only with
CHARTS of the several Divisions of the Ocean, and MAPS of each Country, entirely new Composed, as well as new Engraved, by the best Hands, from the latest Surveys, Discoveries, and Astronomical Observations: But likewise with Variety of Plans, and Prospects of Cities, Harbours, and Cities; besides CUTS representing Antiquities, Animals, Vegetables, the Persons and Habits of the People, and other Curiosities: Selected from the most Authentic Travellers, Foreign as well as English.
Published by his MAJESTY's Authority.
VOL. I.
LONDON:
Printed for THOMAS ASTLEY. M.DCC.XLV.

A new general collection of voyages and travels: consisting of the most esteemed relations, which have been hitherto published in any language: ...
London : Thomas Astley,　1745-47 [1743-47]　4 Vols. plates: maps, ; 26cm

本書は、歴史家グリーンによって編集され、アストリにより出版されたもので、旅行記及び新大陸の発見航海に関する記録や文書類を収録した集成であり、ハリスの「航海及び旅行記集成」に大幅な加筆・訂正がなされて出版されたものである。ポルトガルの東洋への進出、イギリスやフランスの西アフリカへの探検・航海などに関する著作が網羅的に収録され、またセーリスやウィリアム・アダムズなどに関する記録なども多く収録されており、日本研究にとっても貴重な資料となっている。

61. ヒューム（1711～1776）
「人間悟性に関する哲学論集」初版　1748年　ロンドン刊



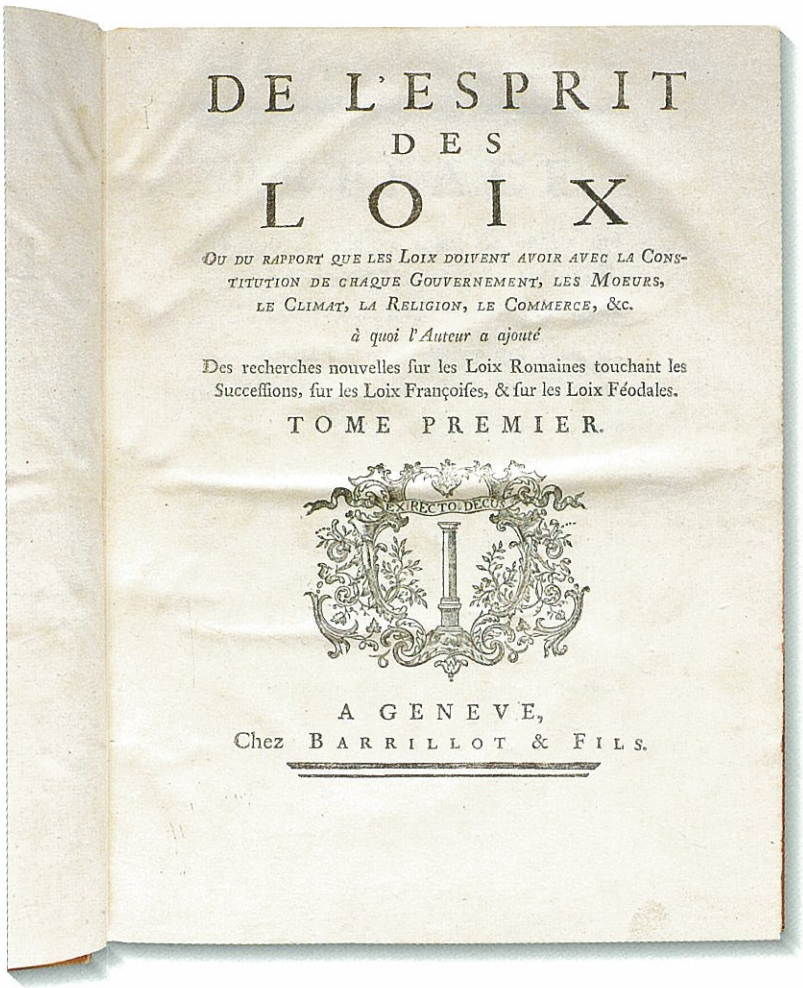
PHILOSOPHICAL
ESSAYS
CONCERNING
Human Underſtanding.
By the AUTHOR of the
ESSAYS MORAL and POLITICAL.

LONDON:
Printed for A. MILLAR, oppoſite *Katharine-Street*,
in the *Strand*. MDCCXLVIII.

Hume, David, 1711-1776
Philosophical Essays concerning Human Understanding.
London : A. Millar,　1748　iv,256p. ; 17cm

1739-40年に出版した「人性論」が省みられなかったのは難解な文体にあると考えたヒュームは、その第1篇を本書で平明に書き改めた上、批判を恐れて「人性論」では省かれた奇跡論（Of Miracles）を、摂理に関する小論とともに本書に加えて発表した。本書の題名は、1758年に著者自選の論文集へ収める時「人間悟性論」と改題され、その後はこの書名で知られている。

62. モンテスキュー（1689～1755）
「法の精神」初版　2巻　1748年　ジュネーヴ刊



DE L'ESPRIT
DES
LOIX

OU DU RAPPORT QUE LES LOIX DOIVENT AVOIR AVEC LA CONSTITUTION DE CHAQUE GOUVERNEMENT, LES MOEURS, LE CLIMAT, LA RELIGION, LE COMMERCE, &c.

à quoi l'Auteur a ajouté

Des recherches nouvelles ſur les Loix Romaines touchant les Succeſſions, ſur les Loix Françoiſes, & ſur les Loix Féodales.

TOME PREMIER.

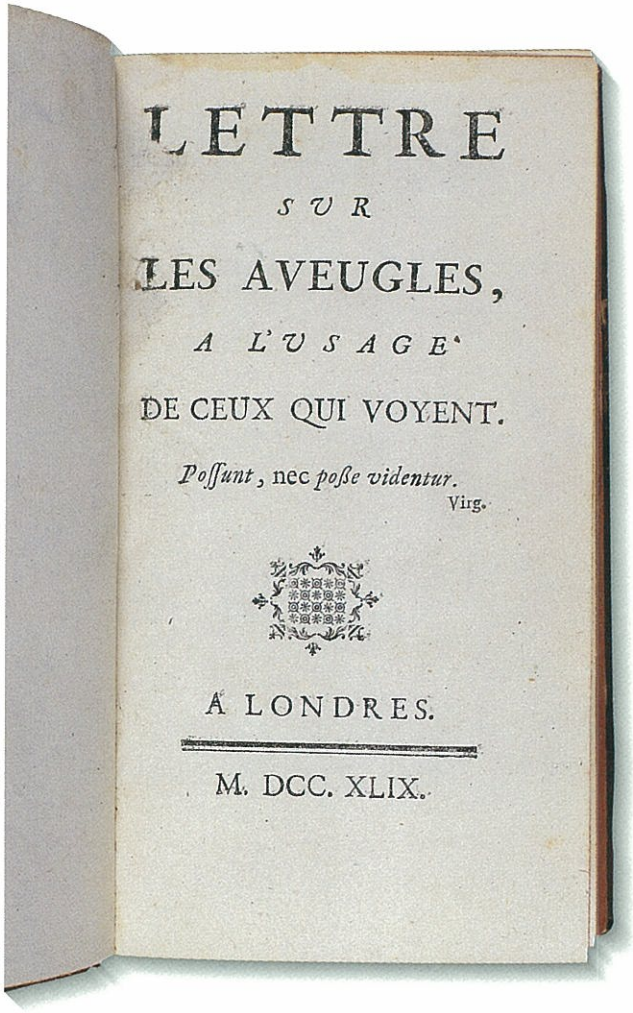
A GENEVE,
Chez BARRILLOT & FILS.

Montesquieu, Charles de Secondat, baron de., 1689-1755
De l'Esprit des Loix ou du Rapport que les Loix doivent avoir avec la constitution de chaque gouvernement, les moeurs, le climat, la religion, le commerce, &c.
Geneve : Barrillot & Fils,　1748　2 Vols. ; 25cm
PMM 197

モンテスキューは、近代初期におけるフランスの代表的思想家で三権分立の主張者。ボルドーの法服貴族の家に生まれ、ボルドーとパリで法律学を学び、ボルドー高等法院長に就任した。後に法院長を辞めてパリに行き、アカデミー会員に選ばれた。

本書は、彼の代表的著作であり、初版が刊行されると同時に大きな反響を呼んだ。諸国の法律制度の原理を追求し、法と物質的、精神的諸要素との相互関係を解明し、法律制度に対しては地理的、社会的条件を重視して、後の社会学的研究に刺激を与えた。また、本書の歴史的意味は、イギリス憲政の紹介、特に権力均衡論としての三権分立論の主張にあり、これは、アメリカ合衆国憲法の制定を始め、のちの政治及び社会思想に多くの影響を与えた。

63. ディドロ（1713～1784）
「盲人書簡」初版　1749年　ロンドン刊



LETTRE
SUR
LES AVEUGLES,
A L'USAGE
DE CEUX QUI VOYENT.

Possunt, nec *posse videntur*.
Virg.

A LONDRES.

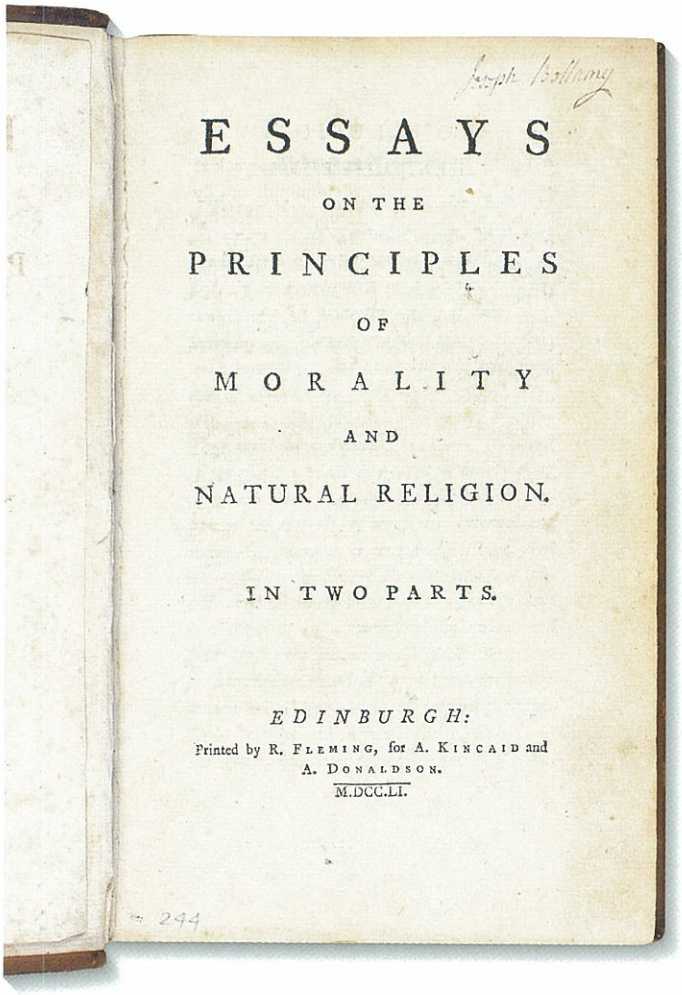
M. DCC. XLIX.

Diderot, Denis, 1713-1784
Lettre sur les aveugles, a l'usage de ceux qui voyent.
London : [s.n.], 1749　220,[1]p. ; 17cm

ディドロは、フランスの唯物論哲学者、文学者。ブルゴーニュ地方に生まれ、パリ大学で古典学、自然学、哲学を学んだ。彼は職に就くことを嫌い、パリに定住して赤貧の中で著述活動に専念した。32歳の時「百科全書」の編集・刊行を委嘱され、20年の間この大事業に没頭した。18世紀の代表的な啓蒙思想家として、哲学、自然科学、社会思想、小説、美学など広範囲にわたって活躍した。

本書は、女性に宛てた書簡の形をとっており、盲人による外界の知覚という認識論上の問題を扱いながら、伝統的な神の存在証明に痛撃を加えた、無神論史上の画期的な作品である。1749年の初頭に行われた、先天的白内障の娘に手術を施して視力を回復させるという出来事が、本書執筆の直接のきっかけとなったと思われる。1749年6月初旬にパリのデュラン書店から匿名で出版されると、ディドロの名声は高まったが、ディドロは逮捕され、百日余り幽閉された。

64. ケムズ卿（1696～1782）
「道徳と自然宗教の原理」初版　1751年　エディンバラ刊



ESSAYS
ON THE
PRINCIPLES
OF
MORALITY
AND
NATURAL RELIGION.
IN TWO PARTS.

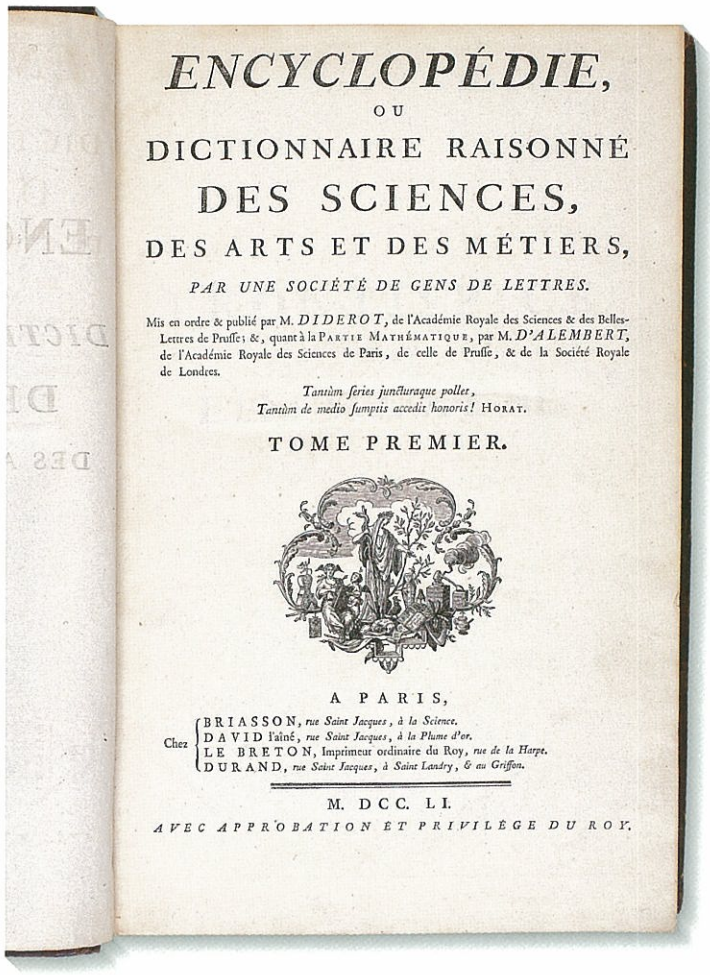
EDINBURGH:
Printed by R. FLEMING, for A. KINCAID and
A. DONALDSON.
M.DCC.LI.

[Kames, Henry Home, Lord], 1696-1782
Essays on the principles of morality and natural religion.
Edinburgh : R. Fleming, for A. Kincaid and A. Donaldson,　1751　[6],394p. ; 20cm
Joseph Bellamy 旧蔵書

ケムズ卿は、18世紀スコットランド啓蒙思想家の中心人物である。ケムズ卿は教育学、論理学、修辞学、法学、歴史学、経済学など多面的な業績を残している。特にスコットランドの近代化のために法改革に力を尽くした。本書は、彼の法学の認識的基礎をなす著作であり、生得の観念の原理を支持し、意志の自由の容認をといたもので、D.ヒュームを論駁する目的で著述した。

館蔵書は、ジョセフ・ベラミー（1719-90）の旧蔵書。

65. ディドロ/ダランベール（1713～1784/1717～1783）
「百科全書」初版　35巻　1751-1780年　パリ刊



ENCYCLOPÉDIE,
OU
DICTIONNAIRE RAISONNÉ
DES SCIENCES,
DES ARTS ET DES MÉTIERS,
PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.

Mis en ordre & publié par M. DIDEROT, de l'Académie Royale des Sciences & des Belles-Lettres de Pruſſe; &, quant à la PARTIE MATHÉMATIQUE, par M. D'ALEMBERT, de l'Académie Royale des Sciences de Paris, de celle de Pruſſe, & de la Société Royale de Londres.

Tantùm ſeries juncturaque pollet,
Tantùm de medio ſumptis accedit honoris! HORAT.

TOME PREMIER.

A PARIS,
Chez BRIASSON, *rue Saint Jacques, à la Science.*
DAVID l'aîné, *rue Saint Jacques, à la Plume d'or.*
LE BRETON, Imprimeur ordinaire du Roy, *rue de la Harpe.*
DURAND, *rue Saint Jacques, à Saint Landry, & au Griffon.*

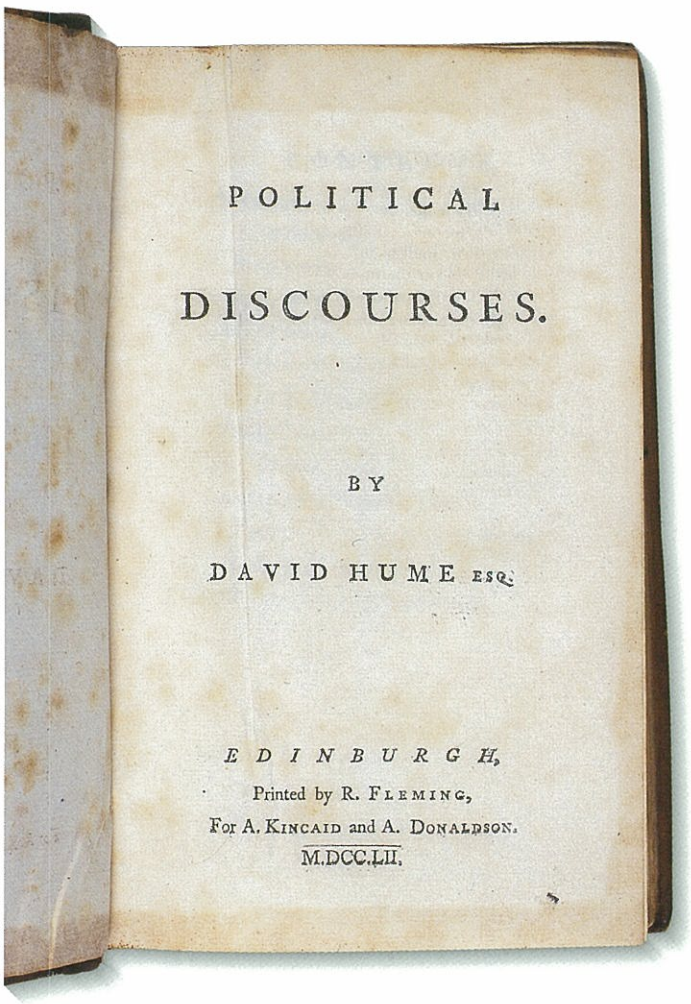
M. DCC. LI.
AVEC APPROBATION ET PRIVILÉGE DU ROY.

Diderot, Denis, 1713-1784 et J. Le R. D'Alembert, 1717-1783
Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres.
Paris : Briasson, David, Le Breton, Durand,　1751-80　35 Vols. ; 40cm
PMM 200

百科全書＜科学と学芸と技術に関する大事典＞は、ディドロとダランベールを編集責任者とし、264人の執筆者の協力によって成立したフランス18世紀の大百科事典。本書は、フランス革命の思想的準備となった18世紀フランス啓蒙思想の集大成としてヨーロッパ思想史における記念碑的著作である。

二つ折り版で本文17巻、図版11巻、索引2巻からなり、ル・ブルトンを中心とする連合出版社から発行された。1750年10月に＜趣意書＞8,000部を配布し予約者をつのったのち本文は1751年6月から1766年1月中旬～3月末にかけて、次いで図版は1762年1月から1772年にかけてそれぞれ完成した。他に＜補遺＞5巻が1766年から1780年にかけて、ディドロらの仕事とは別にオランダの書店から刊行されている。

66. ヒューム（1711～1776）
「政治論集」初版　1752年　エディンバラ刊



POLITICAL

DISCOURSES.

BY

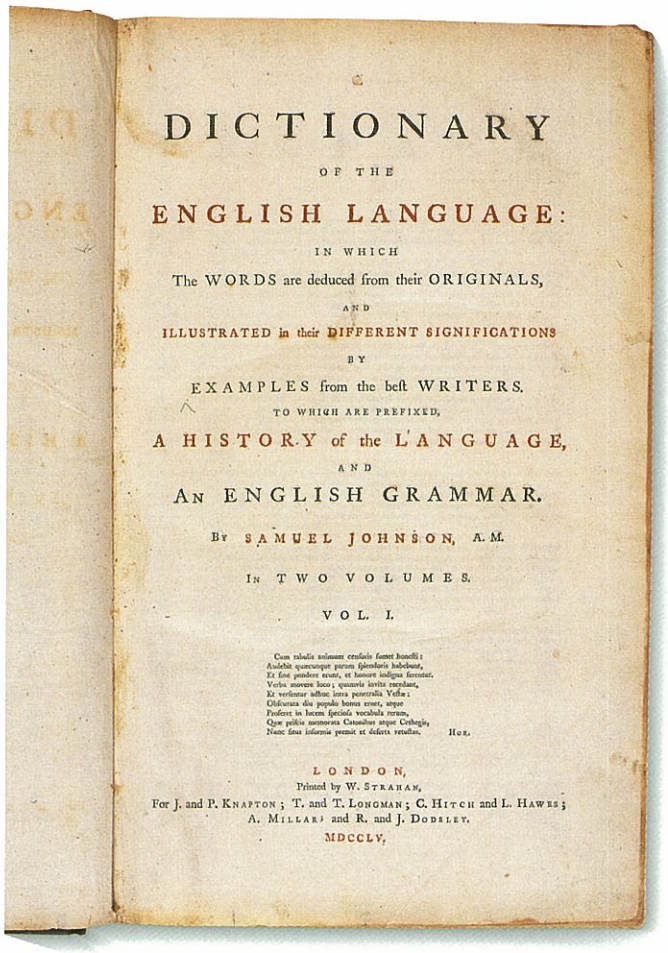
DAVID HUME ESQ.

EDINBURGH,
Printed by R. FLEMING,
For A. KINCAID and A. DONALDSON.
M.DCC.LII.

Hume, David, 1711-1776
Political Discourses.
Edinburgh : R. Fleming, for A. Kincaid and A. Donaldson,　1752　[4],304p. ; 18cm

ヒュームの最良の著作といわれる「人性論」で、彼は自己の道徳哲学の内容を論理学、道徳学、文芸批評、政治学と規定した。イギリスの道徳哲学は、生起しつつある市民社会の総体掌握の試みであったが、ヒュームは、それらの諸構成要素を個別に追求し、ロック以後の新段階をしるした。本書は、そのうちの＜政治学＞の分野を開拓したものであり、「道徳政治論」の第2部をなすものである。本書は、12編の論文からなり、その内容は今日の政治学、経済学、歴史学にも及んでいる。

67. ジョンソン（1709～1784）
「英語辞典」初版　2巻　1755年　ロンドン刊



DICTIONARY
OF THE
ENGLISH LANGUAGE:
IN WHICH
The WORDS are deduced from their ORIGINALS,
AND
ILLUSTRATED in their DIFFERENT SIGNIFICATIONS
BY
EXAMPLES from the best WRITERS.
TO WHICH ARE PREFIXED,
A HISTORY of the LANGUAGE,
AND
AN ENGLISH GRAMMAR.
BY SAMUEL JOHNSON, A.M.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.

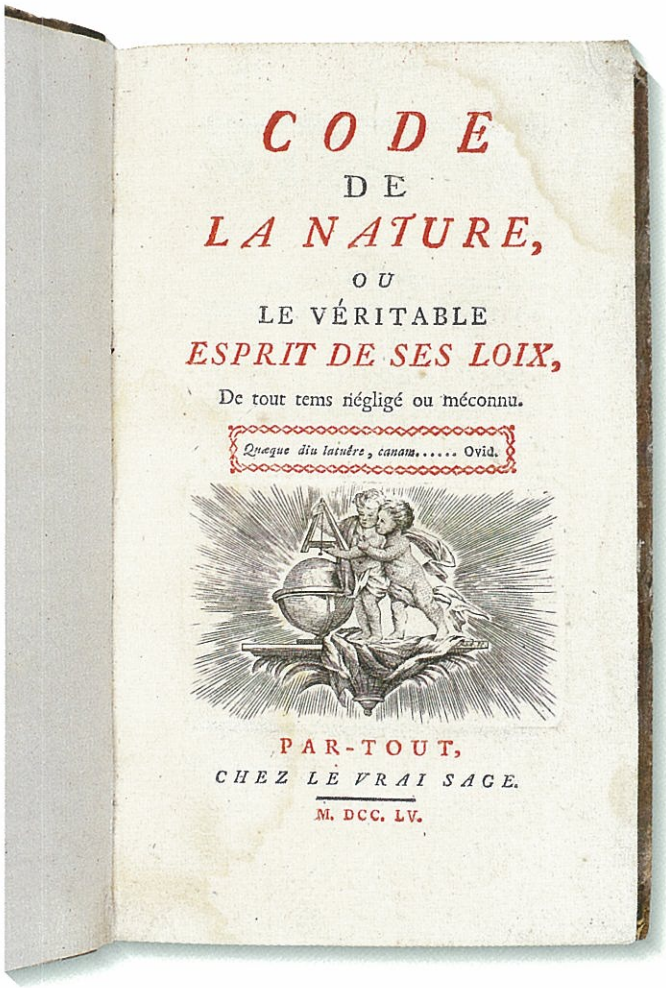
Cum tabulis animum censoris sumet honesti;
Audebit quæcunque parum splendoris habebunt,
Et sine pondere erunt, et honore indigna ferentur.
Verba movere loco; quamvis invita recedant,
Et versentur adhuc intra penetralia Vestæ:
Obscurata diu populo bonus eruet, atque
Proferet in lucem speciosa vocabula rerum,
Quæ prisci memoris Catonibus atque Cethegis,
Nonne fuit satis est, promit et dedecora vetustas. HOR.

LONDON,
Printed by W. STRAHAN,
For J. and P. KNAPTON; T. and T. LONGMAN; C. HITCH and L. HAWES;
A. MILLAR; and R. and J. DODSLEY.
MDCCLV.

Johnson, Samuel, 1709-1784
A dictionary of the English language: in which the words are deduced from their originals, and illustrated in their different significations by examples from the best writers. …
London : W. Strahan, and Others,　1755　2 Vols. ; 42cm
PMM 201

ジョンソンは、イギリスの文人。オックスフォードに学んだが貧困のため中退した。ジョンソンがこの辞典を発表する以前、辞典が意味したものは、単なる翻訳か、語の言い換え、あるいは同義語の並列にすぎなかった。ジョンソンはこうした辞典の欠点を改め、英語を固定する基準を示す辞典として、本書を編纂した。あらゆる適切な意味を記録し、語の用法を説明しながら、意味の相違を解り易く解説したジョンソンの辞典は、真の辞典の価値を有する初めてのものといえる。初版は1755年、二折版（フォリオ）で、序文、英語史、英文法、本文から成り、全部で約2,300ページに及ぶ。英語になんらかの標準を求めていた時代風潮によく適合して非常な好評を博し、版を重ねて著者在世中に約8,000部を印刷した。

68. モレリー（1740〜1750頃活躍）
「自然法典」初版　1755年　パリ刊



CODE
DE
LA NATURE,
OU
LE VÉRITABLE
ESPRIT DE SES LOIX,
De tout tems négligé ou méconnu.

Quæque diu latuêre, canam..... Ovid.

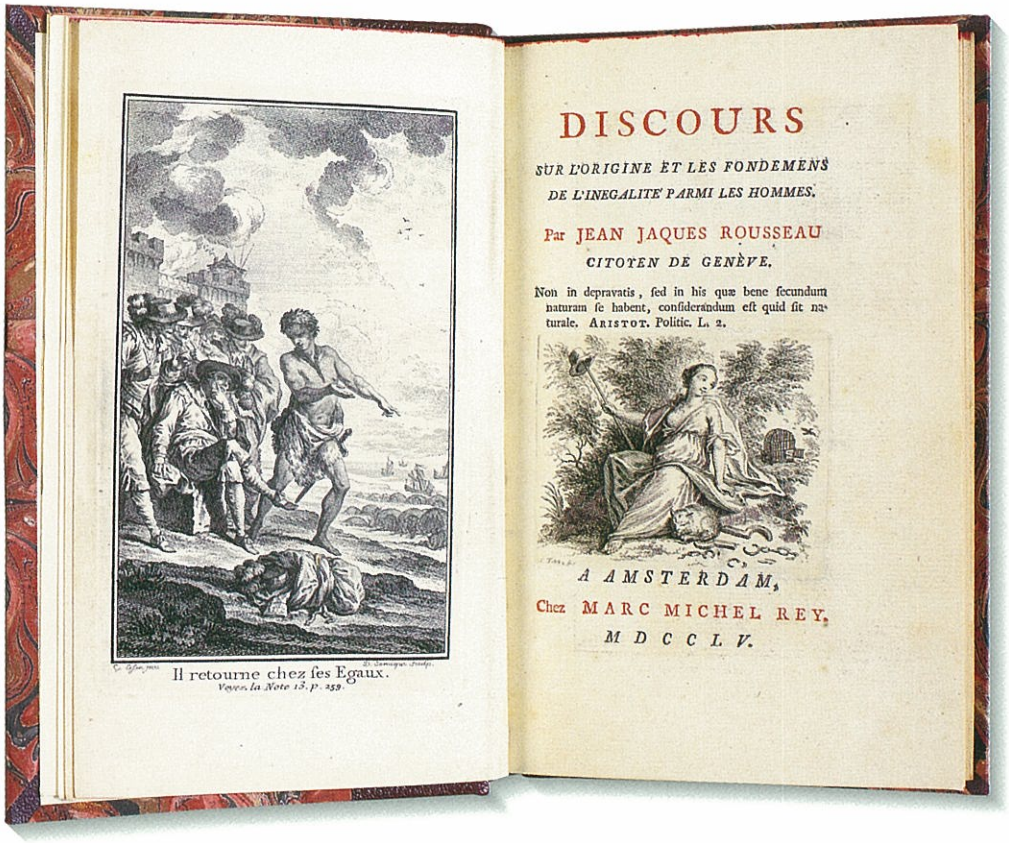
PAR-TOUT,
CHEZ LE VRAI SAGE.
M. DCC. LV.

Morelly, fl.1740-1750
Code de la nature ou le vèritable esprit de ses loix, de tout tems nègligè ou mèconnu.
Paris : Le Vrai Sage,　1755　236,[4]p. ; 17cm

モレリーは、フランスの政治学者、共産主義者。共産主義思想の源泉ともいえる本書は、メリエの「遺書」と並び18世紀フランス共産主義の代表的著作である。匿名の著作であるため、ラ・ボーメルやディドロの著作と考えられていたが、20世紀になってモレリー説に落ちついた。著者のモレリーについては、「浮島遭難」、「君主論」、「人間精神論」など6冊の著書が残されているだけで、経歴はもちろん名前も生没年も不詳である。「真の法の精神」という副題からもわかるように、モンテスキューの「法の精神」、エルヴェシウスの「精神論」に対抗して書かれたもので、自然法思想を援用しながら、共産主義社会こそが人類の本来の姿であり、理想社会のありかたであることを主張している。

本書の刊記に示されている出版地・出版社名はいうまでもなく偽り。地球儀の上に分度器をかざす二人の天使のヴィニエットがタイトルページを飾っているが、この意匠は当時パリやアムステルダムの印刷者の間でしばしば用いられていた。

69. ルソー（1712～1778）
「人間不平等起源論」初版　1755年　アムステルダム刊

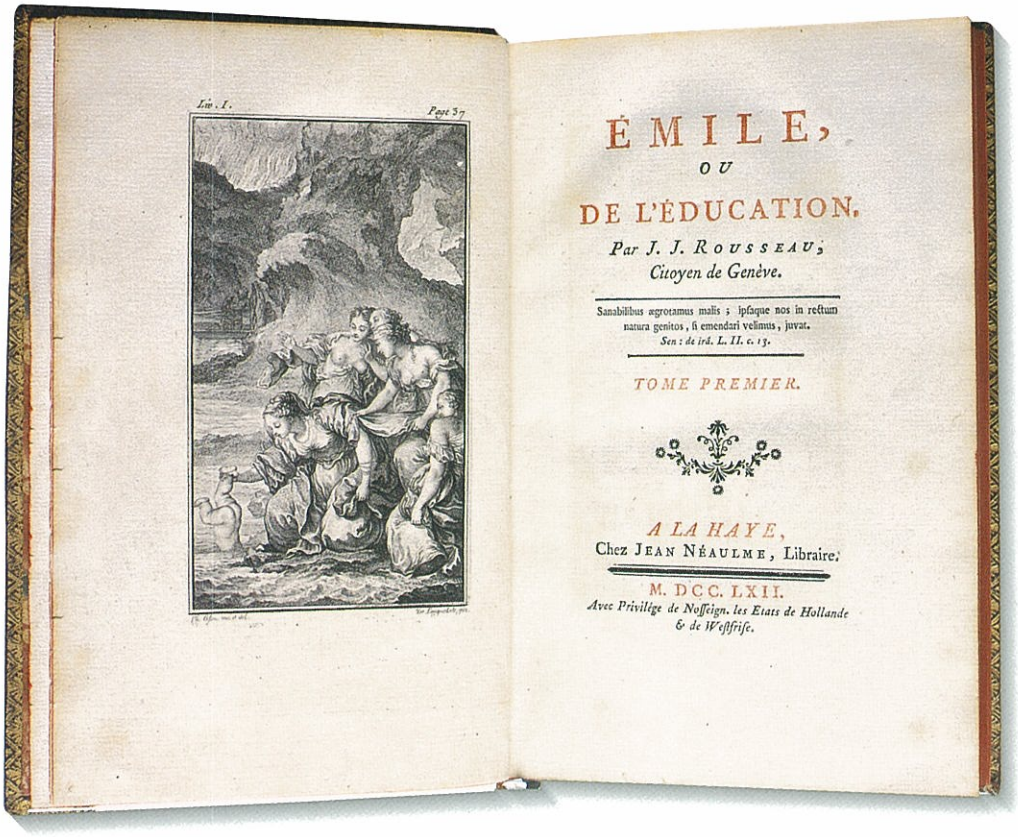


Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778
Discours sur l'origine et les fondemens de l'inegalite　parmi les hommes.
Amsterdam : Marc Michel Rey,　1755　lxx,[2],262,[2]p. plate ; 19cm

ルソーは、フランス啓蒙期の社会思想家で、近代民主主義の代表的思想家。ジュネーヴの時計職人の子で、早くから徒弟奉公に出され、音楽教師、家庭教師をして生計を立てた。本書は、ディジョンのアカデミーの懸賞論文に当選した「学問芸術論」（1750年）で一躍有名になったルソーが、41歳の時再度これに応募したものである。結局懸賞には当選しなかったが、彼は本文に祖国ジュネーヴへの献辞と膨大な注を加えてオランダのレイ書店からこれを出版することとなった。内容は、前の論文における文明批判の原理をさらに発展させ、独自の自然状態と社会状態の説に基づいて、人民が本源的自由を失い、社会的不平等に陥っていく過程を考察したものとなっており、当時の絶対王政における社会の不合理性を痛烈に批判したものともいわれる。

「社会契約論」（1762年）に到達する以前のルソーの社会思想を示すものとして注目すべき著作である。

70. ルソー（1712～1778）
「エミール」初版　4巻　1762年　ハーグ刊



ÉMILE,
OU
DE L'ÉDUCATION.
Par J. J. ROUSSEAU,
Citoyen de Genève.

Sanabilibus ægrotamus malis ; ipsæque nos in rectum natura genitos, si emendari velimus, juvat.
Sen : de irâ. L. II. c. 13.

TOME PREMIER.

A LA HAYE,
Chez JEAN NÉAULME, Libraire.

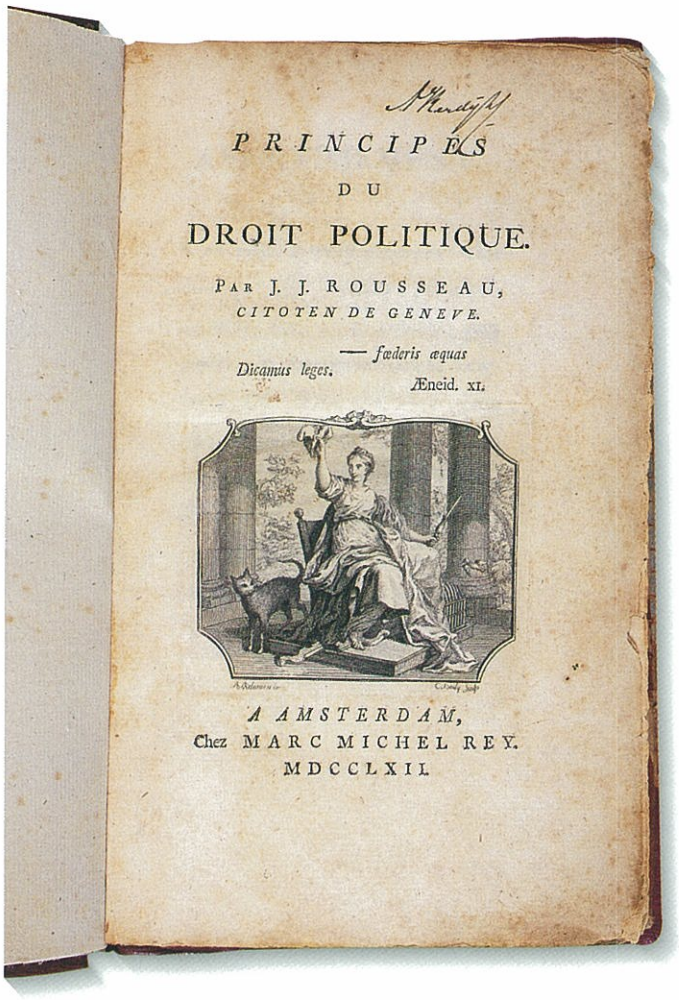
M. DCC. LXII.
Avec Privilége de Nosseign. les Etats de Hollande & de Westfrise.

Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778
Émile, ou de l'éducation.
Hague : Jean Nė aulme,　1762　4 Vols. ; 19cm

フランス啓蒙主義を代表する思想家、文学者であるルソーの教育論。本書は、教養小説的な構成を持ち、教育における人間の自然性の回復を主張し、封建的な古い社会的偏見と宗教的不寛容を雄弁に批判し、“社会契約”は直接民主制を理想とする旨を主張することによって、近代民主主義の古典として以後の政治思想に大きな影響を及ぼした。

初版の刊行に際してルソーは国外（オランダ）で印刷することを主張したが、結局3人の出版者間の複雑な商取引の結果、ほぼ同時にパリとオランダで8折り版と12折り版が出版された。その為初版の決定にはいまだに問題がある。「エミール」は出版されるとすぐ、パリの高等法院によって摘発され、ルソー即時逮捕の命令が出されたのでルソーはパリを逃れ、モティエに赴くが、これを境にしてして晩年の彼の放浪と隠遁の生活が始まった。館蔵書は12折り版である。

71. ルソー（1712～1778）
「社会契約論」初版　1762年　アムステルダム刊



PRINCIPES
DU
DROIT POLITIQUE.
PAR J. J. ROUSSEAU,
CITOYEN DE GENEVE.
— fœderis æquas
Dicamus leges.
Æneid. XI.

A AMSTERDAM,
Chez MARC MICHEL REY.
MDCCLXII.

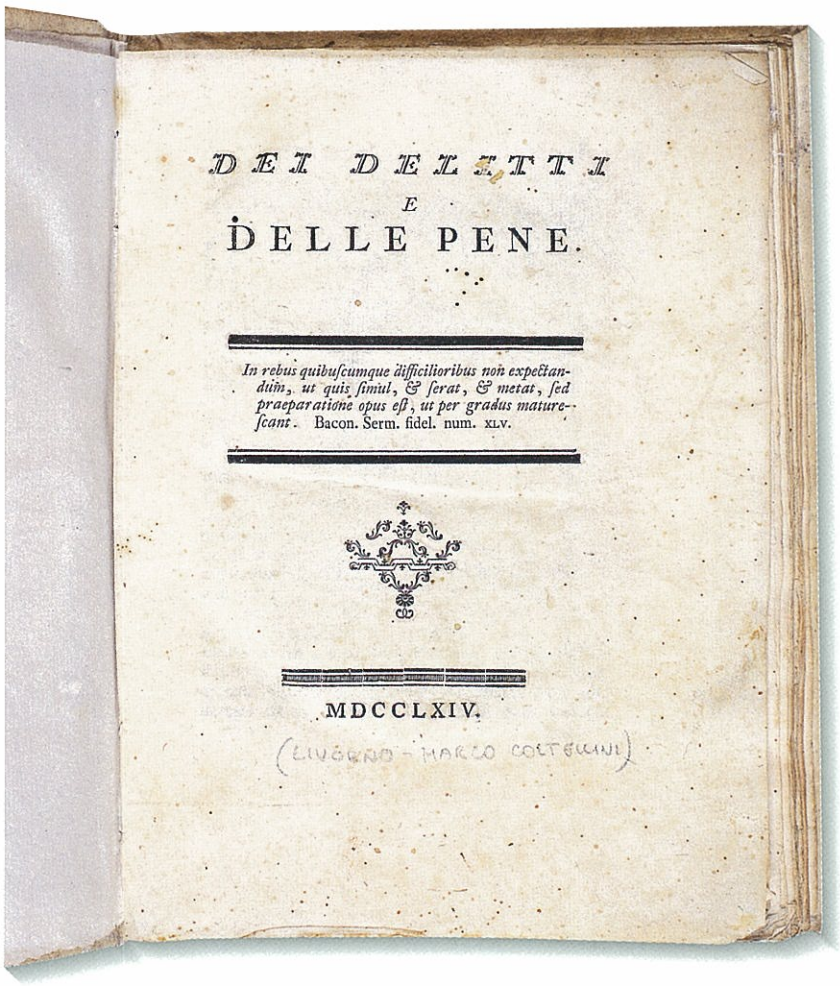
Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778
Principes du Droit Politique.
Amsterdam : Marc Michel Rey, 1762 [2],viii,324,321-323[1]p. ; 22cm
PMM 207

モンテスキューの立憲君主論に真っ向から対立し、人民の平等を国家の最高原則とした主権在民を説き、フランス革命に大きな影響を与えた本書は、4編からなる。まず第1編では、いかにして人間が自然状態から社会状態に移るか、また社会契約の本質的条件はいかなるものかという問題を取り上げ、第2編では立法について、第3編では政府の形態について論じ、最後に国家体制が扱われる。ルソーの思想は革命を経てカント、フィヒテ、ヘーゲル、マルクスなど偉大な思想家たちへも投影された。

ルソーの「社会契約論」初版第1刷のタイトルページには秤をもった正義の女神のヴィニェット（飾り絵）が見られるが、第2刷ではルソーの指示により自由の女神ヴィニェットに変更され、ハーフタイトルと、巻末には出版社Marc Michel Reyの出版目録が入れられるとともに321頁の「結婚」に関する長い注釈が削除されている。

館蔵書は第2刷りであるが、非常にユニークなものである。なぜならば、"Du Contract Social"と印刷されたハーフタイトルが入れられ、巻末には注釈を削除した331-323頁及び広告が挿入され、その前に注釈を載せた第1刷のものである321-324頁が挿入されており、頁中に削除を示すと思われる切込みが入れられているからである。

72. ベッカリーア（1738～1794）
「犯罪と刑罰」初版　1764年　リヴォルノ刊



DEI DELITTI
E
DELLE PENE.

In rebus quibuſcumque difficilioribus non expectandum, ut quis ſimul, & ſerat, & metat, ſed praeparatione opus eſt, ut per gradus maturescant. Bacon. Serm. fidel. num. XLV.

MDCCLXIV.

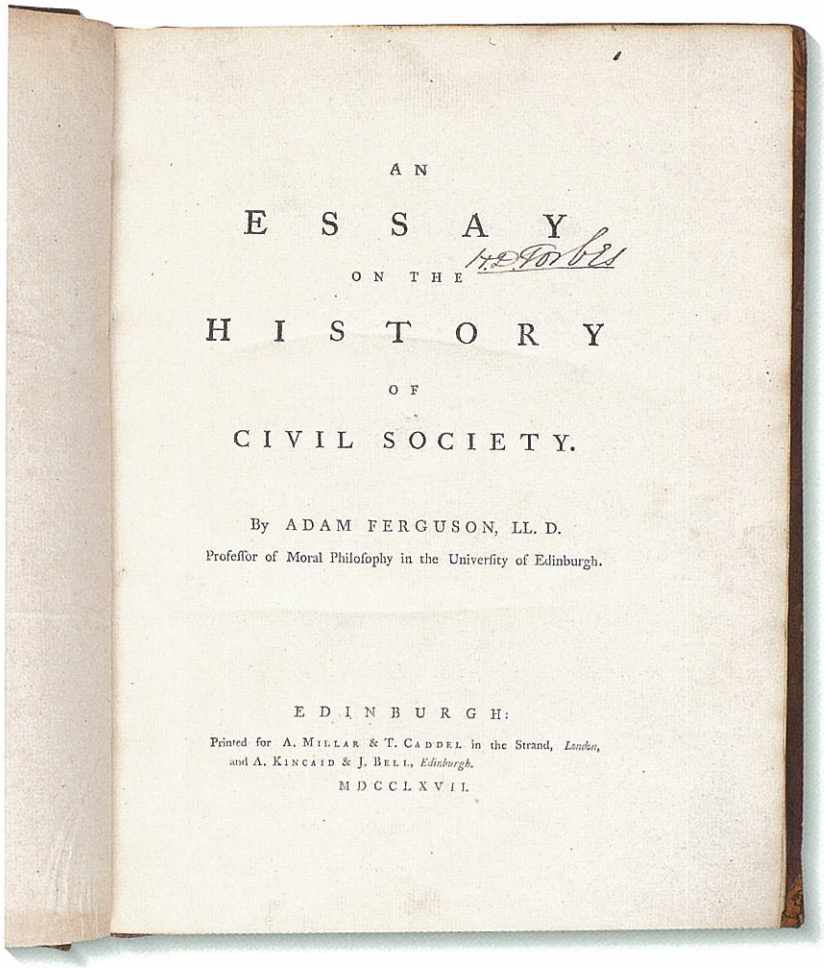
(LIVORNO - MARCO COLTGUINI)

Beccaria, Cesare, Marchese di, 1738-1794
Dei delitti e delle pene.
[Livorno] : [Marco Coltguini], 1764 [2],104,[2]p. ; 22cm
PMM 209

ベッカリーアは、イタリアの刑法学者、哲学者であり、重農主義の経済学者としても知られている。ルソー、モンテスキューらフランス啓蒙思想家の影響を受け、当時の残酷で気ままな刑罰制度に対する鋭い批判を行い、近代刑法学の基礎を築いたのが本書である。

ベッカリーアは、立法の目標は最大多数に分配された最大幸福にあり、刑罰権は社会契約によって基礎づけられ、社会契約の範囲内において行われるものでなければならない。これが刑罰権の基本であり、この基本を超過する刑罰権の行使はすべて乱用であり不正であるとした。犯罪の尺度は、犯罪によって生じた社会の損害であり、刑罰は犯罪に均衡するものとして、法律によって厳格に規定されなければならないとして、近代的な客観主義の立場を明確にし、罪刑法定主義、刑罰に関するいわゆる相対主義など、いくつかの近代刑法の基本原則を提唱した。

73. ファーガソン（1723〜1816）
「市民社会史論」初版　1767年　エディンバラ刊



AN

ESSAY

ON THE

HISTORY

OF

CIVIL SOCIETY.

By ADAM FERGUSON, LL. D.

Professor of Moral Philosophy in the University of Edinburgh.

EDINBURGH:

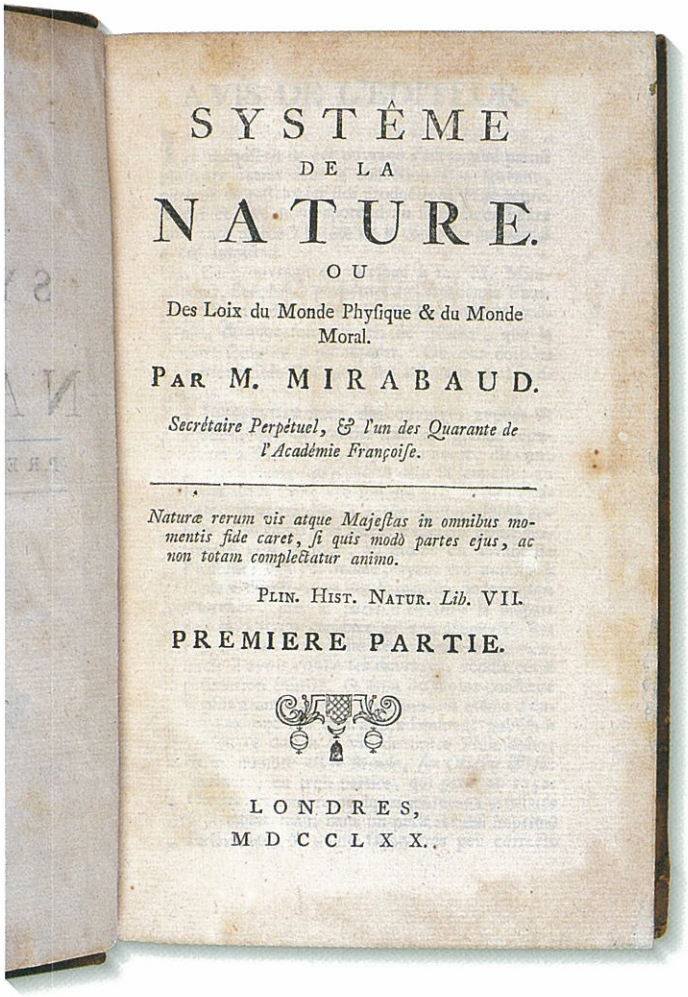
Printed for A. MILLAR & T. CADDEL in the Strand, *London*, and A. KINCAID & J. BELL, *Edinburgh*.

MDCCLXVII.

Ferguson, Adam, 1723-1816
An essay on the history of civil society.
Edinburgh : A. Millar & T. Caddel, and Others,　1767　vii,[1],430p. ; 26cm

ファーガソンは、スコットランドの歴史家で、アダム・スミスの同時代人としてともにスコットランド歴史学派を代表する。エアシャーの地主の出身で、セント・アンドリュース及びエディンバラに学び、1754年まで牧師の職にあったが、1759年にエディンバラ大学自然哲学教授となった。彼は、人間が社会以前の自然状態にもどったという説を否定し、人間ははじめから社会をなして存在したと主張する。そして、未開民族から文明的商業国民にいたり、さらにその没落にいたる過程を、経済的側面を重視しながら叙述する。しかし、スミスと違ってファーガソンは、資本主義社会と経済人の利己的活動を全面的に容認していない。彼は、産業革命開始期の社会をスミスよりやや遅れた立場から見ていた。

74. ドルバック（1723～1789）
「自然の体系」初版　2巻　1770年　ロンドン刊



SYSTÊME
DE LA
NATURE.
OU
Des Loix du Monde Physique & du Monde Moral.
PAR M. MIRABAUD.
Secrétaire Perpétuel, & l'un des Quarante de l'Académie Françoise.

Naturæ rerum vis atque Majestas in omnibus momentis fide caret, si quis modò partes ejus, ac non totam complectatur animo.
PLIN. HIST. NATUR. *Lib.* VII.

PREMIERE PARTIE.

LONDRES,
MDCCLXX.

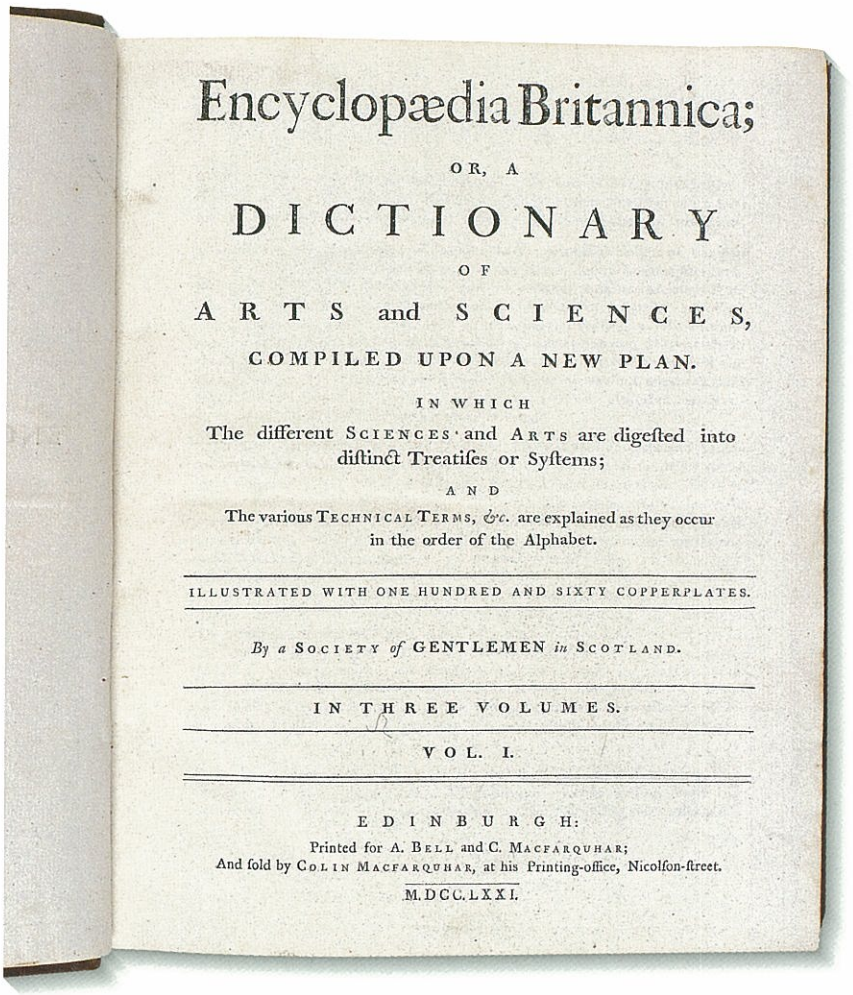
[D' Holbach, Paul Henri Dietrich, Baron,] 1723-1789
Systême de la nature, ou des loix du monde physique, & du monde moral.
London : [s.n.], 1770　2 Vols. ; 20cm
PMM 215

ドルバックは、フランス唯物論哲学者。ドイツに生まれ、パリに移住し帰化した。

最初、彼は科学者として知られ、永年の友人で仲間であったディドロの「百科全書」に約400の記事を投稿した。その後、ドルバックは科学から離れ、宗教を攻撃する多くの本を書いたが、それらはフランスに非合法に流れていったため、自分の本名で安全に出版することが出来なくなった。そこで彼は、その当時死んだフランス人作家の名前を使い、1770年に彼の主著「自然の体系」をジャン=バチスト・ミラボーの名前で出版した。

ドルバックの影響は決して偉大なものとはならなかったが、ヴォルテールに宗教擁護の返答さえさせる原因となった本書は、唯物論のバイブルとしてその存在を維持してきた。

75.「大英百科事典（ブリタニカ）」初版　3巻　1771年　エディンバラ刊



Encyclopædia Britannica;

OR, A

DICTIONARY

OF

ARTS and SCIENCES,

COMPILED UPON A NEW PLAN.

IN WHICH

The different SCIENCES and ARTS are digeſted into diſtinct Treatiſes or Syſtems;

AND

The various TECHNICAL TERMS, &c. are explained as they occur in the order of the Alphabet.

ILLUSTRATED WITH ONE HUNDRED AND SIXTY COPPERPLATES.

By a SOCIETY *of* GENTLEMEN *in* SCOTLAND.

IN THREE VOLUMES.

VOL. I.

EDINBURGH:

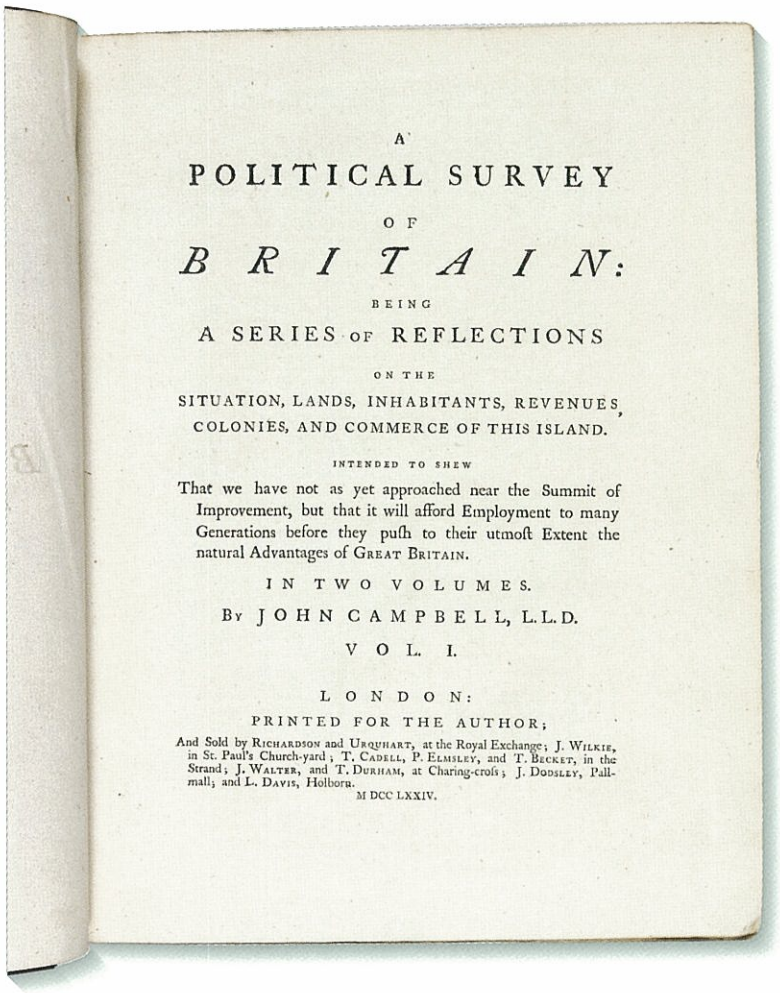
Printed for A. BELL and C. MACFARQUHAR;
And ſold by COLIN MACFARQUHAR, at his Printing-office, Nicolſon-ſtreet.

M.DCC.LXXI.

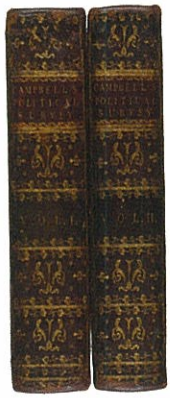
Encyclopaedia Britannica; or, a dictionary of arts and sciences, compiled upon a new plan.
In which the different sciences and arts are digested into distinct treatises or systems;
and ... Illustrated with one hundred and sixty copperplates. By a Society of gentlemen in Scotland.
In three volumes. ...
Edinburgh : A. Bell and C. Macfarquhar; and sold by Colin Macfarquhar, 1771 3 Vols. ; 26cm
PMM 218

あらゆる英語の百科事典の中で最も有名なものは、スコットランド紳士協会から刊行された「大英百科事典」である。本事典は、1768年12月に週刊の分冊形式で発行が開始され、1771年に完結した。本書は、分冊が完結した後に、すべての分冊を3巻にまとめて、1771年に初版として刊行されたものである。価格は、12ポンドであった。タイトルページには、「ブリタニカ百科事典、あるいは新たな企画に沿って編纂された諸学芸と諸科学の辞書」と記されている。初版刊行以来、200余年の歴史を築き、普及率・発行部数・内容においても世界最大の百科事典となっており「ブリタニカ」の愛称で広く親しまれている。

76. キャンベル（1708～1775）
「英国政治概観」初版　2巻　1774年　ロンドン刊



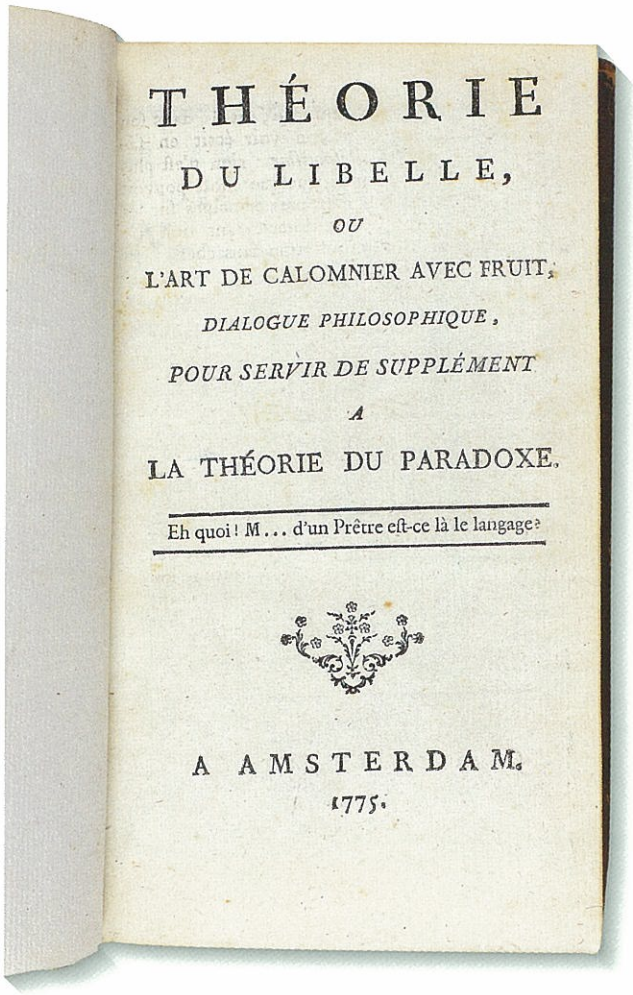
A
POLITICAL SURVEY
OF
BRITAIN:
BEING
A SERIES OF REFLECTIONS
ON THE
SITUATION, LANDS, INHABITANTS, REVENUES,
COLONIES, AND COMMERCE OF THIS ISLAND.
INTENDED TO SHEW
That we have not as yet approached near the Summit of Improvement, but that it will afford Employment to many Generations before they push to their utmost Extent the natural Advantages of GREAT BRITAIN.
IN TWO VOLUMES.
BY JOHN CAMPBELL, L.L.D.
VOL. I.
LONDON:
PRINTED FOR THE AUTHOR;
And Sold by RICHARDSON and URQUHART, at the Royal Exchange; J. WILKIE, in St. Paul's Church-yard; T. CADELL, P. ELMSLEY, and T. BECKET, in the Strand; J. WALTER, and T. DURHAM, at Charing-cross; J. DODSLEY, Pall-mall; and L. DAVIS, Holborn.
M DCC LXXIV.



Campbell, John, 1708-1775
A political survey of Britain: being a series of reflections on the situation, lands, inhabitants, revenues, colonies, and commerce of this island.
London : the author; and sold by Richardson and Others,　1774　2 Vols. ; 29cm

ジョン・キャンベルは英国の著述家。本書は、英国の情勢、土地、住民、歳入、植民地、商業に関する考察、さらに東西インド諸島、アメリカ、カナダとの貿易、アメリカ各地の植民地や町について記述された歴史的に興味深い一書である。

77. ランゲ（1736～1794）
「誣告の理論」初版　1775年　アムステルダム刊



THÉORIE
DU LIBELLE,
OU
L'ART DE CALOMNIER AVEC FRUIT,
DIALOGUE PHILOSOPHIQUE,
POUR SERVIR DE SUPPLÉMENT
A
LA THÉORIE DU PARADOXE.

Eh quoi! M... d'un Prêtre eſt-ce là le langage?

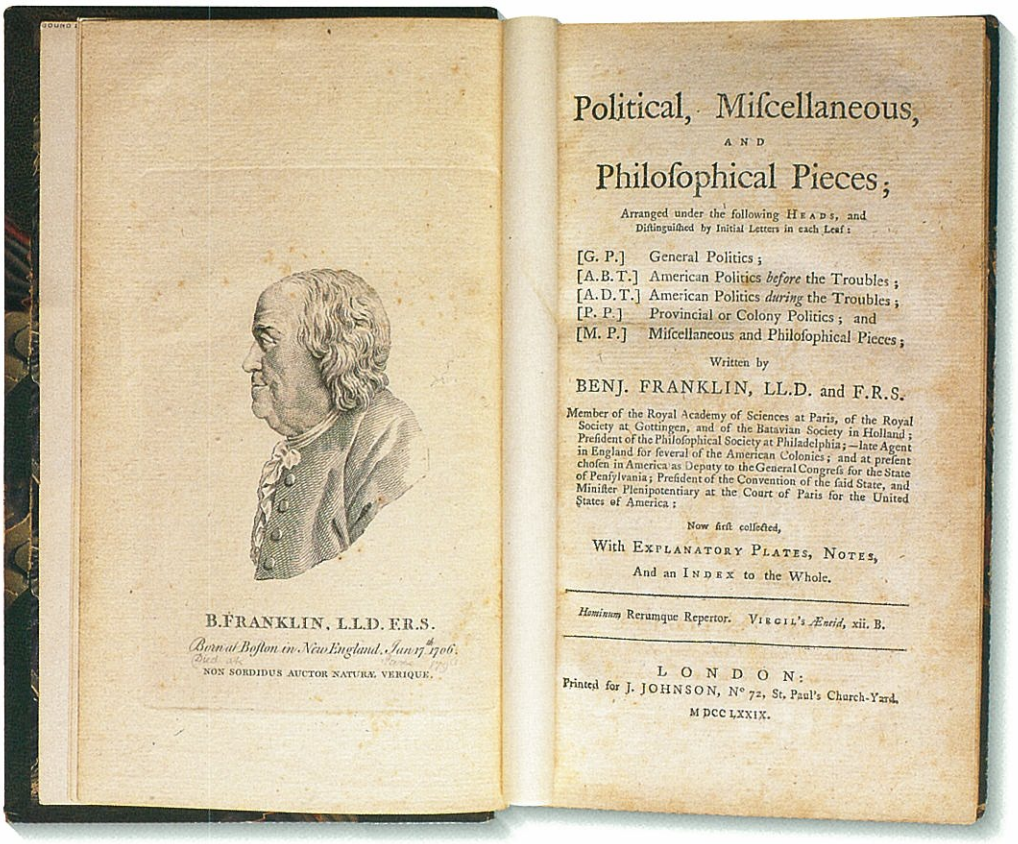
A AMSTERDAM.
1775.

[Linguet, Simon Nicolas Henri], 1736-1794
Thèorie du libelle, ou l'art de Calomnier avec fruit, dialogue philosophique, pour seruir de supplèment.
Amsterdam : [s.n.], 1775 228p. ; 17cm
Bound with :
Moreilet, Moreilet, Andrè, 1727-1819
Thèorie du paradoxe.
Amsterdam : [s.n.], 1775 [4], 214p.

ランゲは、ケネーと重農学派にとって最大の論敵と言われたフランスの法律家・著述家。1764年弁護士となり、名声を博したが、同僚の弁護士を激しく非難したため1775年に失職した。そののちJournal de politique et de littèrature誌、Annales politiques, civiles et littèraires誌を編集した。フランス革命に際してブリュッセルに逃れたが、やがて帰国し、絶対主義の擁護者として革命下の恐怖政治のもとで処刑された。1767年に出版された「民法理論」においてモンテスキューを批判し、モルレとのあいだに論争をひきおこした。本書は、モンテスキュー批判に反駁したモルレの「矛盾の理論」に論法を向け著したもので、重農学派に対して強い攻撃を加えている。

同年に刊行されたモルレの「矛盾の理論」初版が合冊製本されている。

78. フランクリン（1706～1790）
「政治・哲学論集」初版　1779年　ロンドン刊



B.FRANKLIN, L.L.D. F.R.S.
Born at Boston in New England, Janry 17th 1706.
NON SORDIDUS AUCTOR NATURÆ VERIQUE.

Political, Miſcellaneous,
AND
Philoſophical Pieces;
Arranged under the following HEADS, and
Diſtinguiſhed by Initial Letters in each Leaf:

[G. P.] General Politics;
[A.B.T.] American Politics *before* the Troubles;
[A.D.T.] American Politics *during* the Troubles;
[P. P.] Provincial or Colony Politics; and
[M. P.] Miſcellaneous and Philoſophical Pieces;

Written by
BENJ. FRANKLIN, LL.D. and F.R.S.
Member of the Royal Academy of Sciences at Paris, of the Royal Society at Gottingen, and of the Batavian Society in Holland; Preſident of the Philoſophical Society at Philadelphia; —late Agent in England for ſeveral of the American Colonies; and at preſent choſen in America as Deputy to the General Congreſs for the State of Penſylvania; Preſident of the Convention of the ſaid State, and Miniſter Plenipotentiary at the Court of Paris for the United States of America:

Now firſt collected,
With EXPLANATORY PLATES, NOTES,
And an INDEX to the Whole.

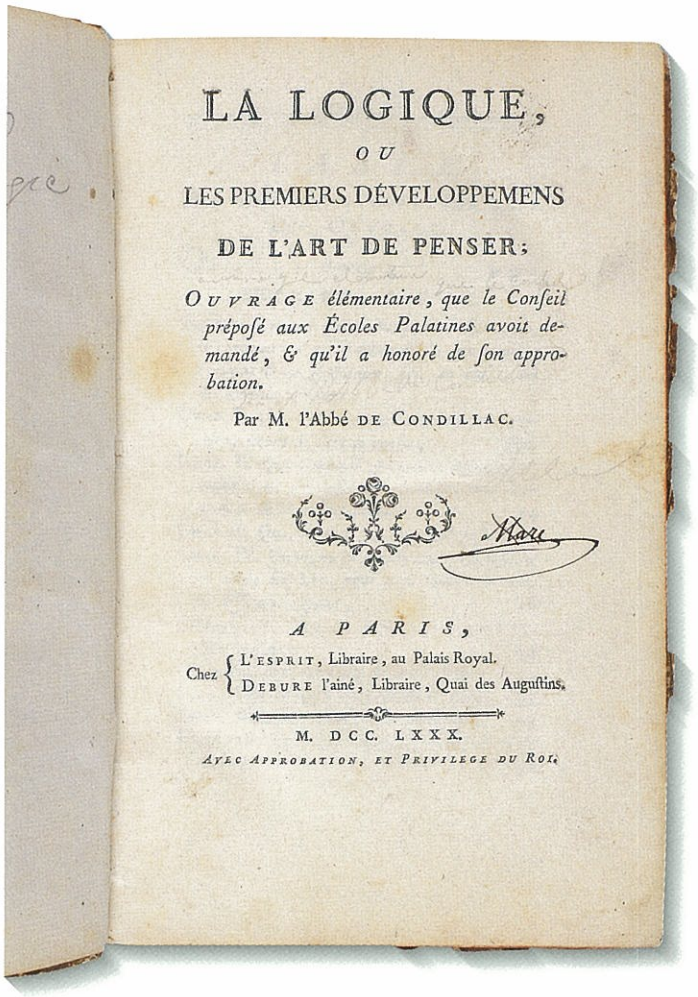
*Hominumq*ue Rerumque Repertor. VIRGIL's *Æneid*, xii. B.

LONDON:
Printed for J. JOHNSON, N° 72, St. Paul's Church-Yard.
MDCCLXXIX.

Franklin, Benjamin, 1706-1790
Political, miscellaneous, and philosophical pieces; arranged under the following heads, and distinguished by initial letters in each leaf.
London : J. Johnson,　1779　xi,[1],567,[7]p. ; 21cm

フランクリンは、アメリカの政治家、出版業者、科学者、著述家。ボストンに生まれ、単身フィラデルフィアに移り、印刷・出版業者として独立した。独学で教養と学識を身につけ、ペンシルヴァニア植民地の政界の有力者となり、イギリス本国とアメリカ植民地との紛争が起こると、本国政府との交渉にあたった。巡回図書館を作り、アメリカ哲学協会を設立し、多くの公共事業に貢献した。その傍ら外国語、哲学及び科学の研究に努め、二重焦点レンズやハーモニカも発明した。また、電気に興味をもち、雷雨中に凧をあげて雷電と電気が同じものである事を立証した。1776年にはアメリカ独立宣言起草委員の一人に委嘱された。

79. コンディヤック（1715～1780）
「論理学」初版　1780年　パリ刊



LA LOGIQUE,
OU
LES PREMIERS DÉVELOPPEMENS
DE L'ART DE PENSER;

Ouvrage élémentaire, que le Conseil préposé aux Écoles Palatines avoit demandé, & qu'il a honoré de son approbation.

Par M. l'Abbé de Condillac.

A PARIS,

Chez { L'esprit, Libraire, au Palais Royal.
Debure l'aîné, Libraire, Quai des Augustins.

M. DCC. LXXX.

Avec Approbation, et Privilege du Roi.

Condillac, Etienne Bonnot de., 1715-1780
La Logique, ou les premiers developpemens de l'art de penser; ouvrage élèmentaire, que le conseil prèposè aux ècoles palatines avoit demandè, & qu'il a honorè de son approbation.
Paris : L'Èsprit, Debure l'ainè, 1780 vi,153,[5]p. ; 20cm

コンディヤックは、フランスの感覚論哲学者。「人間の認識の起源に関する試論」（1746年）、「感覚論」(1754年)を発表した後、1758年から1767年にかけてパルム公の世嗣ぎフェルディナンドの扶育官を務めたコンディヤックが、これまで課題としてきた人間精神の発展史に関する省察を行ない、教師として考察した＜推理法＞や＜考え方＞を部分的に展開した一書。

80. カント（1724～1804）
「純粋理性批判」初版　1781年　リガ刊

Critik
der
reinen Vernunft

von
Immanuel Kant
Professor in Königsberg.

Riga,
verlegts Johann Friedrich Hartknoch
1781.

Kant, Immanuel, 1724-1804
Critik der reinen vernunft.
Riga : Johann Friederich Hartknoch,　1781　[24],856p. ; 20cm
PMM 226

カントはドイツの哲学者で批判哲学の創始者。ケーニヒスベルクの馬具匠の息子に生まれ、ケーニヒスブルク大学では、形而上学、数学、物理学を学び、1755年に大学講師に任命された。15年間この職を務め、多くの論文を発表した。1770年に論理学、形而上学の正教授となったが、以後思想的苦悩の12年を費やし、本書を書き上げた。その後、著作活動の高潮期が始まり「道徳の形而上学」をへて、「実践理性批判」、「判断力批判」と次々に公刊して、全ヨーロッパ的な声望を得た。

本書は、カントの第一主著といわれ、この中で彼は、“先天的”と“経験的”命題、“分析的”と“総合的”命題との区別を論理的に明らかにした上で、“先天的総合判断”はいかにして可能になるかを問題にし、先験的観念論を打ち立てた。本書が書かれるに至った動機について彼自身が、「D.ヒュームの警告によるものである」と告白し、ヒュームの懐疑的経験主義との接触によることを示唆している。ドイツ観念論及び現代哲学の基礎をなす著作である。

81. カント（1724～1804）
「プロレゴメナ」初版　1783年　リガ刊

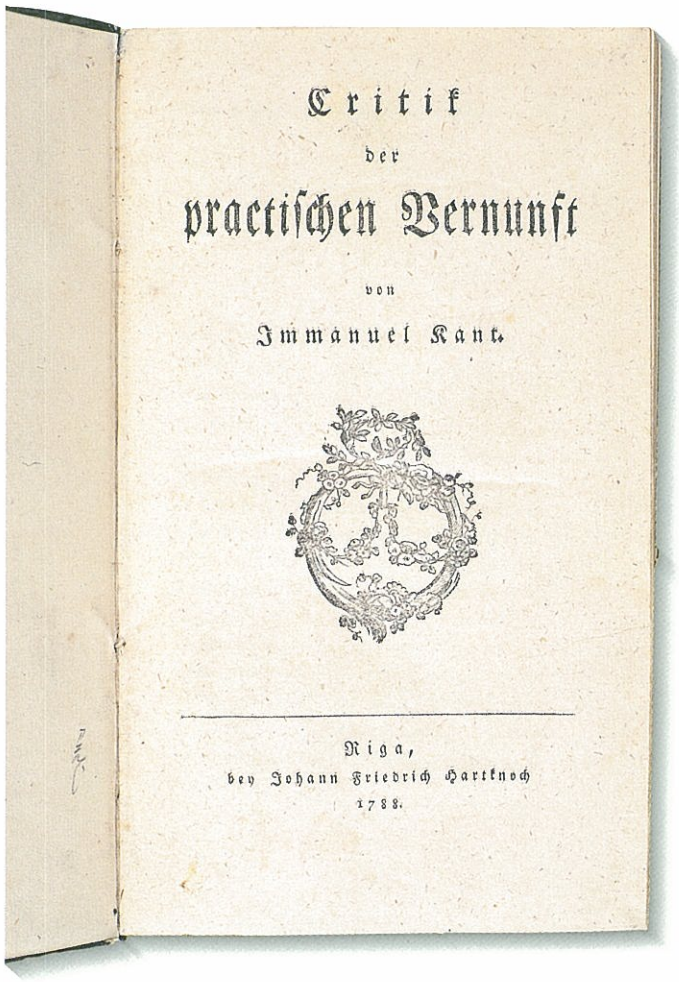
Prolegomena
zu
einer jeden
künftigen Metaphysik
die
als Wissenschaft
wird auftreten können,
von
Immanuel Kant.

Riga,
bey Johann Friedrich Hartknoch.
1783.

Kant,Immanuel, 1724-1804
Prolegomena zu einer jeden Künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können.
Riga : Johann Friederich Hartknoch,　1783　222,[1]p. ; 20cm

本書の書かれた目的は、その正確な表題「学としてあらわれうべきあらゆる未来の形而上学への序論」のうちに示されている。彼の主著「純粋理性批判」の真意が多くの点で誤解されており、特に第一主著に展開されたこれまでの形而上学の批判が、一般にあらゆる形而上学への批判のごとく解されているのに気付いたカントは、自身の真意があいまい化される危険を感じ、本書の中で、非学的な形而上学こそ否定されるべきだが、学的な形而上学ならこの限りではないと述べている。学的な形而上学はどうすれば可能かという条件を設定しようとしたのが「純粋理性批判」であると、本書はわかりやすい言葉で説明している。

82. カント（1724～1804）
「実践理性批判」初版　1788年　リガ刊



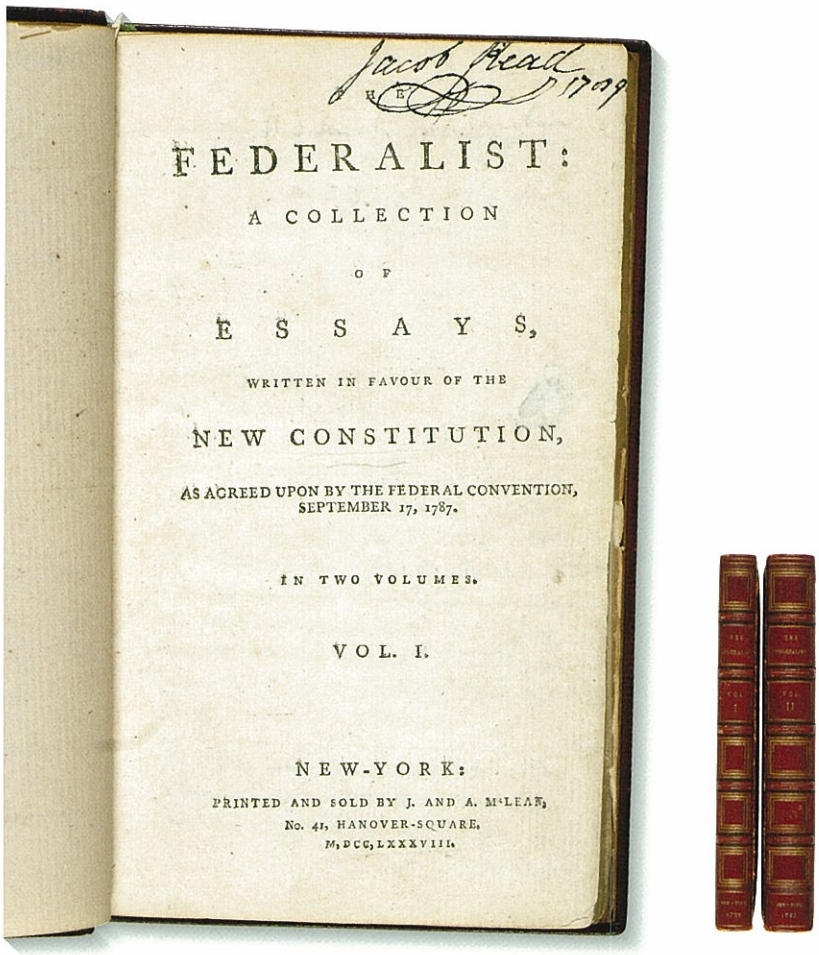
Critik
der
practischen Vernunft
von
Immanuel Kant.

Riga,
bey Johann Friedrich Hartknoch
1788.

Kant, Immanuel, 1724-1804
Critik der Practischen Vernunft.
Riga : Johann Friederich Hartknoch,　1788　292p. ; 21cm

カントの第二主著。「純粋理性批判」及び「判断力批判」とあわせて三批判書といわれる。本書は第二批判と呼ばれ、形而上学の基礎づけという点においても、また倫理思想においても、カント独自の考え方をはっきり示したものであり、後世に対して非常に大きな影響を与えた。

83. ハミルトン（1757～1804）他
「フェデラリスト」初版　2巻　1788年　ニューヨーク刊



Jacob Read 1789

FEDERALIST:

A COLLECTION

OF

ESSAYS,

WRITTEN IN FAVOUR OF THE

NEW CONSTITUTION,

AS AGREED UPON BY THE FEDERAL CONVENTION,
SEPTEMBER 17, 1787.

IN TWO VOLUMES.

VOL. I.

NEW-YORK:

PRINTED AND SOLD BY J. AND A. M'LEAN,
No. 41, HANOVER-SQUARE.
M, DCC, LXXXVIII.

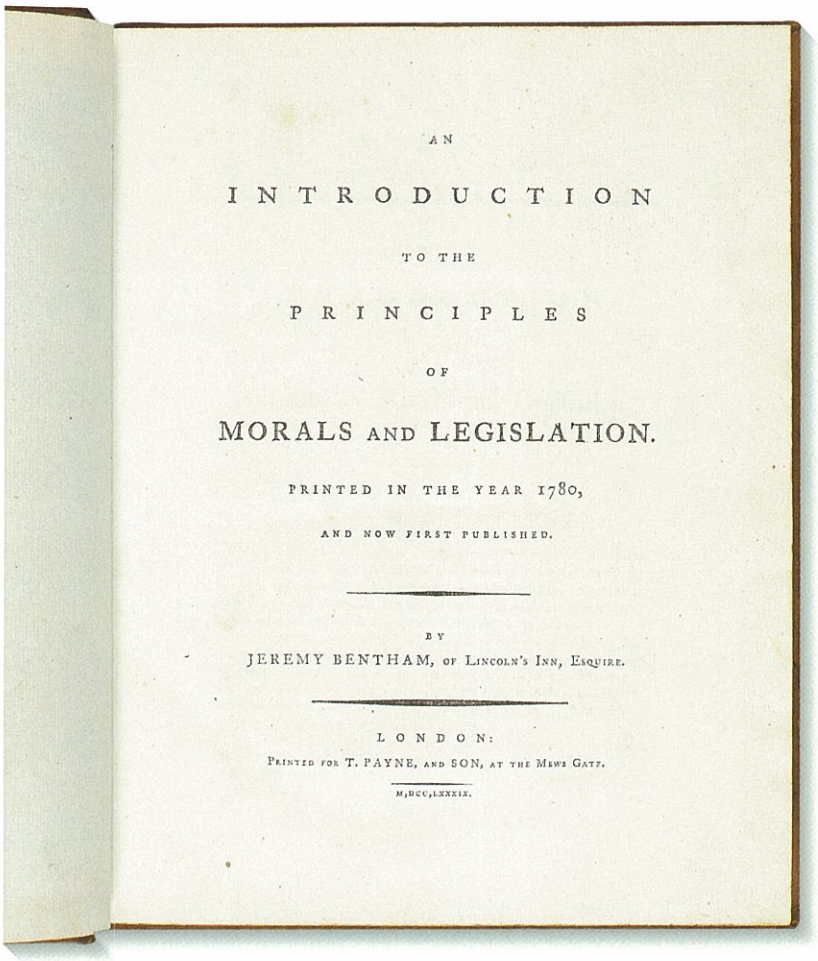
Alexander Hamilton, 1757-1804, James Madison, 1751-1836, and John Jay, 1745-1829.
The federalist: a collection of essay.
New York : Printed and sales by J. and A. Mclean　1788　2 Vols. ; 17cm
PMM 234　Jacob Read 旧蔵書

「ザ・フェデラリスト」は、アメリカ独立後、新しいアメリカ合衆国憲法草案を受け入れない邦、主にニューヨーク選挙民に向けて書かれた論文で、アメリカ独立革命期の政治家ハミルトン（後のワシントン大統領政権下の初代財務長官）とマディソン（後のアメリカ第4代大統領）、そしてジェイ（後の合衆国最高裁判所の初代主席判事）らは、新しい憲法となるアメリカ合衆国憲法草案がどのようなものかを広く市民に説明し、憲法案の擁護を世論に訴えるべく、1787年10月ニューヨークの新聞に論文の掲載を開始した。その際、彼らは「パブリアス」という3人共通の匿名によるペンネームを用い、1788年までに合計85編（ハミルトン;51編、マディソン;29編、ジェイ;5編）もの論文を書き上げる。そしてこれらの論文を集め、書物として刊行したのが本書である。

アメリカ憲法の最高の解説書といわれる本書は、アメリカ政治思想史上第1にあげられる古典としてその名を不朽のものとしている。

館蔵書は、ハミルトン、マディソン、ジェイらと同時代に生きたアメリカ・サウスカロライナの政治家ジェイコブ・リード（1752～1816）の旧蔵本で、彼の自筆署名および1789年の日付の書き入れがある。

84. ベンサム（1748～1832）
「道徳および立法の諸原理」初版　1789年　ロンドン刊



AN

INTRODUCTION

TO THE

PRINCIPLES

OF

MORALS AND LEGISLATION.

PRINTED IN THE YEAR 1780,

AND NOW FIRST PUBLISHED.

BY

JEREMY BENTHAM, OF LINCOLN'S INN, ESQUIRE.

LONDON:

PRINTED FOR T. PAYNE, AND SON, AT THE MEWS GATE.

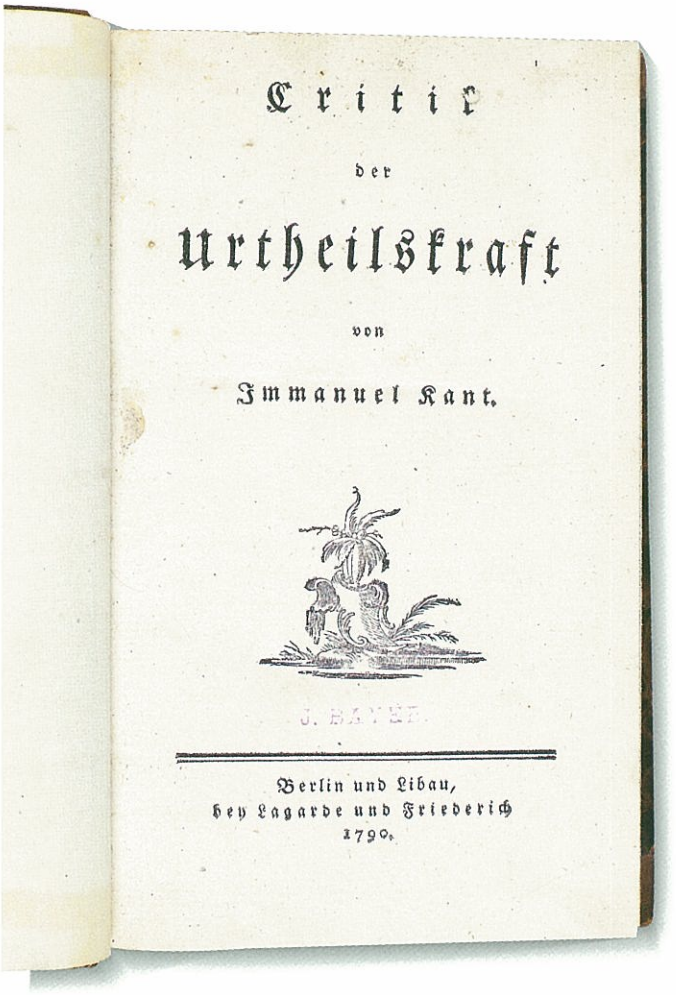
M,DCC,LXXXIX.

Bentham, Jeremy, 1748-1832
An introduction to the principles of morals and legislation.
London : T. Payne and son,　1789　9,[1],cccxxxv,[33]p. ; 27cm
PMM 237

ベンサムは、イギリスの社会哲学者。ロンドンの富裕な弁護士の子で、オックスフォード大学に学んだ後、弁護士を開業したが成功せず、以後思索の生活に入り独身で過ごした。当時根強く残っていた封建的要素を批判しただけでなく、それと戦ってきたブルジョアの武器である自然法思想をも批判した。「最大多数の最大幸福」というモットーのもとに功利主義思想を体系化し、人間の行為の基準を快楽と苦痛という量的なものに還元したのは、自由平等なブルジョア社会の自律的な運動法則の確立を意味する。

本書は、ベンサムの初期の著作であるが、彼の理論的出発点として、いわゆるベンサム理論の基礎を知るうえにきわめて重要な著作である。公刊後、当時産業革命進行中のイギリス近代市民の要求を理論的に正当化することになり、いわゆる“ベンサム主義または個人主義の時期”と呼ばれる立法改革の一時期を作った。

85. カント（1724～1804）
「判断力批判」初版　1790年　ベルリン刊



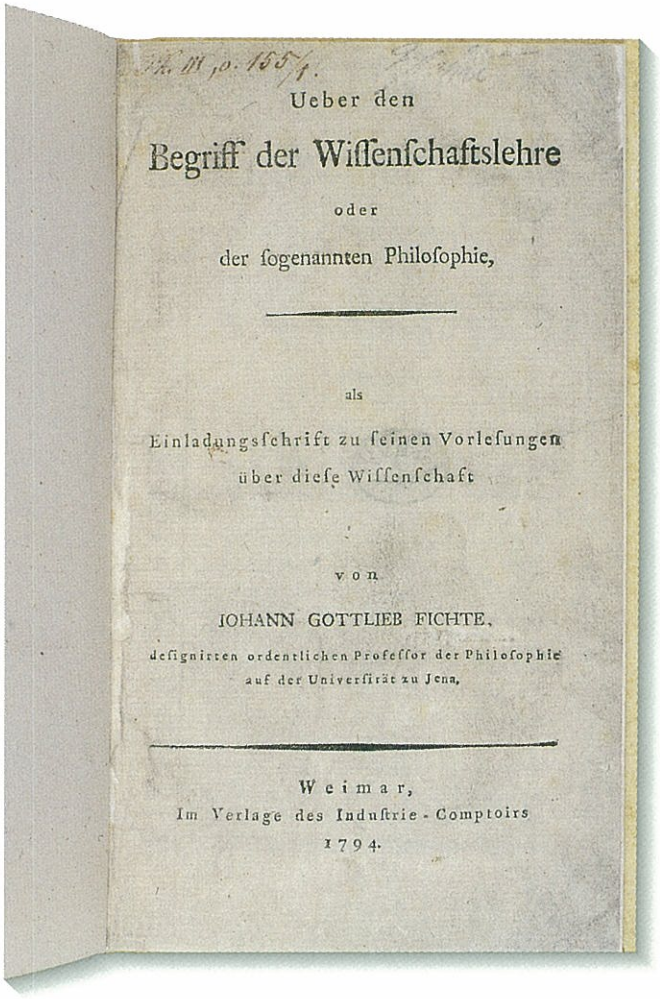
Critik
der
Urtheilskraft
von
Immanuel Kant.

Berlin und Libau,
bey Lagarde und Friederich
1790.

Kant, Immanuel, 1724-1804
Critik der Urtheilskraft.
Berlin und Libau : Lagarde und Friederich,　1790　lviii,476,[2]p. ; 20cm

第三批判といわれる「判断力批判」でカントは、「純粋理性批判」と「実践理性批判」、自然と道徳、必然性の世界と自由の世界の二元論を克服しようとした。そうした体系的な使命をもつと同じに、本書は前掲の二つの批判書が積み残した美学と生命の問題に、超越論的な基礎づけを試みている。同時代のロマン主義運動に大きな影響を与えた書でもある。

86. フィヒテ（1762～1814）
「知識学の概念について」初版　1794年　ワイマール刊



Ueber den
Begriff der Wiſſenſchaftslehre
oder
der ſogenannten Philoſophie,

als
Einladungsſchrift zu ſeinen Vorleſungen
über dieſe Wiſſenſchaft

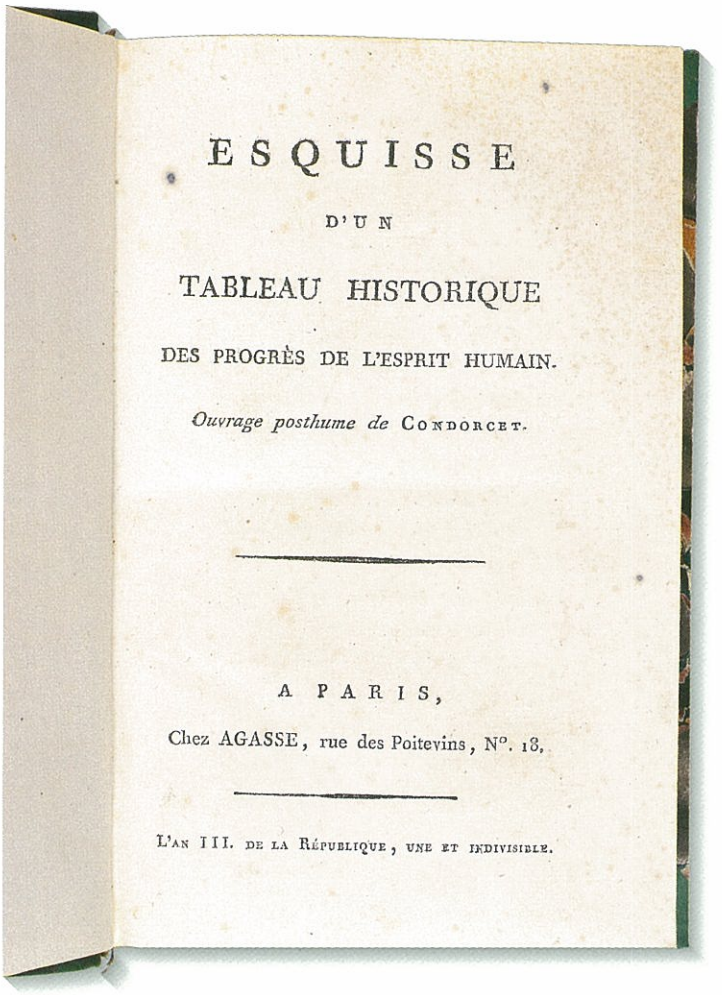
von
IOHANN GOTTLIEB FICHTE,
deſignirten ordentlichen Profeſſor der Philoſophie
auf der Univerſität zu Jena,

Weimar,
Im Verlage des Induſtrie-Comptoirs
1794.

Fichte, Johann Gottlieb, 1762-1814
Ueber den Begriff der Wissenschaftslehre oder der sogenannten philosophie, als Einladungsschrift zu seinen vorlesugen uber diese wissenschaft.
Weimar : verlage des Indestrie,　1794　viii,10-68p. ; 20cm
PMM 244

フィヒテは、ドイツの哲学者。イエナ、ライプチヒの各大学で神学を勉強したが、経済的に苦しく1790年やっとライプチヒ大学を卒業した。この年、カントの第1批判を読み、大いに感動し、翌年カントに会い処女論文「あらゆる啓示の批判の試み」を提示した。これが出版され、カント自身の著作とまちがえられたりしため、たちまち哲学者として有名になった。カント哲学をさらに体系的に組織し、その原理を求めるために、カントの第1批判問題と第2批判問題とを論理的に捉らえようとしたフィヒテは、イエナ大学の教授に就任した翌年の1794年に本論文を発表し、自分の意図を明らかにした。この内容をより体系的に展開したものが、同じ年に刊行されたフィヒテの主著の一つ、「全知識学の基礎」（1794年）である。

87. コンドルセ（1743〜1794）
「人間精神進歩の歴史」初版　1795年　パリ刊



ESQUISSE

D'UN

TABLEAU HISTORIQUE

DES PROGRÈS DE L'ESPRIT HUMAIN.

Ouvrage posthume de CONDORCET.

A PARIS,

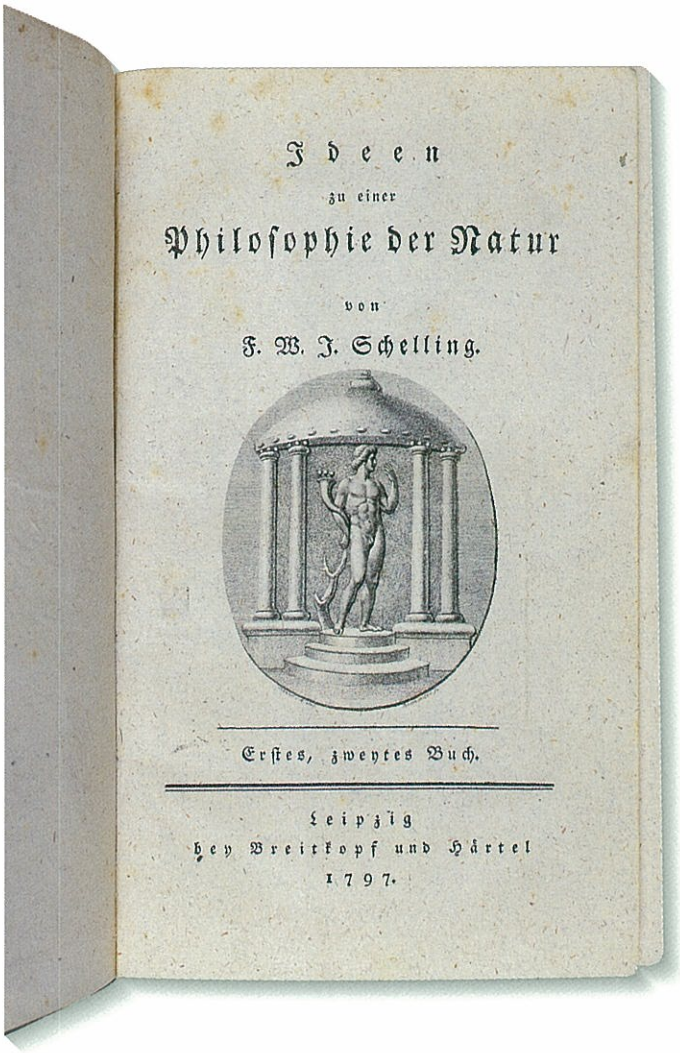
Chez AGASSE, rue des Poitevins, N°. 18.

L'AN III. DE LA RÉPUBLIQUE, UNE ET INDIVISIBLE.

Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de, 1743-1794
Esquisse d' un tableau historique des progrès de lesprit humain.
Paris : Agasse, [1795] viii,389,[1]p. ; 20cm
PMM 246

コンドルセは、フランスの政治家、思想家、数学者であり、特に幾何学にすぐれた。フランス革命が起こると1791年立法議会議員に選出され、教育改革案をはじめ、憲法草案の起草などさかんに活躍したが、憲法を批判したため、革命の敵として告発され、身を隠したが逃亡の途中で死んだ。コンドルセがフランス革命の恐怖政治を逃れ、亡命中に書いた本書は、＜世紀の遺言書＞と呼ばれるように、啓蒙思想、とりわけその歴史観を最もはっきりと示すものである。本書を貫く根本思想は、人間精神は限りなく完成に近づくとする楽天的な進歩・無限完成の思想である。コンドルセは、本書の中で“自然は人間の能力の完成に対しては、何らの限界も付していない。人間のこの完成の可能性は真に無限であり、その進歩は今後これを阻止しようとするすべての力からは独立したもので、我々が自然によって放置された地球の持続以外には何らの限界もない”と述べている。

88. シェリング（1775～1854）
「自然哲学の理念」初版　1797年　ライプチヒ刊



Ideen
zu einer
Philosophie der Natur
von
F. W. J. Schelling.

Erstes, zweytes Buch.

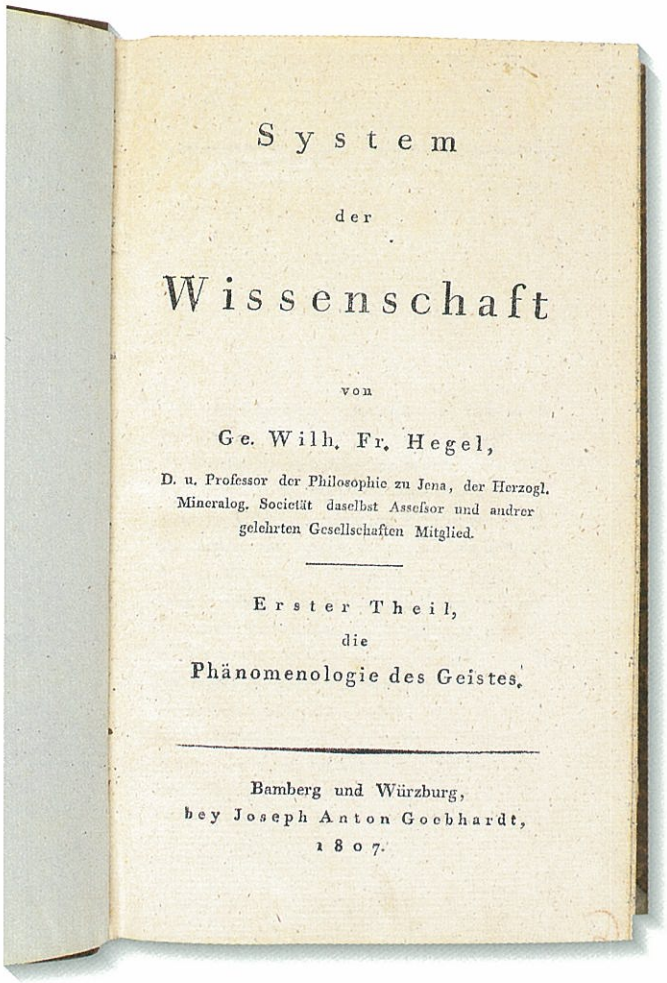
Leipzig
bey Breitkopf und Härtel
1797.

Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph.von, 1775-1854
Ideen zu einer Philosophie der Natur.
Leipzig : Breitkopf und Nartel,　1797　lxiv,262p. ; 21cm

シェリングは、ドイツの哲学者でドイツ観念論の代表的思想家の一人。幼少の頃から古典語の素養を積み、1790年チュービンゲン大学の神学院に入学し、ヘーゲルなどと親交を結んだ。若くして論文により世にみとめられ、フィヒテやゲーテの推薦を得て1798年にイエナ大学助教授となり、翌年フィヒテのあとを継いで正教授に就任した。

本書はシェリングの初期の著作であり、彼が自然哲学の構想を初めて発表した作品である。シェリングは、はじめフィヒテの「知識学」を自分の哲学のよりどころにしていたが、知識学には自然の哲学的考察が与えられていないのにあき足らず、自然哲学を新たに作り上げることを自己の課題とした。18世紀の後半には自然科学の分野において次々と新しい発見がなされたことに刺激を受け、ドイツ哲学の伝統にのっとって自然の有機的解釈を大胆に展開した。本書は無機の自然を扱っており、化学の哲学ともいうべき内容である。

89. ヘーゲル（1770～1831）
「精神現象学」初版　1807年　バンベルグ刊



System
der
Wissenschaft
von
Ge. Wilh. Fr. Hegel,
D. u. Professor der Philosophie zu Jena, der Herzogl. Mineralog. Societät daselbst Assessor und andrer gelehrten Gesellschaften Mitglied.

Erster Theil,
die
Phänomenologie des Geistes.

Bamberg und Würzburg,
bey Joseph Anton Goebhardt,
1807.

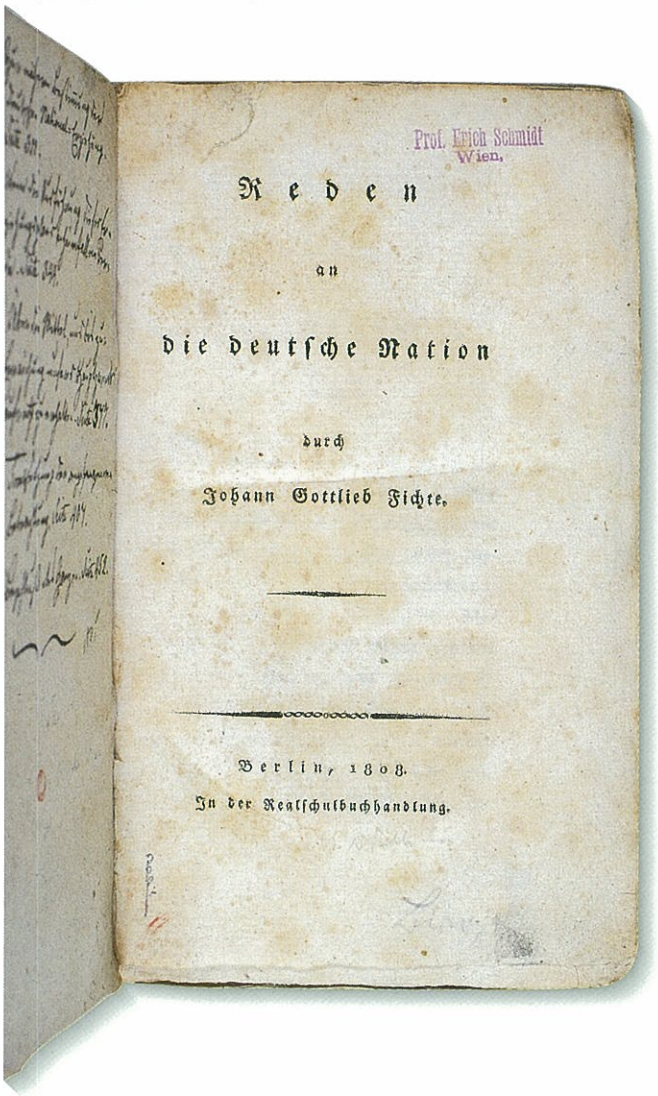
Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1770-1831
System der Wissenschaft.
Bamberg und Wurzburg : Joseph Anton Goebhardt　1807　[16],xci,[5],765,[3]p. ; 20cm

ヘーゲルは、ドイツの哲学者。シュッツトガルトに生まれ、チュービンゲン大学で神学を学んだ。フランス革命に感動し、当時のドイツ哲学運動に刺激され、ギリシャ研究にも傾倒した。1801年にフィヒテのあとを受けてイエナ大学に招かれたのち、ニュルンベルクのギムナジウム校長兼教授、ハイデルベルク大学教授、ベルリン大学教授を歴任した。

「精神現象学」は、精神が己を自覚してゆくこの過程を叙述したものであり、ヘーゲルは、本書において、知を“意識”“自己意識”“理性”の三段階に分け、さらに“理性”を“理性”“精神”“宗教”“絶対知”の四段階に区分した。“意識”がそれ自身の反省において深化、向上し、ついに“絶対知”に到達することを論じた。

本書は、ドイツ観念論の完成者ヘーゲルがイエナ大学時代に執筆したもので、のちのヘーゲル哲学体系のすべてを萌芽の形で含んでいるといわれ、ヘーゲル研究は本書から始めなければならないとされる名著。

90. フィヒテ（1762～1814）
「ドイツ国民に告ぐ」初版　1808年　ベルリン刊



Prof. Erich Schmidt
Wien.

Reden
an
die deutsche Nation
durch
Johann Gottlieb Fichte.

Berlin, 1808.
In der Realschulbuchhandlung.

Fichte, Johann Gottlieb, 1762-1814
Reden an die Deutsche Nation.
Berlin : Realschulbuch handlung,　1808　490,[2]p. ; 19cm
cf.PMM 244

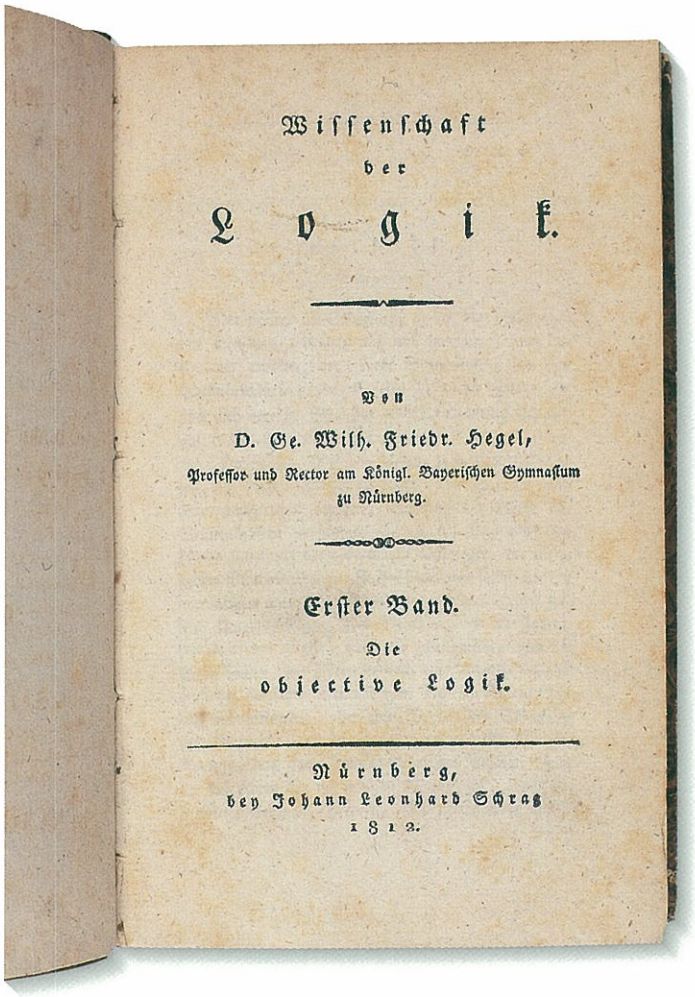
本書は、フィヒテが1807～08年の冬にベルリンの学士院で行った連続講演をまとめたもの。フィヒテは1804～05年の冬に、やはりベルリンの学士院で一連の公開講演を行い、1806年それを「現代の特徴」と題して公刊した。本講演はもともとその続きとして準備されていたのであるが、この間に1806年から翌年にかけてプロイセンの軍隊はナポレオンによって打ち破られ、ベルリンもフランス軍隊の支配下におちいった。このような事態に直面して、フィヒテは熱烈な祖国愛にかり立てられ、身の危険をもかえりみずドイツ国民に呼びかけて、道徳的向上を促したのである。1804年の講演では、現代は全くの腐敗状態に堕していると説かれていたが、本講演においては、この3年ばかりの間に人類の堕落状態は終局に達し、いまや理性の支配する状態が開けようとしていると主張される。そしてこの新しい時代において理性支配の状態を完成させることができるのはドイツ国民のみであると強調している。

91.（クック）（1728～1779）
「南太平洋航海風景画集」　1808年　ロンドン刊

[Cook, Captain James]Webber, James.
Views in the South Seas, from drawings by the late James Webber, draftsman on Board the Resolution, captain James Cooke, from the year 1776 to 1780.
London : published by Boydell, printed by W. Bulmer,　1808　34 leaves. ; 54×41cm

イギリスの世界的に有名な航海家ジェームズ・クックは、1768年から1779年にかけて前後3回の世界一周航海を成し遂げた。オーストラリア東海岸の発見など太平洋と南太平洋を探索したため太平洋の開拓者といわれる。
本書は、そのクック船長の世界一周航海に乗船したウェバーがスケッチした風景画を銅版で印刷したもので、彩色がほどこしてある。

92. ヘーゲル（1770〜1831）
「論理学」初版　3巻　1812-1816年　ニュルンベルク刊



Wissenschaft
der
Logik.

Von
D. Ge. Wilh. Friedr. Hegel,
Professor und Rector am Königl. Bayerischen Gymnasium
zu Nürnberg.

Erster Band.
Die
objective Logik.

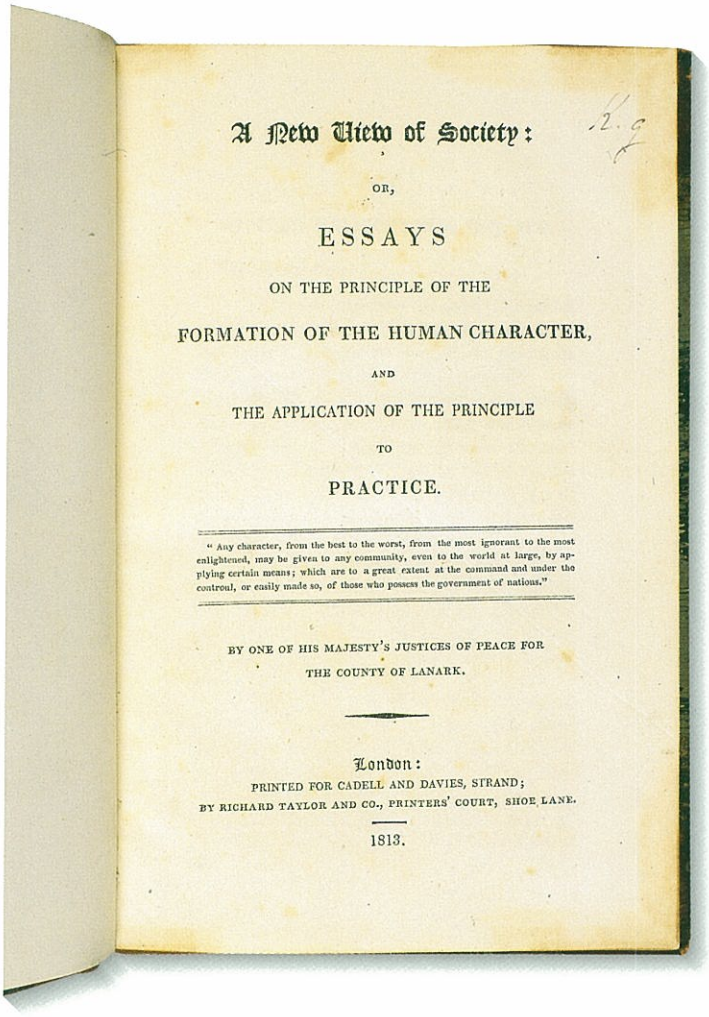
Nürnberg,
bey Johann Leonhard Schrag
1812.

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1770-1831
Wissenschaft der Logik.
Nuremberg : Johann Leonhard Schrag,　1812-16.　3 Vols. ; 20cm

ヘーゲルは、ドイツ観念論の大成者で、弁証法の論理の生みの親である。彼の弁証法をそれ自身体系的な論理として展開したものがこの「論理学」である。ヘーゲルが自分の哲学体系の基礎を獲得したといわれる著書は「精神現象学」であるが、「精神現象学」は当初“学の体系第一部”とされていた。この時点でヘーゲルは、第二部として論理学と実存哲学を考えており、ニュルンベルクのギムナジウム校長時代に本書を著した。

ヘーゲルの論理学は、“大論理学”と“小論理学”の2種類に分けて呼ばれる。“大論理学”とは本書のことであり、各部分において諸概念の歴史的背景と問題点を詳細に論じているため、ヘーゲル自身の思索を具体的にたどれる。“小論理学”は、ハイデルベルク大学時代のヘーゲルが講義の教科書として書いた「エンチクロペディー」の第1部におかれている論理学である。“小論理学“は、本書を縮約したもので内容的には変わるものはないが、「客観に対する主観の態度」という興味ある小論を本論の前の置いている。

93. オーエン（1771～1858）
「社会に関する新見解」初版　1813年　ロンドン刊



A New View of Society:

OR,

ESSAYS

ON THE PRINCIPLE OF THE

FORMATION OF THE HUMAN CHARACTER,

AND

THE APPLICATION OF THE PRINCIPLE

TO

PRACTICE.

"Any character, from the best to the worst, from the most ignorant to the most enlightened, may be given to any community, even to the world at large, by applying certain means; which are to a great extent at the command and under the controul, or easily made so, of those who possess the government of nations."

BY ONE OF HIS MAJESTY'S JUSTICES OF PEACE FOR THE COUNTY OF LANARK.

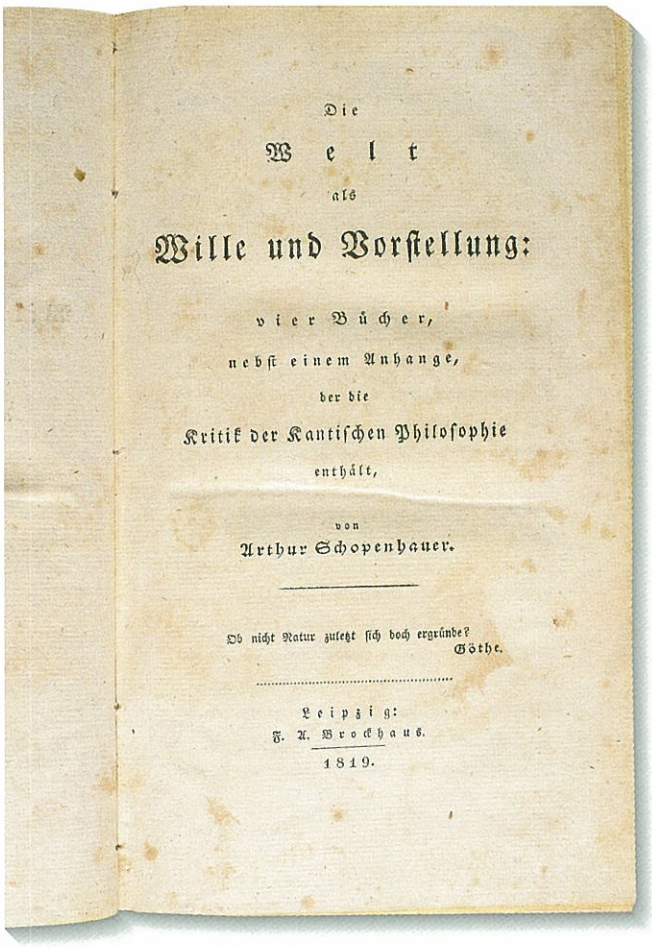
London:
PRINTED FOR CADELL AND DAVIES, STRAND;
BY RICHARD TAYLOR AND CO., PRINTERS' COURT, SHOE LANE.
1813.

Owen, Robert, 1771-1858
A New view of society; or, Essays on the principle of the formation of the human character, and the application of the principle to practice.
London : Cadell and Davies,　1813.　23,vi,39,124p. ; 22 cm.
PMM 271

オーエンはイギリスの空想的社会主義者で、協同組合、労働運動の父ともいわれている。北ウェールズの出身で、早くからロンドンの商店員となり、やがてマンチェスターで綿紡績工場経営者となった。彼の思想は、マンチェスター時代に芽生え、スコットランドのニュー・ラナーク工場の経営開始とともにその思想を実践のうちで鍛えた。

本書は、社会主義の父といわれるオーエンの環境論的唯物論が、はじめて最も体系的に述べられた著作である。彼の思想は1821年に刊行された「ラナーク州への報告」で完成したものの、本書は、彼の工場に於ける実践に基づいて書かれただけに、彼の思想の基本的性格を最もよくうかがうことが出来る。

94. ショーペンハウア（1778～1860）
「意志と表象としての世界」初版　1819年　ライプチヒ刊



Die
Welt
als
Wille und Vorstellung:
vier Bücher,
nebst einem Anhange,
der die
Kritik der Kantischen Philosophie
enthält,
von
Arthur Schopenhauer.

Ob nicht Natur zuletzt sich doch ergründe?
Göthe.

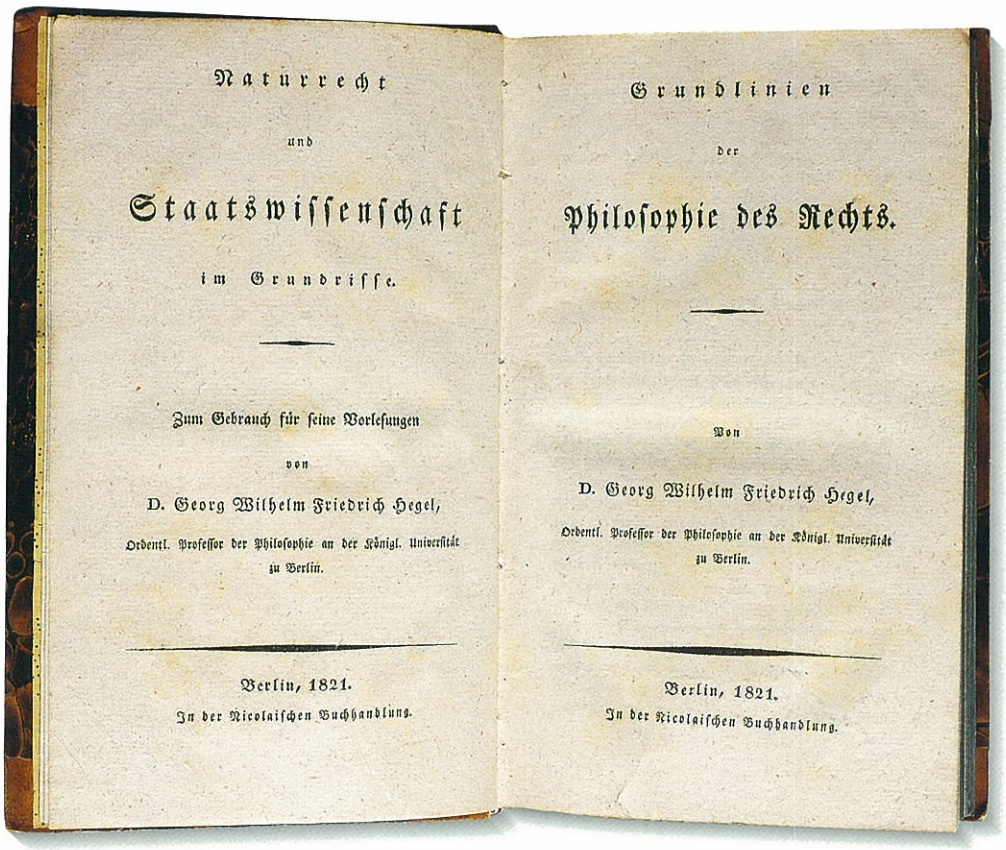
Leipzig:
F. A. Brockhaus.
1819.

Schopenhauer, Arthur, 1778-1860
Die Welt als Wille und Vorstellung: vier Bücher, nebst einem anhange, der die kritik der kantischen philosophie enthalt.
Leipzig : Brockhaus,　1819　[2],xvi,725,[3]p. ; 21cm
PMM 279

ショーペンハウアは、ドイツの哲学者。彼の哲学はカントの認識論に出発し、フィヒテやヘーゲルの観念論的哲学者を攻撃してはいるが、その根本的思想や体系の構成は、同じくドイツ観念論に属する。本書は、ショーペンハウアが30歳の時に4年の歳月をかけて完成した終生の大著である。その後の彼の著述のすべては、本書の単なる注解に過ぎないと言っても過言ではない。しかし、出版当初は、世間から全く注目されず、ショーペンハウアが初めて世評を得たのは、本書によってではなく、いわば本書の注解として1851年に刊行した哲学小論文集の後である。

この著作は正続2巻より成る。続編は、正編の訂正第2版とともに著者が56歳の1844年に刊行されているが、館蔵書は正編のみである。

95. ヘーゲル（1770～1831）
「法の哲学」初版　1821年　ベルリン刊



Naturrecht
und
Staatswissenschaft
im Grundrisse.

Zum Gebrauch für seine Vorlesungen
von
D. Georg Wilhelm Friedrich Hegel,
Ordentl. Professor der Philosophie an der Königl. Universität
zu Berlin.

Berlin, 1821.
In der Nicolaischen Buchhandlung.

Grundlinien
der
Philosophie des Rechts.

Von
D. Georg Wilhelm Friedrich Hegel,
Ordentl. Professor der Philosophie an der Königl. Universität
zu Berlin.

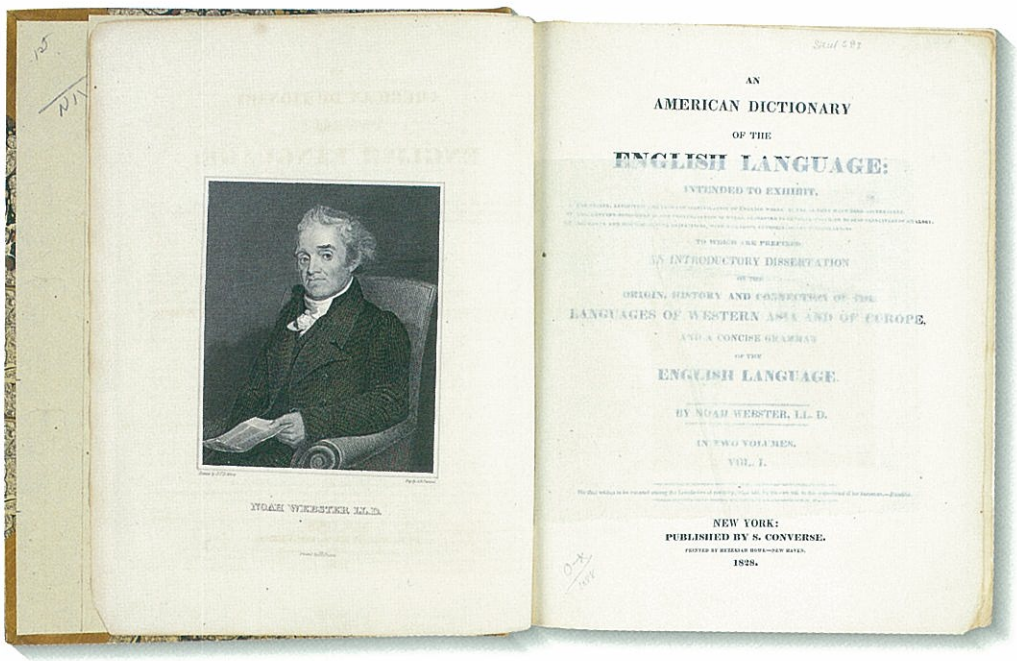
Berlin, 1821.
In der Nicolaischen Buchhandlung.

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1770-1831
Grundlinien der Philosophie des Rechts.
Berlin : Nicolaischen Buchhandlung,　1821　[2],xxvi,355,[1]p. ; 20cm
PMM 283

本書は、ドイツの哲学者ヘーゲルの最も輝かしい円熟した時代の著作である。正確なタイトルは、「法哲学要綱、または自然法および国家学要綱」である。彼は1818年ベルリン大学に招かれ、名声いよいよ高く、ドイツ（プロイセン）国家の哲学的指導者となった。彼は、解放戦争（1813年）の後プロイセン国家の将来に大きな期待を持ち、若い時代から関心をいだいていた国家、倫理、法律の諸問題をあらためて体系的に論述しようとした。プラトン的な古代国家論は近代国家にはもはや通用しえなかったが、自然法的社会契約説に立つ国家論を鋭く批判し、またロマン主義の国家観も排撃して国家の合理性を強調する。哲学の課題は現実の合理的把握であるとし、現実を無視して空想的矯激にはしる啓蒙主義の政治的革新の言動を排して、現実にかなった改革を望んだ。「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」という有名な言葉は、理性と（哲学）と現実との和解というヘーゲル哲学の本質を語るものであるが、それが本書の序文に掲げられている。

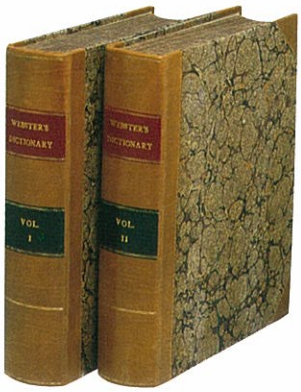
本書は出版後、保守主義者からは大歓迎を受け、ヘーゲルはプロイセンの国家哲学者に祭り上げられたが、進歩的自由主義者からはプロイセン国家を神聖化する御用哲学者として排撃され、冷笑された。

96. ウェブスター（1758～1843）
「アメリカ英語辞典」初版　2巻　1828年　ニューヨーク刊

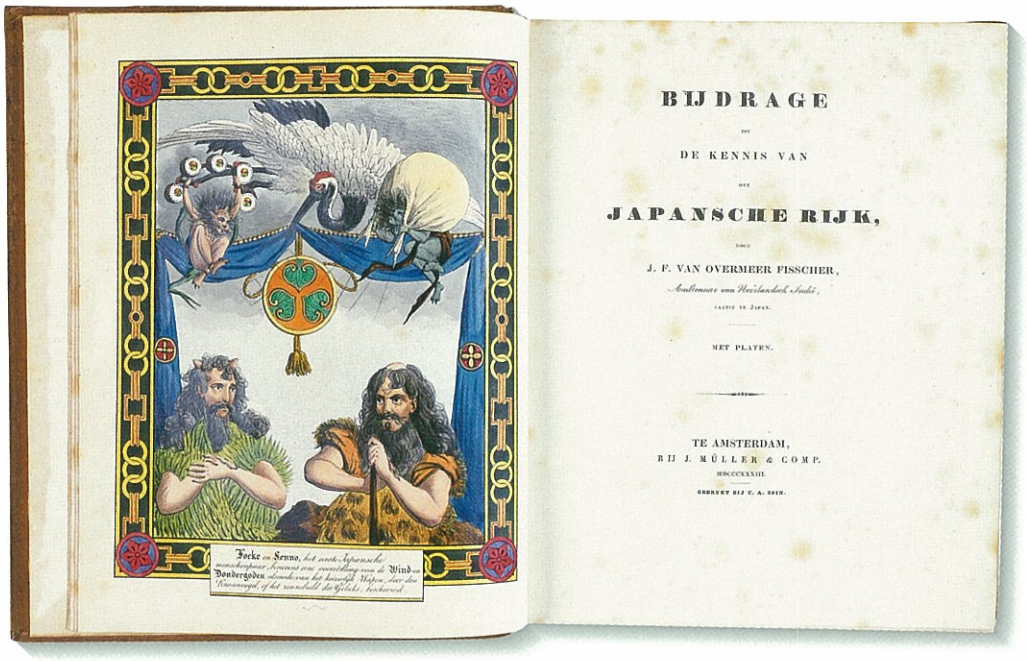


Webster, Noah, 1758-1843
An American Dictionary of the English Language: Intended to exhibit, ...
New York : S. Converse,　1828　2 Vols. ; 29cm
PMM 291

ノア・ウェブスターは、アメリカの辞書編集者で著作家。独立戦争に従軍（1777）の後、1779−83年には教師を務めた。1783−85年に最初の著作Grammatical Institute of English Languageを完成、次いで1785年にSketches of American Policyを出版した。その後ジャーナリズムに進出し、「アメリカン・ミネルヴァ」、「ヘラルド」などの編集にあたった。1806年には最初の辞書「Compendium Dictionary of the English Language」を出版した。7万項目を含むこの辞書は、今日アメリカ式と知られるつづり字、アメリカ特有の用語、意味の重視、百科全書的性格などを確立させイギリス辞書界にも影響を与えた。



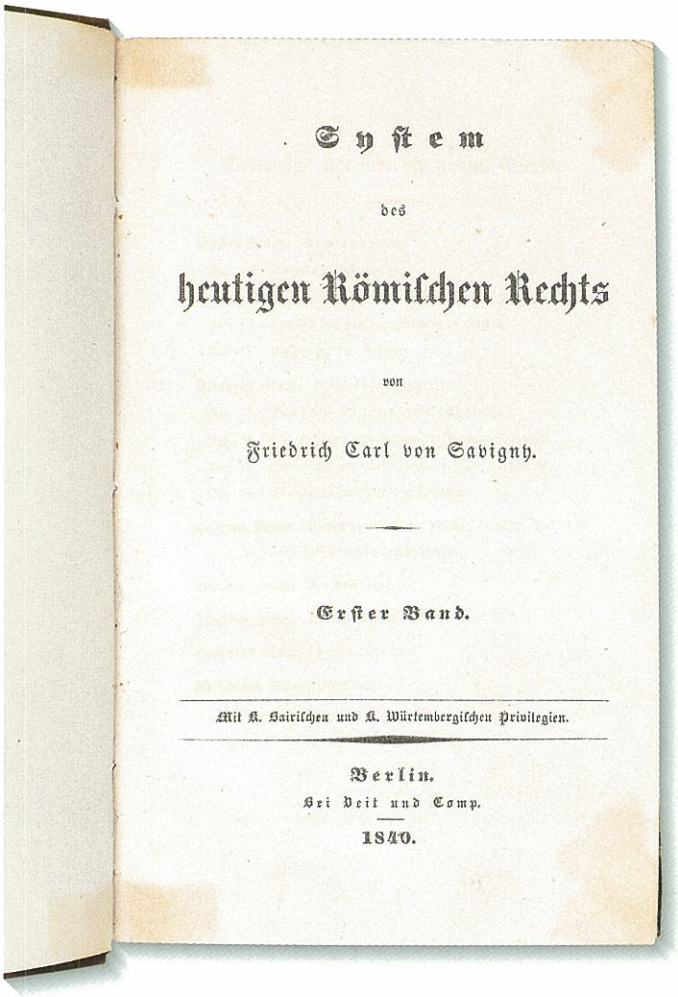
97. オヴェルメール・フィスヘル（1800～1848）
「日本国の知識に対する寄与」初版　1833年　アムステルダム刊



Overmeer Fisscher, J. F. von, 1800-1848
Bijdrage tot de Kennis van het Japansche Rijk.
Amsterdam : J. Muller,　1833　vii,[3],320p. ; 28cm

オヴェルメール・フィスヘルは、1820年にオランダ商館員として来日し、9年間の滞在中に商館長のプロンホフと共に江戸参府（1822年）もしている。本書は江戸末期箕作玩甫、杉田成卿等によって「日本風俗考22巻」として翻訳、刊行されており、日本人の起源、政治、宗教・芸術、衣食住、等々の日本に関する事物の他、日蘭対訳日常会話集なども収録され、19世紀前半の外国人の目で見た日本国内事情を知る格好の資料の一つになっている。

98. サヴィニー（1779～1861）
「現代ローマ法大系」初版　8巻　1840-1849年　ベルリン刊



System
des
heutigen Römischen Rechts
von
Friedrich Carl von Savigny.

Erster Band.

Mit K. Bairischen und K. Würtembergischen Privilegien.

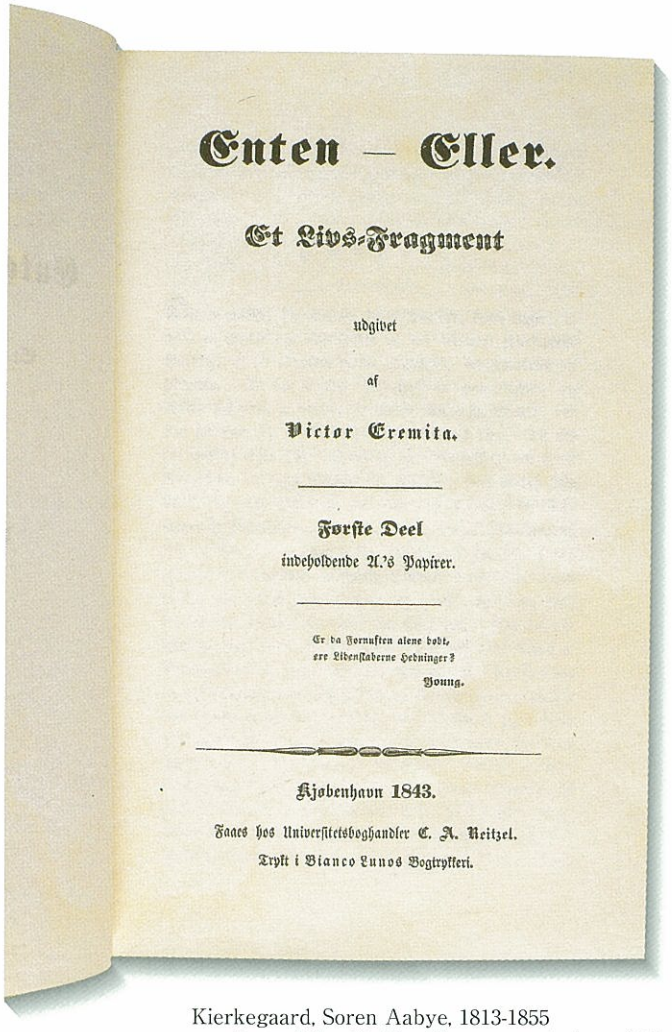
Berlin.
Bei Veit und Comp.
1840.

Savigny, Friedrich Carl von, 1779-1861
System des heutigen Römischen Rechts.
Berlin : Bei Heit,　1840-49　8 Vols. ; 20cm
Together with:
Heuser, Otto Ludwig, 1806- ?
Sachen und Quellen-Register zu von Savigny's System des heutigen römischen rechts.
Second edition
Berlin : Bei Veit und Comp,　1856　[4],351p. ; 20cm

サヴィニーは、ドイツの法学者。富裕な貴族の家に生まれ、、マールブルク、ゲッティンゲンなどの大学で学んだのち、大学で教職につき、プロイセンの立法大臣に就任した。晩年に公職を去って研究に専念し、学術雑誌 Zeitschrift geschichtliche Rechtswissenschaft を創刊した。

本書は、ローマ法学者で歴史法学の提唱者として知られるサヴィニーの主著で、ローマ法を正確な概念で大系的にまとめあげた労作であり、近代私法を理論的に大系化した先駆的な業績の一つとして高く評価されている。館蔵書には、初版の8巻に、ホイサーによってまとめられた索引の第2版が付け加わえられている。

99. キェルケゴール（1813～1855）
「あれかこれか」初版　2巻　1843年　コペンハーゲン刊



Enten — Eller.

Et Livs-Fragment

udgivet

af

Victor Eremita.

Første Deel

indeholdende A.'s Papirer.

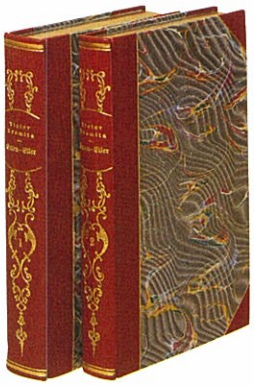
Er da Fornuften alene bedt,
ere Lidenskaberne Hedninger?

Young.

Kjøbenhavn 1843.

Faaes hos Universitetsboghandler C. A. Reitzel.

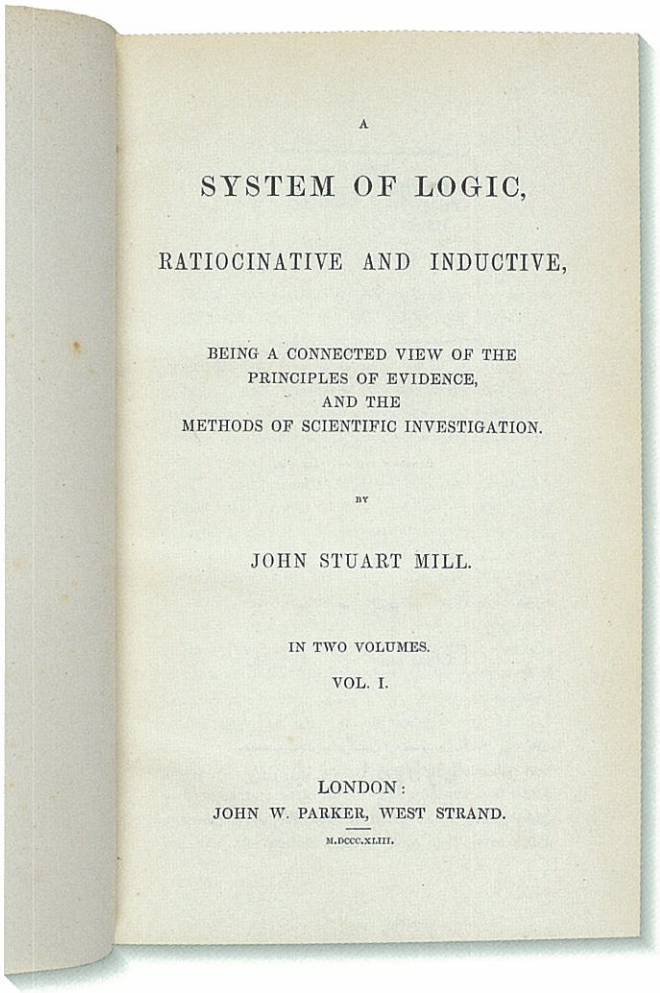
Trykt i Bianco Lunos Bogtrykkeri.



Kierkegaard, Soren Aabye, 1813-1855
Enten-Eller. Et Livs-Fragment udgivet af Victor Eremita.
Copenhagen : C. A. Beitzel,　1843　2 Vols. ; 20cm
PMM 314

キェルケゴールは、デンマークの哲学者、キリスト教的思想家。コペンハーゲンの富裕な織物商の末子として生まれ、大学卒業後は父の遺産で生活し、生涯を著作生活で送った。青年時代、神ののろいを知って宗教意識を深めたといわれる。本書は、実存主義の父と言われるキェルケゴールの処女作であり、匿名で出版された。副題に「ヴィクトル・エレミタにより刊行された人生の一断片」とあり、ヴィクトルが古道具屋で買った机の引き出しから出てきた書類が、この書物の内容をなすという設定となっている。この書は、美的生活者と倫理的生活者とを「あれか、これか」として対立させ、その二者択一を読者に訴える形式をとっているが、実はそんな単純なものではない。これは思弁哲学への挑戦の宣戦布告であり、自己批判の書でもある。ヘーゲル主義の「あれも、これも」と言う立場では陰蔽されてしまう人間の実存的現実を「あれか、これか」という決断によって露呈させようというのがキェルケゴールの意図である。

100. J.S.ミル（1806～1873）
「論理学大系」初版　2巻　1843年　ロンドン刊



A

SYSTEM OF LOGIC,

RATIOCINATIVE AND INDUCTIVE,

BEING A CONNECTED VIEW OF THE
PRINCIPLES OF EVIDENCE,
AND THE
METHODS OF SCIENTIFIC INVESTIGATION.

BY

JOHN STUART MILL.

IN TWO VOLUMES.

VOL. I.

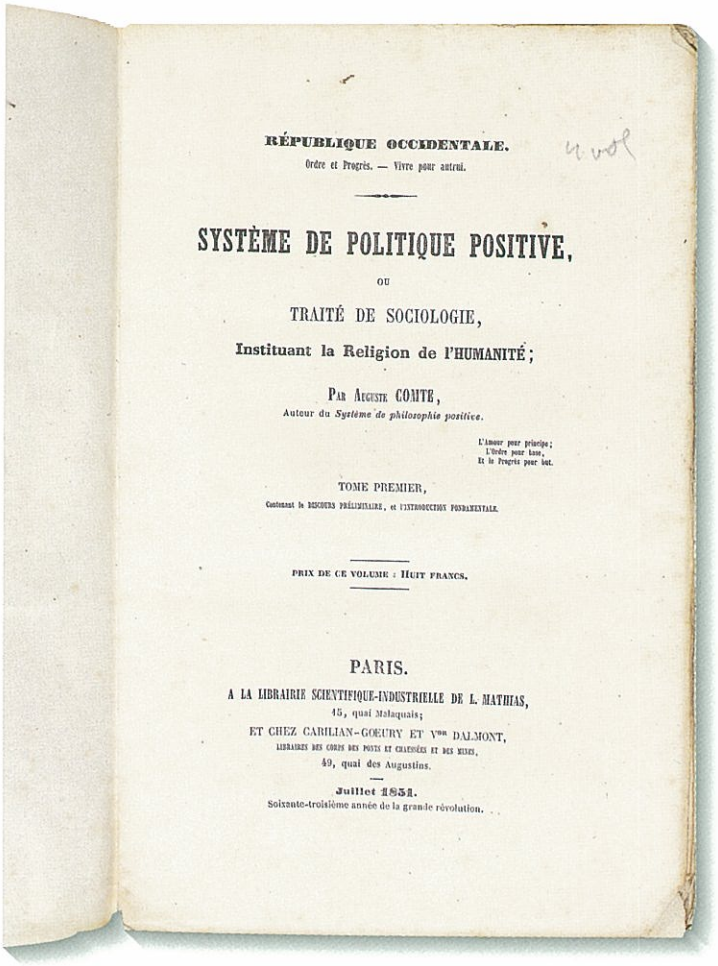
LONDON:
JOHN W. PARKER, WEST STRAND.
M.DCCC.XLIII.

Mill, John Stuart, 1806-1873
A System of logic, ratiocinative and inductive, being a connected view of the principles of evidence, and the methods of scientific investigation.
London : John W. Parker,　1843　2 Vols. ; 22cm

ミルは、イギリスの代表的な自由主義思想家で経済学者。父ジェームズ・ミルがロンドンで文筆業に従事している時代に生まれ、有名な英才教育を受けた。1823年に父の紹介で東インド会社に入り、58年に会社が解散されるまで勤務した。

本書はJ.S.ミルの最初の著作で、いわゆる「ミルの帰納法」として広く知られているものを論述し、近代論理学の1つの古典とみなされている。正確な題名は「論証および帰納の論理学体系、確証の原理と科学の方法との統一的見地」という。非常に多くの版を重ねている。

101. コント（1798～1857）
「実証的政治体系」初版　4巻　1851-1854年　パリ刊



RÉPUBLIQUE OCCIDENTALE.
Ordre et Progrès. — Vivre pour autrui.

SYSTÈME DE POLITIQUE POSITIVE,
OU
TRAITÉ DE SOCIOLOGIE,
Instituant la Religion de l'HUMANITÉ;

PAR AUGUSTE COMTE,
Auteur du *Système de philosophie positive*.

L'amour pour principe;
L'ordre pour base,
Et le Progrès pour but.

TOME PREMIER,
Contenant le DISCOURS PRÉLIMINAIRE, et l'INTRODUCTION FONDAMENTALE.

PRIX DE CE VOLUME : HUIT FRANCS.

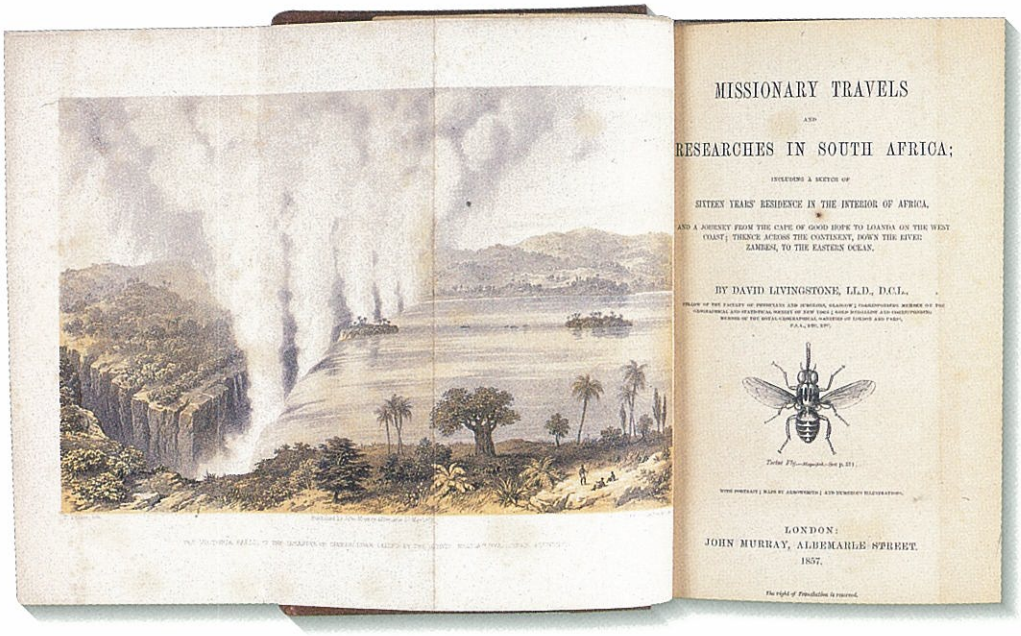
PARIS.
A LA LIBRAIRIE SCIENTIFIQUE-INDUSTRIELLE DE L. MATHIAS,
45, quai Malaquais;
ET CHEZ CARILIAN-GOEURY ET Vve DALMONT,
LIBRAIRES DES CORPS DES PONTS ET CHAUSSÉES ET DES MINES,
49, quai des Augustins.

Juillet 1851.
Soixante-troisième année de la grande révolution.

Comte, Auguste, 1798-1857
Système de politique positive, ou traité de Sociologie instiuant la religion de l' humanité.
Paris : Carilian-Goeury et vor Dalmont,　1851-54　4 Vols. ; 23cm

コントは、フランスの社会思想家で社会学の父ともいわれる。数学・物理を学び一時サン・シモンの門に入ったが、多くは野にあって貧窮の中で著作に従事した。人間精神の段階的発展を考え、想像が支配的な神学的段階、抽象的思惟が支配的な形而上学的段階から客観的認識の成立する時を実証的段階と名づけ、実証精神の最高の形態が社会学であるとした。本書は、コントの前期の主著「実証哲学講義」（1835-42年）と並ぶ後期の代表的著作である。第1巻は実証主義総体の基礎理論と基礎的序論（1851年）、第2巻は社会静態学（1852年）、第3巻は社会動態学（1853年）について論じ、第4巻は人間未来の総合的素描を示し（1854年）、初期論文6編も収められている。副題に「人間を創設する社会学概論」と記されているように、従来の神学に代わって“人間”を崇拝の対象とする新宗教を提唱することが目的である。

102. リヴィングストン（1813〜1873）
「南アフリカ伝道旅行」初版　1857年　ロンドン刊



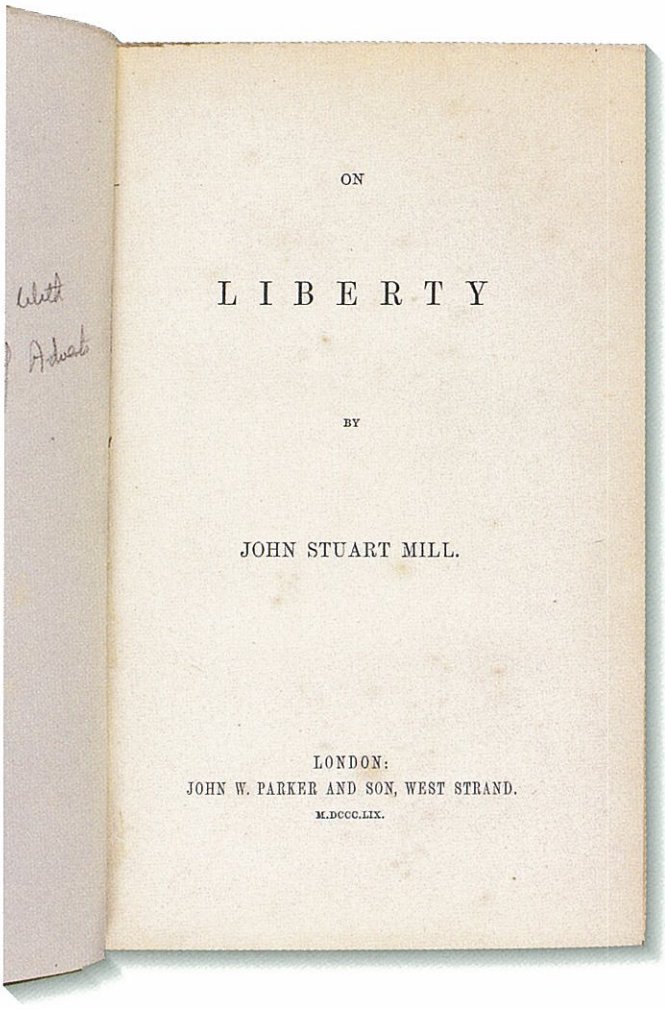
MISSIONARY TRAVELS
AND
RESEARCHES IN SOUTH AFRICA;
INCLUDING A SKETCH OF
SIXTEEN YEARS' RESIDENCE IN THE INTERIOR OF AFRICA,
AND A JOURNEY FROM THE CAPE OF GOOD HOPE TO LOANDA ON THE WEST COAST; THENCE ACROSS THE CONTINENT, DOWN THE RIVER ZAMBESI, TO THE EASTERN OCEAN.
BY DAVID LIVINGSTONE, LL.D., D.C.L.,
LONDON:
JOHN MURRAY, ALBEMARLE STREET.
1857.
The right of Translation is reserved.

Livingstone, David, 1813-1873
Missionary traveles and researches in South Africa; .
London : John Murray,　1857　ix,687,8p., plate,map. ; 22cm
PMM 341

リヴィングストンは、イギリスの医者、キリスト教伝道者、アフリカ探検家。1840年以来、ロンドン伝道協会の医療伝道師としてアフリカに渡り、カラハリ砂漠、ザンベジ川流域を含む医療伝道旅行をした他、2回にわたるザンベジ川流域の探査旅行を行った。その後、奴隷貿易反対とニヤサ、タンガニーカ両水系の分水線決定などをめざして、1866年から7年にわたり調査旅行を行ったが、その途中病に倒れその生涯を終えた。

本書は、そのリヴィングストンが1840年から1856年に行った探検記。館蔵書には、1857年にアロウ・スミスによるリヴィングストンのルートマップが折り込まれており、著者の自筆献辞入り。

103. J.S.ミル（1806～1873）
「自由論」初版　1859年　ロンドン刊



ON

LIBERTY

BY

JOHN STUART MILL.

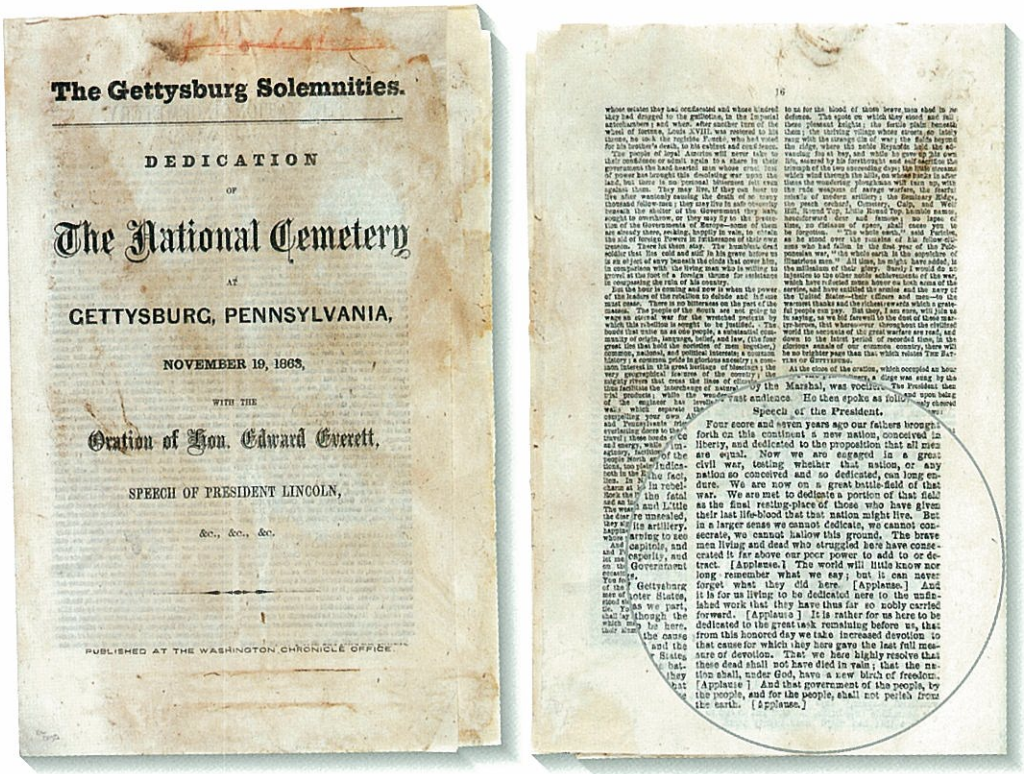
LONDON:
JOHN W. PARKER AND SON, WEST STRAND.
M.DCCC.LIX.

Mill, John Stuart, 1806-1873
On Liberty.
London : John W. Parker and Son,　1859　207p,16p. ; 20cm
PMM 345

ミルは、幼少の頃から父ジェームズによってベンサム主義者として育てられたが、1826年以降ベンサム主義に疑いをいだいてそれから離れ、1851年以降再びベンサム主義に接近した。本書はこの最後の期の代表的著作である。ミルの自叙伝によれば、本書は1854年に1論説として書かれていたが、1855年1月、ローマのカピトルの階段を上がっていた時にこれを1巻に書きかえようと思いついた。その後2回書き直してからしまっておき、時々出して訂正したりしたが、最終的には全部書き直して、1859年に刊行した。ミルは、自らこれほど注意深く入念に構成したものはないと述べ、「一個の真理を説いた哲学の教科書のようなもの」と本書を評した。

104. リンカーン（1809～1865）

「ゲティスバーグ式典。1863年11月19日ペンシルベニア州ゲティスバーグ国民墓地開所式とエドワード・エバレット議員式辞、リンカーン大統領演説」　1863年11月22日発行　ワシントン刊



The Gettysburg Solemnities.

DEDICATION

OF

The National Cemetery

AT

GETTYSBURG, PENNSYLVANIA,

NOVEMBER 19, 1863,

WITH THE

Oration of Hon. Edward Everett,

SPEECH OF PRESIDENT LINCOLN,

&c., &c., &c.

PUBLISHED AT THE WASHINGTON CHRONICLE OFFICE.

Speech of the President.

Four score and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are equal. Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. We are now on a great battle-field of that war. We are met to dedicate a portion of that field as the final resting-place of those who have given their last life-blood that that nation might live. But in a larger sense we cannot dedicate, we cannot consecrate, we cannot hallow this ground. The brave men living and dead who struggled here have consecrated it far above our poor power to add to or detract. [Applause.] The world will little know nor long remember what we say; but it can never forget what they did here. [Applause.] And it is for us living to be dedicated here to the unfinished work that they have thus far so nobly carried forward. [Applause.] It is rather for us here to be dedicated to the great task remaining before us, that from this honored day we take increased devotion to that cause for which they here gave the last full measure of devotion. That we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that the nation shall, under God, have a new birth of freedom. [Applause.] And that government of the people, by the people, and for the people, shall not perish from the earth. [Applause.]

Lincoln, Abraham, 1809-1865

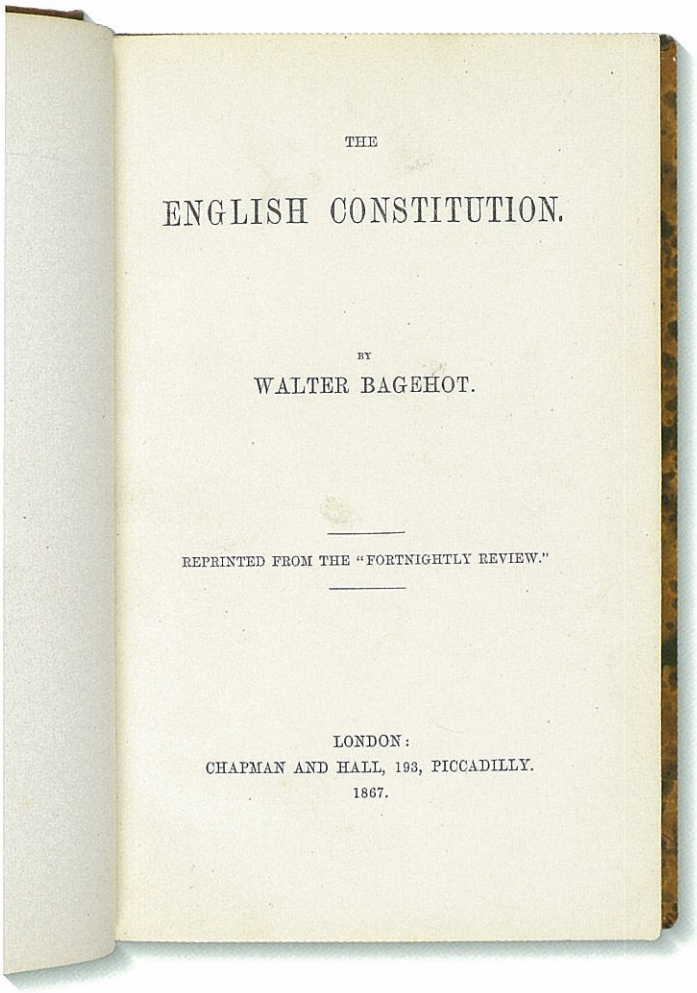
The Gettysburg Solemnities: Dedication of the National Cemetery at Gettysburg, Pennsylvania, November 19, 1863, with the oration of Hon. Edward Everett, Speech of President Lincoln, &c. &c. &c. Washington : Published at the Washington Chronicle Office, 22 Nov. 1863　16p. ; 27cm

PMM 351　Thomas W. Streeter 旧蔵書

リンカーンは、アメリカ第16代大統領。1863年7月、南北戦争の天下分け目の戦いといわれたゲディスバーグの戦いは3日間続き、死者・負傷者・行方不明の兵士の数は北軍・南軍の両軍合わせて5万人以上にのぼった。4ヵ月後の11月19日にこの戦いで死んだ兵士たちの霊を慰めるため、リンカーンはゲディスバーグにおもむき、1万8千人の人々の前で演説をした。これが有名なゲディスバーグの演説である。この時のリンカーンの演説はたったの270語、時間にして3分という短いものであった。しかし、この演説は3日後の11月22日に16頁立ての小冊子としてワシントン・クロニクル紙により印刷され、「人民の、人民による、人民のための政治」はアメリカ民主主義の精神を示す歴史的な文書となった。100年以上たってもなおアメリカ史上に残る名演説として世界中で語りつがれている。

本書は、アメリカーナの収集で有名なThomas W. Streeter氏の旧蔵書で、世界で3部確認されているうちのひとつである。

105. バジョット（1826～1877）
「イギリス憲政論」初版　1867年　ロンドン刊



THE

ENGLISH CONSTITUTION.

BY

WALTER BAGEHOT.

REPRINTED FROM THE "FORTNIGHTLY REVIEW."

LONDON:
CHAPMAN AND HALL, 193, PICCADILLY.
1867.

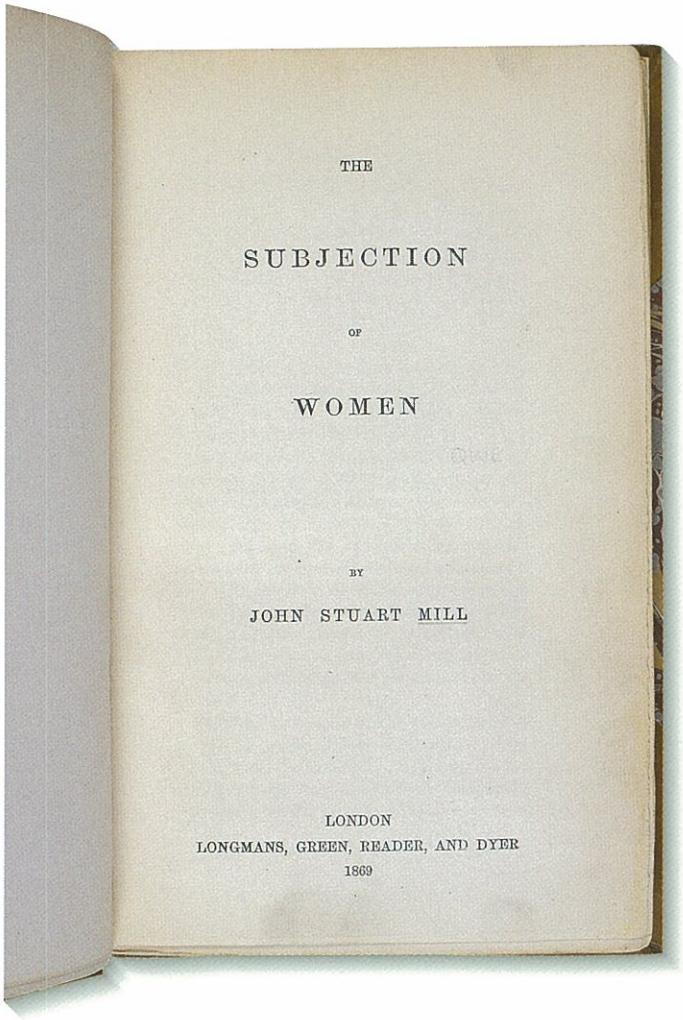
Bagehot, Walter, 1826-1877
The English constitution.
London : Chapman and Hall,　1867　viii,348p. ; 20cm
PMM 358

バジョットは、イギリスの社会学者、ジャーナリスト。銀行家の父を持ち、ロンドン大学で経済学や法律だけでなく、ひろく数学、文学、歴史学などを学び、政治及び経済に関する研究においてすぐれた著述を残した。1852年に父の銀行で実務につき、58年から死ぬまで「エコノミスト」の編集者として活躍した。

本書は、イギリスのConstitutionの研究であり、Constitutionは広い意味での憲法であるが、イギリスにはまとまった憲法典はなく、いくつかの基本的法令と慣習がこの国の基本的な国家構造を形成している。したがって本書は「イギリスの国家構造」とも訳されている。バジョットは、法律論的にではなく現実的かつ記述的に国家構造を論じかつ批評している。本書が刊行された年は、第2次選挙法改正が行われ、労働者階級にも参政権が与えられた年で、かなり保守的な精神をいだいていた彼が、民主主義の台頭を目前にして警告を発する意図をもって書いたものである。

本書は、学術的論文としてではなく、生きた政治の分析と叙述の模範として発行以来尊重され、広く読まれ、今日では一つの古典とみなされている。

106. J.S.ミル（1806〜1873）
「女性の隷従」初版　1869年　ロンドン刊



THE

SUBJECTION

OF

WOMEN

BY

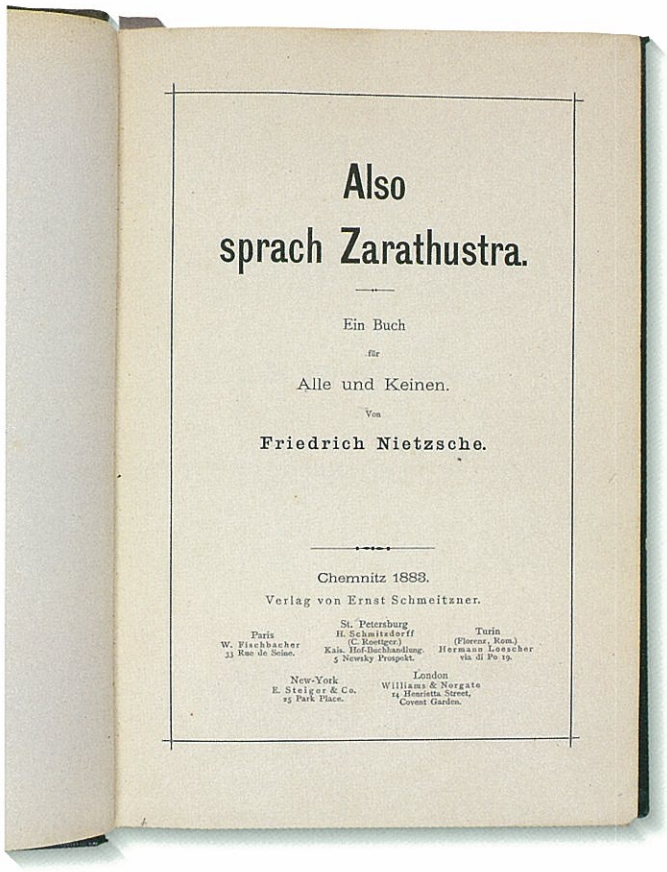
JOHN STUART MILL

LONDON
LONGMANS, GREEN, READER, AND DYER
1869

Mill, John Stuart, 1806-1873
The Subjection of Women.
London : Longmans, Green, Reader, and Dyer,　1869　[4],188p. ; 20cm

イギリス功利主義の代表的思想家J.S.ミルによる女性解放論の古典的著作。ベンサムによって確立されたイギリス功利主義は、生成しつつある市民社会に理論的基礎を与えたが、市民としての資格を与えられない労働者と女性を生むという矛盾を生じさせた。そこで彼らを功利主義の理論の中で包括するすることがミルの仕事として残された。本書は、彼の晩年の著作＜社会主義論＞とならぶ功利主義理論の代表作で、女性の法律的、社会的地位の向上を強調した。ミルは、女性の隷従が近代合理主義と矛盾するものであることを明らかにし、合理主義の理論を用いて女性解放の必要と必然を説明することを意図し、以後の婦人選挙権運動の教科書となった。しかし、独身の女性以外（妻）の職場進出に対しては、家庭を破壊するものとして非難し、女性の経済的独立の問題を軽視しているため、現代では古典としての意味を持つにすぎない。

107. ニーチェ（1844～1900）
「ツァラトゥストラはかく語りき」初版　3巻（1冊）　1883-1884年　シェムニッツ刊



Also
sprach Zarathustra.

Ein Buch
für
Alle und Keinen.
Von
Friedrich Nietzsche.

Chemnitz 1883.
Verlag von Ernst Schmeitzner.

St. Petersburg
H. Schmitzdorff
(C. Roettger)
Kais. Hof-Buchhandlung.
5 Newsky Prospekt.

Paris
W. Fischbacher
33 Rue de Seine.

Turin
(Florenz, Rom.)
Hermann Loescher
via di Po 19.

New-York
E. Steiger & Co.
25 Park Place.

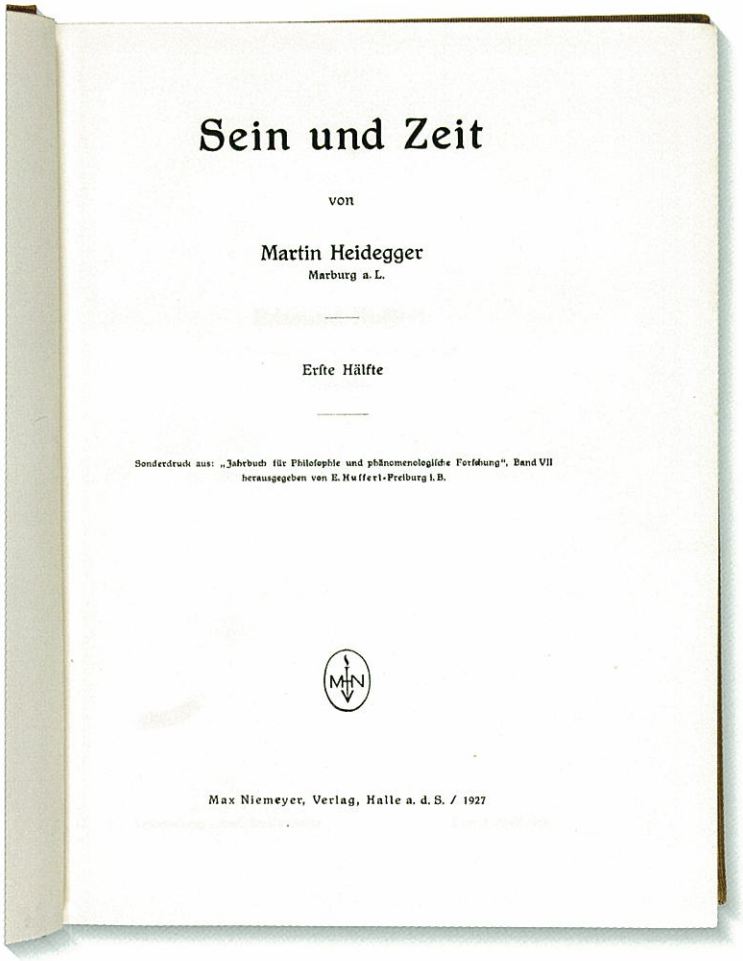
London
Williams & Norgate
14 Henrietta Street,
Covent Garden.

Nietzsche, Friedrich Wilhelm, 1844-1900
Also Sprach Zarathustra.
Chemnitz : Ernst Schmeitzner,　1883-84　3 Vols.(in one) ; 22cm
PMM 370

ニーチェはドイツの哲学者。牧師の子に生まれ、病弱のため主として孤独のうちに思索と著述に専念した。初めショウペンハウアやワグナーの影響を受けたが、後には形而上学と宗教とを捨てていっさいの生を肯定する立場に立ち、さらに超人ツァラトゥストラの思想に達し、弱者の道徳に対し強者の道徳としての権力意志を主張した。

ツァラトゥストラは、古代ペルシアの拝火教の教祖の名であるが、内容に直接の関係は無い。精神はかつて神であったが、やがて人間となり、さらに現在は愚衆に堕している。また、教養は過去の遺産に頼って創造的生命を失い、道徳もあの世の救済や隣人愛、平等を説いて生命の高揚を失っている。ニーチェは、このように低劣化した人間性を自ら否定克服して、充実した本能的、肉体的自己に忠実でなければならないと主張する。これが超人の思想である。超人は、歴史を神にゆだねることは出来ないから、すべての存在者が永劫に繰り返す生の苦悩をたじろがずに引き受けなければならない。この書でニーチェは、時代に先んじて大衆社会への個性埋没の危機を訴えた。

108. ハイデッガー（1889～1976）
「存在と時間」初版　1927年　ハレ刊



Sein und Zeit

von

Martin Heidegger
Marburg a. L.

Erste Hälfte

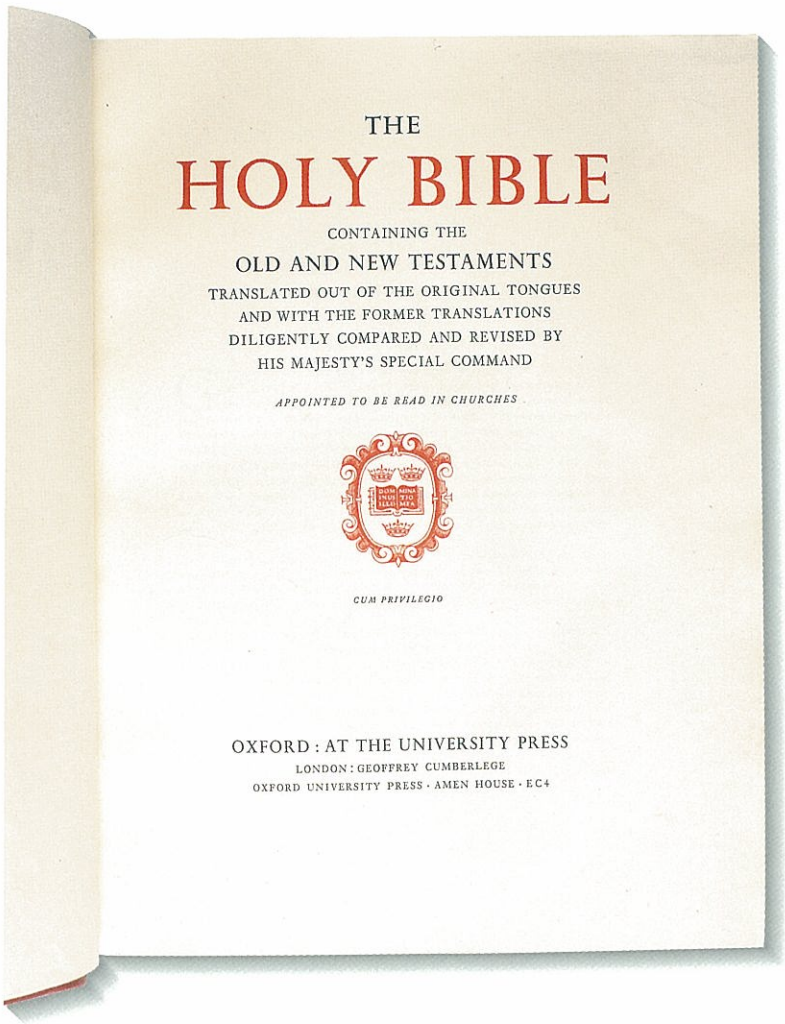
Sonderdruck aus: „Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung", Band VII
herausgegeben von E. Husserl·Freiburg i. B.

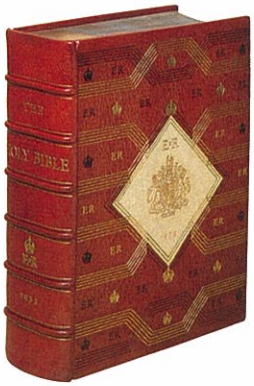
Max Niemeyer, Verlag, Halle a. d. S. / 1927

Heidegger, Martin, 1889-1976
Sein und Zeit
Halle : Niemeyer,　1927　438p. ; 24cm

ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーの主著。現象学の祖フッサールに学び、独自の解釈学的現象学を発展させていった。やがて彼はフライブルグ大学の教授に就任し（後に学長）、政治哲学者ハンナ・アーレントをはじめとする俊秀を育てた。やがて戦争の影がドイツを包むようになると、彼はナチスドイツの民族政策を指示し、政治的地位を上昇させていった。戦後になってその事を批判され、沈黙を余儀なくされることになったが、その哲学史上の重要性は、今もなお失われてはいない。彼は郊外の山荘で本書を執筆したといわれ、その中で、彼は現存在（人間）の有限性を主張し、実存主義哲学の先駆けとされている。サルトルなど、戦後フランスの実存主義者達にも影響を与えた近代哲学の金字塔。巻頭には師フッサールへの献辞が印刷されている。

109. 聖書
「コロネーション・バイブル」　1953年　オックスフォード刊


THE
HOLY BIBLE
CONTAINING THE
OLD AND NEW TESTAMENTS
TRANSLATED OUT OF THE ORIGINAL TONGUES
AND WITH THE FORMER TRANSLATIONS
DILIGENTLY COMPARED AND REVISED BY
HIS MAJESTY'S SPECIAL COMMAND
APPOINTED TO BE READ IN CHURCHES
CUM PRIVILEGIO
OXFORD : AT THE UNIVERSITY PRESS
LONDON : GEOFFREY CUMBERLEGE
OXFORD UNIVERSITY PRESS · AMEN HOUSE · EC4



The Holy Bible, containing the Old and New Testaments translated out of the original tongues and with the former translations diligently compared and revised by his Majesty's special command.
Oxford : Oxford University Press,　1953　xx,[2],1139,[1],265,[3]p. ; 33cm

本書は、オックスフォード大学出版局によって、エリザベスⅡ世の戴冠式のために制作された聖書である。当初25部制作され、戴冠式後さらに100部限定で発行されたもののひとつである。

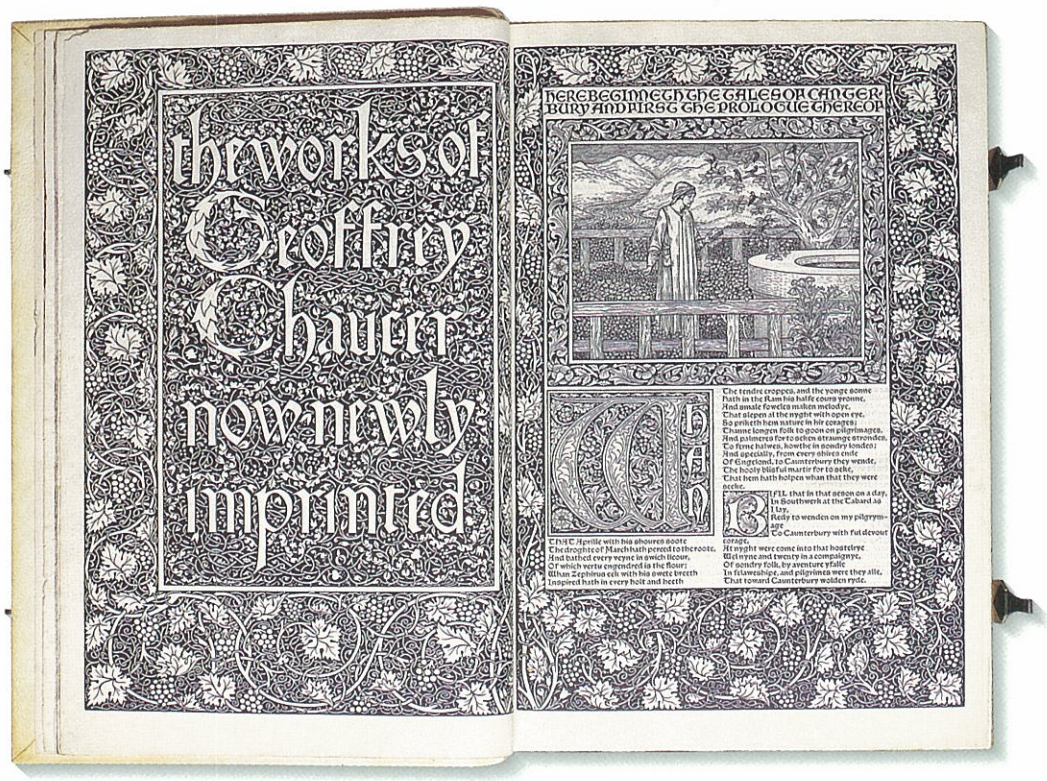
本書は特に女王に贈られたものと同じ装幀である点で貴重である。その理由は、追加発行された他のほとんどのものは、表紙の王室の紋章が"EIIR"の組み合わせ文字に取り換えられてしまっているからである。

彩飾写本
「時祷書」　写本　15世紀第4四半期　ルーアン刊

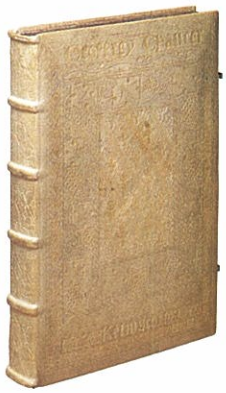
Book of Hours.
[Rouen.] : [s.n.],　last quarter of the fifteentn century.]　i+163+ii leaves ; 17cm
Note:Illuminated Manuscript on vellum

聖書は世界で最も多く制作された書物として知られ、印刷術が発明される前から書物の歴史的変化に最も大きな役割を果たしたと言われている。中世の聖書及び祈祷書は、その用途と目的のために様々な編集によって、「典礼書」、「聖務日課」「詩編集」などが修道僧らの手によって書写され、金銀や貴石を材料にした顔料によって彩飾され、画家によって挿画され制作された。14世紀から15世紀にかけて、貴族や商人が富裕になるに及んで、彼らの個人用の「祈祷書」として贅沢を尽くして作られたのがこの「時祷書」である。「時祷書」にはふつう絵暦が挿し絵として描かれているが、館蔵書は15世紀後半に羊皮紙で制作されたもので、19枚のフルザイズの細密画と24枚の小さな細密画が多くの動物や植物の欄外装飾によって彩飾されている。

プライベートプレス
［ケルムスコット・プレス］
40. エリス編「ジェフリー・チョーサー著作集」 1896年　ハマースミス刊



Chaucer, Geoffrey, ca.1340-1400
The Works of Geoffrey Chaucer.
Hmaer Smith : Kelmscott Press,　1896　554p. ; 43cm.



チョーサーは、中世イギリス最大の詩人。ロンドンの酒商人の子に生まれ、エドワードⅢ世に従ってフランスに遠征し、捕虜になったが、釈放された。その後、エドワードⅢ世の命によってジェノヴァ、フィレンツェに旅行した。彼の作品にボッカチオ、ペトラルカの影響が濃いのはこの旅行のためと思われる。本書は、「カンタベリー物語」他チョーサーの作品を集めた著作集で、ケルムスコット・プレスで印刷された。

ケルムスコット・プレスは、イギリスの社会改革家で詩人、工芸家としても知られたウィリアム・モリスが、「理想の書物」を制作するために設立した私家版印刷所である。モリスは、用紙、活字、字・語・行の相関的な間隔、印刷される部分を頁のどの辺におくかなどを考え、美しい本を刊行した。

この「チョーサー著作集」は、ケルムスコット・プレスの代表的作品であり、活版印刷術の発明以来世界で最も美しい本として絶賛されている。紙刷本425部、ヴェラム刷本13部が制作されたが、館蔵書は、白豚皮に空押し模様がほどこされ、48部作られた特装版の一つで、モリス自身が晩年まで所有していたものである。

ケルムスコット・プレスの活動は、その後私家版印刷所が次々設立されるなど、当時の出版界に与えた衝撃は大きく、その影響は100年経った現代にまでおよんでいる。

［ケルムスコット・プレス］

1. ウィリアム・モリス　「輝く平原の物語」　1891年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Story of the Glittering Plain Which has been Also Called the Land of Living Men or, the Acre of the Undying. 188 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1891

2. ウィリアム・モリス　「折ふしの詩」　1891年　ハマースミス刊
Morris, William -- Poems by the way. 197 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1891

3. ウィルフリッド・スコエン・ブランド　「プロテウスの恋愛抒情詩と歌」　1892年　ハマースミス刊
Blunt, Wilfrid Scawen -- The Love-Lyrics & Songs of Proteus. vii, 251 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892

4. ジョン・ラスキン　「ゴシックの本質」　1892年　ハマースミス刊
Ruskin, John -- The Nature of Gothic. iv, 127 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

5. ウィリアム・モリス　「グウィネヴィアの抗弁、その他の詩」　1892年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Defence of Guenevere, and Other Poems. 169pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

6. ウィリアム・モリス　「ジョン・ボールの夢／王の教訓」　1892年　ハマースミス刊
Morris, William -- A Dream of John Ball and A King's Lesson. 123 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

7. ヤコブス・デ・ボラギネ　「黄金伝説」（全3巻）　1892年　ハマースミス刊
Voragine, Jacobus de -- The Golden Legend. 3 vols[.pp. 1-464 ; 865-1286]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

8. ラウル・ルフェーヴル　「トロイ物語集成」（全2巻）　1892年　ハマースミス刊
Lefevre, Raoul -- The Recuyell of the Historyes of Troye. 2vols. [pp. i-xv, 1-295 ; 298-718]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

9. J.W.マッケイル　「罪なき民の書」　1892年　ハマースミス刊
Mackail, J. W. -- Biblia Innocentium: Being the Story of God's Chosen People before the Coming of Our Lord Jesus Christ Upon Earth. viii, 249 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.

10. ウィリアム・カクストン訳　「狐のレナードの物語」　1893年　ハマースミス刊
Caxton, William (trans.)-- The History of Reynard the Foxe. v, 162 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892.[publ. 1893]

11. エリス編　「シェイクスピア詩集」　1893年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge(ed.) -- The poems of William Shakespeare. 216 p.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893.

12.ウィリアム・モリス　「ユートピア便り」　1893年　ハマースミス刊
Morris, William -- News from nowhere : Or, An Epoch of Rest, Being Some Chapters from a Utopian Romance. 305 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1892 [publ. 1893]

13. ラモン・ルル　「騎士道」　1893年　ハマースミス刊
[Lull, Ramon] -- The Order of Chivalry. [151pp.]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893.

14. ジョージ・キャヴェンディッシュ　「ヨークの枢機卿トマス・ウルジー伝」　1893年　ハマースミス刊
Cavendish, George -- The Life of Thomas Wolsey, Cardinal Archbishop of York. iv, 287 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893.

［ケルムスコット・プレス］

15. ギレルムス　「ブイヨンのゴドフリーとエルサレム征服の物語」　1893年　ハマースミス刊
Guilelmus, Archbishop of Tyre -- The History of Godefrey of Boloyne and the Conquest of Iherusalem. xxii, 450 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

16. トマス・モア　「ユートピア」　1893年　ハマースミス刊
More, Thomas -- Utopia. xiv, 282 p.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

17. アルフレッド・テニスン　「モード――独白の劇」　1893年　ハマースミス刊
Tennyson, Alfred, Lord -- Maud, a Monodrama. 69 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893.

18. ウィリアム・モリス　「ゴシック建築」　1893年　ハマースミス刊
Morris, William -- Gothic Architecture 68 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

19. ウィリアム・マインホルト　「魔女シドニア」　1893年　ハマースミス刊
Meinhold, William -- Sidonia the Sorceress. xiv, 455 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

20. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ　「バラッドと物語詩」　1893年　ハマースミス刊
Rossetti, Dante Gabriel -- Ballads and Narrative Poems. 227 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

20a. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ　「ソネットと抒情詩」　1894年　ハマースミス刊
Rossetti, Dante Gabriel -- Sonnets and Lyrical Poems. x, 197 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

21. ウィリアム・モリス訳　「フローラス王とうるわしのジャンヌ」　1893年　ハマースミス刊
Morris, William (trans.) -- The Tale of of King Florus and the Fair Jehane. 96 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1893

22. ウィリアム・モリス　「輝く平原の物語」　1894年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Story of the Glittering Plain which has been Also Called the Land of Living Men or the Acre of the Undying. 177 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

23. ウィリアム・モリス訳　「アミとアミールの友情」　1894年　ハマースミス刊
Morris, William (trans.) -- Of the Friendship of Amis and Amile. 67 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

24. エリス編　「ジョン・キーツ詩集」　1894年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- The Poems of John Keats. 384 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

25. アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン　「カリュドンのアタランタ――悲劇」　1894年　ハマースミス刊
Swinburne, Algernon Charles -- Atalanta in Calydon : a Tragedy. 81 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

26. ウィリアム・モリス訳　「クースタンス王と異国の物語」　1894年　ハマースミス刊
[Morris, William (trans.)] -- The Tale of the Emperor Coustans and of Over Sea. 130 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894

27. ウィリアム・モリス　「世界のかなたの森」　1894年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Wood beyond the World. 261 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

[ケルムスコット・プレス]

28. スルカン=サバ・オルベリアニ　「知恵と虚言の書」　1894年　ハマースミス刊
Orbeliani, Sulkhan-Saba -- The Book of Wisdom and Lies. xvi, 256 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

29.「パーシー・ビッシュ・シェリー詩集」(全3巻)(1巻)　1895年　ハマースミス刊
-- The Poetical Works of Percy Bysshe Shelley. 3 vols. [399 pp.:iv, 412 pp.]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

30. エリス編　「侮罪詩篇」　1894年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- Psalmi Penitentiales. 63 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

31. ジローラモ・サヴォナローラ　「俗世厭離の書簡」　1894年　ハマースミス刊
Savonarola, Girolamo -- Epistola de Contemptu Mundi. 15 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1894.

32. ウィリアム・モリス、A.J.ワイアット共訳　「ベーオウルフ物語」　1895年　ハマースミス刊
Morris, William, Wyatt, Alfred John [trans.] -- The Tale of Beowulf. vi, 119 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

33. ハリウェル編エリス監修　「ガレスのサー・パーシヴァル」　1895年　ハマースミス刊
Halliwell, James.O. [ed.] and F.S.Ellis (overseen) -- Syr Perecyvelle of Gales. 98 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

34. ウィリアム・モリス　「イアソンの生と死」　1895年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Life and Death of Jason, a Poem. 353 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

35. ウィリアム・モリス　「チャイルド・クリストファとうるわしのゴルディリンド」(全2巻)　1895年　ハマースミス刊
Morris, William -- Child Christopher and Goldilind the Fair. 2 vols. [256 pp.; 239 pp.]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

36. ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ　「手と魂」　1895年　ハマースミス刊
Rossetti, Dante Gabriel -- Hand & Soul. 56 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895

37. エリス編　「ロバート・ヘリック詩選」　1895年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- Poems Chosen Out of the Works of Robert Herrick. xiv, 296 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1895.

38. エリス編　「サミュエル・テイラー・コウルリッジ詩選」　1896年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- Poems Chosen out of the Works of Samuel Taylor Coleridge. ii, 100 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.

39. ウィリアム・モリス　「世界のはての泉」　1896年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Well at the World's End. 496 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.

40. エリス編　「ジェフリー・チョーサー著作集」　1896年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- The Works of Geoffrey Chaucer. ii, 554 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.

41. ウィリアム・モリス　「地上楽園」(全8巻)　1896-97年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Earthly Paradise. 8 vols. [193 pp. ; 121 pp. ; 169 pp. ; 241 pp. ; 217 pp. :203 pp. ; 186 pp.]
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896-1897.

42.「聖処女マリア讃歌」　1896年　ハマースミス刊
-- Laudes Beatae Mariae Virginis. 34 p.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.

［ケルムスコット・プレス］

43. トマス・クランヴォウ　「花と葉/愛の神クピドの書、または郭公と夜啼鶯」　1896年　ハマースミス刊
Clanvowe, Thomas, -- The Floure and the Leafe, & The Boke of Cupide, God of Love, or The Cuckow and the Nightingale. 47 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.

44. エドマンド・スペンサー　「羊飼いの暦」　1896年　ハマースミス刊
Spenser, Edmund -- The Shepheardes Calender. 98 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896..

45. ウィリアム・モリス　「不思議な島々のみずうみ」　1897年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Water of the Wondrous Isles. 340 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1897.

46.「フロワサール年代記」試し刷り　1897年　ハマースミス刊
-- Froissart's Chronicles (specimen pages). 4 pp.
Hammersmith :Kelmscott Press, 1897

47. エリス編　「サー・デグレヴァント」　1897年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- Sire Degrevaunt. 81 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1896.[publ. 1987]

48. エリス編　「サー・イザンブラス」　1897年　ハマースミス刊
Ellis, Frederick Startridge (ed.) -- Syr Isambrace. 41 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1897.

49. シドニー・コッカレル編　「十五世紀ドイツ木版画集」　1898年　ハマースミス刊
Cockerell, Sydney C. (ed.) -- Some German Woodcuts of the Fifteenth Century. xi, 36 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1897.[publ. 1898]

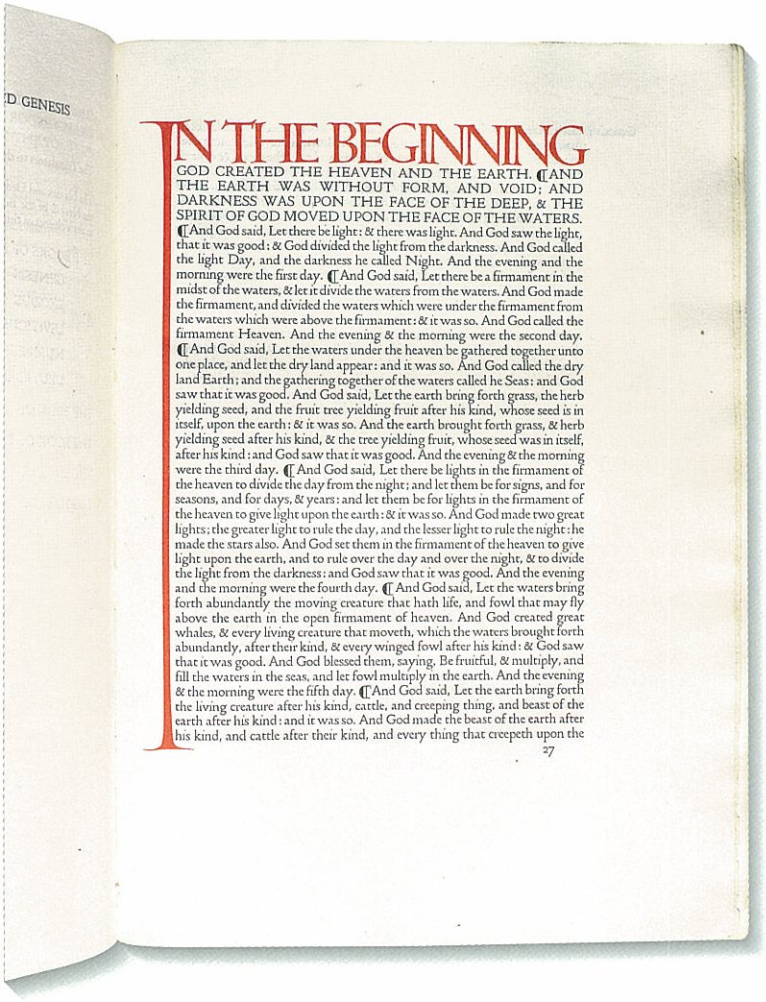
50. ウィリアム・モリス　「ヴォルスング族のシグルズとニーブルング族の滅亡の物語」　1898年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs.207, [2] p.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1898.

51. ウィリアム・モリス　「引き裂く川（サンダリング・フラッド）」　1898年　ハマースミス刊
Morris, William -- The Sundering Flood. 507 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1897 [publ. 1898].

52. ウィリアム・モリス　「恋だにあらば」　1898年　ハマースミス刊
Morris, William -- Love is Enough, or the Freeing of Pharamond: A Morality. 90 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1897.[publ. 1898]

53. ウィリアム・モリス　「ケルムスコット・プレス設立趣意書」　1898年　ハマースミス刊
Morris, William -- A Note by William Morris on His Aims in Founding the Kelmscott Press. 70 pp.
Hammersmith : Kelmscott Press, 1898.

［ダブス・プレス］
「聖書」　5巻　1903-1905年　ハマースミス刊



D GENESIS

IN THE BEGINNING

GOD CREATED THE HEAVEN AND THE EARTH. ¶AND THE EARTH WAS WITHOUT FORM, AND VOID; AND DARKNESS WAS UPON THE FACE OF THE DEEP, & THE SPIRIT OF GOD MOVED UPON THE FACE OF THE WATERS. ¶And God said, Let there be light: & there was light. And God saw the light, that it was good: & God divided the light from the darkness. And God called the light Day, and the darkness he called Night. And the evening and the morning were the first day. ¶And God said, Let there be a firmament in the midst of the waters, & let it divide the waters from the waters. And God made the firmament, and divided the waters which were under the firmament from the waters which were above the firmament: & it was so. And God called the firmament Heaven. And the evening & the morning were the second day. ¶And God said, Let the waters under the heaven be gathered together unto one place, and let the dry land appear: and it was so. And God called the dry land Earth; and the gathering together of the waters called he Seas: and God saw that it was good. And God said, Let the earth bring forth grass, the herb yielding seed, and the fruit tree yielding fruit after his kind, whose seed is in itself, upon the earth: & it was so. And the earth brought forth grass, & herb yielding seed after his kind, & the tree yielding fruit, whose seed was in itself, after his kind: and God saw that it was good. And the evening & the morning were the third day. ¶And God said, Let there be lights in the firmament of the heaven to divide the day from the night; and let them be for signs, and for seasons, and for days, & years: and let them be for lights in the firmament of the heaven to give light upon the earth: & it was so. And God made two great lights; the greater light to rule the day, and the lesser light to rule the night: he made the stars also. And God set them in the firmament of the heaven to give light upon the earth, and to rule over the day and over the night, & to divide the light from the darkness: and God saw that it was good. And the evening and the morning were the fourth day. ¶And God said, Let the waters bring forth abundantly the moving creature that hath life, and fowl that may fly above the earth in the open firmament of heaven. And God created great whales, & every living creature that moveth, which the waters brought forth abundantly, after their kind, & every winged fowl after his kind: & God saw that it was good. And God blessed them, saying, Be fruitful, & multiply, and fill the waters in the seas, and let fowl multiply in the earth. And the evening & the morning were the fifth day. ¶And God said, Let the earth bring forth the living creature after his kind, cattle, and creeping thing, and beast of the earth after his kind: and it was so. And God made the beast of the earth after his kind, and cattle after their kind, and every thing that creepeth upon the

27

Bible.
The English Bible, containing the Old Testament & the New translated out of the original tongues by special command of his Majesty King James the first and now reprinted with the text revised by a collation of its early and other pricipal editions and edited by the late Rev. F.H.Scrivener N.A.Ll. d. for the Syndics of the University Press Cambridge.
Hammersmith : The Doves Press,　1903-1905　5 Vols. ; 34cm

ダブス・プレスは、1900年ロンドンのハマースミスでコブデン・サンダーソンとエメリー・ウォーカーの2人によって創設された私家版印刷所である。その代表的作品の「聖書」全5巻は、朱の装飾頭文字と黒の二色刷りで簡素な美しい印刷となっており、英国私家版史上最高の偉業の一つと言われている。モリスの主宰したケルムスコット・プレスの「チョーサー作品集」とともに近代印刷術における世界の三大美書の一つに数えられている。特に創世記の始まりのページにある赤い装飾イニシャル"In the beginning"の美しさは有名である。

ダブス製本所は、1893年に開設されており、ケルムスコット・プレスの「チョーサー作品集」の白豚皮の特装版はコブデン・サンダーソンの手で製本されている。プレスが閉鎖される時、コブデン・サンダーソンは、ダブス・プレスの活字が他人に使用されないようにテムズ川にすべて沈めてしまったという話は有名である。

［アシェンデン・プレス］
ダンテ　「神曲」　3巻　1902-1905年　ロンドン刊

AL NOME di DIO. Comincia la Commedia di Dante Alighieri, eccelso poeta fiorentino, nella quale tratta delle pene & punizioni de' vizii & demeriti, e de' premii delle virtù. Cantica prima appellata Inferno. Canto primo nel quale si proemia a tutta l'opera.

NEL MEZZO DEL CAMMIN DI NOSTRA VITA
MI RITROVAI PER
UNA SELVA OSCURA,
CHE LA DIRITTA VIA
ERA SMARRITA.

E quanto a dir qual era è cosa dura
Questa selva selvaggia ed aspra e forte,
Che nel pensier rinnuova la paura!
Tanto è amara, che poco è più morte:
Ma per trattar del ben ch' i' vi trovai,
Dirò dell'altre cose ch' io v' ho scorte.
I' non so ben ridir com' io v' entrai;
Tant'era pien di sonno in su quel punto,
Che la verace via abbandonai.

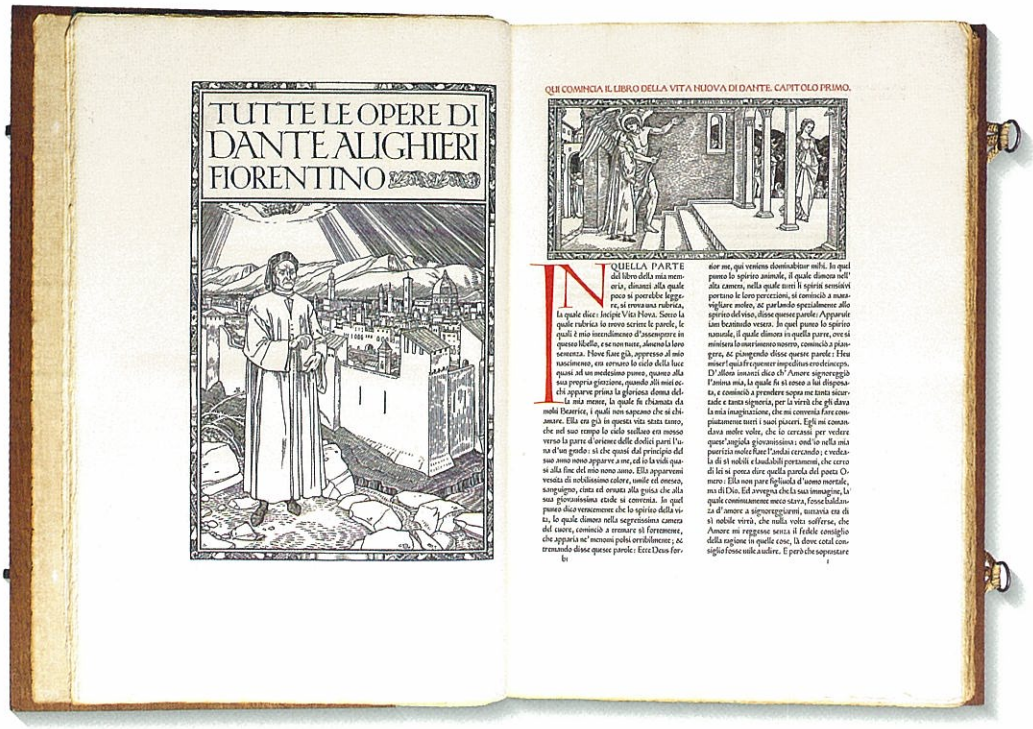
b　1

Dante, Alighieri, 1265-1321
La divina commedia di Dante Alighieri ...
London : Ashendene Press,　1902-05　3 Vols. ; 20cm

アシェンデン・プレスは、セント・ジョン・ホーンビーによって1895年に設立され、1935年までに53点の刊本を完成させた私家版印刷所である。

「神曲」は、14世紀初めにイタリアの詩人ダンテが著した叙事詩で、「地獄編」「煉獄編」「天国編」の3部からなる。本書は、20世紀初めにジョン・ホーンビーが、設立した私家版印刷所で刊行された美本であり、1902年に地獄編が135部の限定出版され、1904年に煉獄編が150部、1905年に天国編が150部出版された。

［アシェンデン・プレス］
ダンテ　「ダンテ著作集」 1909年　ロンドン刊



Dante, Alighieri, 1265-1321
Tutte le Opere di Dante Alighieri florentino.
London : Ashendene Press,　1909　xiv,[2],392,[1]p. ; 41cm

この「ダンテ著作集」は、アシェンデン・プレスで印刷されたものの中で最も美しく、過度の装飾を抑えた印刷は、ケルムスコット・プレスの「チョーサー作品集」、ダブス・プレスの「聖書」と並び、近代印刷術における世界の三大美書に数えられている。二つ折り版で限定105部が刊行された。

館蔵書は、背は白豚皮、木製の表紙に麻糸織りの止め金具付きの美本である。

参考文献

「西洋をきずいた書物」 J.カーター、P.H.ムーア編　西洋書誌研究会訳　雄松堂書店　1977
「世界名著大事典」全8巻　下中 邦彦編　平凡社　1978
「岩波西洋人名辞典　増補版」 岩波書店編集部編　岩波書店　1981
「書物語辞典」 八木 佐吉編著　丸善　1976
「世界地名辞典」 世界地名辞典編集部編　東京堂　1958
「世界地名大事典」全8巻　渡辺 光［等］編集　朝倉書店　1973
「世界伝記大事典　世界編」 ほるぷ出版　1980-1981
「フランス百科全書の研究」 桑原 武雄編　岩波書店　1954
「本邦所在インキュナブラ目録　第2版」 雪嶋 宏一編　雄松堂出版　2004
「書物の森へ:西洋の初期印刷本と版画」 佐川 美智子ほか編　町田市立国際版画美術館　1996
「欧米古書稀覯書展示即売会目録1986～1999」 丸善　1986-2008
「東京国際稀覯書展示即売会第18～20回」 雄松堂書店　1993−1995
「西洋稀覯書展1993～1999」 紀伊国屋書店　1993-1999

Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum
London : The Trustees of the British Museum , 1963-[1963]
Copinger, W.A,
Supplement to Hain's 'Repertorium bibliographicum', partI& II, 3 vols & Addenda
Genève : Slatkine Reprints , 1992
Hain, Lugwig Friedrich Theodre.
Repertorium bibliographicum in quo libri omnes ab arte typographica inventa usque ad annum MD. typis expressi ordine alphabetico vel simpliciter enumeratur vel adcuratius recensentur, 4 vols Milano　Görlich Editore　c1966
Incunabula Short Title Catalogue（http://www.bl.uk/catalogues/istc/index.html）
Bibliothèque Nationale de France（http://ccfr.bnf.fr/portailccfr/servlet/LoginServlet）

人文・社会科学編 著者名索引

A

Augustinus, Aurelius ……20,21

B

Bacon, Francis ……52
Bagehot, Walter ……115
Balbus, Johannes ……29
Bayle, Pierre ……64
Beccaria, Cesare Bonesana Marchese di ……82
Bentham, Jeremy ……94
Blunt, Wilfrid Scawen ……123
Bodin, Jean ……48
Boethius, Anicius Manlius Severinus ……22
Botero, Giovanni, ……51
Bracton, Henry ……26
Butler, Joseph ……68

C

Campbell, John, ……86
Cavendish, George ……123
Caxton, William (trans.) ……123
Chaucer, Geoffrey, ……122
Clanvowe, Thomas, ……126
Cockerell, Sydney C. (ed.) ……126
Colomna, Francesco de. ……38
Columbus, Christopher. ……35
Comte, Auguste ……111
Condillac, Etienne Bonnot de ……89
Condorcet, Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat ……97
Cook, Captain James ……101

D

D'Alembert, J. Le R. ……75
D' Holbach, Paul Henri Dietrich ……84
Dante, Alighieri ……31,128,129
Descartes, Rene ……55
Diderot, Denis, ……73,75

E

Ellis, Frederick Startridge(ed.) ……123,124,125,126
Erasmus, Desiderius ……39
Estienne, Robert ……45

F

Ferguson, Adam ……83
Fichte, Johann Gottlieb ……96,100
Franklin, Benjamin, ……88

G

Gesner, Conrad ……46
Grotius, Hugo ……53
Guilelmus, ……124
Gutenberg, Johann ……15

H

Halliwell, James.O. ……125
Hamilton, Alexander ……93
Harris, John ……65
Hegel, Georg Wilhelm Friedrich ……99,102,105
Heidegger, Martin ……118
Henry, VIII, King of England ……41
Hermes Trismegistus; ……18,19
Herodotos, ……9
Heuser, Otto Ludwig ……108
Higden, Ranulphus ……32
Hobbes, Thomas ……57
Hume, David, ……69,71,76

I

Ignatius de Loyola ……44
Isidorus Hispalensis ……24

J

Jay, John ……93
Johnson, Samuel, ……77
Just, Johan ……17
Justinianus ……23

K

Kames, Henry Home ……74
Kant, Immanuel ……90,91,95
Kierkegaard, Soren Aabye ……109

L

Languet, Hubert ····· 49
Lefevre, Raou ····· 123
Lilburne, John ····· 56
Lincoln, Abraham ····· 114
Linguet, Simon Nicolas Henri ····· 87
Livingstone, David ····· 112
Livius, Titus ····· 11
Locke, John ····· 63
Lull, Ramon ····· 123

M

Machiavelli, Niccolo ····· 42,43
Mackail, J. W. ····· 123
Madison, James ····· 93
Marco Polo ····· 30
Meinhold, William ····· 124
Mill, John Stuart ····· 110,113,116
Montaigne, Michel de., ····· 50
Montesquieu, Charles de Secondat, baron de ····· 72
More, Thomas ····· 124
Morellet, Morellet, Andr, ····· 87
Morelly, ····· 78
Morri, Louis ····· 62
Morris, William ····· 123,124,125,126

N

Nicolaus Cusanus ····· 34
Nietzsche, Friedrich Wilhelm ····· 117
Nostradamus, Michael ····· 47

O

Orbeliani, Sulkhan-Saba ····· 125
Overmeer Fisscher, J. F. von ····· 107
Owen, Robert ····· 103

P

Pascal, Blaise ····· 58,59
Peter Shffer ····· 17
Platon, ····· 10
Plutarchos, ····· 13

R

Rossetti, Dante Gabriel ····· 124,125
Rousseau, Jean-Jacques ····· 79,80,81
Ruskin, John ····· 123

S

Saint-Pierre, (Charles Ir n e Castel de.), ····· 66
Savigny, Friedrich Carl von ····· 108
Savonarola, Girolamo ····· 125
Schedel, Hartmann ····· 36,37
Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph. von ····· 98
Schopenhauer, Arthur ····· 104
Selden, John ····· 54
Seneca, Lucius Annaeus ····· 12
Skinner, Stephen ····· 61
Spenser, Edmund ····· 126
Spinoza, Benedictus de ····· 60
Swinburne, Algernon Charles ····· 124

T

Tacitus, Publius Cornelius ····· 14
Tennyson, Alfred, Lord ····· 124
Thomas A Kempis, ····· 33
Thomas Aquinas, Saint. ····· 25,28

V

Vincent de Beauvais, ····· 27
Voltaire, Francois Marie Arouet ····· 67
Voragine, Jacobus de ····· 123

W

Webber, James ····· 101
Webster, Noah ····· 106
Wyatt, Alfred John [trans.] ····· 125